

41752

教科書文庫

4
810
41-1934
200030 2019

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

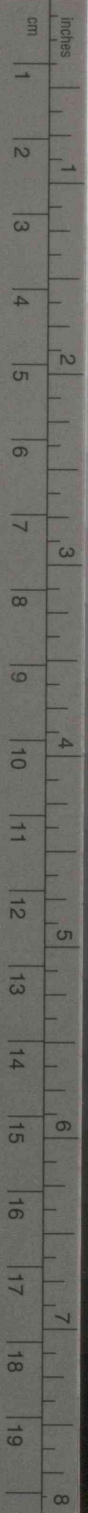


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
K06
資料室

標準問題

國文新鈔 教授資料

中篇



375.9
K05

資 料 室

光風館編輯所編

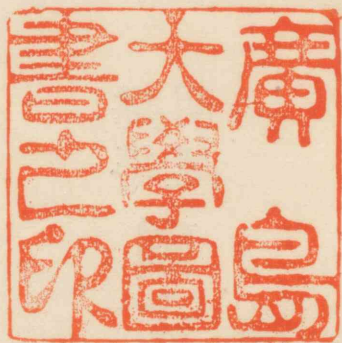
標準
問題
國文新鈔教授資料 中篇

東京 光風館藏版

東京 光風館藏版

標準
國文新鈔教授資料 中篇

光風館編輯所編



標準問題 國文新鈔教授資料 目次

中 篇 近世文

奥の細道鈔	1
一 月日は百代の過客	二
二 野飼の馬	四
三 石の巻	五
樂訓鈔	15
一 残れるよはひ(一)	15
二 時日をしめ(二)	17
三 旅行の樂	18
四 三代の榮耀(一)	17
五 光堂(二)	21
四 古人のかたみ	19
五 秋の花	21
六 菊	23
文訓鈔	25

目次

1

一 ふみ見る樂……………三
二 浦の濱木綿……………七

三 古今の事にうとし……………六
四 玉の盃そこなきが如し……………元

駿臺雑話鈔……………三一

一 道……………三
二 翁が心……………四
三 士の常(一)……………五
四 忠臣義士の盛衰存亡(一)……………七
五 清談の露……………六

六 正成恢復の功……………四〇
七 孔明は臥龍……………四〇
八 老の波(一)……………四
九 三綱五常の道(一)……………四
一〇 儒となりしるし(一)……………四

鶉衣鈔……………五三

一 旅……………五
二 蝶……………五
三 蟬……………七

四 蚊……………五
五 袋……………五

梅園叢書鈔……………六一

一 死生の説……………六

二 理窟と道理……………六

三 誠の道……………三
四 俄掃除……………五

五 己一盃の器量……………六

玉勝閒鈔……………六九

一 新なる説(一)……………七
二 たやすくは出すまじきわざ(一)……………七
三 眞の道を尋ねべきなり……………七
四 書をよむたとへ……………七
五 世の常にことなる新しき説……………七
六 冠辭考……………七
七 師の説にたがふ……………八
八 わが説に泥みそ……………八
九 富み榮えを願ふべし……………八
一〇 わが思ふすぢをまぐべからず……………八
一一 説は必ずかはらでかなはず……………八
一二 誰も解き得ぬふしを問ふ……………八

一三 消息文などの文字……………九
一四 手はよく書かまほし……………九
一五 花のさだめ……………九
一六 近き世の人の歌文……………九
一七 歌文のきすなくととのふこと……………九
一八 祕傳口訣……………九
一九 足ることを知る……………九
二〇 いかでかは唯一言一行によりて定むべき……………九
二一 古よりも後の世の勝れること……………九
二二 神のめぐみ……………九

鈴屋集鈔……………一〇七

- 一 友だちのもとに物しつ(一).....一七
- 二 庭の趣(二).....一〇九
- 三 心へだてぬどちのまとぬ(三).....二〇
- 四 冬枯の野邊のしぐれ.....二二

朮が花鈔

- 一 隅田川の雨(一).....一三
- 二 秩父の山の眞清水(二).....一三
- 三 分けゆく秋の山路.....一四

藤篋冊子鈔

- 一 御嶽に登る.....一三
- 二 月あかき夜.....一三
- 三 かたゐものの様したる法師(一).....一六
- 四 名は圓位と申す(二).....一六

琴後集鈔

- 一 世のならばし.....一四

- 五 昨日は今日の昔(一).....二五
- 六 朽ちせぬ名(二).....二六
- 七 心にいれてつとめむ(三).....二七
- 八 めづらかなる朝ぼらけ.....二八

- 四 山里にうつろひ住む.....二六
- 五 人ばかり己が心のまま.....二七
- 六 父翁の歌(東歌序).....二八

- 五 口とく心さとき法師なり.....四〇
- 六 西行人に語りていふ.....四三
- 七 苦の下臥(秋成遺文).....四三

- 二 心ゆくわざ(一).....四八

- 三 心をやるべきすまひ(一).....一五〇
- 四 法となすしるべ.....一五一
- 五 わが相思ふ人人.....一五二
- 六 寢で明してまし.....一五三

年年隨筆鈔

- 一 ゆふべやまさりたらむ.....一六一
- 二 散るぞめできた.....一六二
- 三 學問に志ある人.....一六四

泊泊文藻鈔

- 一 水鶏.....一六九
- 二 いざたまへもろともに.....一七〇
- 三 きぬた.....一七四

花月草紙鈔

- 一 櫻てふ花(一).....一八〇

- 七 手かく業.....二五四
- 八 谷の戸のはつ音.....二五五
- 九 澄みのぼる光.....二五七
- 一〇 月と花.....二五九

- 四 梅の花いとめでたし.....二六一
- 五 鳥獸のなく聲.....二六二

- 四 いでや水を見よ.....二六五
- 五 心のたゆみ(遊京漫録).....二六六

- 二 雲か雪か(二).....二八

三 月のさしのぼる頃……………一八五
 四 久方の空にまかす……………一八四
 五 道まねぶ人……………一八五
 六 詞の花……………一八七
 七 春は雨こそどかなれ……………一八八
 八 理のまこと……………一九〇
 九 誠……………一九〇
 一〇 かたはらにて見る……………一九三
 一一 雨風のうさ誘ふならひ……………一九五

松屋文集鈔……………三二一

一 鶴……………三二二
 二 しくものぞなき……………三二二
 三 夏はよる……………三二四

檀園文集鈔……………三二九

一 花ざかりは更なり(一)……………三三〇

一二 四つの時のうつり行くけしき……………一九四
 一三 梁の上を歩まば落ちぬべし……………一九五
 一四 外をせめて内をせめされ……………一九六
 一五 日新の教……………一九九
 一六 とみのいたづき……………二〇〇
 一七 家國のすがた……………二〇一
 一八 膽をねること……………二〇三
 一九 人は悪しき心あるものかな……………二〇五
 二〇 花を見すててかへる……………二〇七

四 よろづの調度……………三二五
 五 學ばでやはあるべき(松の落葉)……………三二六

二 春雨の音(二)……………三三三

目次終

三 つばくらめ……………三三三
 四 遠山寺の入相の鐘……………三三四
 五 旅路のならひ……………三三五
 六 神の御社……………三三六
 七 岩もる水……………三三六

八 あまのすみか……………三三九
 九 あまのさへづり……………三三一
 一〇 燈火かかけてふづくゑに向ふ……………三三二
 一一 書……………三三四
 一二 家にのみやは……………三三五



標準問題 國文新鈔教授資料

中篇 近世文

奥の細道鈔

解題

奥の細道一卷は、元祿二年(二三四九年)三月二十七日に松尾芭蕉が、その門人河合曾良と共に江戸を發し、兩毛、奥羽の名所舊蹟を探り、北陸を経て美濃に出で、伊勢路に行つた同年九月までの、日子六ヶ月、行程六百餘里の行脚日記である。その文もとより俳文のことであるから、淡雅勁健、簡潔輕妙な趣にみちてゐる。味ふべきである。

著者芭蕉は、名は宗房、松尾儀右衛門の三男、伊賀國柘植に生れ、初め上野城主藤堂家の世子良忠に仕へた。二十三歳の時北村季吟の門に入つて貞門の俳諧竝に國學を學び、又伊藤坦庵に儒を、佛頂和尚に禪を、森川許六に畫を修めた。寛文十二年(二三三二年)に、江戸に下つて談林派の俳諧を學び、後、深川の芭蕉庵に入り、貞享の初年蕉風を開いた。尋いで諸國を行脚し、奥羽遊歴後は暫く幻住庵(石山の奥)に住してゐたが、又江戸に下り、元祿七年九月大阪に至り、その翌月同地で歿した。享年五十一。(二三〇四―二三五四)

一月日は百代の過客

月日は百代の過客にして、行きかふ年も亦旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは、日日旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず、海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を掃ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の關越えむと、そぞろ神のものにつきて、心をくらはせ、道祖神のまねきにあひて、取る物手につかず。股引のやぶれをつづり、笠の緒つけかへて、三里に炙するより、松島の月まづ心にかかりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅にうつる。

草の戸も、住みかはる代ぞ、雛の家。

〔百代の過客〕〔片雲〕〔漂泊〕〔道祖神〕〔三里に炙する〕

〔別墅〕〔雛の家〕

○和歌山高等商業學校

要旨 作者芭蕉が、旅立の用意をした状態を記して

ゐる。

釋義

【月日は百代の過客にして……古人も多く旅に死せるあり】月日は永久に過ぎ去る旅人のやうに過ぎ去つて行き、去つては來り、來つては往く年も亦旅人の過ぎ去るやうにずん／＼過ぎ去るものである。旅人といふ中でも、船の上に身を泛べて一生を過ぐす船頭や、馬の轡を捉つて老を迎へる馬子達は、いつも旅行してゐて、旅行する其の處を己が住所としてゐる。古への詩人にも亦旅を棲處として、その旅の住所で死んだ人が澤山にある。

【月日は百代の過客】古文眞寶後集に載せてある李太白の春夜宴桃李園序の「夫天地者萬物之逆旅。光陰者百代之過客。而浮生若夢、爲歡幾何。古人秉燭夜遊。良有以也。」の文に據つたものである。

【行きかふ年】去つては來り、來つては往く年。移り變る年。

【予もいづれの年よりか……取る物手につかず】 自分も何時頃からか、きれ／＼の雲が、吹き拂ふ風に誘はれて所定めず行

くのを見て、おのづとそれに心引かれ、自分もその雲のやうに所定めず諸所方々さまよひ歩きたいといふ望を禁じ得ず、去年も、須磨・明石の海濱にさまよひて、家を留守にし、秋になつて、深川の芭蕉庵に久しぶりで、歸つて蜘蛛の古巢を掃ひ清めてしばらく落著いたが漸く其の年も暮れ、霞たなびく春空に又白河の關を越えて奥州に遊ばうと思ふと、何となく人の心を誘ふ神が憑いてわが心を狂はせ、人の心をそより立てて、迷はず神の迷はされ者となり、又、道路の神からは招かれ、かた／＼旅情しきりに、おこつて、取るものも手につかないといふ有様である。

【片雲】きれ／＼の雲。
 【漂泊】寄る邊なくさまよふこと。
 【道祖神】「海濱にさすらへ」元祿元年二月、西方須磨・明石に遊び、その九月に江戸に歸つたことをいふ。
 【江上の破屋】江戸深川の芭蕉庵をいふ。
 【江上】江のほとり、の意。芭蕉庵は、隅田川に近いからいふ。
 【破屋】粗末な庵。
 【白河の關】磐城國西白河郡にあつた關所。
 【そぞろ神】假想の神で、かういふ神が別にあるのではなく、なんとなく、旅行したいといふ氣になつた事を面白くいひなしたたのである。

【道祖神】ドウソウジン 庚申ともいふ。道路の神。即ち、道路を掌る神で、路上の障害を以て行人を守る神の名。古は障神とも岐神ともいつた。茲は、この神の事も假想して記したのである。

【股引のやぶれをつづり……杉風が別墅にうつる】そこで、股引の破れをつくろつたり、笠の緒をつけかへて、三里に炙するうちから、松島の月景色が、先づ心にかゝつて仕方なく、住家の芭蕉庵は人に譲つて、杉山杉風の別荘である採茶庵に移つた。そして、次のやうな句を作つた。

【三里に炙する】三里は、膝頭の下の外側の少し凹んだ所で、所謂の炙所である。こゝに炙をすゑるのは、脚疾を防ぐためであるといつてゐる。

【松島の月、云々】「三里に炙を据ゑる頃から、松島の月の景色は、どんなであらうかと、最初に念頭に浮んで」の意。
 かかり、月の縁語。

【住める方は云々】旅行準備の爲に、これまで住んでゐた深川の芭蕉庵は他人に譲つて、杉山杉風の別荘採茶庵に移つたことをいふ。

杉風、杉山杉風。芭蕉の門人。名は元雅。芭蕉が江戸に下つた時から世話した人で、門人中殊に有力な一人。家は魚商、公儀の御用達、大層富有で、芭蕉庵と採茶庵とを有し、芭蕉庵を翁の居

處にしたが、今回旅行の爲に、暫く採茶庵に寄寓せしめたのである。

別墅 採茶庵は、深川六間堀にあつた。

【草の戸も、の匂】 今日まで僧のやうな世捨人である自分が住んでゐて淋しかった小さな草屋（芭蕉庵）も、そこに住む主人も變る世の中となつて（主人が住みかはつて）、今は賑かしい雑祭をする家となつた。さても世の中は變れば變るものである。

【雑の家】 雑祭をする家。此の家に住み代つた人は、孫娘などがあつて、折柄三月の初であつたから、雑祭などして笑ひさゝめく聲が洩れたのであらう。

但し、菅菰抄では、此の「雑の家」を雑の箱の義とし、箱から出し入れする毎に、入替る意とした説は、面白くない。

二 野飼の馬

明くれば、また野中を行く。そこに野飼の馬あり。草刈るをのこになげきよれば、野夫といへども、さすがに情知らぬにはあらず。「いかがすべきや。されども此の野は縦横にわかれてうねうねしく、

「さすがに」さうはいふものやはり。さうではあるけれども、しかし。

【いかがすべき……馬を返し給へ。】とて、……馬のあとしたひて走る】 その草刈男が、「さあ、どうしたらよいでせうか。馬をお貸し申ししても、此の野原は道が縦横に分れて、その上まがりくねつてゐるので、旅の人が道を歩き違へることもありませうと思はれて不安心で御座いますから、御自分で操縦することをなさらず、たゞ此の馬の歩むにまかせて、その止まる所までおいでになつて、乗りすてて、そこからお返し下さいませ。」といつて、馬を貸してくれた。さうして、小さな子供二人が、馬のあとをつけて走つて来た。

【いかがすべき】 どうしたらよいでせうか。どう致しませうか。農夫も即答が出来ないでしばし思案にくれるさまがよくあらはれてゐる。

【うねうねしく】 まがりくねつてゐること。一本「うひうひしく」とある。これによれば、此の邊の様子を知らないで初旅する意。

【あやしう侍れば】 あぶなく思はれますから。不安心に考へられますから。

【したひて】 後から追ひかけて來ること。

旅人の道ふみたがへむ、あやしう侍れば、この馬のとどまるところにて、馬を返し給へ。」とて、貸し侍りぬ。ちひさきもの二人、馬のあとしたひて走る。

【野飼】 「なげきよる」【野夫】 「さすがに」【いかがすべきや】

○廣島高等師範學校

要旨 芭蕉が那須野が原を通る時に出遇つた草刈男の素樸な人情を描いてゐる。

釋義

【明くればまた野中を行く。……さすがに情知らぬにはあらず】 夜が明けると、又野原の中の道を通つて行つた。そこに野放にして飼つてある馬がある。草を刈つてゐる男に近寄つて、「どうぞその馬を貸して下さい。」と歎願すると、農夫とはいへ、それでもやはり人情を解しないわけではない。

【野中】 那須野が原を指す。

【野飼】 牛馬などを野に放つて置いて飼ふこと。はなしがひ。

【をのこ】 男。

【なげきよれば】 近寄つて歎願すると。

【野夫】 農牧などに従事する男。農夫・田夫。

三 石の卷

十二日平泉へところざし、あねはの松緒だえの橋など聞傳へて、人跡稀に、雉兔芻蕘のゆきかふ道、そこともわかず、つひに道ふみたがへて、石の卷といふ湊に出づ。「黄金花咲く。」と詠みて奉りたる金華山海上に見渡され、數百の廻船入江につどひ人家地を争ひて、籠の煙たちつづきたり。思ひかけず、かかる處にも來れるものかなと宿からむとすれど、更に宿貸す人もなし。やうやくまどしき小家に一夜をあかして、明くれば又知らぬ道迷ひ行く。

【あねはの松】 「緒だえの橋」【雉兔・芻蕘】 「そこともわかず」

【黄金花咲く】 「廻船」【まどしき】

要旨 平泉へ行かうとして途中道をふみちがへて石の卷に出でしまつたといふことと、その石の卷の眺望や狀況

などを記してゐる。

釋義

【十二日、平泉へところざし、……石の巻といふ湊に出づ】五月十二日には、平泉へ行かうと思つて出かけ、途中あねはの松や緒だえの橋などいふ名所があると、話に傳へ聞いてゐたので、序にそれ等をも探りながら行くと、通る人も稀で、獵師や草刈・樵夫などが往來するやうな道に出て、行くべき道がどこがどこやらわからず、終には道を歩きがへて石の巻といふ湊に出てしまつた。

【十二日】元祿二年五月十二日。

【平泉】陸中國西磐井郡平泉村。一關町を距る北方二里、東に北上川が流れ、西に山嶽が連互し、今は東北線の一車驛で、寒村に過ぎないが、藤原清衡以下三世の居つた所で、其の盛時は京都に擬し、結構壯麗を極めたといふ。中尊寺(金堂・經藏)・高館・平泉館趾の古跡があり、附近に名跡が多い。

【あねはの松】陸前國栗原郡澤邊村大字姉齒にあつた松。歌枕である。伊勢物語に「栗原や姉はの松の人ならば、都のつとにいざといはましを」とある。又、觀跡開考志に「古松乃四十餘年前枯槁、其松五葉、後人緣而所植新松也。」とあり、十符の菅薦に

も「尋ねたれど今はなし。」とある。

【緒だえの橋】陸前國志田郡古川町にあつた小板橋。左京大夫藤原道雅の歌に「みちのくのをだえの橋やこれならん、ふみふまがみ心まどはず。」とある。今も町の中にこの橋の名が残つてゐる。

【雉兎・芻蕘】雉や兎を捕へる獵師や樵夫・草刈男の輩。詩經、大雅に「詢于芻蕘。」の疏に「芻、平馬之草。」とあり、又「蕘」は説文に「草薪也。」とある。孟子、梁惠王下篇に「文王之囿、方七十里、芻蕘者往焉、雉兎者往焉。」とあり、趙註に「芻蕘者、取芻薪之賤也。雉兎、獮人取雉兎者。」とある。猶「芻蕘」は、微賤者の義に轉用する。

【つひに道ふみたがひて】(此の句には、わびしさが籠つてゐる。)

【石の巻】陸前國牡鹿郡の首都。仙臺市の東十三里、北上川の河口に在る。人口約二萬。港湾は永寛年中に、伊達政宗が河村某に開鑿させたもの。爾來仙臺の門口として大いに榮え、商船の出入が盛んである。鹽竈へ十七里。

【黄金花咲く。】と詠みて奉りたる……竈の煙たちつづきたり。大伴家持が「黄金花咲く。」と詠んで天子様に奉つたといふ。金華山は、遙か海上に見渡され、數百の廻漕船は入江に集り、人家は地を争つてならび立ち、竈の煙は、立續いて繁昌してゐる。

【まどしき小家】貧しい小さい家。どは「づ」の通音語。

四 三代の榮耀 (一)

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。先づ高館にのぼれば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ちいる。泰衡等が舊跡は衣が關を隔てて南部口をさし堅め、夷をふせぐと見えたり。(第一節) さても義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠打敷きて時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草や、つはものどもが夢の跡。(第二節)

【榮耀】「一睡の中」【高館】【南部口】【義臣】【すぐる】

【功名】「國破れて山河あり云云」

○鳥取高等農林學校

【黄金花咲く】聖武天皇の天平二十一年に陸奥の國から始めて黄金を献上した。天皇は、大いに悦ばれて、元を改めて、天平感寶元年とし、其の金を以て、東大寺の盧舍那佛裝飾の料に充てられた。その時大伴家持が「須寶呂伎能御代佐可延牟等阿頭麻奈流美知能久夜麻爾金花佐久。」(萬葉集卷十八)と詠んで賀した。一首の意は、「天皇(統御の君)の御代が榮えようとする吉兆として、東國の方面にある陸奥の國の山に、黄金の花が咲いたやうに美しい黄金が現れ出た。」

【金華山】陸前國牡鹿半島の東南端の海中に屹立してゐる島山。高さ約一四六〇尺、周圍三里二十八町、全山人家なく、僅かに黄金山神社の宿場がある。神社は山腹にあつて、延喜式内黄金山神社に擬せられてゐる。社殿壯麗、風光絶佳。南端に燈臺がある。古昔山麓から砂金を産した。別稱を陸奥山・蓬萊山といふ。

【廻船】諸國の港々を廻漕する船。廻漕船。

【思ひかけず、明くれば又知らぬ道迷ひ行く】思ひがけなく、斯様なところにやつて来たものであるなと思つて、宿を借らうとすると、一向宿を貸してくれない人もない。やつと貧しい小家に一夜を明して、夜が明けると、そこを出かけて、又知らぬ道を通つて行つた。(芭蕉が、無量の旅愁に浸りつゝ旅をつづけてゐるさまが想察される。)

○桐生高等工業學校

要旨 (一)(二)に互つて、平泉に於ける遊覽懷古を記してゐる。

(一)は、二節から成つてゐて、第一節は、平泉の舊跡の状を述べ、第二節は、往時を追懐しての無量の感慨。

釋義

【三代の榮耀……夷をふせぐと見えたり】 奥州藤原氏三代

(清衡・基衡・秀衡)の榮華は、一ねむりする間の夢のやうにはかなく消え失せて、その居城の正門の跡は、今の平泉からは、一里も手前にある。秀衡の屋敷跡は、今は田や畑や野原になつて、金鶏山だけが昔のままの形を残してゐる。先づ秀衡の居城であつた高館に登つて見ると、北上川が眼下に見え、これは、南部方面から、流れて來る大河である。衣川は和泉三郎忠衡の居城の址をめぐり流れて、高館の下で、北上川に合してゐる。泰衡等の住んでゐた跡を見ると、これは衣が關を中に挟んで、南部方面から入口を警備し、蝦夷を防いだもののやうに思はれる。(第一節)

【三代の榮耀】 奥州藤原氏の全盛時である陸奥押領使、清衡・基衡・鎮守府將軍秀衡三代の榮華をいふ。嘉保元年藤原清衡が豊田

城から、平泉に移り、清衡・基衡・秀衡の居城であつた。泰衡に至つて源頼朝に滅ぼされた。時に文治五年。
榮耀 榮華に同じ。さかえ。生活には贅澤をなし、世には幅をきかすこと。

【一睡の中】 一睡する間。短時間の間意。

(原文には「一睡の夢」とあり、本によつては「一炊の夢」と直してある。これによると、唐の盧生、黄梁一炊の夢の故事に基いて、人生榮華のはかない意を表はす。)

【大門】 總門。外構の正門。

【秀衡が跡】 秀衡の館の跡。今は田圃で、農家がまばらにある。土俗、伽羅御所といふ。

【金雞山】 高館の西南にたつてゐる假山。昔秀衡が、平泉鎮護のために、山容を富士山に擬し、高さ數十丈に築きあげ、雌雄の黄金鶏を作つて山上に埋めたといふ。山の名は之に基づいたのであらう。芭蕉の行脚した時代には、その形がまだ存してゐたやうだが、今は山らしいものはない。

【高館】 今の陸中國西磐井郡平泉村字高館(平泉驛の北凡そ六町、一邑の中心にあたり、中尊寺の東、八町餘を隔てゐる)にあつた館舎。一に衣川館と稱し、俚俗又判官館ともいふ。もと安倍頼時の築いた所だといふから、最古の遺跡にちがひない。源義

經の古蹟として有名である。文治中、義經は、秀衡に依つて、ここに居た。同五年閏四月、頼朝は泰衡に致命して、義經を討たせた。泰衡は亡父の遺言を忘れ、義經を高館に襲つた。義經は防戦力盡き、妻子を殺して自盡した。館は東西四百六十間餘、南北百三十間餘、高さ五十間。當時は北上川が東山の麓を流れたやうだが、今はこの館址の下を流れる。

地形は山上平坦の處が僅かに十間より二十間に至り、東西南北は八十間許、高低三段になつてゐて、西北の高地に義經堂、東南に新山社がある。堂頭は樹木蔚々、堂後は斷崖絶壁、北上川は目の下を流れる。當時東北に館門があり、一士郎があつて、市街に續いてゐたといひ傳へるが、今は殿宇の址もわからない。

正面社堂に詣る坂路は急でなく、下れば國道がある。この邊が當時の埋渠だといふ。山腹西に向つて馬場跡がある。新山社の東南麓を柳御所といふ。

辨慶の宅地の跡は、高館の北にあるといふが、今は認め難い。同堂跡は、中尊寺表坂の下にあつて、今は櫻川茶亭の庭内となる。其處の松を辨慶松といふ。樹下の一碑の

色かへぬ松のあるじや武藏坊。

といふ俳句は、素信の吟である。また南畔の薄墨櫻は辨慶の手植といふが、今のはその枯れた跡に植えた木である。鈴木宅跡は、

高館下の櫻川の下流にあつて、傍に松樹一株、鈴木松といふ。即ち鈴木生害の處と傳へてゐる。龜井塚は高館の西北二町餘の處、龜井六郎望清の墳墓で、塚上の松は龜井松といふ。鈴木松と共に後世植ゑたものである。龜井塚の西、増尾權頭兼房の墓標は、高さ三尺餘、廣さ一尺餘の石塔で、文字ははつきりわからない。櫻川は昔の北上川の別稱。安倍頼時が數十萬の櫻を植ゑ、春時、水面に花を浮べたといふが、歲月の久しき、今は水路が變じて高館の西に及び、櫻川の名は、僅かに高館・中尊寺の間に流れる廣さ三間許の小流に冠せられるやうになつた。

【北上川】 陸中の北境御堂山及び北上山から出て、南流して盛岡市を過ぎ、陸前に入り、鹿又附近で二分し、一は東北に向つて追波灣に、一は南流して石巻灣に入る。(これは伊達政宗の開鑿に係るといふ。)平泉附近では、秀衡時代には平泉の東方である東稻山たかしらの麓、即ち今の長部村附近を流れ、平泉の市街は現今北上川の流域となつてゐる處にあつたといふ。

【南部】 今の岩手縣盛岡市附近から、北部にかけての總稱。蓋し、昔南部氏の所領。

【衣川】 陸中膽澤郡の西境から出て東南流し、平泉村の北境に至つて北上川に入る。長さ四里。

【泉が城】 平泉のうちにある。秀衡の三男泉三郎忠衡の居つた

城。中尊寺の西北に當る。もと琵琶榭といつた。觀開志に「琵琶榭址、在中尊寺西、阻三子衣川。貞任族兄成道之所據、而泉忠衛亦居、仍稱三泉城。」とある。

「大河」 北上川を指す。

「泰衡」 秀衡の子。陸奥守神領使。源頼朝に滅ぼされた。その舊跡は、伽羅御所の南に接してゐる。

「衣が關」 古稱「衣の關山」。關址は、衣川村にある。永承中安倍頼時・貞任父子、膽澤・和賀・江刺・稗貫・紫波・岩手六郡を劫略して、此に據つた。源頼義、陸奥守を以て鎮守府將軍を兼ね、討伐すること数年、康平五年に至つて平いだ。

「南部口」 南部方面から、平泉に入る口。

「さし堅め」 警備して。

「夷」 えぞ。奥羽・北海道にかけて住んでゐた人種。

【さても義臣すぐつて……夏草やつはものどもが夢の跡】 さてまあ、忠義の臣がえり抜かれ（えり抜き）の忠臣等が此の高館の城に立籠り、その主君義經のために堅く守つて奮戦したのであるが、彼等の功名も、今は口にすることも稀で、全く一時の夢と消え失せて、その跡は、一面の叢になつてゐる。國破山河在、城春草木深。（國家は滅びてしまつて、たゞ山河のみが依然として舊

態を存してをり、當時の玉城の跡は、今や春の眞最中で、徒らに草が青々と生ひ茂つてゐるだけで、更に昔の面影をとめない。）といふ杜甫の句を口ずさんで、笠を敷いて腰をおろし、時間のながたつまで懐古の涙を流してゐたことであつた。その時、かういふ意味の俳句が出来た。
この舊跡に来て見ると、一面に夏草が青々と生ひ茂つてゐる。昔は武士どもが立籠つて苦戦奮闘したことであらうが、その功名も、今から見れば、一睡の夢である。あゝ人生のはかなさが、つくづくと感ぜられる。（當年の義臣等の忠志も功名も今は空しく一場の夢と化して、そこには只人間のはかなさとは全く無關心で、夏草が青々と茂りに茂つてゐるばかりである、の意。）
（第二節）
「義臣」 忠義の臣。義經の部下を指したものである。
「すぐつて」 えらび抜いて。選抜して。茲は、自他混淆の語法で「えらび抜かれて」即ち、「えりぬきの忠臣」の意にとるべきである。
「此の城」 高館をさす。
「功名一時の叢となる」 「主君義經の爲に奮戦した忠臣等の功名も、其の當時だけは、世の人から盛にほめられましたが、今は忘れ果てられて、全く一時の夢とはかなく消え失せ、其の跡は跡で、

草茫茫となつてゐて殆どあとかたもない有様である」の意。

功名 功をたて名を揚げること。

「國破れて、云々の句」 唐代の詩人杜甫の詩の句に據つたもので、高館（義經及び藤原氏）の滅亡を寓意してゐる。

杜甫の春望の詩に「國破山河在、城春草木深。感時花濺淚、恨別鳥驚心。烽火連三月、家書抵萬金。白頭搔更短、渾欲不勝簪。」

「侍りぬ」 侍りは、補助敬語としては對話や書簡にのみ用ひるものであるが、芭蕉その他の俳人等は記述文にも澤山に用ひてゐる。

五光堂 (11)

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるべきを、四面新に圍みて、藁を覆うて風雨を凌ぎ、姑く千載の記念とはなれり。

五月雨の降りのこしてや、光堂。

【耳驚かす】 【開帳】 【頽廢空虚の叢】 【千載の記念】

要旨 中尊寺の經堂及び光堂に就いて記し、殊に光堂に就て感懷を吟じてゐる。

釋義

【かねて耳驚かしたる二堂開帳す】 以前から非常にすぐれてゐると、話に聞いて驚いてゐた二堂が開帳されたから、お詣りして拜した。

【二堂】 經堂と光堂。

【開帳】 厨子の戸帳を開いて祕佛などを拜ませること。

【經堂】 金色堂の西北にある。天仁元年清衡の建立。もと二階建の堂であつたが、建武四年の火災に上層は焼失し、その殘基に修繕を加へたのである。清衡・基衡の納めた經卷は、堂中の八架にあり、今國寶となつてゐる。

本尊は、文珠で、なほ附屬の像もある。みな毘首羯摩の作。彫刻精妙。鳥羽天皇の勅願によつて、下し賜うた佛像である。

【三將の像】 清衡・基衡・秀衡の三將の木像。

【光堂】 金色堂のこと。白山社の南にある。天仁二年清衡の建立。

三開四面。中の間七尺二寸、兩脇間五尺五寸、柱の高さ一丈九寸、内外上下四面悉く麻布を掛け、黒漆でその地を厚くし、金箔を貼り、金色燦爛、光堂の名に背かない。

内部は鏤柱彫梁みな螺鈿珠玉を装ひ、中境の四隅には七寶莊嚴丹青の柱を安置し、三壇中には藤原氏三代の棺を納めてある。中央が清衡、左が基衡、右が秀衡。秀衡の棺側に忠衡の首桶がある。鎌倉將軍惟康親王、堂宇の廢壞を憂へ、正應元年執權貞時に命じて五開四面の套堂を建立された。以來時の國守が修補を加へたが、寛永初年、後水尾天皇は特に伊達政宗に勅して修復させられた。後伊達家でも屢々修理した。今は保護建造物となつてゐる。本堂の傍に芭蕉の「五月雨の降り残してや光堂。」の句碑がある。その他、寶堂以下數堂ある。

因に記す、經堂も、光堂も、もとは中尊寺内にあつた。中尊寺は建武四年、野火に延焼して烏有となつたが、經藏(經堂とは記してであ)・金色堂(これまた光堂と)の二字のみ、無事にたすかつたとすふ。

【三尊】 阿彌陀如來と脇士即ち側立の觀世音菩薩(右)と勢至菩薩(左)との三體を稱していふ。

阿彌陀如來は、清淨平等覺經には無量清淨物と稱し、無量壽經には無量壽佛と稱してある。智論に「無量二あり、一は實無量にし

昔からの記念かたみとして保存されるやうになつた。

【七寶】 多くの寶物の意。本來は、金・銀・瑠璃・硨磲・瑪瑙・玻璃・眞珠をいふ。經文によつて多少異同がある。

「堯を覆うて」 屋根を葺いて、の意。即ち覆堂があつて上を覆うてゐることをいふ。

【堯】 本來は、煉瓦。

【五月雨の降りのこしてや光堂】 「折柄、空かき曇つて降りくらす五月雨(梅雨)のために周圍が薄暗くある中に立つて、獨り光堂が燦然と光りかゞやいてゐるのは、さすがに五月雨も、こゝだけは残して降らない(よけて降つた)のではないかと思はれるくらゐである」の意。(これは、光堂の金色燦爛たる有様を詠んだものではあるが、實際は、外には覆堂があり、内には昔時のやうな美觀はもうないのである。それ故、之は、主觀的の句と見るべきである。)

て諸の聖人も量ること能はざる所、虚空と涅槃と衆生との性の如き、これ不可量なり。二は有法可量、たゞ力劣なるもの量ること能はず。須彌山大海水の斤兩、滴數の多少の如き、諸佛菩薩は能くこれを知り、諸天世人は知る能はざる所、故に無量といふ。」
觀世音とは、名義集に「阿那婆婁吉低輪。」別行玄に「こゝは觀世音といふ。能所圓融、有無兼暢、正性を照顯して、その本末を審かにす。故に觀と稱するなり。世音とはこれ所觀の境なり。萬象流動して隔別不同なり。類音殊唱、俱に離苦を學ぶ、菩薩弘く慈し、一時に普く救ひ、皆解脱せしむ。故に觀世音といふ。」唐の玄奘三藏は、「有を觀じて有に住せず、空を觀じて、空に住せず、名を聞きて名に惑はず、相を見て相に没せず、心動する能はず、境隨ふ能はず、動隨その眞を亂さず、無礙の智慧といふべきなり。」といつた。

勢至とは、大勢至力あつて、智慧光を以て一切を照らすをいふ。
【七寶散りうせて、……姑く千載の記念とはなれり】 飾りつけた多くの寶物たからものも散り失せてしまつて、珠をちりばめ飾つた屏も風の爲に破れ、黄金を張つて飾つた柱も霜や雪のために朽ちてしまつて、もう頼れずたれて、何も残らない草むらとなつてしまふ筈であつた所を、鎌倉七代將軍惟康親王が命じて、四方を新たに圍ひ、更に屋根を葺いて上を覆ひ、風や雨を防いで、しばらく大

樂訓鈔

解題 樂訓三卷は貝原篤信の著で、所謂益軒十訓中の一である。總論節序讀書後論の四編に分ち、天地自然の快樂と、人間の清樂とを説いてゐる。其の文章は、平易率直な實用的和漢混淆體で、論旨懇切、溫雅優美の趣に富んでゐる。

著書貝原篤信は、徳川時代の碩儒で、我が國朱子學派の大家である。福岡の人で、福岡藩に仕へた。字は子誠、通稱を久兵衛といひ、益軒又は損軒と號する。文章はすべて簡易を旨とし、著書は百餘程もあつて漢文で記載したものは、慎思錄六卷を始めとして、自娛集七卷、初學知要三卷、大疑錄二卷等がある。和漢混淆體で記述したものは、家道訓六卷、大和俗訓八卷、初學訓五卷、樂訓三卷、童子訓五卷、五常訓五卷、文武訓四卷、養生訓七卷等がある。又紀行文には、岐蘇路記、諸州廻、京廻、吾妻路記、日光名所記、大和廻、有馬名所等がある。中御門天皇の正徳四年に八十五歳で歿した。(二二九〇—二三七四)

一 残れるよはひ(一)

「光陰箭の如く、時節流るるが如し」といへるも、うけることにあらず。老に向へばなほさらに年月の早

く過ぐることを、あたかも飛ぶが如し。あとをかへり見れば、いそぢのよはひを過ぎ來しも、さのみ久しからず。たとひいそぢの後、又いそぢのよはひを経て、百年にいたるとも、猶ゆくさきの月日いよ

いよ早くして、程なく盡きなむこと思ひやられ侍り。いくほどなき残れるよはひを樂みてこそ、過ぐさまほしけれ。うれひくるしみて空しく過ぎなむは、いとおろかなりや。

【うけること】「いそぢ」【さのみ】「盡きなむ」【いくほどなき】

○東京高等師範學校

要旨 (一)(二)に互りて、先づ光陰の過ぎ易きことを説き、更に之に對する感想を述べてゐる。

(二)は、幾許もない餘生を愉快に過したいといふ感想。

釋義

【光陰箭の如く、時節流るるが如し】……うけることにあらず【むかしから、光陰は箭の如く早く、時節は水の流れるやうにすん／＼過ぎてしまふ。】といつてあるのも、とりとめのない浮説ではない。

「光陰矢の如く、云々」李益の句「君看白日過、何異三弦上箭。」黃庭堅の句「日月過箭疾。」顏氏家訓「光陰可惜譬諸逝水。」

「うけること」根柢のないこと。慥かでないこと。出鱈目。うそ。浮説。

【老に向へば】老年に近づいて行くこと。老境に向ふこと。

【なほさらに】一層、この感じが深くて。

【あとをかへり見れば】過ぎ去つたあと(既往)をふりかへつて考へて見ると。

【いそぢ】五十。茲では、五十歳、の意。

【過ぎ來しも】経過して來たのも。

【さのみ久しからず】それほど(そんなに)久しい間ではない。【たとひいそぢの後、……思ひやられ侍り】たとひ既に五十歳になつた其の後に、又實に五十歳の年齢を經過して百歳まで生きるにしても、やはり、それから先(將來)の月日は、ますます早く過ぎて、間もなく一生の月日が盡きて、死んでしまふだらうといふことは、推測が出來ます。

【ゆくさきの月日】將來の月日。

「程なく盡きなむこと」間もなく一生の月日のつきてしまふこと。死期の至ること。

なむ 未來完了の助動詞。

「思ひやられ侍り」推測(推量)出來ます。

やられのれは、可能の助動詞。

【としどしの花は相似たれど云云】「老いかさなる」【今の昔にしかず云云】【今日の日の内を云云】

○東京高等師範學校

○水産講習所

要旨 絶えず老いゆく餘生を空しく過して後悔することのないやうに、一日一日の日を惜んで有意義におくらくてはならぬといふ感想を述べてゐる。

釋義

【としどしに花は相似たれども、……一日もいたづらに過すべからず】 毎年々々花は似よつた美しさに咲くけれども、毎年々々人間は年をとつて前とは變つて行く。さうしてひどく老年になると、僅かに一年の間にも、次第に衰弱して行つて、現在の我が身はすべての點に於て、若かつた過去の我が身に劣り、又老衰した將來の我が身は、現在の我が身よりも劣るやうになることを悟つて、今から、前以て注意して、將來に於て後悔しないやうにといふことを考へ、時日の過ぎて行くのを惜しみ、一日でも無駄に過してはならぬ。

【としどしに云云】花は毎年同じやうに咲くが、人は或は老い衰

【いくほどなき残れるよはひ、……いとおろかなりや】それ故、いくらも残つてゐない餘命を、たのしんで愉快に過したいものである。名利の爲に心配したり苦しんだりして無駄に餘命を送ることは甚だおろかなことである。

【いくほどなき残れるよはひ】いくらも残つてゐない(短い)壽命。

「空しく」むだに。いたづらに。

「うれひくるしみて」名利に狂奔して、自ら我が心をなやますべからず。

二 時日をしめ (二)

としどしに花は相似たれど、としどしに人は同じからず。老いかさなれば、一とせの内にもやうやく衰へ行きて今の昔にしかず、後の今にしかざる事を知りて、かねてより悔なからむ事を思ひ、時日をしめ、一日もいたづらに過すべからず。今日くれて明日もありとて恃むべからず。今日の日の内を、日日にしむべし

へ、又は、死にかはり生れかはつて毎年ちがつて行く。劉延芝の詩句の「年年歲歲花相似。歲歲年年人不同。」とあるに據つて書いたのである。

「老い重なれば」老が重なつて來ると。年よつてくると。ひどく年をとると。

「今の昔にしかず、後の今にしかざる事」現在は過去に及ばないし、將來は現在に及ばないといふ事。

「いかず」身心ともに昔に及ばない意。

「かねて」前々から。

【今日くれて明日もありとて恃むべからず】 今日暮れてしまつたが、明日もあるからよいなどとあてにしてはならない。朱熹の勸學文の「勿レ謂今日不レ學而有來日」といふ句を思ひあはせるがよい。

【今日の日の内を日日にをしむべし】 今日の日の中の現在の時間を、其の日々に愛惜して行かなければならない。

三 旅行の樂

旅行して他郷に遊び、名勝の地山水の美はしき佳境にのぞめば、良心を感じおこし鄙吝を洗ひ濯ぐ

助となる。これも亦わが徳をすすめ、知をひろむ

るよすがなるべし。(第一節)又いひ知らぬ異境にゆきて、見馴れぬ山川のありさまを見て、目をあそばしめ、その里人に逢ひて、其の處の風土を問ひ、あ

るはおくまりたる山ふところに、岩根ふみてたづね入り、もとより山水の癖ありて、青山夢に入るこ

としきりなる人は、心をとめて歸ることを忘れぬべし。あるは海べた山遠き眼見廣きながめは萬

戸侯の富にもまされり。(第二集)

【鄙吝】「よすが」目をあそばしむ 【山ふところ】「岩根」

○海軍機關學校
要旨 旅行の樂を記した文で、二節から成り、第一節は、旅行の效益、第二節は、旅行の趣味を述べてゐる。

釋義

【旅行して他郷に遊び、……知をひろむるよすがなるべし】旅行をして他の地方に遊び、名高い景色のすぐれた土地や、山や

水の美しい景色のよい所に行くと、それに感じて、人間固有の善

心をよび興し、いやしいけちな心を洗ひ清める(さつぱり)となくなしてしまふ)助ともなるものである。それ故、この旅行も亦、

自分の徳を進め、知識を廣める方便となるであらう。(第一節)

【名勝】名高い勝地。

【佳境】けしきのよい所。

【良心】本然の善心。即ち、人間固有の善心をいふ。

【鄙吝】 茲は、いやしくけちな心。

【よすが】 寄處の義から出た語であるといふ。便りとする事、即ち、方便・手段・てだて、の意。

【又いひ知らぬ異境にゆきて、……萬戸侯の富にもまされり】又、何ともいへない物珍しい土地に行つて、平素見ないやうな山や川の有様を見て目を樂しませ、その土地の人にあつて、其處の氣候や土地の様子などを問ひ聞き、或は又奥深い山奥で、岩の上を歩いて尋ね入りなどとすると、平素から、山水の景色を愛好する性癖があつて、青々とした山の景色を夢にまでも見ることが度々あるやうな旅行の好きな人は、その他郷の好い景色に心を留めてしまつて、歸ることを忘れてしまふ。或は又海邊や、山が遙か遠くにあつて見渡しの廣い眺めなどは、廣大な土地を領有する大名の富にもまさつてゐる。(第三節)

「風土」氣候と土地との有様。

「奥まりたる」奥深い。

「山ふところ」山と山との間の懐のやうに圍まれたところ。即ち、山間の入りこんだ所。山奥。

「岩根」根は、接尾語。

「山水の癖」山川の景色を愛好する性癖。又は、山水の勝地に遊ぶことを好む癖。

「青山夢に入ることしきりなる人」青々とした山を夢にまでも見ることが屢々ある人。即ち、勝地を探ることを好むあまり、寢てゐる中にも、度々青々とした山を夢みる人、の意。

「忘れぬべし」このぬは、完了の助動詞ではあるが、茲は、普通よりは、やゝ力強くいふに用ひたのである。

「萬戸侯」一萬戸の都邑を領有する諸侯。大々名。

四 古人のかたみ

あたら夜の月なれば、同じくは心知れらむ人と共に見むこそほいなれど、同じ心に見る人稀なれば、西行が「ひとりぞ月は見るべかりける」と詠めるも、

宜なり。もろこし人も、秋月は俗士と見るべからず。といへり。李白は、今人は古時の月を見ず。といへれど、昔世世の人の眺め来しも、この月なれば、古人のかたみとなれるも、昔覺えて忍ばし。古今の人の世を去りゆくは、流水の逝きてかへらざるが如し。ただ月の光のみ、古今かはる事なきこそ、こよなうめでたく貴ぶべけれ。

〔あたり夜の月〕 〔同じくは〕 〔知れらむ〕 〔同じ心に見る人〕
〔今人は古時の月を見ず〕 〔古人のかたみ〕 〔昔覺えて忍ばし〕
〔こよなし〕

○水産講習所

要旨 秋月に對する所感を記したもので、天に懸る月は、古人の眺めた月であるから、いはば古人の記念である。そして古往今來、人は多く死んで再びかへることはないが、月は昔も今もかはらずに照してゐるといふことを述べてゐる。

釋義

〔あたり夜の月なれば、……もろこし人も、〕秋月は俗士と見るべからず。といへり。折角の惜しい夜の月であるから、同じ事なら、氣心のわかつてゐる仲のよい同士と一緒に見るのが本望ではあるけれども、自分と同じ趣味を持つてゐると思はれる人もごく少いので、西行法師が、「月はたゞ一人で見るときもあるよ。」と詠んだのも尤もなことである。支那の人も、「秋の月は無趣味な俗物と一緒に見るものではない。」といつてゐる。

〔あたり夜の月〕 後撰集卷第三、源信明の歌に「あたり夜の月と花とを同じくば心しれらむ人に見せばや。」とある。

〔心知れらむ人〕 心を知つてゐる人。

ら 完了の助動詞「リ」の將然形。

〔ひとりぞ月は見るべかりける〕 千載集卷第十六に顯昭法師の歌として「さびしきにあはれもいとまきりけり、ひとりぞ月は見るべかりける。」とある。それ故、此の歌は、實は西行法師の歌ではないのである。

見るべかりける 「見るべくありける」の約。べくは、條理をあらはす助動詞、けるは、感歎の意をあらはす助動詞。それ故「見る筈のものであるよ」の意。

〔李白は、〕今人は古時の月を見ず。といへれど、……こよなうめでたく貴ぶべけれ。 唐の李白は「月は常佳變らないけれども、人は始終變つて、今の人は昔のまゝの人ではないから、昔の月を見ることは出来ない。然るに月は常佳であるから、今人の見る月は、曾て古人を照して來たものである。」と、いつてゐるけれども、昔から代々の人が眺めて來たのも、同じ此の月であるから、いはばこの月は古人が後世にのこしてくれた記念ともなつてゐるので、この月を見ると昔の事が思ひ出されてなつかしい感じがする。古の人や今の人の死んで此の世を去つて行く有様は、丁度流水が一度流れ去ると再び戻つて來ないのと同じやうなものである。然るにたい月の光ばかりは依然として昔も今も變ることのないのは、この上もなく結構なことで貴ばなければならぬことである。

〔李白〕 唐の玄宗の時の詩人。字は太白、青蓮と號する。
〔今人は古時の月を見ず〕 李白全集卷二十にある「把酒問月」と題する詩の一句で「(前略)今人不見古時月。今月曾經照古人。古人今人若流水。共看明月皆如此。(下略)」とある。
〔こよなし〕 いったけれども。
〔眺め来しも〕 眺めて來たのも。
〔この月〕 現に自分の眺めてゐる月。

〔古人のかたみとなれるも〕 古人が後世にのこしてくれた(古人を思ひ出す)形見(記念物)となつてゐるが。

〔昔覺えて忍ばし〕 それを見るにつけても、昔の事が思ひ出されて如何にもなつかしい。荷田蒼生子(春満の姪)の歌に「うち向ふ月はひとつの影ながら、うかぶは千々の思なりけり。」とあるを、思ひあはされたい。
覺えて 思ひ出される意。
忍ばし わすれがたい・なつかしい、などの意。

〔世をさりゆく〕 死んで此の世を去つて行く。
〔流水の逝きてかへらざるが如し〕 前掲の李白の詩を参照。

〔こよなし〕 此の上もなく。
〔めでたく〕 結構である。
〔べけれ〕 「べし」の已然形で、上にこそがあるから、べけれと結んだのである。強めていへば、價值があるの意。

五 秋の花

「花は春。」とこそいへれど、秋もまた花おほかめり。ことさら野邊にたてる秋草の名も知らぬ花ども

多く草むらに紐解き、錦をさらすが如く見ゆれば、秋の野いとまし珍し。秋の花の久しきに堪へて散りがてなるは、春の花の見る程もなくてはやく散りぬるにまされり。

○高等學校

【おほかめり】「紐解く」「散りがて」「見る程もなし」

要旨

秋の花の特長を記してゐる。

釋義

【花は春。】とこそいへれど……春の花の見る程もなくてはやく散りぬるにまされり。「花は春の時期に限る。」とまあ昔から言ひ來つてゐるけれども、秋の頃もまた結構な花が多くあるやうである。取りわけ、野邊に生ひ立つてゐる秋草の名前も知らない花などが、澤山に草叢に咲きそつて、丁度錦の織物を敷き連ねてゐるやうに見えるから、秋の野は、春よりも、なほ一層すぐれて美しい。秋の花の長もちがして容易に散りさうにもないのは、春の花の眺める間もなくさつさと散つてしまふのに優つてゐる。

【おほかめり】「おほくあるめり」の略。

めり、物事の狀態を然りと推量していふ意の助動詞で、動詞の終止形に連続し、特に、ら行變格には、連體形よりする。

【ことさら】とりわけ。

【紐解き】咲くことにいふ。

【さらす】布・木綿又は纖維などを、水に洗ひ日にあてて、其の色を白くすることであるが、茲は、錦を敷き連ねておく、といふ位の意にとる。

【いとまし】なほ一層。

【めづらし】世に稀である・つねでない、の意から、すぐれて美しい意にとる。

【久しきに堪へて】久しい間保つて、長もちがして。

【散りがてなる】散り難くあること。容易に散らないこと。

六菊

長月の比は、秋の花も過ぎ紅葉もまだしき折なるに、菊は百花におくられてひとり晩節をたち、霜に

の花もない秋の末にたゞひとり盛りであるから、時節がよくて大變結構なことである。

【長月】陰曆九月の異名。

【まだしき】「いまだしき」の略。まだ早い、の意。

【晩節をたち】終りまで凛々しく咲いてゐること。

【霜にほこりて】霜にあつてもおかされることなく勢よく咲いてゐることをいふ。

【操の色をあらはし】いつまでも清美の色を保つて、けだかく咲きつゞけてゐることをいふ。

【なべて】おしなべて。一般の。普通の。

【あてやか】上品。高雅。

【わきて】取り分け。

【あはれむ】愛賞する。賞翫する。

【折にあひて】時がよくて。時節に適つて。

ほこりて操の色をあらはし、なべての花に時を異にするのみならず、色形句ともに殊にすぐれてあてやかなれば、此の時もし花多くともわきてあはれむべきに、秋の末にひとりさかりなれば、折にあひていとめてだし。

【長月】「まだし」「晩節をたち」「霜にほこる」「なべての花」

【あてやか】「わきて」「折にあひて」

○明治専門學校

要旨 晩節を保つて咲く菊を歎賞してゐる。

釋義

【長月の比は、……折にあひていとめてだし】九月頃は、秋の花も散つてしまつて、紅葉もまだ早い時分であるのに、菊は多くの花におくられてひとり終りまで凛々しく咲き、霜にあつてもおかさされず勢よくいつまでも清く美しい色をあらはして咲きつづけ、一般の花とは咲く時期を異にするばかりでなく、色も形も句も共に殊にすぐれて上品であるから、此の時期にもし花が多くあつても、此の花だけは特別に愛賞する筈であるのに、まして他

文訓鈔

解題

文訓は、益軒十訓中の文武訓(三卷)の一部をなすもので、上上之末下下之末に分れてゐる。そして文道に關して平常の教訓となるべき事を、平易率直に説明した和漢混淆文である。著者貝原益軒の傳は、樂訓鈔の解題に略述してある。

一 ふみ見る樂

四時につきて、いつともわかず、ふるきふみ見ることをたのしみ、つねにして止むべからず。なんぞただ三餘の時にかざるべきや。春夏は日の長きを愛し、秋冬は夜の長きをよるこぶ。折を得てたのしむべし。日ながけれど事しげく、客多ければいとまなし。夜はしづかにして書を見るに功多し。およそ、日ひと日夜ひと夜、ふみ見る益はいかなるたのしみにもかへがたし。經傳をよめば見

るたびに聖賢の教をまのあたり聞くが如し。たふとぶべきこと限りなく、むなしく過ぎぬる隙をしむべし。狄仁傑てきじんの「名教の内、至れるたのしみあり、なんぞ俗人とかたることを好まむや。」といへるもむべなり。

〔いつともわかず〕 〔つねにして〕 〔三餘の時〕 〔事しげし〕

〔經傳〕 〔名教〕

○ 桐生高等染織學校

要旨 讀書の效益を述べてゐる。

釋義

【四時につきて、……ふみ見る益はいかなるたのしみにもかへがたし】 春夏秋冬について、何時といふ區別なく、古書を讀むことをたのしみ、それを常になすべき事として、止めてはならない。書を讀むのは、どうしてたゞ所謂三餘（冬と夜と陰雨）の時に限るべき事であらうか。春と夏とは日の長いのを愛し、秋と冬とは夜の長いのを喜ぶといふやうに、常に讀むべき折々を捉へて、讀書を楽しむべきである。いかに日が長くても、仕事が多、來客が多いと、晝間は讀書する暇がない。ところが、夜間は静かで、書物を讀むのに、効果が多いのである。概して終日終夜讀書して得る益といふものは、どのやうな富貴の樂にもかへることの出来ないものである。

【四時】 四季、即ち、春夏秋冬。

【三つともわかず】 三つといふ區別を立てず。いつといふ區別なく。

【つねにして】 いつもきまつてやる事として。

【三餘の時】 三つの餘分の時。冬は一年の餘、夜は日の餘、曇りたり雨が降つたりするのは、時の餘である。古人はこの三餘を以て讀書すべき時とした。魏略に「董遇の言」學者當以三餘。冬者歲之餘、夜者日之餘、陰雨者時之餘。」とあるをいふ。

二 浦の濱木綿

何事も知らぬさましたるぞよき。自らは私にひかれてよく知れりと思へど、いまだよく知らぬこと多ければ、わが心にゆるしがたし。子路の知らざるを知れりとするは、いつはりて知れりとするにはあらず。わが心にはまことに知れりと思へど、わが氣あらく心くはしからずして、あやまりて既に知れりと思へるなり。ひとへに思へば、まだ知らぬことを既によく知れりと思ひ誤ること多し。浦の濱木綿の百重なることを思ふべし。

【私にひかる】 「知らざるを知れりとす」 「氣あらく心くはしからず」 【浦の濱木綿云々】

【要旨】 何事につけても自分は少しも知らぬ振をして居るがよいといふことを教へてゐる。

【釋義】

【專しげく】 用事（事務・仕事）が多くて。
【功】 效果。
【日ひと日夜ひと夜】 日一日中、夜一夜中、の意。終日終夜。ひねもすよすがらに同じ。

【經傳をよめば、……狄仁傑の内、……好まむや。】 經書や其の註釋書を讀むと、その讀む度に 聖賢と向ひあつて、其の教を目前で開いてゐるやうである。かく經傳を讀むことの尊ぶべき事は限りのないものであるから、無駄に過ぎてしまふ隙を惜んで書を讀まねばならない。狄仁傑が嘗て、「人倫の教の内には、至極の樂がある、どうして俗人と語ることを好まうか、好まない。」といつたのは、尤もなことである。

【經傳】 經は、經書（聖賢述作の書）で、人の道を説いてある書。

主として四書（大學・中庸・論語・孟子）・五經（易經・書經・詩經・春秋・禮記）をさす。傳は、左氏傳のやうに、註釋書のこと。經傳は、古來儒家の學ぶべき書とされてゐた。

【狄仁傑】 字は懷英。唐の名臣で、則天武后に仕へた人。

【名教】 聖人の教。道德の教。儒道の教。五倫・五常の如く、それれん名を立てて明かにする故にかくいふ。晉書、樂廣傳に「名教之内、自有樂地。」とある。

【何事も知らぬさましたるぞよき。……浦の濱木綿の百重なることを思ふべし】 何事につけても自分は少しも知らぬ風をしてゐるがよい。自分では、自惚心にひかれて、よく知つてゐると思ふけれども、事實は、まだよく知らぬ事が多いから、何事も知つてゐるとは、許しがたい。孔子の弟子の子路が知らない事を知つたふりするのは、偽つて知つたふりをするのではない。自分の心では眞實知つてゐると思ふけれども、それは、子路は氣質が粗放で綿密でないからして、誤解して既に知つてゐると考へてゐるのである。一圖に思ひ込んでしまふと、まだ知らぬ事をも、既に十分に知つてゐると思ひ誤る事が多い。すべて物事の道理といふものは、一重や二重ではない浦の濱木綿のやうに百重にも深くつまれて奥があるものである事を考へて見るがよい。

【私にひかれて】 自惚心にひつばられて。自惚心にまよはされて。

【子路の知らざるを知れりとする】 子路は、孔子十哲の一人。姓は仲、名は由、字は子路。論語、爲政篇に「子曰、由誨、汝知之也。知之爲知之、不知爲不知、是知也。」孔子が云はれるには、由よ、汝に知るといふ事の意味を教へよう。知つてゐる事は知つてゐるとし、知らない事は知らないとする、これが實に知つてゐるといふものだ。」とあるに據つて書いたもので、孔子の斯く説めたのは、子路は元來、氣の勝つた者であるから、知らない事

でも無理に知つてゐるやうに振舞ふ缺點があつた。かく知らない事をも知つたとするやうでは、萬事に失敗を招き易いだけでなく、學問修得上にも害になるからである。

「心くはしからず」 心が綿密でない。

「浦の濱木綿云々」 物の道理は浦の濱木綿のやうに奥に奥があつて、單純なものではない、の意。萬葉集、卷第四に「三熊野の浦の濱木綿百重なす心はおもへどたゞにあはぬかも」とあるに據つた語である。

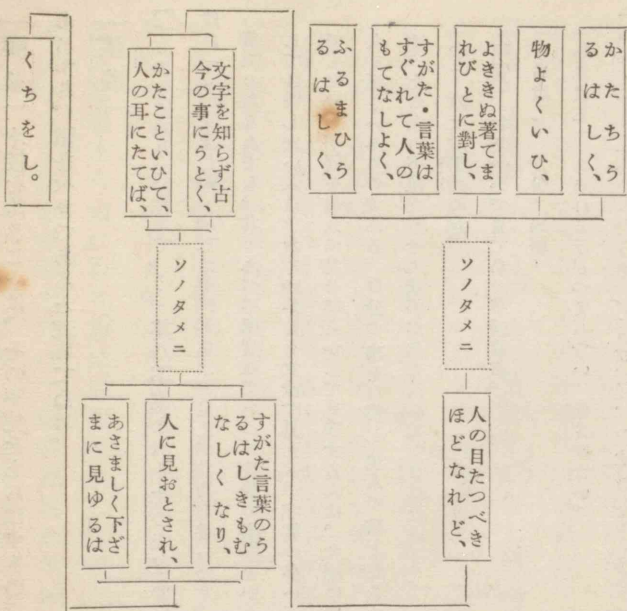
濱木綿 紀州・勢州の海濱に自生するものが多い。石蒜科の草木。莖は芭蕉の如く、皮は幾重にも重なる。葉はおもとに似て長く、多肉である。花は幣に木綿四手をとりにかけたやうである。文珠蘭・濱萬年青。

三 古今の事にうとし

かたちうるはしく、物よくいひ、よききね著てまればとに對し、すがた言葉はすぐれて人のもてなしく、ふるまひうるはしく、

文脈

文の構成を説明して、正解させるやうに、力められたい。
() の中には、補つた部分である。



文訓鈔 四玉の盃そこなきが如し

ひて、人の耳にたてばすがた言葉のうるはしきもむなしくなり、人に見おとされ、あさましく下さまに見ゆるはくちをし。

「まれびと」 「もてなし」 「かたこといひ」

○醫學専門學校

要旨 間違つた事を言ふことを戒めてゐる。

釋義

【かたちうるはしく、…あさましく下さまに見ゆるはくちをし】 顔かたちが立派で、口のきゝ方がうまく（口は達者であり）、よい著物をきて（立派ななりをして）客に對し、様子や言葉がすぐれて（態度といひ言葉遣ひといひすべて立派で）人の接待がうまく、その舉動（動作）が立派（上品）で、人が特に目をつけるほどであるけれども、然し、文字を知らず（學問がなく）古今の事柄に暗く（古今の事柄を知らず）、間違つた事を云つて、それが人の耳にさはると折角の態度や言葉の立派なもの何の甲斐もなく無駄になつて、人には見さげられ、あきれるほど下品な人物のやうに見えるのは、残念な事である。

「まれびと」 稀人、の意。客のと。「まらうど」に同じ。九頁の下欄に

「もてなしよく」 接待が上手で。

「かたこと」 不完全な語。間違つたこと。

「耳にたつ」 耳にさはる。いやらしく聞えることをいふ。

「あさましく」 あきれるほどに。

四 玉の盃そこなきが如し

すこし才ありと見えて、物書き藝ある人も、其の心平實にして、わが才をかくしてほこらざる人は、おこゆかしくうるはしと見ゆ。多才なる人も、わが才をほかにかがやかして誇る人は、多くは人をそしる。おのれにほこり人をそしるは、其の不徳なるくせのほどあらはれてあさまし。かからざりせばよからましと思ひて、あたら才學あるも、玉の盃そこなきが如く思ひくたされて、其の疵きずうらめし。

「平實」 「あさまし」 「かからざりせば」 「玉の盃そこなし」

「思ひくたさる」

要旨 才能を誇ることは、その不徳をあらはすものであるから、慎むべきであると戒めてゐる。

釋義

【すこし才ありと見えて、…其の不徳なるくせのほどあらはれてあさまし】 少しは學問があると見えて、物を書いたり、藝能のある人でも、其の心が平靜實直であつて自分の學問をかくして自慢しない人は、おこゆかしく立派に見える。才智の多い人でも自分の學問を他人に見せびらかして自慢する人は、大抵は他人を悪くいふものである。自分の事を自慢し他人の事を誇るの

は、その人の不徳なくせの様子があらはれてなさない。

「才」 茲は、學問の意。

「平實」 おだやかでまじめ。平靜實直。

「うるはし」 立派。端麗。

「あさまし」 あきれるほどつまらない。なさない。

【かからざりせばよからましと思ひて、…其の疵うらめし】 もしもこんな風でなかつたとしたら、さぞ、よからうにと、他人が思つて、あたり、惜しむべき才學を持つてゐる者も、玉の盃に底がないやうに、如何に才學があつても、人から輕蔑されて、其の自慢の缺點が我ながら恨めしく思はれる。

「かからざりせば」 せばは、現在の事實に對して反對のことを想像する意。

「玉の盃底なし」 貴重な玉製の盃でも底がないと役に立たない意。あき足らない折にいふ語。韓非子、外儲説に「堂谿公見韓昭侯曰、爲入主、而漏泄其群臣之語、譬猶玉盃之無底也」とある。

「思ひくたされて」 思ひけなされて。輕蔑せられて。

「疵」 缺點。自慢の癖をさす。

駿臺雜話鈔

解題

駿臺雜話五卷は、室鳩巢の著である。鳩巢が老いて病に罹り駿河臺の邸で休養中、享保十六年の春から冬に至るまで、講論の餘暇に門生の間に應じた雜話を、翌年の春から書き集め、同年の秋に及んで脱稿した隨筆で、八代將軍徳川吉宗公に上つたものである。其の所説は、主として程朱の學を發揮し、當時盛んに行はれた異説を辯駁し、節義を尙び風俗を正すにあるが、其の間には詩歌文章の評論があり、政治經濟の説があり、兵法論があり、宗教論があつて、鳩巢の教學系統を研究する好材料となるばかりでなく、其の著が最初から組織を立てて書いたものでないにも拘らず、文章雅麗、意義明晰、實に和漢混淆文の模範とすべき價値が十分にある。

著者室鳩巢は、名は直清、幼名は孫太郎、字は師禮、一字は汝玉、鳩巢は其の號、又滄浪と號し、通稱を初め順祥後、新助といつた。其の先祖は熊谷直實から出た。江戸の人で聰明夙成の風があつた。木下順庵に學び、元祿中加賀に行き弟子を教育した。正徳二年新井白石の薦めで將軍家に仕へ駿河臺に邸を賜つた。享保十九年八月十二日に歿した。年七十七。鳩巢は經學に深かつたばかりでなく、文章は範を唐宋八家に取り、詩は晚唐によつて共と妙境に達し、傍ら和歌國文にも通じた。けれども其の功績はよく程朱の學を守つて徳教維持の本源を養ひ、當時盛んに行はれた伊物諸氏の古學を排し、洛閩の學を一縷の危きに持續して、寛政年間に於ける朱子學復興の基をなしたのにある。著書には、駿

臺雜誌義人錄六論行義大意周易新疏大學新疏中庸新疏周易講義四書講義西銘詳義士談補正成諸士
教國喪正義獻可錄不亡錄神儒問答鳩巢逸話(一名鳩巢小說)鳩巢文集鳩巢祕錄鳩巢書簡等がある。(二二一
八一二三九四)

一道

道は事物當然の理なり。匹夫匹婦も共に知り、共
に行ふものなり。ただ眞に知らねば實に行はれ
ず。故に習ひて察せず、行ひて著しからず、身を終
ふるまでこれに由れども、遂に悟入せざるもの多
し。道を開くといふは外の事にはあらず。ただ
此の道理を眞に知り實に行ひて、魚の水に安んじ
鳥の林をたのしむごとく、常に道理を命として須
臾も離るることなく、生きてある限りは道に従ひ、
死すれば身も道もこれまでにて長く安かるべし。

〔當然の理〕 〔眞に知る〕 〔習ふ〕 〔悟入〕 〔道理を命とす〕
〔須臾〕

に悟り知らない者が澤山にある。

「道は事物當然の理なり」論語、里仁第四の「子曰、朝聞道、夕
死可矣。」の集疏に「朱熹云、道者、事物當然之理。苟得聞之、
則生順死安、無復遺恨矣。朝夕所以其言其時之近」とあるに
據つて書いたものである。

道 朱子は、事物當然の理と説き、徂徠は、先玉の道と説いてゐる。
茲は、廣く人の守り行ふべき條理、即ち、仁義忠孝等の徳義と見て
よからう。弘道記記には「道者何、天地之大經、而生民不可須
臾離者也」とある。

事物 あらゆるものごと、意であるが、茲は、あらゆるもの、意
にとり、就中特に、人に就ていふと見るべきである。
當然の理 どうしてもさうあらねばならぬ道理。例へば、朝顔が
花を開き實を結ぶのは、これは朝顔が己が道を行ふ所以である
し、人が君に仕へて忠を盡くし親に仕へて孝を盡くすのは、これ
は人が己が道を行ふ所以である。

「匹夫匹婦も共に知り、云々」中庸第十二章に「君子之道、費而
隱。夫婦之愚、可以與知也。及其至也、雖聖人亦有所不知
知焉。夫婦之不肖、可以能行也。及其至也、雖聖人亦有所不
不能焉。云々」とあるに據つて書いたものである。
匹夫匹婦 一夫(男)一婦(女)の義で、平凡な男女をいふ。俗夫俗

【要旨】 道の意義を説明し、及び此の道を行ふに就いて
の心得、即ち、生きてゐる限り之を行ふべきであることを
教へてゐる。

釋義

【道は事物當然の理なり、……遂に悟入せざるもの多し】
道といふものは、あらゆるものが、どうしても行はねばならぬす
ぢみちである。此の道は、賤しい男女でもともに皆之を知つ
て、ともなく皆行ふ所のものである。かやうに誰でも知つて行
つてゐる卑近のものであるが、たゞほんたうに道の本質を明かに
知らないといふ、ほんたうに之を實行することが出来ない。それ故、
世間には、此の道に習熟しては居るが、どうしてからならなけれ
ばならぬかといふ理を精しく知らず、又、實際に此の道を行つて
居ながら、その何の理由でかうしなければならぬかを明かに知
らないで、死ぬ迄此の道に由り乍らも、しまひまで此の道を十分

婦・愚夫愚婦・俗人。

【眞に知る】 ほんたうに道を知る。

「習ひて察せず、行ひて著しからず」孟子、盡心章句上に「孟子曰、
行之而不著焉、習矣而不察焉。終身由之、而不知其所以然者、衆
也」とあり、その朱註に「著者知之明。察者識之精。言方行之、
而不不能明其所當然。既習矣、而猶不識其所當然。所以終
身由之、而不知其所以然者多也。」とある。

蓋し、行ふといひ、習ふといふは、其の事をいひ、察すといひ、
著しといふは、其の理をいふのである。
習ひて察せず 其の事(道)に習ひ熟してはゐるが、どうしてから
ならなければならぬかを精しく識らない。

習ふ 度々行つて熟してゐること。妻子を愛育するやうなこと
は、平生既に習熟してゐることである。
行ひて著しからず 實際に其の事(道)を行つて居ながら、その
何の理由でかうしなければならぬかを明かに識らない。

【道を開くといふは外の事にはあらず。……長く安かるべ
し】 道を開くといふことは別段これといつて特別な事ではない。

たゞ此の事物當然の道理をほんたうによく知り實際の行ひにあらはして、丁度天から授つた性に從つて、魚が水中に安んじて生活し、鳥が林に楽しんで生活する(孰れも道に安んじてゐる)やうに、常に此の道理を最も大切な事として、しばらくも離れることなく、生きてゐる間だけは、十分に道を行つて生活し、死んだなら、肉體も道徳もそれまでであつて、其の時こそ永久に安心して地下に眠ることが出来るのである。

「ただ此の道理を直に知り、云々」人も道を己が生命とし、尙も道と離れることなく、生きては道を守り、死して、其の身が、道とともに亡ひるといふやうになつたら、もう絶えず心安からう、の意をのべてゐるのである。

「道理を命とし」道理を最も大切な事とする。

「須臾」しばらく。中庸に「道也者、不可須臾離。可離非道也。」とある。

二 翁が心

翁が心は知己を一世にもとむるにも候はず。昔より邪僻妄誕にして根もなき事の世に行はれて、

事といつてよろしい。實際そんな事は、一時的のもので、大概長續のしないものである。幾代も長く時を経るうちには、これ等の邪説は消えて正しい道にかへらないことはない。それなのに、短氣で(氣短かにも)早くその効果を見ようと望むのは、まだ修養の足りない事といつてよい。

「翁」男の老人の稱。茲は、鳩巢翁自身を指す。本書は、獨の翁の物語といふ形式を取つて書いてある。

「知己」自分の心をよく知つてくれる人。

「邪僻」ひがみ。茲は、道に背いた悪いこと、の意にとる。

「妄誕」よりどころの無いうそ。根據のないでたらめ。

「あなかしがまし」あゝやかましくてうるさい。

あな、感謝詞。

かしがまし、喧しい。

「女郎花の一時」古今集、僧正遍照の歌に「秋の野になまめき立てる女郎花、あなかしがまし花もひと時」とあるに據つてかいたものである。

「未練」未熟線の略。未熟。まだ修養の足りない、の意にとるがよい。

あなかしがましく聞ゆるは、女郎花の一時とや申すべき。大方は續かぬものにこそ。世を経て正道へかへらぬはなし。然るを心短くして、早く其の驗を見むと思ふは未練のことといふべし。

【知己】 【邪僻】 【妄誕】 【かしがまし】

○秋田鎮山専門學校

要旨 邪僻妄誕は世を経るうちには正道にかへるものである。然るに氣短かに、早く其の效驗を見ようと思ふのは、まだ修養が足りないといつてよいといふことを述べてゐる。

釋義

【翁が心は知己を一世にもとむるにも候はず。……未練のことといふべし】 翁の本意は、自分の心までもよくよく知つてくれる人を、自分の一代一生の間に求める譯でもありません。昔から正道に反した間違つた事や、根も葉もない偽り事が、盛んに世に行はれて、それを見聞くにつけて、「あゝうるさい。」と思はれるのは、女郎花があでやかに咲きさかる一時の間のやうに短い間の

三 士の常 (一)

盛衰榮枯は世の常なり。それによりて志をかへぬは是亦士の常なり。もし時の模様につきて覺悟を變じ、世話に云ふえりもとにつくやうにては、何をもて士と申し侍るべき。

水邊、楊柳、綠煙、絲。 立馬、煩君、折一枝。

唯有、春風、最相惜。 慇懃、更向、手中吹。

これ唐の揚巨源が楊柳の詩なり。此の三四の句意、婉にしておもしろく覺え侍り。よりて其の意を翁がよめる歌に、

なれて吹く名残やをしき、青柳の

手折りし枝をしたふ春かぜ。

【時の模様】 【世話】 【えりもとにつく】 【慇懃】 【婉にして】
【なれて吹く】

○高等學校

○三重高等農林學校

要旨

(一)(二)に互りて、枝に吹いて来る春風のやさしい趣致から、忠臣義士の心を變へぬ節操に説き及ぼしてゐる。此の(一)は、楊巨源の楊柳の詩意をとつて、鳩巢翁が和歌を詠じ、そして士の覺悟を説いてゐる。

釋義

【盛衰榮枯は世の常なり。何をもて士と申し侍るべき】盛衰や榮枯は世間普通の習はしである。その世態の變遷によつて志を變へないのは、是もやはり士たるものの常の習はしである。然るに若し時代の様子につれて心構を變へ、諺にいふ襟元につくといふやうに、權勢ある人に諂ひ附くやうでは、どうして士と申すことが出来ようか、それは士と申すことが出来ない。

【盛衰榮枯は世の常なり云々】小學に載せてある魏の令女の言に「仁者不以盛衰改節、義者不以存亡易心」とある意に同じ。

【時の權勢につきて】時代の様子につれて。

【覺悟】ころがまへ・ころごらみ。即ち、かねてから思つてゐること。

【世話】世間の言草・世人のいひならはし。即ち、諺。

【えりもとにつく】富貴や權勢ある人に諂ひつく意味の諷刺。權門に阿附する・利慾に奔り附く・意。永正狂歌合に「さしたる垢はなくとも、布子のえりにつき侍らんと」とあり、又曾我會稽山に「京の小四郎といふ種替りの大惡人、慾に耽り襟に付き」とある。

【水邊楊柳綠煙絲。云々の詩】全唐詩第五函の楊巨源集に、

「折楊柳」の題で載せてある。一首の意は、水邊の楊柳(やなぎ)は、緑の絲が煙るやうに美しい芽を出してゐる。餘りの美しさに、私は馬を止め、君に面倒をかけて、その美しい一枝を折つて貰つた。折つても別段にそれを咎める人もないけれども、たゞ春風だけは、いかにも惜しきやうに、なほもそれを持つてゐる手の中にもでも情深く吹いて来るわい。」

猶、唐詩品彙五十二に謝氏の説を引いて、「楊柳已折、生意何在、春風披拂如_レ有_二愛惜之心_一。此無情似_レ有情也。仁人君子以_二天地生_レ物爲_レ心、與_二衰於無用之地、垂_二德於不報之所_一。與_二春風吹_二斷柳_一何異。」とある。

【楊柳】康熙字典に「一物二種也」として、本草を引いて、「楊枝硬而楊起。故謂_二之楊_一。柳枝弱而垂流。故謂_二之柳_一。」といつてゐる。【綠煙絲】柳の枝の細くて緑を吐いてゐるのを形容したものであ

【煩君】君に面倒をかけて。

【懇願】インギン ねんごろ・ていねい。茲は、情深く、の意にとる。

【これ唐の楊巨源が楊柳の詩なり。……おもしろく覺え侍り】これは唐の楊巨源の楊柳を詠んだ詩である。この詩の第三・第四の句の意味が、いかにもやさしくあつて、趣味あるやうに感じます。

【楊巨源】中唐頃の詩人。字は景山。河中の人。唐の德宗貞元五年の進士。官は、祕書即ち國子司業に至り、詩を能くするので名を顯はす。年七十で致仕し、河中少尹で終つた。集五卷ある。韓愈に「送_二楊少尹_一序」の文があり、文章軌範卷一に載つてゐる。

【婉にして】婉は、順・美。やさしくうつくしいこと。

【よりに其の意を翁がよめる歌に、……手折りし枝をしたふ春かぜ】それで、その詩の心持を私が詠んだ歌に、次のやうな意味のものがある。

今私を手折つて手に持つてゐる青柳の枝を慕つて、この枝にまでも吹いて来る春風は、今日まで吹き馴れて親しんで来たので、この枝に別れることが惜しいのであらうか、さうであらう。ああ春風の心のやさしいことよなあ。(春風を擬人法に取扱ひ、

そして倒置法の形式を取つた歌である。)

【よめる歌に】この下に「次のものあり」を補つて解くがよい。

【なごり】茲は、別意。

【したふ春かぜ】この下に「の、やさしき事かな」などの句を補つて解くがよい。

四 忠臣義士の盛衰存亡(二)

楊柳の人に折られてはや木をはなれたりとして、春風のそれをよそにして吹きなば、いかに情なかるべきを、なほその手折りし手を去りやらで、をしみ顔に吹くこそいとやさしく覺え侍れ。忠臣義士の盛衰存亡をもて心をかへぬに喩へつべし。

【去りやらで】「をしみ顔に」

○三重高等農林學校

要旨

前節の續きで、春風のやさしい心を、忠臣義士の心を變へぬ節操に喩へることが出来ると述べてゐる。

釋義

駿臺雜誌話鈔 四 忠臣義士の盛衰存亡

【楊柳の人に折られて、……いとやさしく覺え侍れ】 楊柳の枝が人に折られて、もはや其の木を離れてしまったとして、春風がそれをふりむきもせず、とほざけて吹いたならば、どんなに情なく思ふであらうに、やはりいつまでも、その枝を折つた手を離れ去る事が出来なくて、いかにも惜しさうな様子で、吹いて来るのこそ、甚だやさしく感じます。

「よそにして吹きなば」 遠ざけて（疎外して）吹いたならば。

よそ 通常は、餘所の字音であるとするけれども、一説には、大よそのよそで、廣き義から外の意に轉じたものであるともいふ。

「なほその手折りし手を去りやらで、をしみ顔に吹くこそ」 このなほは、下の吹くの意を限定する副詞。

去りやらで 去ることが出来ないで。去つてしまはないで。

をしみ顔に いかにも惜しいやうな様子で。

吹く 此の下に「事」が省かれてゐる。

「ちとやさしく」 たいそう情愛が深くあることであると。

【忠臣義士の盛衰存亡をもて心をかへぬに喩へつべし】

これは、昔からの忠臣義士が、主君の盛んな場合や、衰へた場合や、生き残つてゐる場合や、死に亡びた場合などによつて、その忠義の心を變へない事に喩へることが出来る。

「心をかへぬ」 此の下に「事」が省かれてゐる。

「喩へつべし」 此のつは完了の助動詞で、力強い用法。

五 清談の露

いつしか秋のけしき立ちて、萩吹く風も身にしむ頃なり。「久しく翁のがり行かねば、此の程老の寝ざめも覺束なし。いざたづね問はむ。」とて、ある夕暮に、例の人人打つれて來しが、「又もまゐらむ。」とて歸らむとせしを、翁とどめて、「今宵は月もよし、薄酒をすすめ奉らむ。しひてとまり給へ。」といへば、「翁の心をいかで背くべき。さあらば。」とて各々座をしめて、清談の露やうやう繁き程に、家人やがて心得て、とりあへぬまでにあるじまうけし、看取りそろへて、盃出しけり。

【翁のがり】 【覺束なし】 【薄酒】 【さあらばとて】 【座をしめて】 【清談】 【とりあへぬまでにあるじまうけす】

○東京高等師範學校

要旨 鳩巢翁が、或秋の月夜に、門人達が久方振で自分の御機嫌伺ひに訪ねてくれたのを、よろこんで招じ入れ、御馳走をして、夜更けるまで風流な話をしあつたといふことを述べてある。

釋義

【いつしか秋のけしき立ちて、……看取りそろへて、盃出しけり】 いつの間にやら秋らしい様子になつて、萩を吹いて来る風も身にしみこたへる時分となつた。永らく（永い間）鳩巢翁のところへ行かないから、夜長な秋の、此の頃のこととて、年とつた翁の朝の眼覺も、どんなであらうか、嘸淋しからうと思はれて、近頃の老人の起居の様子も、氣がかりである。さあ、これから、そろつて訪問しよう。」と誘ひ合せて、或日の夕方に、何時もたづねて來る人々が、連れだつて來たが、しばらくして、其の人々が、「また、そのうちに改めて参りませう。」といつて、歸らうとしたのを、私が引きとめて、「今晚は幸ひ月もよい。粗酒を差しあげませう。是非とも遊んで居て下さい。」といふと、其の人々は、「貴老（翁）のお心ざしに、どうしてそむかれよう。それならば、お言葉に甘へまして（お邪魔しませう。遊んでまゐりませう。頂戴

致しませう。）」といつて、めい／＼座について、俗事をはなれた風流な談話が、次第に佳境に入る時分に、家の者が早速氣をきかせて、何はともあれ急いで、もてなしの支度をして、看など取揃へて盃を出した。

「いつしか秋のけしき立ちて」 一つの間にやら秋らしい様子（氣分）になつて。新古今集に「いつしかと萩のはむけのかたよりに、そよ秋とぞ風も聞ゆる。」とある。

「萩」 禾木科に屬する草。莖は蘆に似て、花葉共に茅に似てゐる。

【翁】 室鳩巢翁をさす。

【かり】 の許へ。の所へ。それ故「翁の」の「の」は、實に重複してゐるわけである。

「此の程云々」 秋の夜長の此頃の事であるから、老人のならひとして、明がたに寝ざめして、定めて徒然でもあらうと心もとなく思はれる、の意。

老の寝ざめ 寤覺は、寝て目のさめることをいふ。夫木抄集に「夜やさむき月やすいしき明方の老のねざめに風ぞ身にしむ。」とある。

覺束なし 氣がかりである。不安である。心配である。

【いざ】 感動詞。人をいざなふ時、又は、事をなしはじめようと

する時に發する聲。茲は、前者。い、ともいふ。
「たづぬ問はむ」 訪問しよう。

「例の人人」 いつも尋ねて來る人々。多分、門人達をさすのであらう。

「又もまゐらむ」 いつか又改めて參上しませう。

「翁」 茲は、鳩巢の自稱。私・拙者、の意。

「薄酒すすめ奉らむ」 粗末な酒をさしあげませう。

薄酒。味のうすい酒。粗酒。茲は、謙遜していつたのである。故事成語考に「魯酒茅柴皆爲薄酒」とあつて、魯國の酒は、その味甚だ薄き故に薄酒といふ。

魯酒の事は、淮南子に「楚會諸侯。魯趙俱獻酒於楚王。魯酒薄而趙酒厚。楚之主酒更求酒於趙。趙不與。吏怒、乃以趙厚酒、易魯薄酒、奏之。楚王以趙酒薄、故問邯鄲。」とある。(これより、「魯酒薄而邯鄲國」は、人の爲に意外の禍を蒙ることにいふ。)

「是非とも」

「さあらはこて」 「それならば、(そんなら)お言葉に甘へませう。」と云つた。

「座をしても」 座席について。

「清談の露やうやう鑿き程に」 俗事をはなれた風流な談話が次第

に盛んになつてゆく時分に。秋の夜も次第にふけて、草葉におく露のます／＼多くなつてゆく意をも含めてゐる。杜詩に「清談玉露繁」の句がある。

清談 名利をはなれた清い話。風流人や學問に志す人のする清い氣持のよい談話。茲は、聖賢の道や詩歌文章等に關する話と見ればよい。

露 露は、清くおくものであるから、清談の縁語。

鑿き 露の縁語。

「家人」 家族の者。

「やかて」 間もなく。早速。

「心得へ」 合點して。氣をきかせて。

「とりあへぬまでに」 猶豫なく、の意。何はともあれ(他のことはさしおいてまづ)急いで。待つほどもなくちぎりに。

「あるじまくけし」 響應の支度をし。

あるじまうけ もてなし・響應、の意。

六 正成恢復の功

建武中興の人物にては、しんじん續神家に藤原藤房たつげん韜鈴家に楠木正成固より輿論の歸する所なり。もし人

品をいはば藤房は公卿こうけい輔弼の臣たり、正成は將帥しやうし禦侮の臣たり。その材の大小をいはば、正成の材藤房の及ぶ所にあらず。藤房龍馬の諫は、直言極諫、朝廷を聳動す。誠に朝陽の鳳鳴といふべし。然れども正成恢復の功とは竝べ論じ難し。其上藤房は、一諫の後國を去り、世を遁れしが、正成は其の身國難に殉ぜしのみにあらず、忠義代代家に傳へ天下に著る。當時誰か正成に比する人あるべき。

〔中興〕 〔經綸家〕 〔韜鈴家〕 〔輿論〕 〔輔弼〕 〔禦侮〕 〔龍馬の諫〕 〔直言〕 〔朝陽の鳳鳴〕 〔恢復〕

○專門學校入學資格試験

○海軍機關學校

要旨 楠木正成と藤原藤房とを比較論評して、正成の功績の無比なるを稱讚してゐる。

釋義

【建武中興の人物にては、……然れども正成恢復の功とは竝べ論じ難し】 建武の中興に功績のあつた人物では、公卿には藤原藤房、兵法家には楠木正成があると、これ等二人を特にすぐれてゐるとして第一に數へあげるのは、言ふまでもなく、世間一般の議論の一致する所である。もし此の二人の身分をいふならば、藤房は公卿であつて、天皇を輔けて政治を行つた重臣であり、正成は大將であつて、朝敵の侮を防禦した武臣である。もし其の材能(伎倆)の優劣をいふならば、正成の材能は藤房の及ぶ所ではない。かの藤房が鹽治判官佐々木高貞が龍馬(すぐれた馬)を献上した時に、これを以て、政道が正しくないために奇獸が現れて人心を迷はさうとするものである、と論じて、天皇を諫め奉つたが、それは、思ふことを憚る所なく正直に申し上げて、口を極めて諫めたので、列座の朝臣を驚かして感動させた。これこそ、ほんたうに世にも稀なすぐれたことといつて宜しい。然しながら、正成が争亂を鎮めて、朝權(皇運)を、再びもと通りにかへした功績とはくらべものにならない。

【建武の中興】 後醍醐天皇が、北條高時を誅滅し、王政を復興し、建武と改元して、天下を統治したまふた事をいふ。

中興 中興、の意。即ち、一旦衰へた世の再び盛んに興る運に中ること。

「縉紳家」官位や身分の貴い人。公卿を指す。
縉紳、笏を紳(大帯)に縉む意。

「船鈴家」武臣をいふ。兵法家・武術家。
船は、弓袋。鈴は、矛の柄。

「輿論」世上一般の論。天下の公論。衆論。

「人品」技は、身分、の意。

「公卿」政治にあづかる高官の人。くげ。卿相といふも同じ。

公は、攝政・關白・大臣の稱。卿は、大納言・中納言・三位以上の
人・四位の參議。

「輔弼の臣」天皇を輔けて政治を行ふ重臣。天皇の政を輔佐し奉
る臣。

「將帥兼侮の臣」軍隊を統御する大將で、敵人の衝き來る侮を拒
ぎとめる武臣。

「龍馬の諫」建武中興の後、後醍醐天皇がやゝ政治に倦ませられ
た折、鹽治判官佐々木高貞が、龍馬と稱して靈異な馬を獻じた。

天皇がその吉凶を問はれたところ藤房獨り凶事となして、「當今政
道が正しくない爲に、かゝる奇獸が現れて人心を迷はさうとする
ものであります。こんなものに御心を注がれないで、政治に御心
を盡くされたい。」と極諫し奉つた。そして其の後も屢々諫言した
けれども容れられなかつたので、北山の岩藏に入り、出家して世

を隱遁してしまつたことをいふ。此の事は、太平記卷十三「龍馬
進奏の事」の條に見えてゐる。

龍馬、八尺ある馬。駿馬・天馬に同じ。

「直言」少しも遠慮する所なく、思ふことを眞直に言ふこと。

「極諫」てきびしく諫めること。

「朝陽の鳳鳴」山の東に鳳凰がなく。天下のめでたい瑞應の意か
ら轉じて、世にも稀れな盛事を褒めていふ。古今事類全書後集に

「胡瑗與二稽遂良一相繼死。内外以言爲諱。將二十年。高帝造二
奉天宮。御史李善感始上疏極言。時人喜之。謂爲鳳鳴朝陽。」
とあるに基く。

而して、「鳳鳴朝陽」の語は、詩經、大雅、卷阿篇の「鳳凰鳴矣、
于彼高岡。梧桐生矣、于彼朝陽。」から、出たものである。

朝陽、山の東、の意。

鳳、おほとり・ほうわう。聖人が世に出ると、之に應じてあらは
れるといふ瑞鳥。梧桐でないとも棲まず、竹實でないとも食はず、醜

巢でないとも飲まず、羽毛五色で、聲五音に中り、世に道があると
あらばれ、飛べば、群鳥之に従ふといふ。雄を鳳といひ、雌を凰
といふ。
「竝べ論じ難し」竝べていふことは出来ない。竝べて同日に論ず
ることは出来ない。くらべものにはならない。

要旨 諸葛孔明の人物と、その出世の有様とを記して
ゐる。

釋義

【孔明は臥龍なり。……君臣水魚のごとくなりき】 諸葛孔

明は、恰も、臥してゐてまだ天に昇らない龍にもたとえられる、
前途英雄ともなるべき在野の大人物である。この人は心に道徳を
持つてをり、功を立てて天下に名を揚げようなどといふことは少

しも考へず、一生を草莽きの粗末な家で終らうとしたのに、思ひ
がけなくも、蜀の先帝劉備から、三度も殷勤に訪問されたので仕

方なしに出て仕へたのであるが、忽ちにして、古參の關羽や、趙
飛よりも上役に重用されて、君臣(劉備と孔明)の閒柄は、丁度、
水と魚とのやうに親密であつた。

【孔明】 諸葛亮の字。瑯琊陽城の人。蜀の昭烈皇帝の丞相とな
り、先主の崩後、その委託によつて忠貞の節を後主に致したけれ
ども、事成らずして、陣中に病歿した。年五十四。忠武侯と諡す。

【臥龍】 臥してゐてまだ天に昇らない龍、の意で、まだ世に出な
いであくれてゐる英雄にたとへる。民間にあつて、まだ官途につ
かない偉人・豪傑。在野の大人物。

【遺外す】 忘れる。念頭に置かない。

七 孔明は臥龍

孔明は臥龍なり。道徳を懷抱し功名を遺外し草
廬にて一生を終へむとせしに、はからざる蜀の先
主の三顧に遇ひて、已むことを得ずして出で仕へ
しに、一朝關趙が上に立ちて、君臣水魚のごとくな
りき。

【臥龍】 【懷抱す】 【遺外す】 【三顧】 【關・趙】 【君臣水魚】

○東京外國語學校

○海軍機關學校

「草廬」 草ぶきのいほり。
「はからざるに」 思ひがけなく。

「蜀の先主」 劉備をさす。蜀の昭烈白帝。
「三顧」 劉備が孔明の徳を慕つて、これを起用する爲に、三度までもその草廬を訪問したこと。

「一朝」 忽ちにして。
「關・趙」 關羽と趙(三國志には、張とある)飛。共に、劉備の義弟。

關羽 字は雲長、解の人。蜀の昭烈皇帝に仕へ、萬人の敵と稱せられ、前將軍に拜し、威内外に震ひ、死後祀られて關帝といふ。
趙飛 字は翼徳。琢郡の人。蜀の劉備に仕へ、雄壯威猛、都先鋒虎威將軍に封ぜられた。一説に、趙は、趙雲(字は、子龍、劉備の臣で軍功あり、虎威將軍と稱せられた人)をさすと、如何か。
「上に立ちて」 上の位置に重用せられて、の意。

「君臣水魚のごとくなり」 君(劉備)と臣(孔明)との間柄は、丁度、水と魚とが離れられないやうに、非常に親密であつた。蜀志。諸葛亮傳に「先主遂詣亮。凡三往乃見。因屏人與計事、善之。於是情好日密。關羽・張飛等不悅。先主曰、孤之有孔明、猶魚之有水也。願勿復言。」及稱尊號、以亮爲丞相。とある。

〔董生〕 〔程朱の道〕 〔鄒魯の風〕 〔韓歐が文〕 〔邯鄲の歩〕

〔老の寢覺〕

○東京高等師範學校

○海軍機關學校

○水産講習所

要旨

(一)(二)(三)に互りて、享保十七年の年頭に於ける感懐を、聖賢の道、殊に程朱の道に就ての意見として記したものである。即ち、「王子試筆の詞」中の前三節で、最後の一節は省略した。此の省略した第四節に當るところは(三)の備考に補つて置いたから、見られたる。

此の(一)は、即ち、王子年頭の感懐を述べてゐる。

釋義

【月日迭に移りて、……七十あまり五つの春にもなりぬ】
月と日とがかはるゝ移り過ぎて、歲月の經つのは甚だ早く、老衰の病は、毎日々々我が身にとりついて進んでゆくが、さうかといつて、金丹といふ不老不死の靈藥を練る仙術を會得することは

八老の波(一)

月日迭に移りて、白駒の隙過ぎ易く、衰病日に侵して、黄金の術成りがたし。されば犬馬の齡これまでもあるべしとも思はれざりしが、いつしか老の波より來て、ことしは七十あまり五つの春にもなりぬ。剩へ、近き頃より身に痿疾を得て、手足もあがらず、たちぬも惱めるまま、昔の董生を學ぶとはあらねども、此の三とせ春の園を窺ふ事もかなはねば園の中ながら、梢につたふ鶯の音に殘のゆめをさまし、枕にかをる梅が香に過ぎし昔を偲ぶばかりになむありける。しかはあれど、幸に若かりし時より、學びの意に年を経し甲斐ありて、程朱の道に従ひて鄒魯の風を尋ね、韓歐が文を好みて邯鄲の歩を學ぶにぞ、老の寢覺も慰みぬべし。

〔迭に〕 〔白駒の隙過ぎ易し〕 〔黄金の術〕 〔犬馬の齡〕 〔痿疾〕

出來ない。それゆゑに、つまらぬ自分の壽命が、今日まで保たうとは思はなかつたが、いつか知らない間に老齡が我が身に押寄せて來て(年が寄つて來て)、今年はもはや七十五歳の春を迎へることになつた。

〔迭に〕 かはるゝ。互に。

〔白駒の隙過ぎ易く〕 白い駒が馳せ過ぎるのを、壁の隙間から、ちらりと見るやうに、歲月は早く過ぎ易いものである、の意。莊子に「人生天地之間、若白駒之過隙、云々。」とある。

白駒は、一説に、光線で、光陰・歲月をいふと。

〔衰病〕 老衰の病。老病。

〔日に侵して〕 日一日と自分のからだに取りついて、老病が進んでゆく意。

〔黄金の術〕 不老不死長壽の術。即ち、仙人道士等が丹砂を金に變じ、不老不死の藥を調ずる術をいふ。史記、封禪書に「丹砂可化爲黄金。黄金成以爲飲食則益壽。」とあり、通鑑二十卷、漢武帝記に「黄金可成、而河決可塞。不死之藥可得、仙人可致。」とある。

(一)説に、立派な功業の意に取るがよいといふが、如何か。

〔犬馬の齡〕 自己の年齡を卑下していふ語。

〔これまであるべしとも〕 今まで生きながらへる(保たれる)で

あらうとも。

「老の波より来て」老齡が我が身に押寄せて来て。年が寄つて来て。古今集冬に「老の波こえける身こそ哀なれ、今年も今は末の松山。」とある。

老の波 年が寄ると、額に波のやうな皺を刻むから、かくいふ。

「七十あまり五つの春」此の春は、即ち、壬子の春で、中御門天皇の享保十七年（紀元二三九二年）に當る。

【剰へ、近き頃より……老の寢覺も慰みぬべき】 そればかりではなく（その上に）、近來（近頃から）からだがしびれる病氣に罹つて、手足もあがらないし、起きたり座つたりすることにも苦しんでゐる始末であるから、昔の漢の董仲舒の行動を真似るといふわけではないけれども、此の三年の間、春の季節の庭園の景色をのぞき見る事も出来ないで、寢所の中に居ながら、樹の枝先から傳へて来る鶯の鳴く聲に、見残しの夢をさます、枕許に薰つて来る梅の香によつて、過ぎ去つた昔の事を思ひ起すだけで、野山の春草などを眺めたのしむことは、出来ずに、月日を送つて来たのである。さうではあるけれども、仕合にも、年若の頃から、學問を修める室に閉ち籠つて、年を送つて来た甲斐があつて（學問の道に長年たゞきはつて勉強して来た效があつて）、宋の程子・朱子の學說に従つて、孔子・孟子の學風を研究したり、更に、韓

退之や歐陽修の文章を好んでそれに倣ひ、かの邯鄲の歩を學ぶといふ故事のやうに、己の儒學を專一にしてないで、下手ながら、文章家の眞似などすることによつて、老生の明方のさびしい眼覺も慰めることが出来た。

【剰へ】 ある上に加はる「餘つ副（添）」の義。

【痿疾】 手足の痺れて感覺を失ふ病。

「董生を學ぶとはあらねど」昔の董先生（董仲舒）の行事を學ぶといふわけではないけれども。漢書、董仲舒傳に「前漢董仲舒、廣川人。少治春秋。孝景時、爲博士。下帷講誦、弟子傳以三久次相授業。或莫見其面。蓋三年不窺園。其精如此云々。」とある。

「梢につたふ鶯の香に云々」樹の枝先から傳へて来る鶯の鳴く聲によつて、つきない見残しの夢を覺し、の意。

「程朱の道」宋の程氏（程頤・程頤の兄弟）・朱氏（朱熹）の唱へた學說をいふ。

「邯鄲の風」孔子・孟子の學風をいふ。邯は、孟子の生地、魯は、孔子の生地であるところからいふ。

「韓歐が文」室鳩巢は、韓退之・柳宗元・歐陽修・蘇軾の中、韓歐の文を、柳蘇の文より好んだといふ事が他文に見えてゐる。

「邯鄲の歩を學ぶにぞ云々」彼の邯鄲の歩を學ぶといふ故事のやうに、己の儒教の道を專一にしないで、文章家の眞似をなし、儒學・文章の何れをもその眞相を促へ得ない（どちらも物にならな）やうな愚かな事をして、老人の寢覺を慰めて居るのであるの意。

邯鄲の歩 邯鄲は、趙國の都。燕國の少年が趙國の都である邯鄲に行つて、歩き振を學んだが、それをも十分に學ぶことが出来ず、又己のものと歩き振をも忘れてしまつたといふ故事。そこで妄りに己の本分をすてて、他の行爲に倣ふのは、兩ながら失ふに至るといふ事に喩へる。莊子、秋水篇に「且子獨不聞夫濤陵餘子之學行於邯鄲與。未得國能、又失其故行矣。直匍匐而歸耳（濤陵は、燕の邑、餘子は、弱齡の人、猶、孺子といふに同じ）」とある。

九 三綱五常の道 (二)

さても多くの年月を経て、世の移り變る有様を考ふるに、盛衰榮枯互に行きかふをば夢とやいはむ、現とやいはむ。誠に富貴は浮べる雲の如く、禍福は糾へる繩の如し。」といへるに、何かたがふことは

あるべき。中に唯わが聖人のたて給へる三綱五常の道のみ天地と並び傳へ古今のへだてなく、こればかりは變ることあるべからず。人として仰ぎ崇ぶべきはこの道ぞかし。然れども儒教世に行はれざりしより、人人義理にうとく、利慾にさとなる程に、五常の道すたれて、風俗日に下り行くこそなげかはしけれ。もとよりいやしき身に一代の風教を維持せむとすとも、わが力及ぶべきにあらねばひとへに蚍蜉の樹を撼かし精衛が海を填むるに似たるべし。

【富貴は浮べる雲】 禍福は糾へる繩 【三綱】 【五常】 【義理】

【風教】 【蚍蜉】 【精衛】

○千葉醫學專門學校

○大阪醫科大學豫科

○濱松高等工業學校

要旨

聖人の道の崇ぶべきを説き、現代のすたれた風教を挽回して維持するのが己の任務であると述べてゐる。

釋義

【さても多くの年月を経て、……この道ぞかし】 さてまあかく多くの年月を経て来た今になって、世の中の移りかはる有様（世態の變遷）を考へて見るに、或は盛んになつたり、或は衰へたり、或は榮えたり、或は衰へたりする事の、交互に往つたり來たりして常ない有様をば、夢であるといはうか、實際であるといはうか、實に、其のほかない變化には驚かざるを得ない。古人が、誠に「家の富み身の貴いことは、浮んでゐる雲のやうに、軽く頼みならぬものであり、禍難と幸福とは、洵ひ合せた繩のやうに、互に交替去來するものである。」と言つたのに、何の間違があらうか、ありはしない。しかし、このやうな世相の中で、たゞ我が聖人のお定めになつた君臣・父子・夫婦の間の道と、仁・義・禮・智・信の道とばかりは、天地と共に傳つて、永久に變ることなく、古の世と今の世と別け隔てなく（古今の差別なく）、此の道ばかりは萬世に互つて決してかはる事はないのである。それであるから、人間として仰ぎ崇ばなければならぬことは實に此の道であるよ。

「富貴は深べる雲の如く」 論語卷七、述而篇の孔子の語に「不義而富且貴、於我如浮雲。」とあるに基いて書いた句である。

浮べる雲、たよりないもの譬。
 「禍福は糾へる繩の如し」 賈誼の鵩鳥賦（史記の賈誼傳）に「夫禍之與福兮、何異糾繩。」とあるに基いて書いた句。
 「三綱」 君臣・父子・夫婦の間の道徳。禮記に「君爲三臣之綱。父爲子之綱。夫爲三婦之綱。」とある。
 「五常」 仁・義・禮・智・信の道。
 一に、五典・五倫（父子有親・君臣有義・夫婦有別・長幼有序・朋友有信）に同じと。
 【然れども儒教世に行はれざりしより、……精衛が海を填むるに似たるべし】 さうではあるけれども、儒教（孔孟の道）が世に行はれなくなつてから、世の人々は、正しい道に昏く、私慾にばかり目がきくやうになつたから、人の常を守るべき仁・義・禮・智・信の道も衰へて、人の習慣が日々に退下して行くのは歎いても餘りあることである。いふまでもなく、かく微賤の身で、當代の風俗教化の道を持ち続けようと計つても、とても自分の力が及ぶことではないから、このやうな希望を抱くことは、専ら、大蟻が大樹を撼かさうとしたり、精衛といふ小鳥が、木石を取つて、東海を填めようとするやうなもので（自己の力を量らない、結局徒勞に歸する無謀な舉で）あるといふべきで、到底めざましい結果は得られなからう。

「義理」 正しい道理（すぢみち）。
 「風教」 民のならばしに應じて教育するをしへ（風習上のをしへ）。道徳を以て民を教化すること。又、風俗教化。
 「蚍蜉の樹を撼かし」 蚍蜉は、大蟻。自己の力を量らずに、無謀な事を企てて徒勞に終る譬にいふ。韓愈の詩句に「蚍蜉撼大樹、可笑自不量。」とあるに基いて書いた句。
 「精衛が海を填む」 精衛は、小鳥の名。前の句と同じ譬にいふ。山海經に「發鳩之山有鳥、曰精衛、（中略）取西山之木石、以填東海。」とあるに據つて書いた句。

10 儒となりししるし(三)

さはいへど、世を憂へ民を新にするも、わが儒分内の事なれば、これを度外におくべきにもあらず。いかなれば世に老師宿儒と稱する人の、好んで異説を肆にし、又は他道を雜へて、仁義五常の沙汰をばよそにすることうけられね。ただ勉めて新奇を競ひて、俗耳を悦ばしめ、時好に投するなるべし。

いと口惜しきことなり。古人のいはゆる阿世曲學とは、これ等をいふなるべし。よし人はさもあらばあれ、たとひ風俗は昔にあらずなりぬとも、わが身一つはもとの如く仁義の道を守りつつ、前修の模範を失はじと思ふこそ、せめて儒となりししるしともいふべけれ。

民を新にする」 「分内」 「度外」 「宿儒」 「沙汰」 「うけられず」 「時好」 「阿世曲學」 「前修の模範」 「儒となりししるし」
 ○大阪醫科大學豫科

要旨 儒者の本分を説き、己の覺悟を述べてゐる。

釋義

【さはいへど、世を憂へ民を新にするも、……これらはいふなるべし】 さうはいふものの世間の事を心配し、人民を新に教化して行くことも、我々儒學者の、本分の範圍内の仕事であるから、之を考の外に置いて顧みないでよい筈のものでもない。然るにどういふわけか、世間の老先生とか大儒者とかいはれる人達が、好んで異説を思ふまゝに唱へ、又は、他の儒教以外の道をま

せて説いて、仁義・五常の論説をばよそしくする（度外に置く）ことは、承引出来ない（合點の出来ぬ）ことである。彼等は唯、無理やりに新奇な學説を鼓ひ唱へて、世俗の人達の耳を悦ばせ、その時代の人の嗜好によくあふやうにする（時代の人物に調子を合せてうけのよいやうにする）のであらう。これは甚だ残念なことである。古人のいはれた世にへつらふ不正な學問とは、是等のことをいふのであらう。

「民を新にする」民を教化して舊い惡風を一新する意。

「分内」範圍内。

「度外」のけもの・法度まじりの外、の義で、茲は、考の外。

「老師・宿儒」暗に、當時の先輩大家である山崎闇齋（朱子學山崎派）、伊藤仁齋（復古學仁齋派）、荻生徂徠（同徂徠派）、熊澤蕃山（陽明學）等を指す。鳩巢は専ら程朱の學説を奉じたから、此等の學説をよるこばなかつたのである。委しくは駿臺雜話卷上「異説まち／＼」の條に就て見られたい。

宿儒 年輩の功勞ある儒者。

「他道」孔孟の道でない外道。例へば、老莊の學や佛道などをいふ。

「沙汰」説又は、議論の意。

「よそにする」度外視する。

「うけられぬ」承引されない。合點が出来ない。
ね 打消の助動詞「ず」の已然形。上のこその係りの結びである。

「時好」時代の好み。

「阿世曲學」世に媚び佞ふ邪曲な學問。史記儒林傳「公孫子務正學以言、無曲學以阿世。」とある。

【よし人はさもあらばあれ、……せめて儒となりししるしともいふべけれ】 まゝよ、人はどうであらうともかまはぬ。たと

ひ風俗は昔の様ではなくなつてしまつても、自分だけは今まで通りに仁義の道を守つて、古人の徳を修めた手本にはづれまいと決心してゐるのがまあ、せめては（十分に我が意をつくさないといふものの）儒者となつたかひある事ともいふべきである。

「さもあらばあれ」 まゝよかまはぬ、の意。

「風俗は昔にあらす云々」此の一文の體裁は、伊勢物語や古今集にある業平朝臣の歌に「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして。」とあるに據つて書いたものであらう。

「もとの如く」今まで通りに。もとのやうに。

「前修の模範」前代に徳を修めた古人の手本。

前修 程氏朱氏等を指していふ。

「失はじ」じは、自己に就ていふ場合には決心をあらはす。

備考

「壬子試筆の詞」中の新春の感を述べてゐる下略の部分、茲に補つておく。

然るにあらたまの年の春のはじめとて、人は皆おのがじし身の福を萬代と祝ふ中に、我はただ五常の道に心をよせて、いつもかはらずめでたきものは、此の道なりとて、かくなむ筆を試みぬる。

この春もかはらでゆかむ、七十に

あまる五つの道をたづねて。

（然るに、新年の春の初だといふので、世の人は皆、各自その身の幸福を萬代もつゞけようと祝つてゐる中に、自分だけは五常の道に心をよせて、いつも變らずにめでたいものは、此の道であると思つて、次のやうに書初を書いた。私は今年は、七十にあまること五歳となつたが、此の五に縁のある仁義禮智信の五常の道を研究して、此の春も今までと變らずに進んでゆかう。）

鶉衣鈔

解題

鶉衣うしころも四卷は横井也有の俳文二百數十篇を収めたものである。鶉衣とは、つぎはぎした衣のこと、これは無價値な小品文集といふ意味である。此の書は也有の歿後、蜀山人の盡力で初篇が上梓せられ、その後、六樹園、石川雅望等の序文を附して後篇を公にしたものであつて、俳文が近世の文學史上に列せられる價値を生んだのは、實にこの鶉衣の爲である。

著者横井也有は名は時般ときぱん、通稱は孫左衛門也有はその號である。別に暮水蘿隱、半掃庵とも號した。尾張名古屋藩の重臣、祿高千三百石で、極めて謹直温厚な人であつた。文武諸藝に通じ、俳文を最もよくし、詩歌、俳句、狂歌にも長じてゐた。元祿十五年に生れ、天明三年に八十二歳で歿した。鶉衣の外に、浦の梅野文談、小皮籠等の著がある。(二三六二—二四四三)

一 旅

旅にあはれを知るとはその行客かうかくの身の上のみにあらず。鶉籠かごかる人はかく人の達者を羨めども、鶉籠かく人はかる人の錢を羨む。身はさだめな

き村時むらし雨雲ぐれ助の行末もいとこころもとなし。痴氣持ちきもちの川越かはごしの首ひげに髭奴ひげやつのまたがりて及ばぬ富士をながめたるも、片目の馬方の座頭ざとう乗せてくらはり峠越とげごすも、いづれ世わたりの悲しからぬかは。

〔身はさだめなき村時雨〕〔痴氣持の川越の首に云云〕〔及ばぬ

富士 (座頭) 「くらがり峠」

○山口高等商業學校

要旨 昔の旅に於て、旅人を受けて運ぶ駕籠かきや馬方の身の上をあはれんでゐる。

釋義

【旅にあはれを知るとは、その行客の身の上のみにあらず】旅中に於て、物かなしきを感じるといふのは、旅人自身が自分の身の上だけに就てさう感ずるのではない。

【あはれ】 哀樂の哀をいふ。茲は、旅愁の意。

【行客】 旅人。行子・遊子ともいふ。李頎の詩に「行客暮帆遠、主人庭樹秋。」とある。

【駕籠かる人】 駕籠をやとつて乗る人。

【駕籠】 人を乗せて、前後から舁いて行く乗物。

【かく人】 駕籠をかついである人。

【かく】 舁くと書。二人以上の肩によつて物を支へる、意。

【達者】 からだの丈夫なこと。足の丈夫なこと(健歩)。茲は、後者の意にとる。

【身は定めなき村時雨、雲助の行末もいとこころもとなし】

街道筋を、旅人を舁ひて、所定めず徘徊する雲助の身の前途も、甚だ頼りないやうである、の意。

【村時雨】 は、定めなく降るものであるから、「定めなき」とつゞけ、「時雨」から、雲助の「雲」とつゞくやうに書きなしたものであつて、「身は定めなき村時雨」は、「雲助」に係る修飾句である。

【村時雨】 一叢づつ降りすぎる時雨をいふ。又、時雨は、秋冬の際に、降つたり晴れたり降つたり晴れたり、定めなく降る小雨のこと。

【雲助】 昔時、街道筋を所定めず徘徊して、駕籠を舁き又は賤役に従つた賤民。多くは、住所不定のものどもである。

【行末】 前途、又は、なりゆく結果、の意。然し、茲は、「行方」の意をも含めて、「雲助の行方定めずかせぎまはる現在のしがない生活振も」の意をも含めると見るが、面白い。

【こころもとなし】 (一)待遠しくて気がかりである・じれつたい。(二)ぼんやりして頼りないやうである。おぼつかない。茲は、第二義による。

【疝氣持の川越の首に云云】 疝氣持は冷えるのを厭ふものであるから、その疝氣持の川越人足が、川に浸るのはいかにも苦しくあるのを、その首にまたがつてゐるいかめしい髻面の奴が、樂々と富士の絶景を賞しつゝ越すのも、の意。

【世わたり】 世をわたつて行くこと。生活を立てること。よすぎ。生計。

【かは】 反語。

二 蝶

蝶の花に飛びかひたるやさしき物のかぎりなるべし。それも啼く音の愛なければ籠にくるしむ身ならぬこそ猶めでたけれ。さてこそ莊周が夢もこのものには託しけれ。

【それも啼く音の云々】 莊周の夢云々

○米澤高等工業學校

○山口高等商業學校 (二回)

○長崎高等商業學校 (二回)

○臺灣高等商業學校

要旨 蝶の趣味的觀察で、優美な蝶も、啼く音の愛すべきものないのが却つて幸で、籠の苦しみもうけずに自由に遊んで、その生を遂げ得るのであるといふことを述べ

【いづれ世わたりの悲しからぬかは】 旅人を相手に、其の日其の日をやつとすごしてゐる此等の雲助や、川越や馬子などのまづしいくらしは、どれも皆物悲しいものである、の意。

てゐる。

釋義

【蝶の花に飛びかひたる、やさしき物のかぎりなるべし】

蝶が花の間に飛びちがつて遊んでゐるのは、優美なものの上であらう。

【飛びかひたる】 「飛びかひたる事は」の略で、「飛びかはして（飛びちがつて・飛びまはつて）ゐるの」の意。即ち、連體形で終つて、下の、「やさしき物のかぎりなるべし」の主語である。

【やさしき】 優美な。

【かぎり】 最上。

【それも啼く音の愛なければ、……猶めでたけれ】 そんなに優美な蝶も、他の蟲とちがつて、啼く聲の可愛いことが無いから、人間の爲に捕へられて、籠の中に入れられて苦しい思をする身柄でないのが、一層蝶にとつて結構なことである（幸なことである）。

【それも】 さういふ蝶も。そんなに優美な蝶であつても。

【啼く音の愛】 啼き聲の愛すべき點。西山宗因の句に「もし啼かば蝶々籠の苦やうけむ。」とあるを思ひあはせて書いたものである。

【籠にくるしむ】 籠の中に入れて苦ししい思をする。

【猶めでたけれ】 一層、結構である。めでたけれは、茲では、幸なことであると解してもよい。

【さてこそ莊周の夢もこのものには託しけめ】 それでこそ（蝶といふものは、さういふ何等の束縛をも受けない自由な楽しい境遇にあるから）莊周が、夢に、我が身が蝶になつて飛びあるといふ寓言も、他のものを選ばずに特にこの蝶を選んで、これにかこつけたのであらう。

【さてこそ】 それであるから、まあ。さういふ自由な楽しい身であるから、の意。

【莊周の夢】 莊周が、我が身が蝶となつて、自由に飛びあるいて楽しく遊んだといふ夢。莊子の齊物論に出てゐる寓言。即ち、莊子（莊周著）の齊物論に「昔者莊周夢爲胡蝶。栩栩然胡蝶也。自喻適志。與不知周。俄然覺。則蘧蘧然周也。不知周之夢爲胡蝶。與胡蝶之夢爲周與。」とある。

【莊周】 周代の思想家。宋の蒙（今の河南歸德府商邱縣附近）の人。漆園の吏となつた。梁の惠王・宣王と同時代であるからには、孟子とも同時代であつた筈であるが、不思議にも二人は互に知らなかつた。楚の威王がその賢を聞いて招いたけれども仕へないで逍遙自適してゐた。その學は、儒教から道教に入つたものらしい。

釋義

【蟬はただ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。……人の汗しぼる心地す】 蟬は、たゞ五月晴の頃に初めて聞いた時分がよいものである。だん／＼と日盛りに、盛んになく頃は、人の汗をしぼり出すやうな氣持がする。

【五月晴】 きみだれの晴間。

【日ざかり】 日の照らす最中。

【鳴きさかる】 盛んに鳴くをいふ。

【されば初蝶とも、……初蟬といはるるこそ大きな手柄なれ】 それだから、初蝶とも初蛙ともいふことを聞かないのに、この蟬ばかりが初蟬といはれるのは、大きな手柄である。

【初蝶・初蛙】 此の語、現今は春の季に用ひる。

【初蟬】 鳴きはじめの蟬、の意。

【初】 接頭語。はじめて・新しい、などの意。

【やがて死ぬけしきは見えす。……翁の一句に盡きたりといふべし】 このものの上は、「やがて死ぬけしきは見えす、蟬の聲。」と詠んだ芭蕉翁の此の一句にいひつくされてゐるといひ得る。

【やがて死ぬ云々】 松尾芭蕉翁の句に無常迅速と題して「やがて

莊子の書は、その全部が莊子の手になつたものではないらしいが、その内篇だけは、その手になつたものであらう。也有の句に「蠅が来て蝶にはさせぬ晝寝かな。」といふがある。【このものには託しけめ】 他のもものを選ばずに、何等の束縛も受けない自由な楽しい此の胡蝶といふものにことよせたのであらう、の意。

三 蟬

蟬はただ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やや日ざかりに鳴きさかるころは人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふことを聞かず、このものばかり初蟬といはるるこそ大きな手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えす。」と、このものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。

【やがて死ぬ云々】

要旨

蟬の趣味的觀察で、蟬は、初蟬がよいとほめてゐる。

死ぬけしきは見えず、蟬の聲。」といふのがある。句意は「蟬は命の短いものであるが、あの鳴きしきる聲をきいてみると、まだ死ぬ命をもつてゐるやうには思はれない。」

四蚊

蚊は憎むべきかぎりながら、さすがに卯月の頃端居めづらしき夕はじめてほのかに聞きたらむ、又は長月の頃力なく残りたるは、寂しき方もあり。蚊張つりたる家のさま、蚊遣焼く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊はことにはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけむ。

【卯月】「風雅の道具」【七賢】「團扇の隙」

○米澤高等工業學校

○山口高等商業學校

○北海道帝國大學豫科

【蚊帳つりたる家のさま……かつは風流の道具ともなれり】

蚊張がつつてある家の有様や、蚊遣火をたく（蚊いぶしをする）

村里の煙などは、單に蚊を防ぐ爲の實用の方面だけでなく、一方

では、詩歌・俳句などを作る風流の道の材料ともなつてゐる。

【蚊遣】蚊を追ひやる爲に、煙を煙らし立てること。かいぶし。

然し蚊は、蚊遣火（蚊やりのためにたく火）のことをいふ。

【かつは】一方では。一面には。蚊を防ぐといふ實用的方面以外

に、の意。

【風雅の道具】和歌・俳句などを詠む風流の道の材料。詩材。

【藪蚊はことにはげしきを……いかに團扇のひまなかりけむ】

藪に居る蚊は、蚊の中でも取分けて刺方がひどくて、人を苦しめるものであるが、あの支那の晉時代の竹林の七賢の、竹藪の

中に會合して夜ばなしに花をさかせた時には、藪蚊に夢はれて、

之を逐ふために、どんなに團扇を使ふ手が忙しくて、休む隙もな

かつたことであらう（さぞ、團扇をばたくと絶え間なしにつか

つて、それを使ひやめる暇がなかつたであらう）と、想像すると、

をかしくなつて来る。

【ことにはげしきを】殊更に刺方がひどくあるのに。

【かの七賢】支那晉代の隱者。嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・

王戎の七人が、漫談に耽り酒を飲んで楽しみ、よく、竹林中に會

【要旨】蚊の趣味的觀察で、これも卯月の頃の出はじめ

と、長月の頃の残りのものとが、何となく趣味があるとい

ふことを述べてゐる。

釋義

【蚊は憎むべきかぎりながら、……寂しき方もあり】蚊は

憎まなければならぬもののこの上ないものであるが（この上もな

く、嫌なものであるが）、さうはいふものの、陰曆四月の頃に、暑

くなりかけはしたが、縁側の端に出て居るのが珍しく思はれる夕

方に、はじめて蚊の鳴く聲をかすかに聞いたのや、又、陰曆九月

の頃に、弱つて生き残つてゐるのは、閑寂な方面の趣もある。

【さすが】さうはいふものの。しかしながら。

【卯月】陰曆の四月。

【端居めづらしき夕】縁側の端に出ることが珍しい夕方。ま

だ暑くなりかゝつたばかりであるから、夕方縁側の端に出て居て

すゞみをするのが珍しいのである。

【ほのかに】仄にと書く、かすかに。

【長月】陰曆の九月。

【力なく】弱つて。元氣なく。

【寂しき方もあり】さびしいといふ方の趣もある。

合して放言談笑して樂んだ。世人は、之を竹林の七賢といつた。

【團扇の隙】團扇を使ひやめるひま。

文脈

【はじめてほのかに聞きたらしむ、又は長月の頃力なく残り

たるは寂しき方もあり】此の文脈の説明に二通りある。

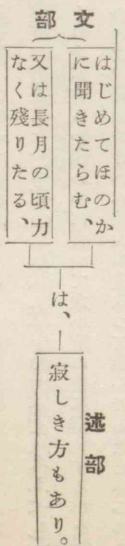
(1)「聞きたらしむ」の下に、「は、をかし。」が省略されてゐる形であ

るといふ説。

(2)「聞きたらしむ」は、「力なく残りたる」と共に、「寂しき方もあ

り」の文主部であるといふ説。（今、此の説に従ふ。）

（注部（文）



五袋

器は入るる物をして己が方圓に従はしめむとし、袋は入るる物に隨ひて己が方圓を必とせず。實なる時は肩に餘り、虚なる時は疊まれて懐に隠る。

虚實の自在をしる布の一袋、壺中の天地を笑ふべし。

〔己が方圓を必とせず〕〔肩に餘る〕〔虚實の自在をしる〕〔壺中の天地〕

○陸軍經理學校

要旨 袋の伸縮自在なことを稱へてゐる。

釋義

【器は入るる物をして……疊まれて懐に隠る】一般の容器は、中に入れる品物を、自分の四角や丸の通りにさせようとするし、之に反して袋は入れる品物の形の通りになつて、自分の四角とか丸とかの形をその儘に保つ事を、きつとするとはいない。そして袋の中の品物が一杯につまる時は、肩に擔ぎきれない程に大きくなり、からつばな時は、疊まれて懐の中に入つてしまふ。

「器」 いれもの。

「方圓」 四角や丸。

「おのが方圓を必とせず」自分の四角や丸の形の通りを保つことをきつとするとはいらない。即ち、保つこともあれば、保たないこともあつて、勵行はしない、の意。

必とせず「必要としない」と解してゐる説もあるが、漢文の「不レ必」から來た語法と見て、「きつとするとはい限らない。きつとでもない」の意に取るがよからう。

「實なるとき」中に品物がいつばいつまつてゐる時。

「肩に餘り」肩に擔ぎきれない。

「虚なる時」からつばな時。

「隠る」はひつてしまふ。

【虚實の自在をしる布の一袋、壺中の天地を笑ふべし】かく中身が有るか無いかによつて大小意の儘に變化する事を得る布の袋は、昔壺公といふ仙人が這入つて住んでゐたといふ壺の中の狭い天地も、自分の様には融通のきかぬ事を嘲笑するであらう。「虚實の自在をしる」からになつたりつまつたりする事によつて、自由自在に變化すること心得てゐる。

「壺中の天地」もと、別世界とか、小さくとも我が身を安んずるに足る地とかの意に用ひる語であるが、茲では、融通のきかぬ天地の意に用ひてある。漢書、方術傳に「壺公賣藥。懸壺於肆頭。日入後輒飛入壺中。費長房於樓上見之。知其非常人。乃日進餅餌。公語曰、隨我跳入壺。長房一跳即入。但見樓觀五色重門閣道、侍者數十人。公曰、我仙人也。見謫暫寓人間耳」とある。

梅園叢書鈔

解題

梅園叢書三卷は、三浦梅園の論篇四十九篇を輯録したもので、詩を説き、道を論じ、人倫を論し、恣慾を戒めるなど儒道の本旨を平易に講説し、よく其の例を擧げて了解し易からしめたものである。著者梅園は、名を晉字を安貞といひ、梅園は其の號である。豊後杵築の人で、早くから儒學の俊秀を以て知られてゐた。天明中、杵築侯に家老の重職を以て優遇せられ、政務に關し進言するところも頗る多かつた。享保八年に生れ、寛政元年に歿した。年六十七。(二三八三—二四四九)

一 死生の説

死生の説あきらかならず。ややもすれば異端の説にまよふ。予易を讀みて「原始反終」といふにいたりて、豁然として悟る事あり。死して後は生れざる前の如し。生れざる前吾知らず。死して後吾いづくんぞ知らむ。むべなるかな、聖人其の知るべき所をもとめて、其の知るべからざる所を

いはざる事を。

【死生の説】〔異端〕〔原始反終〕〔豁然〕

要旨 易の「原始反終」の語を讀んで、死生の説に就て豁然として悟るところがあつたといふことを述べてゐる。

釋義

【死生の説あきらかならず。……豁然として悟る事あり】人の死生に關して解いた説は、何れも明瞭でない。それ故やゝも

すると、異端の説に迷ふやうになる。自分は易を讀んで「始を
原ハジメねて終ハジメに反る。」といふところに至つて、からつと迷がはれて、
明かに悟る事があつた。

「死生の説」人の死生に關して解いた説。

「異端」正しい教にそむく道。聖人の道と異つた一派の學問。即
ち、楊子・墨子の類をいふ。

「原始及終」物事は終始一貫して一理であるから、始をたづね
て見て其の理を反覆して終を知る、意。易の繫辭上に「原始
反終。故知死生之説」とある。

「豁然」(一)うちひらいてゐるさま。(二)さとるさま。明かに知
るさま。茲は第二義。

【死して後は生れざる前の如し。……其の知るべからざる所
をいはずるを】 死んでからは、生れない以前のやうなもので
ある。生れない以前のこととは自分は知らない。これと同様に、死
んでから後のことを、自分はどうして知つてゐよう。だからして
聖人は、その知ることの出来る事について説明し、其の知る事の
出来ないところについて説明しないのは、尤もな事である。

「むべ」宜と書く。げにさもあるべきこと。あたりまへなこと。
もつともなこと。

「聖人」最高の理想上の人格。又、智徳の甚だすぐれて人格の最

説いてゐる。

釋義

【理窟と道理とへだてあり。……など歎くは道理なり】

理窟と道理とは區別がある。理窟はよいものではない。譬へて
いふなら、「親が羊を盗んだのは親が悪いのである。親にもせよ
(親でも構はない)、悪は悪であるから、それを知つた子は、すぐ
に訴へ出なければならぬ。」といふのは理窟といふものである。

「親が羊を盗んだのは悪い事ではあるが、親に悪い事があるから
といつて、子が之を訴へるといふやうな事があらうか、そんなこ
とをすべきものではない。」といつて隠してしまふのは、道理と
いふものである。「人が死んで再び此の世に生きかへつては來
ない。歸ることの出来る道があるなら、いくらでも歎くがよい。
しかし一度行つては再び歸らない道であるから、歎いても何の役
にも立たない。」といふのは理窟といふものである。「人が死んだな
ら二度とかへつて來ない。歸ることの出来る道があるなら、歎か
なくてもよからうが、かへらぬ道であるからこそ、悲しいのであ
る。」などといつて歎くのは道理といふものである。

「理窟」(一)わけ。すぢみち。(窟は穴で、理の集まる處の義。)

(二)國語では、こじつけの理由。茲は、第二義。

も高い人。茲は、後者の義。

二 理窟と道理

理窟と道理とへだてあり。理窟はよきものにあ
らず。たとへば「親羊を盗みたるは親の悪しきな
り。親にてもあれ、悪しきは悪しきなれば、直ちに
訴ふべし。」といへるは理窟なり。「親羊を盗みし
は悪しきながら、親悪事あればとて子これをいふ
べきやうなし。」とて隠したるは道理なり。「人死
して再び歸らず。歸るべき道あらば歎きても歎
くべし。歸らぬ道なれば歎きて益なし。」といへ
るは理窟なり。「人死して再び歸らず。歸るべき
道あらば歎かずともあるべけれど歸らぬ道こそ
悲しけれ。」など歎くは道理なり。

「へだて」「再び歸らず」「歎きても歎くべし」

要旨

理窟と道理との相違を、例を擧げてわかり易く

「道理」(一)すぢみち。(二)道徳(人として必ず守るべき正しい
道・五倫五常の道)に同じ。茲は第二義。

「へだてあり」區別がある。

「親、羊を盗みたるは、云々」論語、子路篇に「葉公語孔子曰、
吾黨有直躬者。其父攘羊、而子證之。孔子曰、吾黨直者異
於是。父爲子隱、子爲父隱、直在其中矣。」とある。

「再び歸らず」二度と生きかへつて來ない。

「歎きても歎くべし」いくらでも歎くべきである。いくら歎いて
もよろしい。

三 誠の道

一勺の水を海に入れて海の水増したりといはむ
は愚なり。増さずといふは妄なり。水を加ふる
所は我にして、増すと増さざるとは我にあらす。
我にあらざるものは、強ひてその辨をもとめずし
て可なり。我にある所の誠を盡す、これ君子の道
なり。誠とはうそをいはずることのみ心得た

らむは愚なることなり。或人司馬溫公に誠に入る方を問ひければ「妄語せざるより入る」とぞ。なるほど妄りに語らずをいはぬより、誠の道には入るなれども、虚言をいはぬを誠とはいはぬなり。偽をいはぬに對する信は小し。偽なきに對する誠は大なり。

○小樽高等商業學校

「妄」〔辨をもとむ〕〔虚言〕〔誠に入る方〕〔信〕

要旨 「誠といふ説」の一節で、人は自己の内部にある誠をつくすべきものであるといふことと、誠といふものの偉大な力とについて説いてゐる。

釋義

【一勺の水を海に入れて、…誠とは虚言をいはざることのみ心得たらむは愚なることなり】ごく少量の水を海に入れて、その爲に海の水が増したといふならば、それは馬鹿なことである。然し又、少しも増さないといふのはでたらめである。水を加へたのは自分であつて、増すとか増さないとかは、自分に關係

したことはない。自分に關係しないものには、無理にその區別を追求しなくてもよい。自己のもつてゐる誠の道を盡して、その結果には心を向けない、これが君子の道である。誠といふのは、單にうそを言はない事であるとばかり心得たならば、それは馬鹿なことである。

【一勺の水】ひしゃくに一杯程の水量の義から、轉じて、少量の水、の意。

「妄なり」うそ・いつはり・でたらめ。

「辨をもとめず」區別を追求する。辨明を求めぬ。

「誠を盡す」誠を十分に發揮する。外面的にいへば、表裏間斷なく自分のなすべき事をきちん／＼とやつて行くことをいふ。

「君子」徳の完成してゐる人。

【或人司馬溫公に誠に入る方を問ひければ、…偽なきに對する誠は大なり】ある人が司馬溫公に誠に入る道をたづねたところが「うそをいはない事から這入るものである」と、答へられたさうである。なるほど、みだりに語らず、うそを云はないといふ事から、誠の道には入るのであるが、うそを云はないだけを誠とは云はないのである。うそを云はないことを信といふのであるが、これは單に言葉の上に関する事だけであるから、小さいことである。言行一致し、萬事にわたつて全然虚偽の無いのを誠とい

ふのであるが、これは心の根柢的の誠のあらはれであるから、大した立派なものである。

「或人」劉安世のことをいふ。

「司馬溫公」支那宋代の賢相。名は光、字は君實。陝州夏縣の人。仁宗・神宗に仕へ、神宗の時、勅命によつて資治通鑑を撰した。哲宗の元祐元年、衆望を荷つて執政に擧げられ、王安石の新政を全廢し、青苗法を罷め、在任八箇月で歿した。太師溫國公を贈られ、文正と諡した。著書は文集八十卷・雜著五百餘卷。七歳の時、水甕中に陥つた子供を救つた話は人口に膾炙してゐる。年六十八。(一六七九—一七四六)

「方」方法。道。

「妄語せざるより入る」十八史略に「劉安世問下光一言可ニ以終レ身行ニ之者。光曰、其誠乎。安世問其所ニ從入。曰、自レ不ニ妄語ニ入」とある。

妄語、みだりな言。いつはりのことば、うそ。

「虚言」うそ。

「偽をいはぬに對する信は小し」「うそを云はないのに對する信は小さい」と直譯したのでは、意味がはつきりしない。「うそを云はないことを信といふのであるが、これは單に言葉の上に関することだけの事であるから、小さな事である」と敷衍して説くがよ

い。

「偽なきに對する誠は大なり」これも、單に「すべてに偽のないのに對する誠は大きい」と説くよりも、「言行が一致し、萬事にわたつて全然偽のない事を誠といふのであるが、これは心の根柢的の誠のあらはれであるから、大した立派なものである」と敷衍して説くがよい。

四 俄掃除

深き谷の蘭も、遙かなる山の紅葉も、人なしとてよく薫り、うつくしく照ればこそ、人至りたるときも香清く色麗はしけれ。人の至るを待ちて香をはなち色を出さむとせば、筈にあふ事あるべからず。常常心にかけて、帚灑したらむ座席と、俄に蜘蛛のい取り柱ふきたらむはいかで見まがふべき。人平生をたしなまずして其の期に臨み、偽り文らむは誠の俄掃除なるべし。

【うつくしく照る】〔筈にあふ〕〔帚灑〕〔蜘蛛のい〕〔見まが

ふ)「たしなむ」

○東北帝國大學農科大學
○海軍兵學校

要旨 これも、「誠といふ説」の一節で、人は其の平生をつゝしんで、常に誠を守つてをるべきであるといふことを、例を引いて説いてゐる。

釋義

【深き谷の蘭も、……いかでか見まがふべき】 深い谷間に咲いてゐる蘭も、遙かな遠い山にある紅葉も、人が居ないからといって、いつも、善い香を放つたり、美しく紅葉したりしてをればこそ、人が行つた時も、香が清らかであり、色が麗はしいのである。人が行くのを待つて急に香を放つたり、よく色を出さうとしたならば、うまく間に合ふ事は出来ない。常日頃氣をつけて掃除したやうな座席と、俄かに蜘蛛の巣を取つたり柱を拭いたやうなのとは、どうして見違へることがあらうか、ありはしない。
【蘭】 ふぢばかま 山野に自生する草で、古來秋の七草の一つに數へられて、その色香を賞翫された。蘭科に屬する「春蘭」とは異なる。藤袴・蘭草とも書く。

「照れば」紅葉するので。

【善にあふ】 弓のはずが弦によく合ふことの義から轉じて、うまく適合する・間にあふ、の意。

「帚灑したらむ」 掃きすゝぎしたやうな。

「蜘蛛のい」 くもの巢。

「見まがふ」 見まちがへる。

【人平生をたしなまずして、……誠の俄掃除なるべし】

人は平常をつゝしまないで、その時に臨んで、いつはりには人を飾るやうなのは、誠の俄掃除といふものであらう。

「たしなまず」 つゝしまない。心がけない。

「俄掃除」 急にした間に合せの掃除。

五己一盃の器量

近頃片桐石見守は茶人のきこえありけるが、煙草の火入唐金のわたり物にて、いかにもおもしろき器なり。人みな、良き香爐なり。といひけれど、石州そのままにして、開かれけり。ある人その仔細をとふ。石州の曰く、これ火入とすれば上品なり、香

爐とすれば下品なり。」とや。誠にこの心もちて人をつかはば、人人己一盃の器量をつくし、國家の益ともなるべきか。

【茶人のきこえ】 【わたり物】 【開く】 【仔細】 【己一盃】

要旨 適材を適所に用ひることの益を、例話によつて説いてゐる。

釋義

【近頃片桐石見守は茶人のきこえありけるが、……香爐とすれば下品なり。】とや 近頃、片桐石見守は茶人としての評判の高い人であつたが、この人の持つてゐる煙草の火入は、唐金製の舶來品で、いかにも趣の深い道具である。そこで誰も皆、「よい香爐である。」といつたけれども、石見守は、もとのまゝ、火入にしておいて、香爐には用ひられなかつた。ある人がそのわけをたづねた。石見守がいふには、「これを火入として使へば、上品で結構だが香爐とすれば下品で、用ひ方を得たものでない。」との事であつた。

【茶人】 (一)茶道を好む人。茶道に明かな人。茶道の宗匠。(二)尋常と異なつた好事の人。一風かはつた好事家。ものずき。茲は

第一義であらう。

【きこえ】 評判。

【火入】 煙火を吸ふ炭火を入れる小さい器。

【唐金】 青銅ともかく。製法が支那から傳はつたところから此の名がある。銅と錫とを主成分とした合金で、鉛・亜鉛・鐵・ニッケル・燐などを混合する。稍青黒色を帯びてゐる。合金中最も著名なもので、古代から器具の製作に用ひられた。

【わたり物】 舶來品。

【香爐】 香を焚く器。座敷の裝飾具として用ひられる。多くは陶磁器・金器、もしくは漆器で、其の形には種々ある。

【開く】 さしおく。茲は、もとのまゝ、火入として用ひて香爐として用ひなかつたことを意味する。

【仔細】 わけ。いはれ。理由。

【とや】 この下に「いふ」などの語が省かれてゐる。補つて解するがよい。

【誠】 この心もちて人をつかはば、……國家の益ともなるべきか ほんたうに、このやうな(適材を適所につかふ)心掛けで人を使つたならば、使はれる人々は自分の及ぶ限りの力量を出して働くので自然と能率が上がり、従つて國家の利益ともなるであらうかと思はれる。

「己一盃の器量」 自分の出来る限りの（自分の最上の）力量。

玉勝閒鈔

解題

玉勝閒全十五卷（内一卷は目録）は、本居宣長の著であつて、宣長が古事記傳を著述しようとして諸書
 を涉獵した際に書き集めた隨筆集である。寛政六年に最初の三卷が發刊され、以後三卷宛五度に刊
 行され、其の最終の卷即ち第十四卷の「つらく」椿の十六丁以下を除き、他の他の板下はすべて宣長の
 自筆だといふ。「玉勝閒の書名は此の書の卷頭に、言葉のすゝろにたまる玉か。つまつみて心を野べの
 すさびに。」と記せるによる。又「玉かつまは、玉籠かたまかつま、即ち目を細かく編んだ所の籠で、摘草な
 どを入れるもの。書き寄せたものを收めてある意味から、此の題名をつけたものである。それ故各
 卷の名をも亦皆草木に因んで、例へば、一の卷を「初若菜」、二の卷を「櫻の落葉」、三の卷を「たちばな」、四の卷を
 「わすれ草」、五の卷を「枯野の薄」、六の卷を「からあむ」、七の卷を「ふぢなみ」、八の卷を「萩の下葉」、九の卷を「花の雪」、
 十の卷を「山菅」、十一の卷を「さねかづら」、十二の卷を「山吹」、十三の卷を「おもひ草」、十四の卷を「つらく」椿と
 いふ風につけた。其の内容は研究もあり、解釋もあり、議論もあり、感想もあつて、頗る多種多様である
 が、其の文は遒勁暢達、雅言を用ひて、少しも拘束された所もないのは、誠に雅文の中でも上乘の筆とい
 ふべきである。

著者本居宣長は、初名を榮貞、幼名を富之助、後、宣長と改めた。通稱を彌四郎、後に健藏、春庵、中衛とい
 つた。嘗て書齋に三十六の鈴を懸け、時々鳴らして氣晴らしをして居たといふので、號を鈴屋といつ

た。私に諡して秋津彦美豆櫻根大人といふ。小津定利の次子で、兄定治の嗣となつて家を嗣ぎ、後、本姓に復した。

享保十五年五月に伊勢國飯南郡松坂に生れた。寶曆元年、二十三歳の時、京都に出て、儒學を堀景山に學び、四年また武川幸順に就いて小兒科の醫術を學んだが、七年歸國して醫を開業した。十七年初めて賀茂眞淵の門に入りて古學を研鑽し、明和元年に古事記傳の稿を起した。同六年に眞淵が歿してから、古人を師として身を學事に委ね、名聲漸く著はれた。寛政六年に紀伊治寶の召に應じて紀州に赴き、古書を進講したが、此の時奥醫師の列に加へられ、十人扶持を賜ひ、享和元年奥詰に進んだ。時に宣長の名聲天下に振ひ、刺を通じて門下に列する者甚だ多く、此の年京都に遊んだ時の如きは、公卿等争ひて其の旅館を訪ひ、講義を聽聞すること、殆ど連日に互つたほどである。九月病に罹り、二十九日に歿した。年七十二。伊勢國松坂の山室山に葬つた。後、門人等墓側に山室山神社を建てて之を祀つた。明治十六年正四位を贈られ、同三十八年更に從二位を贈られた。(二三九〇—二四六一)

宣長は學問博該、識見卓絶で當時其の右に出るものがなかつた。又夙に儒學者流が内外本末の辨を謬つてゐたのを慨き、之を矯正しようと欲して餘力を遺さなかつた。其の嘗て京都に在つた際時の執政の命によつて馭戎慨言を進呈した。これ尊内卑外の意を明辨したものである。直日靈玉櫛笥、玉鉾百首等は、我が國の神ながらの古道を發揮したるもの、玉匣別記二冊は、藩侯の寵遇を辱うし國政を諮詢せられた時に上つた意見書である。其の他古書の註釋、文法音韻等の著述等、先人未發の説

が尠くない。特に其の畢生の大業である古事記傳は、考證精確、識見卓拔、能く千古の疑義を斷じ、後人をして闇夜に燈光を得たやうに思はせた。そして宣長の全力を傾注したのは、古道の闡明にあるので、文を屬し歌を詠するやうなことは、意を致した所ではないけれども、其の歌文を検すると、詞藻富贍、筆力雄健なものが多し。要するに國史、國文、國語、神道の各方面に於て之を大成したものと云ふべきである。

門人帳に録する所の門人四百八十八人、就中、藤井高尙、本居大平、服部中庸、渡邊重名、石原正明、横井千秋、齋藤彦磨、黒澤翁磨、細井貞雄、植松有信、伴信友、平田篤胤以上二人歿後の門人等が尤も著はれてゐる。著書には、古事記傳、直日靈神代正語、鉅狂人馭戎慨言、歷朝詔詞解、玉の小櫛、てにをは紐鏡言葉の玉緒、字音假字用格、菅笠日記、玉勝間玉匣、臣道、國號考、眞曆考、玉鉾百首、鈴屋集等數十種ある。

一 新なる説(一)

近き世學問の道開けて、大方よろづのとりまかなひさとくかしこくなりぬるから、とりどりに新なる説を出す人多く、其の説よろしければ世にもてはやさるるによりて、なべての學者いまだよくも

ととのほぬほどより、われ劣らじと、よに異なる珍しき説を出して人の耳を驚かすこと、今の世のならひなり。其の中には、随分によろしきことも稀には出でくめれど、大方いまだしき學者の心はやりていひ出づることは、ただ人に優らむ勝たむの心にて、かるがるしくまへしりへをもよくも考へ

合はさず、思ひよれるままにうち出づる故に、多くはなかなかなるいみじきひがごとのみなり。

「とりまかなひ」「とりどりに」「なべての學者」「ことのはぬほどより」「いまだしき學者」「なかなかなるいみじきひがごと」

○東京高等師範學校

要旨 (一)(二)に互りて、輕卒に新奇の説を出すものではないといふことを戒めてゐる。

(一)は、未熟な學者の新説に、誤の多いことを詰つてゐる。

釋義

【近き世學問の道開けて、……今の世のならひなり】 近世(近頃)學問をすることが盛んになつて、一般に萬事の取扱ひ方が(研究の仕方が)機敏で上手になつたから、思ひ／＼に新説を出す人が多く、そして其の説が、可成によいと、世の中にほめそやされるによつて、普通一般の學者は、自分の研究が、まだよくもまとまらないうちから、われ先にと殊の外變つためづらしい説を出して、世人を驚歎させるのが、當世のならひはしである。

「大方」下の「なりぬる」に係る副詞。一般に「大概」。

「新なる説」説は、「ときごと」と讀む。以下、すべて、之にした

で、輕卒にも、その説の前後に矛盾がありはせぬかといふやうな事を深く考へ合せもせず、思ひついたことをそのままに發表するからして、多くは却つて、言ひ出さない方がましであると思はれるやうなひどい間違ばかりである。

「隨分」もと分限に應ずる義で、身分相應の意。茲では、それ相應に。

「出てくめれど」出て来るやうではあるけれども。

めり 見えありの約。推量の助動詞。やうだ・らしい、の意。

「いまだしき學者」未熟な學者。

「いまだ」まだそれに達しない・未熟である、の意。

「大方」下の「ひがごとのみなり」に係けて説くがよい。

「心はやりて」心あせつて。あせり氣味に。

「はや、」いらだつ・せきこむ、意。

「いひ出づ」發表する。

「からがろしくまへしりへをもよくも考へ合はさず」輕卒に、前後の事をも、よくも考察しないで。

「思ひよれるままにうち出づる故に」思ひついたそのまゝに、發表するからして。

「なかなかなる」却つて(なまじつか)、發表しない方が、まじだと思はれるやうな、の意。間違の多い拙劣な學説だから、かういつ

がふ。

「とりまかなひ」處理の仕方。取扱ひ方。遣り方。茲は、研究の仕方と見るのが適切であらう。

とり 接頭語。

「さどくかしこくなりぬるから」機敏で上手になつたので。又は、氣がきいて器用になつたので。

「とりどりに」それ／＼に。各自に。銘々に。誰も彼も思ひ／＼に。

「よろしければ」大抵によいと。可成によいと。此の語は、一般には、十分ではなく七八分よといふ意に用ひるを常とする。

「なべての學者」普通一般の學者。

「なべて、おしなべて・ひきくるめて、の義から、轉じて、なみ」とほり・なみ／＼・普通一般・尋常一様、の意に用ひる。

「まだよくとのはぬほどより」まだ其の研究が十分整理されない(完成しない)うちから。

「よに異なる」殊の外變つた。

【其の中には、隨分……いみじきひがごとのみなり】 その發表せられた説の中には、それ相應に可成よい事も稀には出て来るやうではあるが、大體からいつて、未熟な學者が、あせり氣味に言ひ出す(發表する)事は、たゞ人より優らう勝たうといふ心

たのである。

「いみじきひがごと」甚だしい(非常な)間違。

ひがごと、「僻事」と書く。道理に合はぬことをいふ。

二 たやすくは出すまじき わざ(一)

すべて新なる説を出すはいと大事なり。幾度もかへさひ思ひて、よくたしかなるよりどころをとらへ、いづくまでもゆき通りて違ふ所なく、動くまじきにあらざれば、たやすくは出すまじきわざなり。その時には、うけばりて善しと思ふも、程經て後に今一たびよく思へば、なほわろかりと、我ながらだに思ひならるる事の多きぞかし。

「かへさひ思ふ」「よりどころ」「ゆき通る」「たやすくは

「うけばる」「思ひならる」

○神戸高等商業學校

○富山高等學校

要旨 前段の続きで、新説を發表するには、十分に研究を積んだ上になすべきであるといふ注意を説いてゐる。

釋義

【すべて新なる説を出すは、…我ながらだに思ひならるる事の多きぞかし】 一般に新しい説を發表するといふ事は、非常に重大な事である。幾度も繰り返し考へて、よく確實な根據をつかみ、その論旨が、どこまでも一貫して、支吾撞著を來す（くひちがひを生ずる）所がなく、論旨のぐらつくやうな事が全然ないといふのでなければ、容易には（輕卒には）發表してはならぬ事である。それを發表する時には、これなら大丈夫間違ないといふ氣になつて、善いと思ふ説も、しばらく時が経つてから、もう一度、よく考へ直して見ると、やはり間違つてゐるなあと、自分でさへも、自然に感付いて來ることが多いものであるよ。
「いと大事なり」 非常に大切なことである。
「かへさひ思ひて」 繰り返へし考へて、の意。さひは、しの延音、それ故、かへさひは、「かへし」に同じ。
「たしかなるよりどころ」 確實な根據。
「いづくまでもゆき通ひて」 どこまでもその説が徹底して、理窟が通つて、の意。即ち、その論旨が終始一貫して。

「違ふ所なく」 矛盾する所。支吾撞著する所。くひちがふ所。
「動くまじきにあらずば」 動かすことの出來ぬ説でないならば。確固不變の學説でないならば。動くまじきの下には「事」を補つて解くがよい。

「うけはりて」 受張りての義。押し張つて、恐れ憚らずに、おしきつて。間違ないとうけあつて、などの意。
「善しと思ふも」 善いと思ふ事（説）も。
「なほわるかりけり」 大丈夫間違ないと思つてゐたにも拘らず、やはり自分の説は間違つてゐたわい。
なほ、やはり。
けり、此の場合は、詠歎の助動詞。
「我ながらだに」 その説を發表した自分でさへ（自分ながらですら）、の意。（他人が、悪いと思ふのは勿論であるといふ意をも含む。）だに、事物の輕きをあげて、言外に他の重きを知らしめるに用ひる助詞。ですら・でも・こればかり・せめて是れなりとも、といふに當る。
「思ひならるる事」 その考へにられる事の義で、思はれること、の意。努めて考へるのでなく、自然にさう考へるやうになる事といふ。
る、此の場合は、自然可能の助動詞。

「多きぞかし」 多きの下に「ものなる」を補つて見るがよい。かし、言ひきる語に添へて意味を強め、又は輕き感動の意を添へる助詞。

三 眞の道を尋ねべきなり

道にかなはずとて、世に久しくありならひつること、を、俄にやめむとするはわるし。ただそのそこなひのすぢを省き去りて、あるものはあるにてさしおきて、眞の道を尋ねべきなり。萬のことを強ひて道のままに直し行はむとするは、なかなか眞の道の意にかなはざることあり。

「道にかなはず」 「ありならひつること」 「そこなひのすぢ」 「あるものはあるにてさしおく」 「眞の道の意」

○醫學専門學校
○神宮皇學館

要旨 久しく世に行はれて來た事を、道理にあはないからといつて、俄に廢棄すべきではないといふことを説い

てゐる。

釋義

【道にかなはずとて、世に久しくありならひつることを、…なかなか眞の道の意にかなはざることあり】 道理に當てはまらない（あはない）からといつて、世間に永い間習慣となつてゐることを、急に止めようとするのは、よくない（間違つてゐる）。たとゝ其の害になる（悪い）點だけを除去去つて、現にあるものはあるものとして、其の儘に手をつけずにおいて（其の儘にしておいて）、眞の道理を尋ね知り（本當の道理を研究し）、そして、それに叶ふやうにするがよい。世の中の萬事を無理に道の通りに改めて（道理によく當てはめて）行はうとするのは、却つて本當の道理の趣意に反することがある。
「ありならひつること」 習慣となつてゐること。
「そこなひのすぢを省き去る」 その事の中の缺點だけを除去するの意。
「あるものはあるにてさしおく」 その事全體を中止することなく、そのまゝに残しておく意。

あるにて、此のにては、として、の意。

「眞の道」 眞の道理。

「道のままに直し行はむとする」 道理の通りに改めて行はうとする。

「なかなか」 却つて。

「眞の道の意」 本當の道理の趣意。

四 書をよむたとへ

須賀直見がいひしは、廣く大きな書をよむは、長き旅路を行くが如し。おもしろからぬ所もおほかるを、經行きては又おもしろくめさむる心地する浦山にもいたるなり。又あしつよき人ははやく、よわきは行くことおそきも、よく似たり。」とぞいひける。をかしてきたとへなりかし。

「おほかるを」「よわきは」「をかしてきたとへ」

○高等學校

○高岡高等商業學校

「浦山」 海邊や山。海邊の山、の意にもとれる。

「あしつよき人ははやく」 健脚家は進行が速く。

「をかしき」 面白い。

五 世の常にことなる

新しき説

大かた世の常にことなる新しき説をおこす時にはよきあしきをいはず、まづ一わたりは世の中の學者に憎まれせしらるるものなり。」あるは己がもとより據り來つる説といたくことなるを聞きては、よきあしきを味ひ考ふるまでもなく、始よりひたぶるにすてて取上げざるものもあり。」あるは心の中には、げにと思ふふしも多くあるものから、さすがに近き人のことに従はむことのねたくて、よしともあしともいはで、ただうけぬかほして過すたぐひもあり。」あるはねたむ心のすすめるは心にはよしと思ひながら、その中の疵をあなが

要旨 讀書を旅行にたとへて説いてゐる。

釋義

【須賀直見がいひしは、「……。」とぞいひける。をかしてきたとへなりかし】 須賀直見がいつたことに、「大部の書物を讀むのは長途の旅をするやうなものである。道中には面白くないところも多くあるが、それ等の個所を通り過ぎて行つてこそ、又景色がよくて目が醒めるやうな氣持のする海邊や山にも行きつくことが出来るのである。それと同じやうに、大部の書物の中には、面白くない個所の多いのを、ずん／＼讀過して行くと、又面白い個所に出くはすのである。それから又、旅をする際には、足の強い人は速く歩き、足の弱い人は遅いといふ點も、讀書力の強い人は讀むことが速く、讀書力の弱い人は遅いのによく似てゐる。」といつてゐる。これはまことに面白い譬であるよな。

「須賀直見」 伊勢國松坂の人。本居宣長の門人。

「廣く大きな書」 長くつゞいてゐる書物。大部の書物。浩瀚の書。

「經行きては」 通つて行つては。行き過ぎては。

「めさむる心地する」 目が醒めるやうな氣持がする。おどろくほど景色のよいことを意味する。

ちに求め出でてすべてをいひつけたむと構ふるものもあり。」

【世のつねにことなる説】 「一わたり」「もとより據り來つる説」

【ひたぶるに】 「げにと思ふふし」「あるものから」「ねたし」

【うけぬかほ】 「あながちに」「いひけつ」

○東京高等師範學校

○京城法學專門學校

要旨 先づ、新奇な學説を發表すると、とかく反對非難されるものであるといふことを説き、次に之に反對する學者の中には、(一)その新奇の説の善惡を考へずに、頭ごなしに非難する者、(二)内心には賛成しながら不賛成顔する者、(三)賛成しながら、強ひて缺點を求めて排斥する者などがあるといつて、三種の態度を列擧して述べてゐる。

釋義

【大かた世の常にことなる新しき説……そしらるるものなり】 一般に、普通の説と違つた新しい説を唱へはじめるときには、其の説の善惡にかゝはらず(其の説が善くても悪くても)、最初、

一應は世の中の學者から、憎まれ非難されるものである。(冒頭)
「大かた」一般に概して總じて。特別の場合別として、大體に就ていへば、の意。

「世の常にことなる」普通の説とちがつた。

「おこす」はじめ。

「よきあしきをいはず」その説の善悪にかゝはらず。その説がよくてもわるくても。

「一わたり」一應。一とほり。

【あるは、己がもとより、……すべてをいひけたむと構ふるものあり】その新しい説を聞く人々の中には、或は、自分が以前から據り來つた説と非常に違つてゐる説を聞くと、其の説の善悪を十分にしらべ考へるまでもしないで、最初から全然排斥して採用しないものもある。

或は又、内心ではなるほど尤もだと思ふ個所も澤山あることはあるが、それでも、近頃の人(未熟な後輩)の言説に服従することが残念さに、其の説がよいともわるいともいはないで、たゞ不同意な顔付をしてそのままにして置く人々もある。

或は又、嫉妬心の一層ひどい者になると、内心では其の説をよいと思ひながら、その中の缺點を無理やりに探し出して、それによつて、其の説の全部をだめだと否定しようと思つてゐるものもある。

「いひけたむ」言ひ消さう。否定しよう。
「構ふ」たくらむ。企てる。

六 冠辭考

さて後、國に歸りたりし頃、江戸よりのぼれりし人の近き頃出でたりとて、冠辭考といふ物を見せたるにぞ、懸居あひだるの大人おとなの御名をも始めて知りける。かくてそのふみ初に一わたり見しには、さらに思ひもかけぬことのみにして、あまりこととほく怪しきやうにおぼえて、更に信ずる心はあらざりしかど、なほあるやうあるべしと思ひて、立ちかへり今一たび見れば、まれまれにはげにさもやと覺ゆるふしぶしもいで來ければ、また立ちかへり見るに、いよいよげにと覺ゆること多くなりて、見るたびに信ずる心の出で來つづ、つひにいにしへぶりのこころことばのまことに然ることを覺りぬ。

(以上、非難する者の三態度)

「もとより據り來る説」以前から、従つて來た所の説。

「よきあしきを」説の善悪是非を。

「始より」てんから。頭ごなしに。最初から。

「ひたぶるに」全く。全然。

「取り上げず」採用しない。

「げにと思ふふし」なるほどと首肯出來る個所。

「ものから」ものながら・とはいひながら・ものではあるが、と返へる意味の語。

「さすがに」さうではあるが・さうはいふものの・それでも・何といつても、などの意。

「近き人のこと」近頃の人のいふ言。

「わたりて」にくらしくて。いま／＼しくて。無念さに。残念さに。

「うけぬかほ」承知しない顔付・首肯出來かねる様な顔付。同意しない様子。

「たぐひ」連中・人々。

「疵」缺點。

「あながちに」強ひて。無理やりに。

「求め出でて」さがし出して。

かくて後に思ひ較ぶれば、かの契沖が萬葉の説はなほいまだしきことのみぞ多かりける。
【無辭考】「あるやうあるべし」「げにさもや」「いにしへぶりのこころことば」

○東京音楽學校
○横濱高等商業學校

要旨 宣長がその修學の經歷を述べた一部分で、自分は冠辭考を學んではじめて古代精神や古語を覺り得たといふこと。

釋義 【さて後、國に歸りたりし頃、……かの契沖が萬葉の説は、なほいまだしきことのみぞ多かりける】さて後になつて、國に歸つた頃に、江戸から來た人が、近頃出版されたのだといつて、冠辭考といふ書物を見せたのによつて、懸居大人の御名前をも始めて知つたのである。かういふわけで其の書物を、初め一通り見た時には、一向思ひがけない(思ひもよらない)事ばかりで、あまりに普通の説とは縁遠くて奇怪な説のやうに思はれて、少しもそれを信ずる心はなかつたけれども、それでも何か理由があるなら

うと思つて、繰り返してもう一度読んで見ると、極く稀にはほんたうにさうでもあらうかと思はれる箇所々々も出て来たから、又繰り返して見ると、いよ／＼、げにさもあらうと思はれることが(ます／＼)成る程と首肯される個處も)多くなつて、讀むたびに次第に信ずる心が出て来て、遂には古風の精神(思想)や言葉の、ほんたうにさうである事をさつた。かやうにして後になつて考へ合せて見ると、かの契沖の萬葉の説(註解)は、まだ／＼不十分な事ばかりが多くあつた。

「國に歸りたりし頃」 宣長が故郷の伊勢國に歸つたのは、寶曆七年十月で二十八歳の時である。

「冠辭考」 十卷。賀茂眞淵の著。古事記・日本書紀・萬葉集等に見えた冠辭(枕詞)三百四十餘に就て、其の語原等を解釋したもので、創意が多く、冠辭の研究には缺くべからざる良書である。寶曆四年の十月に校し終つた旨の後序がある。刊行は同七年である。

「縣居の大人」 賀茂眞淵の敬稱。眞淵は遠江の人。定信の子。通稱岡部衛士、初め三四郎と稱した。荷田春滿の門人。田安宗武に仕へ、寶曆十年に致仕した。明和六年十月三日に歿、年七十三。

著す所、萬葉考・伊勢物語古意・源氏物語新釋・祝詞考・冠辭考等がある。明治三十八年贈正三位。(二三五七—二四二九)

縣居 明和元年に、眞淵は江戸の北八丁堀から濱町に移つた。そ

して庭を野邊や畑につくつて、その所もいさゝか傍(かた)であるからといつて、その屋敷を縣居と名付けた。

大人 一處の領主、又は貴人の尊稱に用ひる語。轉じて、師、又は學者の尊稱とする。茲は、先生といふほどの意。

「思ひもかけぬ」 思ひもよらぬこと。意想外なこと。

「こととほく縁遠く。耳慣れないこと。實際の事情にあはなことをいふ。

「怪しきやうに」 奇怪な説のやうに。又は、不安心に、の意にとるもおもしろい。

「なほあるやうあるべし」 それでもやはり、このやうな説を立てるだけの理由があるであらう、の意。

あるやう 仔細・理由・わけ。

「げにさもやと屬ゆる」 さも、やの下に「あらむ」を補つて解くがよい。ほんたうにさうもあらうかと思はれる、の意。

「ふし／＼」 個處々々。

「いよいよげにと屬ゆること多くなりて」 いよいよは、「多くなる」に係けて解くがよい。げにの下には「然らむ」などの語を補つて見るがよい。

「いにしへぶりのころ」 ことばのまことに然ることを屬りぬ」昔の風の精神と言葉とが、實にその通りであることがわかつた。

いにしへぶりのころ。ことばは 我が國の古代の人の心性や言語。

「契沖が萬葉の説」 契沖の萬葉集に關する説明。即ち、萬葉代匠記に解いた説。

契沖 大阪高津圓珠庵の住職。俗姓下田氏。名は空心。高野山快賢及び河内延命寺覺彦に従つて學んだ。就中、國學に精しく、徳川光圀の爲に、萬葉代匠記を著した。其他、和字正鑑抄・古今餘材抄・勢語臆斷・漫吟集等がある。元祿十四年正月廿五日歿。年六十二。明治二十四年贈正四位。(二三〇〇—二三六一)

萬葉 萬葉集は二十卷。短歌・長歌・旋頭歌を併せて四四九六首を收め、之を雜歌・挽歌・相聞歌・譬喻歌・四季相聞等の諸部に分ち、仁徳天皇から淳仁天皇まで凡そ四百年に涉り、上は天皇・皇后から、下は世捨人・防人・地方の野人等の歌までを網羅してゐる。因に萬葉の名義は、「よろづの言の葉」の義だとも、又葉は代の意で、「萬代に傳はるべき集」の義だともいふ。

「いまだしきこと」 未だ至らぬことをいふ。不十分なこと・未熟なこと、の意。

七師の説にたがふ

おのれ古典を解くに師の説とたがへること多く、師の説のわるき事あるをば、わきまへいふことも多かるを、いとあるまじきことと思ふ人多かめれど、これすなはちわが師の心にて、常に教へられしは、後によき考の出で來たらむには、必ずしも師の説にたがふとてなはばかりぞ。」となむ教へられし。こはいとたふとき教にて、わが師のよにすぐれ給へる一つなり。

【古典】「わきまへいふ」 「あるまじきこと」 「なはばかりぞ」

要旨 道の爲には、師の學説にも抱泥すべきでないといふことを、其の師なる賀茂眞淵翁の訓言をあげて説いてゐる。

釋義

【おのれ古典を解くに……わが師のよにすぐれ給へる一つなり】 自分が古代の書物を解釋するのに、我が師眞淵先生の説と違つてゐる事が多く、先生の説の誤つてゐる事を、辨説すること

も多くあるのを、弟子としてさういふことをするのは甚だ不都合な事であると思ふ人が多くあるやうであるけれども、この、師の説と雖も、誤謬の點はあくまでも辨説するといふことは、とりもなほさず我が師眞淵先生の御本意であつて（御精神にかなつてゐるのであつて）、我が師が常に私に教へられた事には、「この後に、私の説よりもまさつた善い考が出て来たならば、それが師たる私の説に違ふからといつて（私の説と一致しないからといつて）、決して遠慮などするな」と教へられた。この教は非常に立派な教であつて、我が師眞淵先生の非常にすぐれてをられた點の一つである。

「古典」昔の書物。古事記・日本書紀などの古書をいふ。

「師の説」我が師（賀茂眞淵先生）の學説。

「わきまへいふ」是非を判別して論ずる。辨明し論ずる。辨説する。

「あるまじきこと」あつてはならぬこと。よくないこと。不都合なこと。

「多かめれど」「多くあるめれど」の約。多くあるやうだけれども。

「これすなはちわが師の心にて」師の説といへども、誤があつたならば正せといふのが、眞淵先生の御意見である、の意。

むはわが心にあらざるぞかし。

「泥む」「かにもかくにも」

○神戸高等商業學校

○海軍兵・機關・經理學校

○東京高等蠶絲學校

要旨

宣長が、門弟子に學問研究の心得を説いたもので、わが説に抱泥するには及ばない、よい新説が出た時には遠慮なく、それを廣めよといふことを教へてゐる。

釋義

【吾に従ひて物學ばむともがらも、……わが心にあらざるぞかし】私（宣長）の弟子となつて學問をしようとしてゐる人々も、私の死後に、またよい考が思ひつくやうな事があるならば、決して私の説に拘泥してはならぬ。私の説の誤つてゐる理由を述べ

て、諸子のよい説を世に廣めなさい。一體、私が人を教へるのは、我が國の古い道を明かにしようとする爲であるから、とにかく、古の道を明かにすることが、私の教を遵奉するわけなのである。古の道を大切に思はないで、たいむやみに私を尊んで、私の説に拘泥するのは、却つて私の本意ではないのであるぞ。

「後によき考の出た来たらむには……なはばかりそ」眞淵の訓誡の言。後になつて、よい考が出て来たならば、師の説に違ふからといつて決して遠慮せずに正せよ、の意。
後に、教へられた時の後に、の意。
なはばかりそ、遠慮するな。
な……そ、勿れ、の義で、禁止する意をあらはす助詞。そして、多くは動詞の連用形をその中間に挿み、か變・き變に限つてその將然形を挿む（例「早くな來そ。」「悪口なせそ。」）
「よにすぐれ給へる」殊の外勝れておいでなさる。
よに、ことのほかに・まことに・非常に、などの意。

八わが説に泥みそ

吾に従ひて物學ばむともがらも、わが後に又よき考のいできたらむには、必ずわが説にな泥みそ。わがあしきゆゑをいひてよき考をひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道を明かにせむとなれば、かにもかくにも、道を明かにせむぞ、吾を用ふるにはありける。道を思はで、徒らに吾をたふとま

「吾に従ひて」私の門弟となつて。又は、私を師として。

「わが後に」私の死後に。

「よき考のいできたらむには」きたらむの下に「時」の語を補つて解するがよい。

「な泥みそ」拘泥するな。かゝはるな。執著するな。

「道」茲は、古の道、即ち、神ながらの道。換言すると、神代ながらの國民精神。

「かにもかくにも」とにかく。何にしても。

「吾を用ふるにはありける」自分の教を用ひる（守る）ことであるわい。用ふるの下に、「事」の語を補つて解くがよい。

「わが心にあらざるぞかし」私の本意ではないぞよ。
かし、念を押し意を強める爲の感動詞。

九富み榮えを願ふべし

世世の儒者身の貧しく賤しきをうれへず、富み榮えを願はず、よろこばざるを、よきことにすれども、そは人のまことのころにあらず。多くは名をむさぼる例のいつはりなり。まれまれに、さる心

ならむものありとも、そは世のひがものにてこそあれ、なにのよきことならむ。〔前節〕ことわりならぬふるまひをして、あながちに願はむこそはあしからめ、ほどほどにつとむべきわざをいそしくつとめて、なりのぼり富み榮えむこそ、父母にも先祖にも孝行ならめ。身衰へ家貧しからむは、うへなき不孝にこそありけれ。ただおのがいさぎよき名をむさぼるあまりに、まことの孝を忘るるは、もろこしのつねなりかし。〔後節〕

【まことのころ】〔名をむさぼる〕〔例の〕〔まれまれに〕
【ひがもの】〔ことわりならぬふるまひ〕〔いそし〕〔なりのぼる〕〔うへなき〕〔いさぎよき名〕

○東京高等蠶絲學校

○高等學校

要旨 前後二節からなり、前節は、とかく儒者が、富貴から超越するのを、よい事としてゐるが、それは虚偽であり、偽善であると難じ、後節は、正道を踏んでの富貴榮

がる。虚栄心かられる。

【例のいつわり】 通例、儒者にありがちなあの虚偽。

【まれまれに】 ごく稀には。

【さる心ならむもの】 さういふ心のあるやうな人。即ち、眞實、心から貧賤を憂へず富貴榮達を欲しない人、の意。

【ひがもの】 心の僻んだ人。ねぢけもの・ひねくれもの・偏屈者。

【なにのよきことあらむ】 何のよい事があらう、少しもよい事ではない。

【ことわりならぬふるまひをして、……もろこし人のつねなりかし】 道理にかなはない（道にはづれた）行爲をしてまでも、無理やりに富貴榮達を願ふのなら、それは、わるくもあらうが、身分相應に、自分の勤めるはずの業を一生懸命に勉め勵んでやつて、その結果立身出世して富貴の身になるのは、父母に對しても先祖に對しても、孝行であらう。我が身が零落し、我が家が貧困に陥るのは、父母や先祖に對しても、此の上もない不幸であるのである。たゞ無暗と自分が清廉潔白であるといふ評判を得たいと慾ばるために、貧賤の境遇をはなれようとはせず、眞實の孝行の道を忘れるのは、支那人にありがちなことである。〔後節〕

【ことわりならぬふるまひ】 道理に合はない行爲。無理非道な所行。

達は孝道にもかなふもので、排斥するどころか、寧ろ獎勵すべきであると説いてゐる。

釋義

【世世の儒者、……なにのよきことあらむ】 代々の儒學者

は、我が身の貧賤なを憂へ悲しむことなく、また富貴榮達を願ふこともせず、喜ぶこともしないことを、よい事であるとしてゐるけれども、それは、人間としての眞情ではなく、大抵は無暗に名譽を得ようとする例の通りの、儒者にありがちな虚偽なのである。ごくたまには、そのやうな心の人（無暗に名譽を得ようとする虚偽の心からではなくて、眞心から富貴榮達を得たいと望まぬ人があるにしても、そんな人は世の中のねぢけ者であつて、少しもよい事ではなからう（間違つた事で、決してほむべきではない）。〔前節〕

【世世の儒者】 代々の儒學者。下の「よきことにす」の主語。

【富み榮え】 富貴榮達。

【そは】 それは・その事は。「身の貧しく賤しきをうれはず……よきことにす」を指す。

【人のまことのころ】 人間としての眞情。偽らない人情。

【名をむさぼる】 むやみによい評判を得ようとする。名譽を得た

【あながちに願はむこそはあしからめ】 無理に富貴を願ふ事はわるくもあらうが。此の句の下に、「けれども・だが」などの語を補つて解するがよい。

【あながちに】 無理に。

【ほどほどに】 身の程に従つて。身分相應に。

【いそしく】 よく勤めるさま。忠實に・一生懸命に・せつせと。

【なりのぼる】 「成上る」で「成下る」の對。立身する・出世する、の意。

【身衰へ家貧し】 身分はおちぶれ、家は貧乏する。

【うへなき】 此の上もない。最上な。

【いさぎよき名】 恬淡無慾、清廉潔白で、清貧に安んじてゐるらしい人であるなどといふ名（評判）。

【むさぼるにあまり】 無暗と過度に得たがるために、の意。

【むさぼる】 過度に欲する・飽くことなく欲する・よくばる。

【あまりに】 法外に・度を過ぎて。

【もろこし人のつね】 支那人にありがちなこと。支那人の通弊。

（儒學者の支那思想に惑溺するのを難じた文であるので、かういつたのである。）

一〇 わが思ふすぢをまぐべからず

世の物しり人の、ひとのときごとのあしきを咎めず、ひとむきにかたよらず、これをもかれをも捨てぬさまにあげつらひをなすは、多くはおのが思ひとりたる趣をまげて世の人の心にあまねくかなへむとするものにて、まことにあらず、心ぎたなし。たとひ世の人はいかにそしるとも、わが思ふすぢをまげて従ふべきことにはあらず。人のほめそしりには、かかはるまじきわざぞ。

「ひとむき」「あげつらふ」

- 東京高等師範學校
- 新潟醫學專門學校
- 東京高等蠶絲學校

要旨 他人の毀譽に頓著しないで、自己の定見を操守すべきを説いてゐる。

釋義

【世の物しり人の、……人のほめそしりにはかかはるまじきわざぞ】 世間の識者が、他人の説の誤つてゐるのを非難することなく、又一方の説にばかり偏するといふことなく（一方の説だけをとらないで）、この説をもあの説をも排斥しないといふ風に曖昧な議論をするのは、大抵は自分が正しいと信じてゐる趣旨を曲げて、廣く世間の人の意見に合ふやうにしよう（迎合しよう）とするものであつて、誠實を缺いた事であり、陋劣なしかたである。たとひ世の中は、人はどのやうに非難しようとも、自分が正しいと信じてゐる道理を無視してまでも、強ひて他人の説に従ふやうな事があつてはならない。人が自分を譽めようがそしらうが、そんなことに頓着してはならぬのである。

「世の物しり人」 世の中の、物事をよく辨へ知つてゐる人。

「ひとのときごと」 他人の學説。

「ひとむきにかたよらず」 一方の説にだけ偏せない。二つ以上の説がある時、そのいづれに對しても反對せず、曖昧な態度を取るをいふ。

「ひとむき」 其の事一方にだけ心を寄せて他を顧みないこと。ひとすぢ・一途。

一一 説は必ずかはらでかなはず

同じ人の説の、此處と彼處と行きちがひて、ひとしからざるは、何れによるべきぞとまどはしくて、大方その人の説すべてうきたる心地のせらるる、そは一わたりはさることなれども、なほさしもあらず。始より終まで説のかはれることなきは、なかなかにをかしからぬかたもあるぞかし。（前節）はじめに定めおきたる事の、程經て後に又異なるよき考の出で来るは、常ある事なれば、始とかはれる事あるこそよけれ。年を経て學問進み行けば、説は必ずかはらでかなはず、又己がはじめの誤る後に知りながらは、包み隠さできよく改めたるもいとよき事なり。（後節）

「まどはし」「うきたる心地のせらる」「なほさしもあらず」

「これをもかれをも捨てぬさまにあげつらひをなす」 甲の説もよいが、乙の説もわるくはないといふ風に、曖昧な議論を爲すをいふ。

「あげつらふ」 議論する。語原は、「擧げ連る」。理を擧げて論を述べる義。

「おのが思ひとりたる趣をまげて」 自分が正しいと信じてゐる趣旨と反することをいつて。

「思ひとる」 思ひ込む・心にさとる・考へなす、などの意。

「世の人の心にあまねくかなへむとするものにて」 世間の人の心を迎へて、廣く適合させようとするもので。

「かなへむ」 「かなはせむ」の約。

「まことにあらず」 誠實を缺いてゐる・不眞面目である。

「心ぎたなし」 陋劣な考である。

「わが思ふすぢ」 自分が正しいと信ずる道理。すぢ、筋。理のすぢみち・道理。

「従ふべきことにはあらず」 自己の正しいと信ずる説と反する他人の説に従ふやうな事があつてはならない。

「かかはる」 拘泥する・頓著する。心にとめる。

「をかしからぬかた」 「かはらでかなはず」

要旨 二節から成り、年月の移ると共に、學説も進歩すべきであるといふことを説いてゐる。即ち、前節は、終始學説の變らないのは面白くないといふこと、後節は、學問が進んで行くと、説は必ずかはるはずのものであつて、其の都度よく改めるがよいといふことを述べてゐる。

釋義

【同じ人の説の、……なかなかをかしからぬかたもあるぞかし】 同じ人の説が、この處と彼の處と異つて等しくないのは(前)後矛盾して一貫しないのは、どちらの説に従つたらよいのかと疑はしくて、大體其の人の説が全部當にならないやうな氣持がせられるのは、一應は尤もなことではあるが、よく考へて見ると、やはりさうでも無い。始から終までその人の説の變つてゐる事のないのはその人の考の少しも進歩してゐないといふ事の證據で、却つて面白くない點もあるものであるぞよ。(附説)

「此處と彼處と」 この處の説とかの處の説と。

「行きちがひて」 一致しないで。矛盾して。

「何れによる」 どちらの説により従ふ。

【はじめに定めおきたる事の、……きよく改めたるいとよき事なり】 はじめにかうであるときめて置いた事が、幾程かの時日が経過して後に、最初の考とはちがつた更によい考の出で来ることは、常にありがちの事であるから、學説といふものは、はじめに立てたのと違ふ事のあるのが、よいのである。年月を経過して、その人の學問が進歩して行くと、その學説は屹度變らない譯にはいかない(變化しないではない)。又、自分の初の誤謬を後になつて氣がつきながら、包みかくすやうな事はしないで、きつぱりと、訂正する事も甚だよい事である。(後節)

「程經て後」 いくらか時日を経過して後に。

「異なる」 はじめに定めた考とちがつた。

「かはらでかなはず」 變らないではすまない。變らないわけにはいかない。變るはずのものである。では、「さて」の約言。

「知りながらは」 氣がつきながらある時は、の意。

「きよく改めたるも」 きつぱりと改める(訂正する)事も、きよく、残りなく・きつぱりと。

二 誰も解き得ぬふしを問ふ

「まどはしくて」 疑惑を起させて。まぎらはしくて。

「大かた」 おしなべて。大體。

「うきたる心地せらる」 學説が不定であるので、信用が出来ないやうな氣がする。

「うきたる心地」 うきは浮、であてにならぬ心地・根據のないやうな氣持・信用が出来ないやうな氣持。

「そは一わたりさることなれども」 前説と後説とが一致しないやうな人の學説は、信用するに足らぬやうに思はれるのは、一應は尤もではあるが。

「一わたり」 一應は・一通りは。

「さること」 然る事で、尤もなこと。

「なほさしもあるぞかし」 よく考へて見ると、やはり、さうではない。前後の説が變つても、信用するに足らないなどといふことはない、の意。

「さしも」 さうでも・其通りでも、などの意。いは、語氣を強める助詞。

「なかなかをかしからぬかたもあるぞかし」 却つて面白くない點(事)もあるものであるぞよ。

「なかなか」 却つて・けつく。

「をかし」 面白い・趣味がある。

物まなぶともがら物知り人にあひて物問ふに、ともすればまづ古書いにしへのよかの中にも、よにかたきこととして誰も解き得ぬふしをえり出でて問ふならひなり。かたきことをまづ明らかまほしく思ふも、學者のなべての心なれども、しからばやすきことどもは、皆よく明らかめ知れるかと試むれば、いとやすきことどもをだに、いまだえよくもわきまへず。さるもの、さしこえて、まづかたきふしを明らかめむとするは、いとあぢきなきわざなり。

「ともすれば」 「さしこえて」 「あぢきなきわざ」

○醫學専門學校

要旨 學問をするには、まづ平易なことから、著手するものが順序であるといふことを説いてゐる。

釋義

【物まなぶともがら、……まづかたきふしを明らかめむとするはいとあぢきなきわざなり】 學問する人達が、博識の人に會

つて何か尋ねるのに(質問するの)に、動もすると(どうかする
と)一番先きに昔の書物の中でも、格別難解な事として、誰も解
釋することの出来ない個所を選び出して尋ねるのが、習はし(よ
くありがちな事)である。かやうな難解なことを第一番に明かに
したいと思ふのも、學問する者の一般に考へることであるけれど
も、それならば平易な事柄はすべてよく明かに知つてゐるかと、
試しに聞いて見ると、非常に平易な事柄でさへもまだ十分に了解
することが出来ずに居る。さういふ風に平易な事柄でさへわから
ずにゐる位の學者が、分を越えて、第一番に、難解な點を了解し
ようとするのは、非常につまらない事である。

「物まなぶともがら」 學問する人たち。

「物知り人」 博學な人。博識な者。

「物問ふに」 物事を尋ねるのに。質問するの。

「ともすれば」 動もすると。どうかすると。

「古書」 古い者。昔の書物。古事記や日本書紀や萬葉集などをさ
す。

「よに」 殊の外。格別。非常に。

茲では、世間で、の意にとつてはいけない。

「かたきこととして」 むづかしい事として。難解な事として。

「解き」 解釋する。一に「説き」と漢字を宛てる。之によると、

(二)よく聞えたりと思ひて、心もどめぬことに、思ひの外なるひが
心得の多かるものなれば、まづたやすき事をいく度もかへさひ考
へ、問ひも明らかによく得たらむ後にこそ難きふしをば思ひかく
べきわざなれ。

語釋

(一)「莫囂圓隣」此の語は、昔から學者がいろ／＼
研究してゐるが未だに讀みとき得られないとされてゐるものであ
る。(二)「よく聞えたり」よくわかつてゐる。(三)「心もどめ
ぬこと」氣にもかけずにゐること・何とも思つてゐないこと。
(四)「思ひの外なる」意外な・案外な。(五)「ひが心得」思ひ違ひ
・心得ちがひ。(六)「かへさひ」くりかへして。(七)「問ひも明
らめて」人にも問ひたゞして明かにして。(八)「よく得たらむ後
に」よくわかつた後に・十分會得した上で。(九)「思ひかくべき
わざ」研究し了解しようと思ふべきこと。

一三 消息文などの文字

常にかきかはす消息文なども、文字讀みがたくて
はいひやるすぢゆきとほらず。よむ人はた苦し
みて頭かたぶけつつかへさひ讀めども、遂によみ

説明する、の意にとる。

「えり出て」 選び出して。

「學者」 (一)學問のある人・ものしり。(二)學問をする者・學生。

茲は、第二義にとるがよい。

「明らかまほしく思ふ」 明かにしたく思ふ。了解したいと思ふ。

「なべての心」 一般の人の心。

「いまだよくもわきまへず」 「いまだよくもわきまへ得ず」とい
ふに同じで、まだ十分にわかりかねてゐる、の意。

「さるもの」 さういふ學者。やさしい事さへわからずにゐるやう
な者。

「さしこえて」 分に越えて。

「あぢきなきわざ」 つまらないこと。

備考

原文には「古書の中にも、よにかたきこととして誰も解き得ぬふし
をえり出でて問ふならひなり。」の下に、次の文があるのを、省略し
たのである。参考のために、茲に補つておく。

例へば、書紀の齊明御卷なる童謡、萬葉にては、一の卷なる莫囂
圓隣云々と書ける歌などのやうのたぐひなり。

又、本文の下略した部分をも補つておく。

得ずなどしては、「ここ讀みがたし」とかへし問はむ
も、さすがになめしきやうなれば、ただおしはかり
に心得ては、事たがひもするぞかし。

「かきかはす」 「消息文」 「ゆきとほらず」 「かへさひ」 「さす
がに」 「なめし」 「おしはかり」

○高等學校

【要旨】 手紙を明瞭にかゝないと意外な間違をも生ずる

ものであるといふことを説いてゐる。

釋義

【常にかきかはす消息文なども……事たがひもするぞかし】
平素書いてとりやりする手紙の文なども、文字が讀みにくいやら
では、こちらで言つてやる事柄の條理(趣旨)が先方に通じない。
それを讀む人も亦讀むのに困難して、不審がつて頭を傾けながら
幾度も「讀みかへしてみても、結局讀めないやうなことがあつ
たりする、さうした場合に、「こゝが讀めませぬ。」と問ひ返すの
は、なんぼなんでも無禮なやうでそれも出来ないから、たゞ當推
量にこんな意味であらう位に合點しては、とんだ間違ひもするも
のであるよ。

「かきかはす」書いてお互にやりとりする。書いて往復する。
 「消息文」消息、即ち、起居動靜を報ずる文。手紙の文。
 「いひやるすぢ」言つてやる條理(趣旨)。
 「ゆきとほらす」向ふの人に通じない。相手に了解されない。
 「はた」茲は、もまた・やはり、の意。副詞に用ひられてゐる。
 因に、接續詞としては、あるひは、の意に用ひる。
 「苦しみて」讀むのに困難して。
 「頭かたぶけつづ」不審に思ふさま。頭をひねつて。
 「あまたたび」幾度も幾度も。
 「かへし問はむも」問ひかへすのも。
 「さすがに」さうはいふものの・いくら何でも・何ほ何でも。茲は、親しい開柄であるから、遠慮はいらぬとはいふものやはり、といふ心持をいふ。
 「なめき」「なめしき」に同じ。無理である・失禮である、といふ意味の形容詞。
 「おしはかりに心得ては」當推量にこんな意味であらうぐらゐるに合點しては。
 「事たがひもする」まちがひなどゝする。

あらう、少しも差支のない事である。といふのも、一應は尤もな道理のやうに思はれるが、それでもやはり、何となく物足りなく(不満足に)思はれ、その歌人たり、學者たる人柄に相應しないやうな氣持がするわい。
 「よろづよりも」何事よりも。茲は、何の技能よりも、の意。
 「手」手蹟、即ち、文字。
 「まほし」「まくほし」の「く」が省略されたもので、願望をあらはす助詞として用ひられる。
 「手あしくては」字を書くことが拙(まづ)くては。
 「心おとりせらる」思ひの外に劣つてゐるやうに思はれること。即ち、そのものが、豫想してゐたよりも悪くて、そのものに對する慕はしさが減ずることをいふ。
 「心おとり」「心まさり」に對する語。豫想よりも劣りさまに見えらる。自發の助動詞。
 「せらるるを」このを、何々されるのに、の意をあらはす。
 「それ何かはくるしからむ」反語法。字の下手なことがどうして差支があらうか、少しも差支がない、の意。
 「ことわり」道理・理窟。
 「さることながら」然るべきことながら。もつともではあるが。

一四 手はよく書かまほし

よろづよりも手はよくかかまほしきわざなり。
 歌よみ學問などする人は、ことに手あしくては心おとりのせらるるを、それ何かはくるしからむといふも、一わたりことわりはさることながら、なほあかずうちあはぬ心地ぞするや。

○東京高等師範學校

○東北帝國大學豫科

○廣島高等女學校專攻科

要旨

文字を上手に書くことの必要を説いてゐる。

釋義

【よろづよりも手はよくかかまほしきわざなり。……なほあかずうちあはぬ心地ぞするや】どんな技能よりも字は一番上手に書きたいものである。歌をよんだり學問などする人は殊更に字を書くことがまづくては、折角の歌や學問などが、實際よりもつまらなく見られるものであるのに、「字のまづい事は何の差支が

「なほあかずうちあはぬ心地ぞするや」やはり物足りない不釣合な感じがするよ。
 あかず 飽きたらぬ・物足りない・不満足な。
 うちあはぬ 相應しない・ふさはしくない・不釣合な、などの意。歌人・學者たる身分に對して不釣合なこと。即ち、歌人とか學者とかいふものは、その身分柄文字を上手に書くべきものであるから、文字が下手ではその人格に相應しないといふのである。
 うちあはぬ、接頭語、あふを強めていふ
 心地ぞするや 氣持(感じ)がするわい。このや、は、感歎の意をあらはす。

一五 花のさだめ

人の花を見てさまざまいふは、皆おのが思ふ心にこそあれ。人は又思ふ心異(こと)なんべければ、ひとやうにさだむべきわざにはあらず。又いまやうの世の人のもてはやすめる花どもも、よに多かるを數へいでぬは、ことさらめきたるやうなれど、歌にも詠(よ)みたらすふるき物にも見えたることなきは

心のなしにや、なつかしからずおぼゆかし。されど、それはたひとやうなるひが心にやあらむ。

「ひとやう」 「いまやう」 「ことさらめく」 「詠みたらす」 「心のなしにや」 「ひが心」

○國學院大學豫科

要旨

種々の花に對する人々の觀察品評はそれ／＼にちがふものであるから、一概に定むべきものでないといふことと、作者宣長翁の、花に對する感想とを記してゐる。此の文によつて、翁の、我が好尚を以て人と争ふことを敢へてしないといふ美德を備へた君子であつたことを認めることが出来る。

釋義

【人の花を見てさまざまいふは、……ひとむきにさだむべきわざにはあらず】 人が花をながめてさまざまに品評するのは、皆自分の思ふ心持にまあ因るものである。人は、また所謂十人十色で、思ふ心(考)がそれ／＼違つてゐるだらうから、一概に斯くと定めることが出来る事ではない。

めく、他の語に附屬して用ひる語で、其のさまに見える、意。

「詠みたらす」 「詠みてあらず」の約。

「ふるき物」 昔の書物。

「心のなしにや」 思ひなしであらうか。氣のせぬであらうか。

「それはた」 それも亦。はたは、漢字、將。もまた・はまた、といふ意に用ひる。

「ひとやうなるひが心にやあらむ」 一概な偏頗の心からであらうか、何とも計り難い、の意。

「ひとやうなるひが心」 一方にはかり偏した考へ違ひ。

「ひが心」 ひがんだ心・ねぢけた心すなほでない心。

一六 近き世の人の歌文

近き世の人の歌も文も大方はよろしと見ゆるにも、なほ僻事おほきぞかし。されど、そのたがへるふしを見知れる人はた世になければ、ただかいなでに、ここかしこえんなることばをつかひ、よしめきて詠みなし書きちらしたるをば、まことによ

「異なるべければ」 「異なるべければ」の音便。違つてゐるだらうから。

「ひとやうに」 一樣に・一概に。

【又いまやうの世の人の……それはたひとやうなるひが心にやあらむ】 又世間の人が愛賞するらしい當世風の花なども、非常に多くあるのに、自分が今別にとり立てて數へあげないのは、いかにも、わざとらしいやうではあるが、和歌にも詠み入れてをらず、昔の書き物にも見えてゐない花は、氣のせい、どうもなつかしくないやうに思はれるわい。さうであるけれども、一方から考へると、そんなに思ふのも、やはり一方にばかり傾いた自分のねぢけた心でさう考へるのであらうか、どうかは、知らぬことである。

「いまやうの世の人のもてはやすめる花どもも」 世間の人の愛賞するらしい當世流行の花なども、の意で、「いまやうの」は、下の「花」に係る。

「よに」 今様で、當世風のこと。今ふう。

「よに」 非常に。

「數へいてぬは」 別にとり立てて數へあげないのは。

「ことさらめきたるやうなれど」 態々さうするやうな様子であるけれども。わざとらしいやうではあるが。

しと見て、人のもてはやし譽めたつれば、心をやりてしたりがほすめる、いとかたはらいたく、をこがましくさへぞ思はるる。

「かいたてに」 「よしめく」 「かたはらいたし」 「をこがまし」

○東京高等師範學校
○大阪醫科大學豫科

要旨

近代人の歌文にはよいものが無いといふことと、其の作者の輕薄な態度を笑止におもふといふことを述べてゐる。

釋義

【近き世の人の、歌も文も、……をこがましくさへぞ思はるる】 近代の人の作つたのは、和歌でも文章でも、大抵はよく出来てゐると思はれるものにも(近代の人の作つた歌文中、よく出来た方に屬するものでも)、やはり誤が多いわい。しかし其の誤つてゐる點を見知つてゐる人も亦、世間にないから、歌文の作者がたゞよい加減に、所々に美しい言葉を使つて勿體ぶつて歌を詠んだり、文を書きちらしたのを、實際によい歌文であると思ひ誤つて、世人が珍重がつて賞めそやすと、作者は満足して、得意顔を

するやうであるが、それなどは實に傍から見ても笑止千萬で、又馬鹿々々しいとまで思はれるのである（馬鹿げてゐるといふ氣持まで起つて来るものである）。

【近き世の人の】 近代の人の作つたものは。

【大方はよろしと見ゆるにも】 概してよく出来てゐると見えるものにも、ほどうまく出来てゐると見える歌文にも、の意。

【よろし】 可なりである。まあよい・わるくない、などの意。

【なほ】 それでもやはり。

【僻事】 誤。間違。

【そのたがへるふし】 其の間違つた箇所。

【見知れる人】 見て知つてゐる人。又は、見合わせる人。

【かいたてに】 「掻き撫で」の音便。ほんの表向を撫でただけの通り一遍の義から、上すべりに、好い加減に・間に合せに、などの意にとる。

【えんなることは】 えんは、漢子、艶。優雅な語句。所謂、美辭麗句。

【よしめきて】 わけありさうに。仔細ありげに。勿體ぶつて。

【もてはやし】 賞讃して。珍重して。

【はやし】 榮有らしめる義。

【心をやる】 満足して。いゝ氣になつて。

なるにやあらむ。されど同じくは、人の聊かも難すべきふしまぬさまにこそはあらまほしけれ。よき程にて心をやるをば、唐土（ちゆうと）の古の人も、よからぬことにいひおきけるをや。

【いかにぞやおぼゆるところ】 「をさをさ」 「あながちなるにやあらむ」 「同じくは」 「心をやる」

○東京高等師範學校

要旨

すべて歌や文章は、缺點なく完備したものを作りたいものであるといふことを述べて、世の作者を戒めてゐる。

釋義

【近き世の人の歌ども文どもを、いといと難きわざになむありける】 近代の人の作つた歌だの文章だのを、あれやこれやと澤山讀んで見ると、一かど面白く出来てゐると目につくものは、それ相應に多くあるやうであるが、さういふ歌文にでもやはりどうであらうか、どうも面白くないと感ずる箇所（どうも變だと思はれる點）がまじつてゐて、これならまあ缺點がなく完備し

「したりがほ」爲（し）たり顔の義で、うまくやつたわいといふ顔付。即ち、得意顔。
「かたはらいたく」傍で見ることが苦痛である。傍で見ると氣の毒である。笑止千萬・苦々しい、などの意に用ひる。
「そこがまし」馬鹿げてゐる。

一七 歌文のきずなくととのふこと

近き世の人の歌ども文どもを見あつむるに、一ふしをかしと目とまるは、ほどほどにあまたあめれど、それはたいかにぞやおぼゆるところはまじりて、大方きずなくととのひたるは、をさをさ見えす。これを思へば、後の世にして古をまねぶことは、いと難きわざになむありける。古のかしこき人人のだに、これはしも露のきずなしとおぼゆるは、多かる中にも少くなむあれば、まして今の人の聊（しやう）かなるきずをさへにいひ立てむは、あながち

てゐると言つてよいのは、殆ど見當らない。かういふことを考へると、後世に於て古のことを研究するといふことは、非常に困難な事であるのである。

【見あつむるに】 數多く見るに、の意。

【一ふしをかしと目とまるは】 なるほど此の點で面白いなあと、

注意をひくものは、の意。

【ほどほどに】 それ相應に。歌人・文人の力に従つて相應にといふ意である。

【あめれど】 「あめれど」の「る」が省略されたもの。あるやうであるが、の意。

【いかにぞやおぼゆるところ】 どうであらうかと思はれる箇所。即ち、どうであらう、これでは變だなあと思はれる箇所。よくない・まづいところ。

【大方】 大抵・殆ど。

【きずなく】 缺點なく。きずは、漢字、瑕。

【ととのひたるは】 完備してゐるのは。

【をさをさ】 殆ど。

【これを思へば】 此のこれは、前の文全體をうける。

【後の世にして】 後世に於て。

【古をまねぶ】 古の事を學ぶ。茲は、古の言葉を研究するをい

ふ。

「ふ」と「甚だ」。

【古のかしこき人のだに、…唐土の古の人も、よからぬことはいひおきけるをや】昔のすぐれた人達の作った歌文でさへも、これこそ少しの缺點もないと思はれるものは、数多いそれ等の作中にも、少数であるから、まして現今の人の作った歌文は、少しばかりの缺點までも見付け出して、仰山らしくかれこれといふ事は、無理なことであるかも知れない。けれども、どうせ作るものなら、世人が自分の作を見て、少しでも非難する點がまじつてゐないやうな完全なものにしたものである。いゝ加減なところで満足する事をば、昔の支那の人も、よくないこととして誠めておいたではないか。それ故なほ十分に氣をつけなくてはならぬ。

【古のかしこき人のだに】昔の大家達の作った歌文ですらも。此の句は、後の、「まして今の人のは」と相對するものであることに注意すべきである。

「これはしも露のきずなし」と此の歌文は、少しの缺點もないと。しもは、語勢を強める助詞。

「多かる中にも」数多い歌文の中にも。
「今の人の」現代人の作った歌文は。

【秘傳】「口訣」「道道」「名のみ」「きたなき心」「さるたぐひ」「はかなき伎藝」「とてもかくてもありぬべけれど」「うるはしくはかばかしき道」「あるべくもあらず」

○神戸高等商業學校

要旨 世の秘傳・口訣を難じ、特に、學問の道に於てかかる事はあるべき筈のものではないと高唱してゐる。

釋義

【近き世に、道道に秘傳口訣など…さるべきことあるべくもあらず】 近い時代に、諸藝諸道に於て、秘傳とか口訣とかいつてゐるやうな事は、その道を重んずるが爲であるといつてゐるのは、それは、大抵は、單に表面上の名義だけで、實際に於ては、他人には、之を知らせず置いて、自分一人の専有の知識として、世間に自慢しようとする自己本位の陋劣な精神であるか、又はそれ以上、私利を貪らうとする陋劣な精神であるものが多し。そのやうに秘密にして容易に人に傳授しないといふやうな類の事も、いろ／＼なつまらない遊藝の道などであるならば、どうあらうともかうあらうともかまはぬけれども、苟くも學問などの立派なしつかりした道については、そんな秘傳だの口訣だのといふ事などはある筈のものではない。

「聊かなるきず」少しばかりの缺點。
「いひ立てむは」仰山らしくいふのは。
「あながちなるにやあらむ」無理なことであらう。
「同じくは」同じ事なら、どうせ文を作るなら。
「難すべきふしませぬさまに」非難すべき個所のまじつてゐないやうな風に。
「よきほどに」よいかげんなところ。

一八 秘傳口訣

近き世に道道に秘傳口訣などいふなるすぢ、おほくは道をおもくすといふは、ただ名のみにて、まことは人にしらすずて、おのれひとりものにして、世にほこらむとするわたくしのきたなき心、又それよりもまさりてきたなき心なるぞおほかる。さるたぐひも、もろもろのはかなき伎藝の道などは、とてもかくてもありぬべけれど、うるはしくはかばかしき道には、さることあるべくもあらず。

「道道」學問技藝の諸道。

「秘傳」秘密にして容易に人に傳へないもの。秘密の傳授。

「口訣」書いて傳へると洩れ易いといふので、直接に口で傳へる秘訣（奥の手）。口傳。

「すぢ」方の事。方面の事。

「おほくは道を…ただ名のみにて」此のおほくは、下の「名のみにて」に係る副詞である。それ故、解釋の時には、「おほくは、ただ名のみにて」と續けてやるとよくわかる。

「道をおもくす」その道を重んずる。

「名のみ」名義ばかり。表面上の口實に過ぎない、の意。

「まことは」事實に於ては。實際は。

「おのれひとりものにして」自分一人の専有のものにして置いて、他人には知らせず置いて自分一人だけ知つてゐることにして、の意。

「わたくしのきたなき心」私のためにする陋劣な心。即ち、自己本位の陋劣な精神で、自分の利益ばかりを思ふ卑劣心、の意。

「きたなき心」不正な心・濁つた心。

「又それよりもまさりてきたなき心」自分だけ知つてゐることを誇るといふより以上の陋劣な心といふ意で、金錢上の利益（傳授料を貪ること）を得ようとする心事をさす。茲では、それよりも

は何を意味するか、之は「おのれ一人のものにして世に誇らうとする卑劣な心よりも」の意である。然らばそれよりもまじりてきたなき心は何をさすか、「傳授料を食らうとする陋劣な心」をさすのであるといふ風に考ふべきである。

(自分一人で知つてゐることを誇るのは、陋劣な心ではあるが、まだしも單なる虚榮心であるに過ぎないけれども、傳授料を食る爲にわざと秘密にして容易に人に知らせないなどは、全く見下け果てた陋劣心である。)

「さのたぐひ」 さういふ類の事。

「もろもろのはかなき伎藝の道」 いろ／＼のつまらない(とるに足らぬ)藝道。此の句は下の、「うるはしくはかばかしき道」と相對してゐるものである。

「とてもかくてもありぬべけれど」 どうでもかうでもかまはぬけれども。秘傳・口訣などがあつてもなくても大した問題ではなからうけれども、の意。

「うるはしくはかばかしき道」 嚴格でしつかりした道。茶道・生花などのつまらない藝道などに對して、學問の道などを指す。はかばかし、しつかりとしてゐる。一廉ある。

「さること」 そのやうな事。秘傳・口訣などといふこと。

「あるべくもあらず」 あるべき筈のものでない。

一九 足ることを知る

足ることを知るといふは、もろこしの人のつねに
いみじきわざにすめることなるを、これまことに
いとよきことにして、しか思ひとらば、ほどほどに
つけて、誰も誰も心はいと安かりぬべきわざにぞ
ありける。しかはあれども、たかきみじかきほど
ほどに望みねがふことの盡きせぬぞ世の人のま
ごころにて、今は足りぬとおぼゆる世はなきもの
なるを、世には足ることしれるさまにいひて、さる
かほする人の多かるは例のからやうのつくりごと
にこそあれ。まことにきよくしか思ひとれる
人は、千萬の中にも有りがたかるべきわざにこそ。
「しか思ひとる」 「ほどほどにつけて」 「たかきみじかき」 「か
らやう」 「つくりごと」

○高等學校

○慈惠會醫科大學豫科

要旨

現在の境遇に満足することの益を説き、併せて、然し世には足ることを知らないで、足ることを知つたやうな顔付をしてゐる者が多いが、之は己を欺き人をも欺くもので、虚偽であると説いてゐる。

釋義

【足ることを知るといふは、……誰も誰も心はいと安かりぬべきわざにぞありける】 自分の現在の境遇に満足して心の和樂を得るといふことは、支那の人が常に甚だよい事としてゐるやうであるが、なるほど之は實際、甚だよい事であつてほんたうに其の通り心に悟るならば、人は其の身分相應に、誰でも皆心が安らかである筈の事であるよ。

【足ることを知る】 身分相應で満足すること知る。身分に安んじてむさぼらぬこと。即ち、現在の境遇に満足して、それ以上を求めないで、常に心の和樂を得ることをいふ。

「さういふみじきわざ」 甚だよい事柄。

「いみじ」 すぐれる・立派な・よい、などの意。

「しか思ひとらば」 さう心に悟つたならば。

「ほどほどにつけて」 身の程々に従つて。身分々に應じて。

身分相應に。身分の相違はあつても、それ／＼に。各自の身分相當に。

「安かりぬべき」 「安かるべき」を強くいつたもので、ぬは完了の助動詞。

「ありける」 此のけるは誅歎であつて、過去をあらはすものではない。

【しかはあれども、たかきみじかき……千萬の中にも有りがたかるべきわざにこそ】 さうではあるが、身分の高い人も低い人も、身分々に應じて望み願ふことの無限にあるのが、世の

人の眞の人情(偽らぬ感情)であつて、最早これで十分であると、思ふ時期は無いものであるのに、世間には如何にも現在の境遇に満足することを知つてゐるかのやうに言つて、さういふ顔付をする人が多いのは、よく世にある支那風の拵へ事であるのである。實際にさつぱりと其のやうに心に悟つてゐる人は、千萬人中にもめつたには無い筈のものである。

「たかきみじかき」 身分の高い人と低い人。貴人と賤人。

「望みねがふこと」 願望・欲望。

「今は足りぬとおぼゆる世」 もうこれで十分であると思ふ時。

世、 茲は、時の意にとる。

「さるかほする」 さういふ顔付をする(さういふ風を装ふ)。足

る事を知つてゐるといふ類つきをするをいふ。

「何の」 いつもの。よく世の中にある。

「からやうの」 支那風の。

「しくりごと」 拵へ事。虚偽。

「きよく」 さつぱりと。残りなく。全く。

「千萬の中にも」 千萬人の中にも。

「有りがたかるべきわざにこそ」 この下に「ありけれ」が略してある。

有りがたかる めつたにない。

二〇 いかでかは唯一言一行によりて定むべき

人のただ一言、ただ一行によりて、その人のすべてのよきあしきを定めいふは、からぶみの常なれども、これいと當らぬことなり。すべて、よき人といへども、稀にはことわりになはぬしわざもまじらざるにあらず、あしき人といへどもよきしわざもまじるものにて、生けるかぎりのわざ、ことごと

によきあしき一かたに定まれる人は、をさをさなきものなるを、いかでかは唯一言一行によりて定むべき。

「からぶみの常」 「生けるかぎり」 「いかでかは…べき」

○専門學校入學資格試験

要旨 人の一言一行によつて、その人物の善惡を定めはならないといふことを説いてゐる。

釋義

「人のただ一言、ただ一行によりて、…これいと當らぬことなり」 或人のたつた一つの言葉を聞き、若しくはたつた一つの行爲を見て、それを證として其の人の全部の言行の善惡を論定する事は、漢文の書物にありがちなことであるけれども、これは甚だ道理にはづれてゐることである。

「その人のすべてのよきあしきを」 その人の言行のすべての善いか悪いかを。

「定めいふ」 論定する。

「からぶみの常」 漢文の書物の常習。漢籍にありがちなこと。

「當らぬこと」 理にはづれてゐること。間違つたこと。

二一 古よりも後の世の勝れること

古よりも後の世の勝れること、萬の物にも多し。或は古にはなくて今はある物も多く、古はわろくて今のはよきたぐひ多し。これをもて思へば、今より後もまたいかにあらむ、今に勝れる物多く出で來べし。今の心にて思へば、古は萬に事足らず、あかぬこと多かりけむ。されど、その世には、さはおぼえずやありけむ。今より後、また物の多くよきが出で來む世には、今をもしか思ふべけれど、今の人事足らずとはおぼえぬがごとし。

「事足らずあかぬこと」 「さはおぼえずやありけむ」

○高等學校

○神戸高等商業學校

○岡山醫學專門學校

○東京高等師範學校

【すべてよき人といへども、…唯一言一行によりて定むべき】 一般に、善い人でも、いつも、善い事は、かりするとは限らず、たまには道理に合はないことをまぜてすることもあり、又悪い人でも、時には善い行爲もまざるものであつて、其の人の一生の行爲が、どれもこれも善いか悪いかの一方に定つてゐる人は、殆どないものであるのに、どうしてたつた一つの言葉や、たつた一つの行爲によつて、其の人の言行全部を、善いか悪いかのどちらかに論定してしまふことが出來ようぞ、出來ないのである。

「生けるかぎりのわざ」 一生の行爲。

「ことごと」 事毎に、の意。することなすことすべて。どの事もどの事もみんな。

「よきあしき一かたに」 善惡何れかの一方に。

「をさをさ」 殆ど・餘り・大抵。下を打消の語で結ぶを常とする。

「なきものなるを」 此のをは、意味が裏返つて接続する時に用ひられる詞。ものであるのに、の意にとればよい。

「いかでかは」 どうして。下の「定むべき」と呼應して反語となる。そして此の場合、結びが「定むべき」と連體形になる。

要旨 事物は古よりも後世の方がまさつてゐるが、その時代でも、其の當時の人々は、別に不足とも不満とも思つてゐなかつたといふことを、實際上から説いてゐる。

釋義

【古よりも後の世の勝れること、……今の人事足らずとはおぼえぬがごとし】 古の世の中よりも後の世の方が、まさつてゐる事は、さまざまの品物にも、又事柄にも多くある。中には古の時代には無くて、今の時代にある品物も澤山あるし、今の時代の善いといふ類のものも澤山ある。これによつて、考へて見るに（推量するに）、今から後も亦どうであらうか、今よりもまさつたものが澤山出て来るであらう。今の人の考を標準として古の時代のことを考へると、古の時代は萬事につけて不足勝で、不足な事が多かつたであらう。さうだけれども、その當時には、今の世の人が思ふやうに不足で不満であるとは考へなかつたであらう。それは丁度、今後世が進歩して、またよい物が澤山出て来る時代になつたなら、その時代の人は、今の我々の時代をも、不足勝で不満な世の中であつたらうと思ふであらうが、現に、今の時代の人々は、目前の状態に満足して、別に不足不満を感じてゐないやうなもので、古の時代の人も、やはりその當時の状態に

満足してゐた事であらう。（古の時代の人が、その當時に不足不満を感じなかつたらうと想像するのも、これと同じ理由に基くのである。）

【今の心にて思へば】 今の人の考を標準として昔の事を考へると。

【萬に】 萬事に。

【事足らず】 不足である。不自由である。

【あかぬこと】 不満足なこと。あきたらぬこと。

【その世】 其の時代。その當時。

【さはおぼえずやありけむ】 さうは思はなかつたであらう。あの時代には、さぞ不足不満を感じてゐたことであらうと、今の時代が、想像する程には、感じてゐなかつたらう、の意。

【今より後】 今後。將來。

【物の多くよきが出て來む世】 多くといふ此の副詞は、下の「出で」に係るので、「よき」に係るのではない。即ち、「よき物の多く出て來む世」といふに同じ。よい物が澤山に出て來る未來の世、の意。

【今をもしか思ふべけれど】 今の時代をも、さう（さぞ不足不満であつたらうと）思ふであらうけれども、の意。

【今の人事足らずとはおぼえぬがごとし】 今の時代の人々が、自分

等の時代を不満足とは思つてゐないのと同様である。今の時代の人々が不満足と思はぬと同様に、昔の人も不満足とは思つてゐなかつたであらう、の意。

三 神のめぐみ

上は位高く、一國一郡をも知りて、多くの人を従へ、世の人に敬はれ、よろづゆたかに楽しくてすぐし、下は飢えず食ひ、寒からず著、やすく居る、これら皆君の恵先祖の恵父母の恵なることはさるものにて、そのかみをたづねれば、件くだの事どもよりはじめ、世のありとあるもろもろのこと、みな神のみたまにあらずといふことなし。

【知る】 【さるものにて】 【件の事ども】

要旨

貴賤貧富が、共に幸福に世を送り、少くとも衣食住に事かゝらず、安らかに暮す事の出来るのは、君や先祖や父母の恩であることは勿論の事であるが、その本源をたづねると、これ皆神の賜物であるといふことを説いてゐる。

釋義

【上は位高く、……神のみたまにあらずといふことなし】

上流の人に就いていへば、位が高くて、一國又は一郡を支配して、多くの家來を有し、世人から尊敬され、萬事裕福に楽しく日を送ることや、又下流の人に就いていへば、飢い目にはぬ程に食べた、寒い目にはぬ程に衣服を著たり、安心して住んで其の衣食住に不自由をしないといふこれ等の事は、すべて君主のお蔭であり、先祖のお蔭であり、父母のお蔭であることは、それは、いふまでもないこととして、なほ、其の本源をたづねたゞすと、前に述べたいろ／＼の事ははじめとして、世の中にありとあらゆるいろ／＼の事は、すべて皆神様の御賜物でないといふものは一つもない。

【上は】 上流に就いていへば。下の「下に」對する語。

【知りて】 領して。治めて、の意。

【多くの人を従へ】 多くの家來を持ち。

【ゆたかに】 裕福に。何不足なく。

【下は】 下流の人に就いていへば。

【飢えず食ひ、寒からず著、やすく居る】 衣食住の三つの事に不自由のないことをいふ。 やすく居るは「安心して住んでゐること」とは、下の主部となつてゐる。

「これら」「位高く」以下「やすく居る」までの諸項をうけまとめてあるもので、下の「君の恵」以下の句の主部をなす。文脈を参照されたい。

「君」 天子・君主。

「さるものにて」 いふまでもないこと。もつともなこと。それは勿論として。

「そのかみ」 その本源。

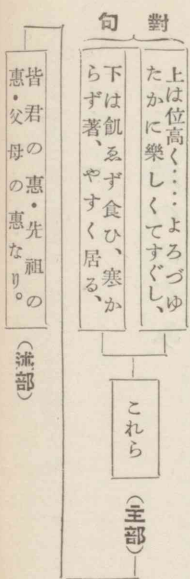
「件の事ども」 前に述べたいろ／＼なこと。即ち、前述の衣食住其の他の事をいふ。

件くだり 前に記した物ごと。また前記の文面。

「ありとある」 ありとあらゆる。

「みたま」 御賜物。轉じて、御恩・お蔭。茲は、神靈の意に解しないがよい。

文脈



鈴屋集鈔

【解題】 鈴屋集九卷は、本居宣長の著書である。即ち、宣長翁の和歌和文を集めたもので、初の五卷は和歌を、六七卷は和文を、八九卷は和歌を載せてある。そして六卷は翁の男春庭、八九卷は翁の養子大平の編纂したものである。書中には、學術處世觀賞等種々の方面に涉り、國文の研究に益する材料が多し。

一 友だちのもとに物しつ(一)

水無月の二十日の程おほかたも此の頃は、暑さところせき程なるを、まいて朝より塵ばかりも曇なくて、照りはたたく日影の、西日になるほど、よにたへがたくて、思ふどちうちとけたる物語をだにして、まぎらはさばやと思ひて、むつまじく相語らふ友だちのもとに物しつ。なき程にやあらむと覺束なく思ひしもしるく、今日は物へなむまかりぬ

る。」といふに、いとくちをしくてかへりなむとする程、此のあるじ歸りきて、まづ見るより、げふの暑さをかへすがへす言ひつづけ、汗おしのごひ扇うちならしつと、ともなひいる。

【水無月】 「ところせき程に」 「まいて」 「照りはたたく」 「物しつ」 「よに」 「思ひしもしるく」 「物へなむまかりぬる」

○外國語學校

【要旨】 「月前の納涼」といふ文の一節で、心置きなく語りあつて暑を凌がうと、友達の許へ行つたといふことを

述べてゐる。

釋義

【水無月の二十日の程、…むつまじく相語らふ友だちのもとに物しつ】 六月の二十日頃といへば、概して此の頃は普通の日でも身の置きどころもない程に暑さがきびしい時分であるのに、まして朝から、塵ほども雲がなつて、強く照りつける日輪が、西に傾く頃になると、殊の外堪へ難いので、こんな時は、氣の合ふ同士の者が打解けた物語なりともして、此の暑さをまぎらしたいものであると思つて、日頃仲よく語りあつてゐる友達の許へやつて行つた。

【水無月】 陰曆六月の異稱。

【おほかたも】 一般に・概して・大體が。

【暑さところせき程なるを】 暑さがひどい爲に、身の置きどころもないくらいであるのに。

【とこそせし】 「所狭し」の義で、身の置きどころがない・身をもてあます、などの意。轉じて、窮屈である、の意となる。

【まゐて】 まして。

【塵ばかりも】 少しも。

【照りはたたく】 ひどい勢で照りつける。盛んに照る。

し言ひつゞけ、汗を押し拭ひ、扇をばた〜と使ひ〜、自分をつれてうちに入つた。

【なき程にやあらむ】 不在かも知れない。

【覺束なく】 心配に。

【しるく】 著しく當つてゐる。果して其の通りで。

【物へなむまかりぬる】 用達に参りました。

【まかる】 「間離る」の義。(一)退き去るの敬語。(二)往來するの敬語。(三)死ぬ・死去する。茲は、第二義で、往く、意。

【扇うちならしつ】 扇でばた〜と煽いで。

二庭の趣(二)

南おもてなるところ、伊豫簾かけわたし、あたりあたり、いとさはらかにしつらひたる、いと涼しげなるに、夕風まちとるべき端つ方につい居たるに、かつが暑さもわすらるる心地して、簀子の端に出でて見出せば、庭の梢どもいづれとなく茂りあひたるものから、木だちうとましからぬ程につくろひなして、このもかのもにはかなき柴垣なつかし

は、たたく、本來は、雷の激しく鳴るさまにいふ語。

【日影】 日の姿、即ち太陽そのものを指す。茲では、光ではない。

【よに】 殊の外。非常に。

【思ふどち】 思ひあつた連中。氣の合つた同士。

【まぎらはさばや】 まぎらしたいものである。ばやは、願望の感動詞。元來は二語なので、ばは助詞、やは感動詞で、「まぎらはさばよからむ事や」のやうに、中間に結果をあらはす語の省略された形であるが、普通一語と見做して、願望の意を表はす感動詞としてゐる。

【相語らふ】 「相語る」の延言。話しあつてゐる。つきあつてゐる。

【物しつ】 行つた。訪れた。

物す、何によらず動作をする意である。それ故、前後の關係で、その動作の何なるかを考察せねばならない。

つ、完了の助動詞。口語の「た」に當る。

【なき程にやあらむと覺束なく思ひしるく、…汗おしのごひ扇うちならしつ、ともなひいる】 或は不在中かも知れぬと心配に思つたが、果してその通りで、「今日は用達に出かけました。」といふので、非常に残念で歸らうとする中に、此の主人が歸つて来て、先づ自分を見るなり、今日の暑さを繰返し繰返しく結びわたしなど、しめやかに見どころあるさまなり。

【いとさはらかにしつらふ】 【かつかつ】 【簀子】 【茂りあひかるものから】 【うとまし】 【柴垣】

【要旨】 「月前の納涼」の一節で、前段の続きである。

友の家の庭の趣のゆかしさを述べてゐる。

釋義

【南おもてなるところ、伊豫簾かけわたし、…しめやかに見どころあるさまなり】 南に面した所(南向きの座敷)に、伊豫簾を懸け連ねて、そここゝ(其の邊一帯)が、甚ださつぱりと設備してある(飾りつけてある)のは、大層涼しさうである上に、夕風を待ちとるべき縁端の方に、ちよつと踞つてゐたところが、どうやら暑さも忘れられるやうな心持がして、簀子の縁側の端に出で見ると、庭先の梢どもは、どの木ともなく(どれもこれも)茂り合つてはゐるが、然し木立の様子がいやらしくない位につくらうて(手入して)、こゝかしこに(あちらこちらに)一寸した柴垣が慕はしい様に結びわたしであるなど(拵へてあるなど)、如何にもしみりと落ちついて見所のある様子である。

「南おもて」 南向き
 「伊豫籬」 伊豫の山中から出る極く細い篠竹を編んで造つた籬。
 「あたりあたり」 そここゝが。
 あたり 邊の意。

「さはらかに」 「さはやかに」といふに同じ。氣持よく。さつぱりと。

「しつらひたる」 構へ設けてある。設備してある。飾りつけてある。
 「まちとる」 待つてゐて風を入れる。

「端し方」 縁端の方。
 「つゐるる」 ちよつとある。

「かつがつ」 からうじて。僅に。やつと。どうやら。

「簷子」 茲は、簷子縁のこと。廂の外にあつて、常に雨露にさらされる部分に設けた一種の縁で、竹を縦に並べ作り、又は、狭い板を間をすかして張り、雨露のもれ落ちる便としたもの。

「いづれとなく」 どのものとなく。どの木もどの木も。

「ものから」 ながら。

「うとまし」 疎ましい。いやらしい。

「つくろひなす」 手入をする。

「このもかのも」 此の面彼の面。こなたかなた。

「はかなき」 たよりない。おぼつかない。しつかりしない。「一寸

いた。

「柴垣」 柴で編んで結び作つた垣。
 柴 山野に自生する雜木。そだ。
 「しめやかに」 靜かに落ちついて。しんみりと。

三 心へだてぬどちの

まとぬ(三)

夕つけゆくほど簷のき近き吳竹くたけの下風、心もとなきほどにうちそよめきたるも、あかぬ心地のみぞせらる。ややありて同じ心なる人、また二人三人なむ來合ひたる、さうさうしかりつるに、いとうれしくて、はかなき物語も、今ひときは心ゆく心地す。心へだてぬどちのまとぬは、なべてうち解けたるなむよきを、ましてかく暑きには、いかでかしまりもおきあへ侍らむ。むらいの罪はゆるされなむ。」とて、ほとほと帯なども解きちらしぬべし。
 「心もとなきほどに」 「そよめく」 「あかぬ心地」 「さうさうし」

「はかなき物語」 「ひときは心ゆく」 「まとぬ」 「ほとほと」

○水産講習所

○早稻田高等学校

○神戸高等商業學校

要旨

やはり、「月前の納涼」の一節で、前段の續きである。當夜は非常に暑くて行儀などにはかまつてをられなかつたといふことを述べてゐる。

釋義

【夕つけゆくほど、簷近き吳竹の下風、……ほとほと帯なども解きちらしぬべし】 だん／＼と夕方になつて行く時分に、軒先近くにある吳竹の下を吹く風が、あるかないかわからない位の程度に、そよ／＼と吹いてゐるのも、何だか物足りない感じのものがして、おのづと、もつと吹けばよいといふ氣がする。暫くして、氣の合つてゐる友達が、また二三人來合せた。今までは、淋しかつたのが、賑やかになつたので、非常に嬉しくて、とりとめもない雜談も、一段と面白心持がする。「氣兼ねない(遠慮のない)仲間の團欒は、すべて打寛いだのがよいのに、ましてかう暑い時には、どうして行儀なども正しくして居切れませうか、失

禮の罪は赦して戴きたいものであります。」といつて、ほとんど帯なども解きすてしまひさうである。

「夕つけゆく」 段々夕方になつてゆく。

「吳竹」 竹の一種。もと吳から渡來したのであるといふ。葉は細かくて、節が多い。

「心もとなきほどに」 あるかないか分らない位に。

「心もとなし」 (一) 待遠しい・じれつたい。(二) おぼつかない・たよりにない。茲は、第二義の轉義。

「そよめきたるも」 そよつてゐるものも。

「そよめく」 そよ／＼と音を立てる。

「あかぬ心地」 不満足な心。物足りない氣持。

「せらるる」 此のらるは、自然にさういふことになるといふ意味をあらはす助動詞で、勢相とか自然相とかいふものである。上にぞの係があるから、連體形で結んだのである。

「さうさうしかりつるに」 物さびしかつたのに。

「さうさうし」 「さびし」の轉であるといふ。茲は、單なるさびしさでなく、物足らずさびしい氣持をいふ。

「同じ心なる人」 心の合つてゐる友。

「はかなき」 取りとめもない。持もない。つまらない。一寸した「ひときは」 一層。一入。

「心ゆく」面白。嬉しい。愉快な。漢語の會心に相當する。
 「まとも」圓居の義。衆人が輪のやうに居並ぶこと。團樂・集り。
 「なべて」押し並べての義。すべて・皆・一體に。
 「うちとけたるなむ」打寛いだのが。
 なむ 特に出出して意を強める爲の助詞。「ぞ」よりは稍弱い。
 此の係の結は「ぞ」の場合と同じく連體形である。
 「いかでか」どうして。

「かしこざりもおきあへ侍らむ」かしこまりもおくは、相手との間に畏敬の念を置く、意。即ち、敬意を拂ふ。茲は、行儀正しくして畏つてゐるをいふ。あへは「敢ふ」の連用形。敢へてする。推して爲す・しおほせる・爲し切る・堪へ通す、などの意。
 「むらい」無禮の字音。

「ゆるされなむ」赦されたい。ゆるして貰ひたい。おゆるしを願ひたい。

なむ この語には三種あつて、助詞にも、感動詞にも、助動詞にも用ひる。茲は、感動詞で、希望又は、註文をあらはす。

(一)助詞 (體言又は他の助詞につゞく)……「ぞ」に似て、それよりは軽い。(係詞)

(二)感動詞 (用言の將然形につゞく)……何々してもらひたい。(希望・註文)

「ほとほと」殆ど。

四冬枯の野邊のしぐれ

夕月の影に、玉笹の霜のところせくおきわたしたるが、きらきらと見えたるなど、なかなかをかしき冬枯の野邊のけしき、闇ならましかばくちをしからましと思ふにもいりがた近くかすかなる光のいとあかぬ心地するに、空さへ俄かに曇りて、山の端ならで月も隠れ、いみじく暗くなりて、風あらあらしく吹ききぬるはげにさだめなき此の頃の空

(三)助動詞 (用言の連用形につゞく)……

何々するだらう。(未來)
 何々しよう。
 (意向)
 何々する方がよい。(批判)

(三)の場合には、定子の助動詞「と」の將然形「む」に、未來の助動詞「む」の加つて出來たものである。

のけしきかなと見るに、はしたなくうちしぐれ來ぬれば、足を空に走りかへるほど、しとどにぬれぬ。何とは分かねど、いと大きな木の立てるを見つけて、しばしのかさやどりとしたのむ蔭さへ、いたく散りすぎにたれば、雨たまるべくもあらぬぞ、いとわりなきわざなりける。しばしの程に名残もなく霽れぬれど、月ははやく入りにけり。

「はしたなし」「足を空に」「しとどに」「かさやどり」「散りすぎにたれば」「わりなきわざ」

○山口高等商業學校

要旨 「初冬時雨」といふ文の一節で、初冬の或日他所へ行つた歸途に、時雨に逢つて困つたといふことを記してゐる。

釋義

【夕月の影に、玉笹の霜の……足を空に走りかへるほどしとどにぬれぬ】 夕月の光に照されて、玉笹の上に一杯置いてゐる

霜が、きら／＼と光つて美しく見えたのなど、却つて面白い冬枯の野邊の景色であつたが、これが若しも闇の夜であつたならば、残念な事であらうと思ふにつけても、入方近くてかすかに照してゐる月の光が、甚だ物足らぬ氣持がするのに、その上空までが急に曇つて、山の端にはなく、雲の中にも月もかくれ、甚だ暗くなつて來て、風が荒く(はげしく)吹いて來たのは、ほんたらに昔からいふやうに變り易い此の頃の空模様であるわいと見てゐる中に、意地悪くも時雨が降り出して來たので、足をも地に著けないくらゐに大急ぎで(宙を飛んで)走つて歸る間にびつしよりと濡れてしまつた。

「玉笹」美しいさま。玉は、美稱。

「ところせく」物が一杯満ちてあたりも狭いほど。場所もせまい位。

「なかなか」却つて。

「冬枯」冬に草木の枯れること。

「かすかなる光」幽かな月の光。

「山の端ならで」山の端に月が隠れたのではなくて、の意。

「いみじく」甚だしく。本來は、忌み愼むべきだ、の意であるが、普通は、甚だしい・すぐれてゐる、の意に用ひてゐる。

「來ぬるは」來たのは。

ぬる。完了の助動詞「ぬ」の連體形。口語の「何々をしてしまふ。何々した」に當る。但し語調を強める爲に、完了の意味を持たせずに使用される場合もある。

「げに」 いかにも。まことに。なるほど。

「けしき」 様子。模様。

「かな」 詠歎の意をあらはす感動詞。口語の「わい・なあ」などに當る。

「はしたなく」 意地悪く。本来は、(一)どつちつかずである・中途半端である、の意。轉じては、(二)開が悪い・きまりがわるい。(三)けしからぬ・不都合である。(四)意地が悪い・仕打がむごい。

「しぐる」 時雨が降る。時雨は、秋冬の頃、降つたり止んだりする小雨。

「足を空に」 足を地面につけずに急ぎ走つて。宙を飛んで。

「しとどに」 びつしよりと。甚だしく満れるさま。

【何とは分かぬど、…月にはやく入りにけり】 何の木だか分らないが、非常に大きな木が立つてゐるのを見つけて、しばらくの雨宿りと頼んで立寄つて見ると、その木蔭までが、ひどく葉が散つてしまつてゐるために、雨が防げさうもないのは、甚だなまげない事であつた。暫くの間に、名残もなくすつかり舞れて

しまつたが、月はもうとつくにはひつてしまつてゐた。

「何とは」 何の木といふことは。

「分かぬど」 分らぬが。

「かさやどり」 軒下・木蔭などに立寄つて、雨を避けること。雨宿り。

「散りすぎにたれば」 木の葉が落ちすぎてゐる爲に。此のには、完了の助動詞「ぬ」の連用形。然し「散りすぎたれば」を強くいつたまでで、別に意味なくつかはれてゐる。

「雨たまる」 雨がたまつて下へ漏らない・雨を通さない。雨を防ぐ、の意にとる。

「あらぬぞ」 あらぬは。

「いと」 甚だ。大層。誠に。

「わりなきわざ」 なまげないこと。

「わりなし」 「理なし」の義。(一)分別がない・無茶苦茶である。

(二)仕方がない・やむを得ない。(三)なまげない・困つたものである。又別に、親しくて隔てがない・仲がよい、といふ意もある。

「名残もなく」 残るところなく。すつかりと。

五 昨日は今日の昔(一)

昨日は今日の昔にて、はかなくのみ過ぎに過ぎゆく世の中をつくづくと思へば、あはれわが世もいくほどぞや。手ををりて數ふれば、はやみそぢにもあまりにけり。命長くてななそぢやそぢ生けらむにてだに、はやくなかは過ぎぬると思へば、まだよごもれるやうなる身も行くさき程なき心地のして、心ぼそくぞおぼゆる。

「わが世」 「生けらむにてだに」 「まだよごもれるやうなる身」

○神宮皇學館

○東京商科大学豫科

要旨

(一)(二)(三)は、「述懐」といふ題で書かれた文章である。本節は、宣長が、自分はどう一生の半分を無爲に過してしまつて、生ひ先の短くなつたのが悲しく思はれると述べてゐる。

釋義

【昨日は今日の昔にて、…心ぼそくぞおぼゆる】 昨日と

いつても今日から見ると、もう昔であつて、つまらなくどん／＼と過ぎて行つてしまふ世の中を、よく／＼と考へて見ると、「あゝ私の生きながらへる前途も、もうどれだけあらうか。」と思はれる。それで指を折つて數へて見ると、もう自分も三十歳を越してゐるわい。「長生きをして七十とか八十とかまで生きてゐるとしてさへ、もうその半分は過ぎてしまつたのだなあ。」と思ふと、まだ生ひ先が長いやうな此の身も、前途が何程もないやうな氣がして、心細く思はれる。

「昨日は今日の昔にて」 極めて近い昨日も、今日から考へて見ると、すでに昔であつて、の意。

「はかなくのみ過ぎに過ぎ行く」 何等爲し得た事もなく、つまらなく過ぎゆく、といふ意。

「あはれ」 感歎の意をあらはす語。「あゝ」に同じ。

「わが世」 自分の壽命。自分の生ひ先。

「いくほどぞや」 どれほどであらうか。何程もない、といふ意がふくまれてゐる。

「手を折る」「指を折る」と同意。

「みそぢ」三十歳。
 「ななそぢやそぢ」七十歳・八十歳。
 「生けらむにてだに」生きてゐるとしてさへも。
 「らむ」この「らむ」は、推量の助動詞ではなく、完了の助動詞「リ」の將然形「ら」に、未來の助動詞「む」の添つたものである。
 「よもごる」齡籠る。生ひ先が長い。

六 朽ちせぬ名(二)

かくのみはかなく、心なき木草鳥けだもののおなじつらになにすとしもなくあかしくらしつつ、いけるかぎりの世をつくして、徒らに苔の下に朽ちはてむは、いと口惜しくいふかひなかるべきことと思ふにも、よろづにいたり少くつたなき身にしあれば、何事をしいでてかは、世の人にもかすまへられ、なからむ後の世に朽ちせぬ名をだにとどめましと、いとど人に似ぬおろかささへとりそへてぞ、かなしく心うかりける。

「おなじつら」「いけるかぎりの世」「いたり少くつたなき身」「かすまへらる」

○高等學校
 ○専門學校入學資格試験

要旨 宣長が、自己の不束さを感じて悲しんでゐる。

釋義

【かくのみはかなく、……いとど人に似ぬおろかささへとりそへてぞかなしく心うかりける】 かやうにつまらなく、何の考もない草木や鳥獸の同じ仲間になつて、何をするとはいふこともなく夜を明かし日を暮し續けて、壽命だけを生き盡して（一生涯を終へて）、つまらなく墓場の下で朽ち果ててしまふ事は、誠に残念で、意氣地のない事であると思ふにつけても、萬事に不行届で、不調法な者であるから、「一體、自分は、どういふことを爲出かして、世間の人からも、すぐれた人として數へられ、死後の世に朽ちない名だけでも止めようか。自分にはそんな事が出来さうもない。」と、誠に人並でない我が愚さまでが、考へ合はされて、いよゝ悲しく心苦しい事であるわい。

「心なき」 茲は、思慮分別がない、意。

「同じつらに」 同列に・仲間。同じ程度に生活して、の意。
 「生けるかぎりの世」 壽命のあるだけの間。一生涯。

「苔の下」 墓場の下。

「朽ちはてむは」 朽ちてしまふことは。

「いふかひなかるべきこと」 意氣地がないといはねばならぬこと。

「いたり少く」 不行届で。造詣が少くて。

「何事をしいでてかは……名をだにとどめまし」 何事をして……名を残さうかなあ。このかは、疑問の助詞、はは、感歎の意をあらはす助詞。茲は、反語の「かは」と取つてはいけない。

止めましは、「止めむ」を少し強くいつた形。ましは、元來、事實に反して想像をなす時に用ひる助動詞であるが、茲は、「む」と同意に用ひられてゐる。

「かすまへられ」 數の中に入れられる。

「かすまへ」 「かぞへ」に同じ。

「いとど」「いといと」の約。何か前に強い事柄があつて、それが一層強くなる場合にいふ。

「人に似ぬおろかさ」 人並にも立てない自分の愚さ。

「さへ」「添へ」の義。あるが上に更に或物が添ひ加はる意を表はす。「その上にまた・その上……までも」に當る。

「とりそへて」 意氣地がないと思ふのに、不朽の名を留めたいが出来ない事であるといふ思ひを、とりそへて、の意。

七 心にいられてつとめむ(三)

さりとはた身をえうなき物にはふらかしはつべきにしもあらず。かくのみつたなく愚なる心ながら、何わざにまれ、おこたりなくわざと心にいられてつとめたらむには、つひには一つゆゑづけて、なのためにしいづるふしもなどはなからむと、あいなだのみにかかりてなむ。

「えうなき物」「はふらかしはつ」「ゆゑづけて」「なのために」「あいなだのみにかかりてなむ」

要旨 宣長が、自分は不束ながらも、自暴自棄することなく、何か一事に長じようと努力してゐるといふことを述べてゐる。

釋義

述べてゐる。

【さりとはた、身をえうなき物に、……あいなだのみにかかりてなむ】 それかといつて（わが身が不束であるとはいいつても）、また此の身を無要なものとして、打捨ててしまふべきものでもない。こんなに不調法で何事も出来ない愚鈍な心ではあるが、何事でもよい、一つの事に怠ることなく、殊更に身を入れて勉めたならば、しまひには、何か一つ立派に爲し遂げて、竝大抵には成功する事柄も、どうしてないことがあらうかと、あてにならぬことを頼みにして、このやうに勉めてゐるわけである。

「はた」それとも、或は、の意味に用ひられるが、此處は、また、やはり、などの意に用ひてある。

「えうなきもの」無要なもの。必要のないつまらないもの。えう、要。一に、「益」の音讀の轉じたものであるともいふ。

「はふらかす」うちすてる。ほつたらかす。

「何わざにまれ」まれは、「もあれ」の約。

「わざと」特別に、殊更に。故意に、といふ意味にも用ひられる。

「ゆゑづけて」立派に一かどあるやうに爲す遂げて。

「ゆゑづく」一かどあるやうにする。故あるものとする。

「なのめに」「ななめに」に同じ。一通りに。竝大抵に。

「しいづるふし」しでかす事。

「なかはなからむ」かは、反語。どうしてなからうか、きつ

とあるに相違ない、の意。

「あいなだのみ」「あひなきたのみ」に同じ。あてにならない頼み。あいなし、「あひなし」の音便。へだてがない・わかちがない、の意であるが、此處は、頼み甲斐がない・あてにならない、などの意。

「かかりてなむ」此の下に「かくはつとむる」といふやうな結詞を補つて解くがよい。

八めづらかなる朝ぼらけ

あけくれ心へだてぬ友どちは、かからぬをりだに、何事につけてもまづ思ひ給へ出でらるるわざなるを、ましてかくめづらかなる朝ぼらけを、心なき身のひとりのみ見侍らむことのいとあたらしく思ひ給ふれば、よし跡つけても、人のとひ給はましかば、こよなくをかしさもまさりぬべきものと思ひ給ふるに、いかにとだにおとづれもし給はぬは、いと思はずにうらめしくなむ。

「かからぬをり」「思ひ給へ出てらる」「心なき身」「あたらし」

「跡つけても」「思はずに」

○彦根高等商業學校

要旨

「雪の朝友達の許にいひやる書になぞらへてかける書」といふ文の一節で、雪の降つた朝の珍らしい景色に對して、何ともいつて寄こさない友を詰つてゐる。

釋義

【あけくれ心へだてぬ友どちは、……いと思はずにうらめしくなむ】 始終隔心なく親しみ交つてゐる友達同士は、かういふ場合でない折でさへ（かうした雪景色の面白い時でなくても）、何事につけても、眞先に思ひ出されるものでありますのに、ましてこのやうに珍しい雪の日の朝景色をば、風雅心のない私のやうな者が自分だけで見ます事が、誠に惜しく思ひます。ですから、たとへ雪に足跡をつけて美景を損はれるやうなことがあつても構はぬから、どなたか、訪ねて来て下さるとしたら、此の上もなく面白くもまさるに違ひなからうと思つてゐますのに、「今朝の雪の御感想はどうですか。」位の事さへもお尋ね下さらないには、誠に案外で、お恨めしい事で御座います。

「友どち」友同士。どちは、或語に添へて、同類の義を示す語。

「かからぬをりだに」かうでない時にでも。今朝のやうに雪が降つて珍しい景色でない時にでも。

「朝ぼらけ」夜の明ける時。あげがた。

「心なき身」趣味を解しない身。

「心なし」本來は「思慮がない」といふ意であるが、茲は、「物の情趣を解しない・風流心がない」などの意。

「あたらし」惜しい・勿體ない。

「跡つけても」雪に足跡をつけても。

「思はずに」案外で。

「うらめしくなむ」下に、「ある」が省かれてゐる。補つて解くべきである。

朮が花鈔

解題

朮が花七卷は、橋千蔭の歌文集である。第六卷までが和歌、第七卷が長歌と文詞とである。其の文詞、措辭は巧緻、情趣は豊麗である。

著者橋千蔭は、江戸の人で、通稱は加藤又左衛門、芳宜園、朮園、江翁と號した。奉行大岡越前守に仕へた與力である。縣居門下の俊才として、村田春海と併稱され、又書道にも長じた。五十五歳の時に職を辭して、専ら歌學を研究し、その歌文は一時に推重されてゐた。享保二十年に生れ、文化五年に七十四歳で歿した。著書には、萬葉集略解うけらが、花行かひぶり、香取日記等がある。(二三九五—二四六八)

一 隅田川の雨(一)

葉月二十日あまり、秋のけはひのなつかしくて、例の隅田川のほとり、石濱の庵に行きてやどりぬ。有明の月のにほひも、霧たちわたる曉のさまも、所がら世に似ぬものから、こは雨のそぼふる日な

む殊にあはれは深かりける。もとより萱葺ける庵なれば、音だになくて、軒の雫の三つ四つ落ちそむるより、籬の秋の下葉の色づきたるが、ほろほろと散るもあはれなり。

〔葉月〕〔秋のけはひ〕〔にほひ〕〔所がら〕〔ものから〕〔そぼふる〕〔あはれ〕

- 専門學校入學資格試験
- 和歌山高等商業學校
- 大分高等商業學校
- 東京女子大學豫科

要旨 「隅田川のほとりなる石濱の庵にて雨の中に作れる文」の冒頭で、先づ石濱の庵の朝景色のよいことを述べ、次に秋の雨の趣を記してゐる。

釋義

【葉月二十日あまり、秋のけはひのなつかしくて、……ほろほろと散るもあはれなり】 八月二十日過ぎのこと、秋の風情が見たくて、何時も行きつけた、隅田川のそばにある石濱の庵に行つて宿つた。夜明の空に残る月の光の美しさも、霧が一面に立ち罩めてゐる明け方の様子も、場所柄がよいので、他にくらべものないほど面白いが、此處は雨のしよぼ〜と降る日が、とりわけ情趣が深いのである。もと〜萱葺の庵の事であるから、雨の音さへ聞えないが、其の雨の雫が軒端から三つ四つ落ち始めるのが先づ面白く、垣根の萩の下葉の色づいたのが、ほろ〜と散るのも趣があつてよいものである。

「そぼふる」 細雨の静かに降る有様。しよぼ〜と降る。
「あはれ」 茲は、情趣の意。
「深かりける」 このけるは、詠歎。
「落ちそむるより」 落ち初めるのからはじめて。即ち、先づ落ち初めるのが面白くあり、の意。
「籬」 本來は、竹木などで粗く作つた垣をいふのであるが、茲では、たゞ垣の意に解してよい。
「あはれなり」 趣がある。

二 秩父の山の眞清水 (二)

水のおもては動くともなくて、鏡の如くなるに、雲の濃き薄きうつろひて、かつ浮びかつ消ゆるみなわにこそ、雨のけはひはしるかりけれ。みを一筋は、さしひく潮にもまじらで、とはにはなだの色に流れいにて、沖に出づめり。これや水上の秩父の山の眞清水の落ち來るならむ。

「うつろふ」 「みなわ」 「雨のけはひ」 「しるし」 「みき」 「はなだの色」

【葉月】 陰曆八月の異稱。陰曆の八月といへば、秋の半ばである。
「秋のけはひ」 秋の趣。秋の景色。
「けはひ」 おもてに現はれた様子をいふ。氣配・様子。
「なつかし」 したはしい・心がひきつけられる、などの意であるが、茲は、見たく思ふ、と解するが自然である。
「例の」 何時も行きつけた、の意で、「隅田川」に懸るのではなくて、「石濱の庵」にかゝるのである。
「有明の月」 夜が明けて後も、空に残つてゐる月。十六夜以後の月は、皆有明である。

「にほひ」 (一)香。(二)つや・いろ。(三)おもむき・様子。(四)いきほひ・威光。(五)鎧の絨の、上が濃くて下に至るに従つて次第に薄くなつてゐるもの(例「櫛笄の鎧」)。茲は、第三義と見る。
「霧たちわたる」 霧が一面にかゝつてゐる、意。
「わたるは、或動作が一方から他に及ぶ意を示す語で、時間的にも空間的にも用ひる。
「所がら」 場所柄だけに。場所が場所であるから。場所がよいので。
「似ぬものから」 似ないけれども。
「ものから」 ものながら・ではあるが、の意。

○東京女子大學豫科

要旨 前節の續きで、降るともなき秋雨を、水面に生ずる泡によつて知るといふことと、隅田川の水の流に就て述べてゐる。

釋義

【水のおもては動くともなくて、……雨のけはひはしるかりけれ】 水の表面は動くやうにも見えないで、鏡のやうに平らかである所へ、雲の濃いのが薄いのが映つてゐて、その水面に浮いたかと思ふと消え、消えたかと思ふと浮ぶ水の泡によつて、雨の降つてゐる様子(雨の降り加減)がよくわかる。
「鏡の如くなるに」 單に、鏡のやうであるのに、といつたのでは意味がはつきりしない。「鏡のやうに平らかである所へ・鏡のやうに平らかで、そこへ」とすべきである。
「雲の濃き薄き」 「雲の濃きもの薄きもの」の意で、「雲の濃い」や「薄いのや」と解する。
「うつろひ」 「うつろ」に複語尾「ふ」がついたものの連用形である。映る動作の盛んに行はれる意をあらはす。
「かつ浮びかつ消ゆる」 浮んだり消えたりする。浮んでは消え、

消えてはまた浮ぶこと。「かつ……かつ……」の句形は、「何々し、たり何々したりする」と解すればよい。

「みなわ」水の泡。水沫ともかく。みづのあわの「づ」が省かれて「みのあわ」となり、「のあ」が約つて、「みなわ」となつたのである。

「雨のけはひ」雨の様子。雨の降り加減。

「しるかりけれ」よくわかるのである。「しるくありけれ」の約つたもの。

【みまの一筋は、さしひく汐にも……秩父の山の眞清水の落ち来るならむ】 水脈の一筋は、差し引きする潮にもまじらないで、いつも變らず薄い藍色をして流れて行つて、沖へ出るやうである。この水こそ、上流の秩父の山の清水が落ちて流れて來るのであらうよ。

「みを」河海中で、船を通ずる水路となる深み。水脈。みよ。

「さしひく潮」海水の定時の漲落をいふ。日月、殊に月の引力の作用が地球に及ぼすにより、之に面する方及び背する方の海水は昂漲する、之を高潮といふ。又それに直角な側面の海水は低落する、之を低潮といふ。昂漲するものを、さしほ・あげしほ・みちしほと稱し、低落するものを、ひきしほ・さげしほ・おちしほと稱する。

潮うしほ (一)海水の定時の漲落の稱。(二)海水の稱。潮と汐とを區別していふ時は、潮は、朝しほ、汐は、夕しほ。「とはに」いつも。「はなだの色」縹色。薄い藍色。はないろ。「秩父の山」武藏國(埼玉縣下)の西偏にある秩父郡諸山の總稱で、武甲・三峰・雨神・高見倉・二子・毘沙門岳等十數峰あり、高さ各一五〇〇尺以上。此の山奥は甲信上の三國に連り、人跡未踏の深所がある。

三分けゆく秋の山路

あしたの霧の絶間より、木木の紅葉このもかもの匂ひ、分けゆく山路はややうら枯れにたれど、八千草の花猶色をつくせり。蟲の聲もそこはかとなき聞えて、げに春見ましよといひけむもうべなりけり。やうやう登りゆくほど、み山おろしに霧はれ渡りて、國のまほらもつばらに見わたさる。足穂あしほの山は、そがひにしみさび立ち、みなみなの川は源

二ふたをの峽がより湧出づる眞清水にて、末遠白く流れいぬめり。すそわの田居たゐはるかに色づきて雁雲井いづみよりおち、端山はなのしもと陰しげくして、鹿の聲かすかなり。

「このもかもの」 「うら枯る」 「色をつくす」 「そこはかとなき聞ゆ」 「春見ましよ」 「まほら」 「つばらに」 「そがひ」 「しみさび立つ」 「二をの峽」 「すそわ」 「田居」 「端山」 「しもと」

要旨 「秋の山ぶみ」と題する文で、即ち、筑波登山記である。

釋義

【あしたの霧の絶間より……端山のしもと陰しげくして、鹿の聲かすかなり】 朝霧のきれ目から木々の紅葉があらこちらに美しい色を見せてをり、踏みわけて行く山路はやゝ葉末は枯れたけれども、色々の秋草の花はまだ美しい色を盡して咲いてゐる。蟲の聲も何處となくきこえて、ほんたうに、「春見よう(春見る)よりも今が楽しい。」といつたといふのも尤もな事である。段々登つて行くうちに、深山 嵐あらしに吹きさらされて霧もすつかりはれてしまつて、國の内もはつきりと見渡される。足穂の山は背後

にこんもりと神々しく立ち、みなみなの川は其の源が、筑波の男體・女體の二つの嶺の間から湧き出る眞清水で、末が遠くまで白く光つて流れて行くのが見える。山の麓の邊の田圃は遙かに遠くまで色づいて、雁は高い空から下りて來、端の山の梢はよく繁り合つてゐて、その下から、鹿の聲が聞えて來る。

「このもかもの」 こなたの面かなたの面。あちらこちら。

「うら枯れ」 草木の梢や、下葉などが枯れること。

「色をつくせり」 様々の色をつくして咲いてゐる。

「春見ましよ」 春見るよりは今の方がまさつてゐる。萬葉集卷第九、檢稅使大伴卿登筑波山時歌に「衣手の、常陸の國の、二並みの筑波の山を見まくほり、君來ませりと、熱けきに、汗かきなげき、木の根とり、嘯き登り、嶺の上を、君に見すれば、男の神も、許し給ひ、女の神も、ちはひ給ひて、時となく、雲雨降り、筑波嶺を、さやに照して、いぶかし、國の眞秀まほらを、つばらつばらかに、示し給へば、うれしみと、紐の緒解きて、家のごと、とけてぞ遊ぶ、打なびく、春見ましよは、夏草の茂くはあれど、今日の樂しさ。」とあるに據つて書いたものである。

「まほら」 見渡す限りの國の中。丘山にかこまれこもつた土地。

「つばらに」 つまびらかに。明瞭に。はつきりと。

「足穂の山」 常陸國眞壁郡にある。葦穂山ともかき、今足尾山と

いふ。白井・櫻井の東嶺で、標高六百二十八米の者をさすが、古人のいつたのは、今の加波山をも汎く呼んで、佛頂山に至るまでの一脈、五六里に互つた横嶺の總名とした。萬葉集常陸國歌に「筑波ねにそがひに見ゆる安之保山あしかるとがもさねみえなくに。」とある。

「そがひ」 背後。後の方。

「しみさび立ち」 木立がしげく神々しく立つてゐること。

「みなのかみ」 水無川。常陸國筑波山の男體女體を南へ下る溪流。

「二をの峽」 二つの嶺の谷間。

「流れいぬめり」 このめりは、推量の動詞ではあるが、文意を和げるに用ひたものと考へてよからう。

「すそわの田屋」 山の麓附近の田圃。

「端山」 外の方の山。麓の方の山

「しもと」 木の細い小枝。

四 山里にうつろひ住む

耳になり弭の音を聞かず、目に旗手のなびきをも見ぬおぼん時代にあひては何事につけても、うし

とわびしと怨みかこつべき事やはある。されば世を避くとしもあらねど、あきじこる市のちまたに近きにぎははしさやいとひて、この山ざとにはうつろひ住めるになむありける。

「なり弭の音」「旗手」「事やはある」「あきじこる」「うつろひ住めり」

○小樽高等商業學校

要旨 「山里の月」といふ文の冒頭である。太平の御代に、山住みをしてゐる理由を説いてゐる。

釋義

【耳になり弭の音を聞かず、……この山ざとにはうつろひ住めるになむありける】 耳には弓の鳴弭の音を聞かず、目には戦旗のなびくのをも見ない太平無事の大御代に生れては、何事につけても、つらいとか、悲しいとか言つて怨んだりぐちをこぼしたりすべき事であらうか、そんな筈はない。それであるから、自分以外の隠遁者のやうに此の世をいやに思つて避けるといふのではないが、商賈繁昌の市街に近い所の賑やかさを厭つて、この山里に移り住んでゐるのである。

五人ばかり己が心のまま

花は春を待ちてかをり、紅葉は秋を得てにほへり。人ばかり己が心のままなるものやはある。霞をあはれびては暮れゆく春ををしみ、露をかなしみては、過ぐめる秋をなげく。さらばまた年くれむとしては、うららかなる春をこそ待つべきに、年なみのたちかへらぬをわびて、せきとどめまほしく思ふはなぞ。(千蔭遺文)

「人ばかり」「あはれび」「かなしみ」「さらば」「年なみ」

「わび」

○福岡高等商業學校

要旨 千蔭遺文中の「萬葉集略解の稿を起しけるころ」と題する文の冒頭で、人間の我儘勝手なのを詰問してゐる。

釋義

【花は春を待ちてかをり、……せきとどめまほしく思ふはな

「なり弭」 弓を射る際に、鳴るやうにしてある弭。

「弭」 弓弭ともいつて、弓の兩端の弓弦を懸けるところ。

「旗手」 旗足のこと。旗の下端の風になびく所をいふ。技は單に、「旗」といふに同じ。

「耳になり弭の音を聞かず、目に旗手のなびきをも見ぬ」 此の句で、世がよく治まつて、太平無事であるさまをいひあらはしてゐる。

「おぼん」 「おほみ」の音便。更に約つて「おん」となる。

「うし」 思ふまゝにならぬ・つらい・心配である。

「わびし」 なやましい・さびしい・かなしい。

「かこつ」 不平をうつたへる・愚痴をこぼす。

「しも」 語勢を強めたり語調を整へたりする爲に用ひる語。本來は二語であるが、よく結合して用ひられる。

「やはある」 反語法。あらうか、ない。

「あきじこる」 商賈で失敗をする意であるが、技は、商賈をする。商賈が盛んである、の意に用ひてある。

「うつろふ」 移る、意。

「住めるになむありける」 住んでゐるのである。ける、詠歎の意。

【ぞ】 花は春になるのを待ちかまへてはじめて好い香を放つて咲き、紅葉は秋に逢つてはじめて美しい色を見せる。このやうに花、紅葉などは皆自然の時にまかせてゐる。ところが、人間ほど我儘勝手なものが他にあらうか、ありはしない。考へても御覽なさい。人間は、霞を賞しては、暮れてゆく春を惜しみ、露の趣を愛しては、過ぎてゆく秋を歎くのである。そんなに春や秋を惜しみ愛するのならば、年が暮れようとする時には、霞たなびくのどやかな春が再び廻つて来るのを待つべき筈であるのに、年が過ぎ去つては再び立歸ることのないのを悲しんで、行く年を無理に堰きとどめたいと思ふのは、何故であらうか、あまりにも我儘がひどすぎるではないか。

「秋を得て」 秋といふ時期を得て。秋に逢つて。
 「にほへり」 美しい色を見せてゐる。茲は、香る、意ではない。
 「人ばかり」 人間ほど・人間くらゐ。
 「あはれびては」 賞しては。
 あはれび 面白く思つて見る・愛賞する、意。茲は、ふびんに思ふ、哀れに思ふ、意ではない。
 「かなしみ」 身にしみて面白く思つては、の意。愛賞する。之も普通にいふ、かなしく思ふ、意ではない。
 「める」 推量の助動詞ではあるが、文意を和げるに用ひたまでで

ある。
 「さらば」 それほど春や秋を惜しみ歎くのならば、の意。
 「年なみ」 年竝。年のこと。
 「わびて」 思ひ煩つて。
 「思ふはなぞ」 この下に「あまりに我儘すぎる」を補つて餘意を明かに説くがよい。

六 父翁の歌

千蔭十あまり四つの年にかありけむ。縣居の大大をちか鄰に招きすませて、かたみにむつみかはされつづ、千蔭は彼の大人の教を受けよとてなむ名簿なまづおくらしめたまひける。父翁ちちのおきな七そぢあまり二つの齡よひにして、ねぎごとのままに仕を退き給ひては、殊に歌にのみ遊び給へりければ、歌の數ぞさはになりけり。(東歌序)

〔縣居の大人〕〔かたみに〕〔むつみかはす〕〔名簿〕〔ねぎごと〕〔さは〕

○陸軍經理學校

【要旨】 千蔭が、父の歌文集である「東歌」に書いた序文の冒頭で、父と賀茂真淵との關係、及び父が退職後、作歌に餘念のなかつたことを記してゐる。

釋義

【千蔭十あまり四つの年にかありけむ。……歌の數ぞさはになりける】 私が十四の年の時であつたらう。父上は、縣居先生(賀茂真淵)を近所に招いて住ませ、互に親密に交はられて、「千蔭よお前は、あの先生の教を受けなさい。」とおつしやつて、弟子入りの名刺をお送らせになつた。父上が、七十二歳で、願によつて、仕を退かれてからは、殊に歌ばり詠んで居られたので、歌の數が非常に澤山になつた。
 「けむ」 過去推量の助動詞。
 「縣居」 賀茂真淵のこと。
 「大人」 もとは、人を尊び稱する時に用ひる語であつたが、後には、師又は學者の尊稱として用ひるやうになつた。
 「ちか鄰」 近隣。近所。
 「招きすませて」 千蔭の父が、真淵を招いて住ませたのである。

それ故、上に「父上が」の主語を補つて解かなくてはいけない。
 「かたみに」 たがひに。
 「むつみかはす」 親しく交はる。
 「つづ」 茲は、口語の「で」に當る。
 「名簿」 弟子入の名札。先生の所へ弟子入をする時、さし出す名札。即ち、名刺。
 「ねぎごと」 願ひ事。
 「さは」 澤山。

藤篋冊子鈔

解題

藤篋冊子六卷は、上田秋成の歌文集である。卷一・二が歌で、卷三以下は文章である。其の文章は雨月物語と並稱せられ、筆致幽妙である。

著者上田秋成は、大阪の人、通稱は東作、無腸餘齋、鶉居、剪枝、畸人等の號がある。父母を詳にしない。幼時から堂島の商人上田氏に養はれてゐた。初め俳諧を几圭に學び、眞淵門下の加藤美樹が大坂城番として來たのに就て國學を修めた。その後火災にかゝつて家産を失つたため、醫を學んで、大阪に開業したが、餘暇には學藝の方面にいそしみ、歌人學者として漸く世に認められた。五十五歳の時、ある動機から醫を廢め、長柄里に隱退した。寛政五年(六十歳)京都に上り、寛政九年妻を失つてからは、猶介孤獨の氣性はいよく、荒み世を嘲り俗を罵りて、文化六年、京都南禪寺畔の寓居に逝いた。享年七十八歳。著書には、冠辭考、續貂清風瑣談、靈語通楮の杣、古今集よしやあしや、雨月物語、春雨物語、藤篋冊子、痴癖談等がある。(一三九二—二四六九)

一 御嶽に登る

御嶽に攀登る。南無行者が聲後先にかまびすし

く、暫し杖とどむべくもあらず。巖を匂ひ葛をたよりに、或は梯立を傳ひて登る。いとさがしきがあひだも、をちこち見さけくだしも見れば、この來

る道道、高く仰がれし山山峰峰は原野田畑のやうにて、ただ高見山ぞささげ出されたる。かね掛といふ巖のもとに至りて見れば、ここなむ山のつかさなりける。久方の光こそあれ、行く雲も吹く風の音も、我より下のものにぞありける。

〔南無行者〕〔かまびすし〕〔梯立〕〔さがし〕〔見さげくだしも見る〕〔ささげ出さる〕〔つかさ〕〔久方の光〕

○神戸高等商業學校

要旨

〔御嶽さうじ〕の一節で、秋成が、大和國吉野の奥にある金峰山に登つた時の有様と感想とを記してゐる。

釋義

〔御嶽に攀登る。南無行者が聲、…我より下のものにぞありける〕 御嶽に攀ち登つた。ところが、修行者の唱へる「南無南無」といふ聲が、前後にやかましく聞えて絶え間なしに上下するので、暫くも杖をとめて休む事が出来ない。巖の上を腹ばひになつて渡つたり、蔓草に取りすがつたり、或は梯を立ててあるところを傳はつたりして登りに登つて行つたが、甚だ險阻な所を

通る間にも、彼方此方を見渡したり、下の方を見おろしたりして見ると、自分等の歩いて來た此の道々も、下の方では、仰ぎ見られた山々峰々も、此處からは、原野や田畑のやうに低く見えて、たゞ高見山ばかりが、ささげ出されたやうに高く突立つてゐる。鐘掛といふ巖の下に行つて見ると、そこがまあ山の頂上であつたのである。そこでは、日の光だけは上からさして來るが、過ぎて行く雲も、吹いて來る風の音も、皆自分よりは下の方のものであつたわい。

〔御嶽〕 大和國吉野山の一峰である金峰山の別稱。役の行者の開いたところ。頂上に藏王權現を祀つた堂がある。修驗道の本山で、夏時には白衣の行者の登山する者が多い。此の峰に入ること昔から大峰入と稱へてゐる。

〔南無行者〕 「南無當來導師彌勒佛」とか、「南無行者大菩薩」(御嶽を開いた役の行者をいふ)とかと唱へて山に入る行者。

南無 ひとすら依りすがるといふ意で、自分の信ずる佛・菩薩などの稱號の上に冠して唱へる。

行者 原本では、「がうぎ」とよんでゐる。高山の難所を通つて、頂上に祀つてある神佛に參詣する者。白衣に金剛杖を携へてゆく。

〔後先にかまびすし〕 行者の澤山に登ることの形容。

かまびすし

「喧し」と書く。やかましい、意。

〔匂ひ〕

はらばひをする。難所などを通る時の形容。

〔葛〕

蔓草をいふ。

〔梯立〕

はしごを立てかけてあるところ。險しくて攀ち難い崖などを登るに便するのである。

〔さがし〕

「險し」と書く。けはしい。

〔をちこち〕

遠近。彼方此方。

〔見さく〕

見放く。遠く見渡す。

〔くだしも〕

下の方。

〔この來る道道〕

自分等の通つて來た道。今も歩きつゝあるからこのといつたのであり、その道が幾屈折して、澤山に見えるから、道といつたのである。

〔高見山〕

大和の國にある山。

〔ささげ出さる〕

他の山々から、ささげ出されたやうに、一つだけ高く聳えてゐる有様をいふ。

〔つかさ〕

高い部分。茲は、頂上、の意。

〔久方の光〕

日の光。

久方の

天・空・日などに冠する枕詞であるが、茲では、日を省いて直ちに光に冠せしめたのである。

〔ここなむつかさなりける〕

下のものにぞありける。此の二つの

けるは、過去の意と詠歎の意とを含んでゐると見るがよい。そして何れも第二の結で、連體形。

二月あかき夜

月あかき夜を誰かはめでざらむ。ふん月望のこよひ庵を出でてわづかに杖をひけば鴨の河づらなり。雨ふらぬほどなれば、月はながれをたづねてやすむらむ。音をしるべにとめくれば、むべも清しとて、人入手にむすび、かいそそぶりなどしてあそぶ。風高くふき、雲きえ影さやかにて、何をか思ふくまのあるべき。月見ればすすろに物の悲しきぞとは、竹の中より生れ出でし貌よ人の天に今やのわかれをしむにこそ。

〔ふん月〕 「鴨の河づら」 「月はながれをたづねてやすむらむ」

〔音をしるべに〕 「とむ」 「むすぶ」 「むべも清し」 「思ふくま」

〔すすろに〕 「貌よ人」 「天に今やのわかれ」

○和歌山高等商業學校

要旨 「初秋」の題下の冒頭で、月明かな七月十五夜に、鴨川に遊んだことと其の時の感想とを記してゐる。

釋義

【月あかき夜を誰かはめでさらむ。……今やのわかれをしむにこそ】 月の明るい夜を誰が愛しなからうか、愛しないものは一人もあるまい。七月十五夜である今夜 わが家を出て、一寸来たかと思ふと、もう鴨の河畔である。雨の降らない頃であるから、月はこの清く澄んでゐる流をさがし求めて、そこに綺麗な影を映してゐるだらう。さて流のところまで行つて見ようと思つて、水の音をたよりにして、尋ねて行つて見ると、「なるほど鴨長明の詠んだ歌のやうに、綺麗な水である。」といつて、人々はそれ／＼手に汲み取つたり、かきまはしたりなどして遊んでゐる。風が空高く吹いて、雲も消え失せ、月の光が明かで、これを見てゐたら、心に何の思ふ所があらうか、そんな筈はあるまい。それであるのに、「月を見ると、何となしに悲しい心持になる。」といふのは、竹の中から生れ出た顔の美しい赫耶姫が、今や天に昇らうとして別を惜しんだ時に言つた事であらう。

「誰かはめでさらむ」 反語法。

「ふん月」 「文月」の音便。陰曆七月の異稱。

「わづかに杖をひけば」 少し歩いて行くと。

「鴨の河づら」 鴨川のヘリ。

鴨川 京都市の東部を流れてゐる川。

河づら 「河面」であるが、茲は、河畔・河邊の、意に取るがよい。

「月はながれをたづねてやすむらむ」 新古今集、鴨長明の歌に「石川や瀬見の小川の清ければ、月も流を尋ねてぞすむ。」とあるに據つて書いたもの。一首の意は、「鴨川の水が清らかであるから、月もこの川の清い流をもとめて影をうつすことであらう。」因に「石川や瀬見の小川」は、鴨川を指していふ。

すむ 「澄む」で、「住む」の意をも含めてゐる。

「音をしるべにとめくれは」 水音をたよりにして尋ねてくると。

しるべ 手引・たより。

とむ もとめる・たづねる。

「むべも清し」 なるほど鴨長明の歌のやうに綺麗である。

むべ 「うべ」に同じ。

「むすぶ」 手で汲む。

「かこそそぶり」 かきまはすこと。

「思ふくま」 心配事。

くま 暗い影。

「月見ればすずろに物の悲しきぞ」 古今集、大江千里の歌に「月

見ればちぢに物こそ悲しけれ、我が身一つの秋にはあらねど。」とあるに據つて書いたものである。一首の意は、「秋は世間一統の事で、自分一人の秋ではないけれども、それを自分一人の秋かのやうに世間の人はとにかく、自分は月を見ると、さまざまに物悲しいわい。」

すずろに 「そぞら」に同じ。わけもなく・ひとりで。

物の悲しきぞとは、悲しいとは、の意。物は、接頭語的に軽く添はつただけで、別に意味はない。

「竹の中より生れ出でし貌よ人」 竹の中から生れ出て来た美しい人。即ち、竹取物語の主人公赫耶姫を指す。赫耶姫はもと竹の中から生れ、竹取の翁に養育され、成人の後、天に昇つてしまつた。

貌よ人 かほよき人で、顔だちのよい人・美人。

「天に今やのわかれをしむ」 今から天に昇らうとする時の別れを惜しむ。竹取物語の末尾方に、赫耶姫が、月を見て悲しんだよ

しが見えてゐる。即ち、「文月望の月の出でゐて、切に物をおもへるけしきなり。近く使はるゝ人々、竹取の翁に告げていはく『か

ぐや姫、例も月をあはれがり給ひけれども、この頃となりては、

たゞ事にも侍らざめり。いみじく思し歎くことあるべし。よくよく見奉らせ給へ。』といふを聞きて、かぐや姫にいふやう、『なでふ

心地すれば、かく物を思ひたるさまにて、月を見給ふぞ、うましき世に。』といふ。かぐや姫、『月を見れば、世間心細くあはれに侍り、なでふ物をか、なげき侍るべき。』といふ。かぐや姫のある所に到りて見れば、なほ物思へるけしきなり。これを見て、『あが佛、なにごとを思ひ給ふぞ。おぼすらんこと、何事ぞ。』といへば、『思ふこともなし。物なん心細く覺ゆる。』といへば、翁、『月を見給ひそ、これを見給へば、物おぼすけしきはあるぞ。』といへば、『いかでか、月を見ではあらん。』とて、なほ月出づれば、出でゐつゝ歎き思へり。夕闇には、物思はぬけしきなり。月の程に爲りぬれば、なほ時々は、打歎き泣きなどす。これを仕ふるものども、なほ物思事あるべしと、さゝやけど、親をはじめて、何事とも知らず。葉月望ばかりの月に出でゐて、かぐや姫、いといたく泣き給ふ。人目も今は、つゝみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもも、何事ぞと問ひさわぐ。(下略)』

「をしむにこそ」 此の下に結詞が省かれてゐる爲に、こゝの解釋が、人々によつて違つてゐる。通釋のやうに「惜しんだ時にいつたのであらう」とも解けるし、「惜しんだ心持をいふのであらう」と解くもあり、又「惜しんだのによつてであらう」とも解いてゐる。識者の示教を俟つ。

三 かたゐものの様したる

法師(一)

文治それの年の秋、八月十五日、鎌倉の大將殿鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて御供つかうまつる人人、御さきおひ御あとべつかうまつれる落(た)に遊ぶ蘆(あし)たづのあゆみして疾(た)からず遅(おそ)からずつらを亂(みだ)さずねり出でさせ給へるを、大路(おほぢ)に膝(ひざ)折(ひ)伏(ふ)せ、かしくみたいまつれる人、數多あるに、けいめいして、あなただにいはず、世(よ)にかめしく貴(た)き御(み)有(あ)り。かへりまをしして御手(みで)輿(こし)に召(よ)させ給ふほど、さとき御(み)まなじりに見(み)とどめさせ給ひ御階(みはし)の忌垣(いぎ)のもとにかしくまり居る法師(ほうし)のあなるが見(み)上げ奉(た)る面(おもて)つき旅(たび)に飢(う)ゑて、いと瘦(や)せ黒(くろ)みづきたるに、衣杖(えじょう)笠(かさ)などもかたゐものの様したるが目を偷(ぬす)みてうすずまり居る、なほ人(ひと)ならずと

や思(おも)しけむ、あの法師(ほうし)が修行(しやうぎやう)するやう、名(な)をも問(と)へ。と仰(おほ)せたらうぶ。

【御(み)さきおひ】 御(み)あとべつかうまつる 【かしくみたいまつる】
【けいめいす】 【あな】 【手(て)輿(こし)】 【忌垣(いぎ)】 【かたゐもの】 【なほ人(ひと)】 【修行(しやうぎやう)】

【要旨(ようし)】 (一) (二) に互(たが)りて、「月の前(つきまへ)」即(すなは)ち、西行(さいぎやう)が頼朝(よりとも)に面會(めんわい)して政治(せいじ)の要道(ようだう)・和歌(わか)の道等(みちらう)に關(か)する意見(いけん)を申し上げた事(こと)を書(か)いた文(ぶん)の一節(いちせつ)である。

此(こ)の(一)は、「月の前(つきまへ)」の冒頭(まうとう)で、頼朝(よりとも)が鶴(つる)が岡(おか)八幡宮(やっぺんぐう)に參詣(さんぎ)して、そのかへりに、階段(かいたん)の垣(かき)の所に、乞食(こじき)姿(すがた)の法師(ほうし)のをるのを見(み)つけ、之(これ)は普通(ふつう)の人(ひと)でないと感じ(かん)じて、お供(とも)の者にその名(な)を尋(たず)ねるやうに命(いのち)じたといふことを記(し)してゐる。

釋義(しやくぎ)

【文治(ぶんじ)それの年の秋(あき)、…世(よ)にかめしく貴(た)き御(み)有(あ)り】
文治(ぶんじ)の或年(あるねん)の秋(あき)の八月(はちがつ)十五日(じゅうごにち)に、鎌倉(かまくら)の大將殿(たいしやうだん)〔源頼朝(げんよりとも)〕が、鶴(つる)が岡(おか)八幡宮(やっぺんぐう)に參詣(さんぎ)なされた。いつもの仕方(しやうほう)で、お供(とも)を致(いた)します人(ひと)々は、或(ある)は行列(ぎやうれつ)の先拂(さきぶ)をし、或(ある)は行列(ぎやうれつ)の後(あと)の警固(けいこ)をして行きま

【御(み)あとべ】 あとべは、後方(あとほう)の義(ぎ)。うしろのかた・しりへ。茲(こゝ)は、後(あと)の御供(みけ)。
【落(た)】 波(なみ)のうちよせる所(ところ)。なみうちぎは。

【黒(くろ)みづきたるに、衣杖(えじょう)笠(かさ)などもかたゐもの】 鶴(つる)のやうな歩方(あひほう)をして。鶴(つる)があるときは、脚(あし)を高くあげてゆつくりとあるく、そのやうに供廻(ともまわ)りものが、脚(あし)を高くあげて一足(ひとあし)一足(ひとあし)徑(ぢやう)ろに歩くことをいふ。

【蘆(あし)たづ】 「蘆田(あしたづ)鶴(つる)」と書く。蘆邊(あしべ)などにをるによつて付けた名であるが、茲(こゝ)は、普通(ふつう)にいふ鶴(つる)と見てよい。

【ねり出(で)て】 ねるは、「遷(うつ)る」と書く。(一) 靜(しず)かに歩行(あゆ)する。そるそる歩(あ)む。(二) 行列(ぎやうれつ)を整(ととの)へて行く。

【大路(おほぢ)】 今の若宮(わかしほ)大路(おほぢ)をさす。

【膝折(ひざひ)伏(ふ)せ】 土下座(どげざ)〔大地(だいち)に跪(ひざまづ)いて禮(れい)をすること〕すること。
【かしくみたいまつる】 「畏(おそ)みたてまつる」の音便(おんべん)。御敬(ごけい)ひ申し上げる。

【けいめい】 「救命(けいめい)」と書く。つゝしみうやまふ、意(い)。
【あな】 喜怒(きど)哀樂(あいらく)等(らう)等(らう)、凡(たゞ)て驚歎(きょうたん)の意(い)をあらはす發聲(はつせい)。「あら」といふに同じ。

【世(よ)に】 まことに。
【かへりまをしして、…】 「あの法師(ほうし)が修行(しやうぎやう)するやう、名(な)をも問(と)へ。」と仰(おほ)せたらうぶ】 さて大將殿(たいしやうだん)が、御報(ごほう)賽(さい)をすまされて、

したが、それ等の供人は、落(た)に遊ぶ鶴(つる)が歩くやうな歩方(あひほう)をして、はやくもおそくもなく、行列(ぎやうれつ)をみださずにしづくと歩(あ)み出(で)られましたのを、大路(おほぢ)に膝(ひざ)を折(ひ)り伏(ふ)せてお敬(ごけい)ひ申し上げる人が澤山(たくさん)にあつたが、皆(みな)つゝしみうやまつてをり、それ等の人(ひと)々に、「あな」との一言(ひとこと)をでもいはず、まことにおごそかで尊(たう)い御(み)様子(ようす)であつた。

【文治(ぶんじ)】 後鳥羽(ごむすひ)天皇(てんかう)御治世(ごちせい)の年號(ねんごう)。皇紀(くわうき)一八四六年(いちやうしやうねん)―一八六九年(いちやうしやうねん)。

【その年(そのねん)】 某年(あるねん)。實(じつ)は、文治(ぶんじ)二年(にねん)。

【鎌倉(かまくら)の大將殿(たいしやうだん)】 源頼朝(げんよりとも)。
大將(たいしやう) 近衛府(きんゑふ)の長官(ちやうかん)。頼朝(よりとも)は右近衛府(みぎきんゑふ)の長官(ちやうかん)〔右大將(みぎたいしやう)〕であつたから、かういつたのである。

【鶴(つる)が岡(おか)】 現今(いま)、國幣(こくへい)中社(ちゆうしゃ)。上下二宮(じやうじふにみや)あつて、上宮(かみみや)には應神天皇(おうじんてんかう)、下宮(しもみや)には仁德天皇(にとくてんかう)が奉祀(ほうし)されてゐる。

【宮居(みやゐ)】 神(かみ)の宮(みや)のあるところ。茲(こゝ)は、神社(じんしゃ)ほどの意(い)。
【例(れい)の事(こと)にて】 いつもの仕方(しやうほう)で、の意(い)。

【御(み)さきおひ】 行列(ぎやうれつ)の先拂(さきぶ)。前驅(ぜんこ)警蹕(けいせつ)。即(すなは)ち、主上(しゆじやう)又は貴顯(きけん)の出入(でいり)される時(とき)、聲(こゑ)をかけ、先拂(さきぶ)して人を警(けい)めること。其(その)の掛聲(かゑ)は、下(した)を向(む)き、或(ある)は「をゝ」、或(ある)は「しゝ」、或(ある)は「をし」、或(ある)は「をしをし」などといふ。

御手輿（手でさげてゆく輿）にお乗りになる時、御階段の所の垣のもとに慎んでゐる僧が居たが、その者の大將殿を見上げ申した顔付が、旅行の爲に飢えて、たいさう瘦せて日に焼けて黒くなつてゐる上に、著物や杖や笠なども古び破れて、まるで乞食のやうな様子をしてゐるのが、人目を忍んで跪いてゐるのを、鋭い御眼で見つけられて、「あの僧は普通の人ではない。」と思はれたのであらう、「あの僧が修行する様子と、名前とを尋ねよ。」と御命令なされた。

「かへりませし」 神佛へ祈願した事の報謝に詣でること。即ち、報賽、の意。

「御手輿」 前後二人が、両手で腰の邊にさゝげて持つて行くこし。輿、輿ともいふ。之に對して肩でかつぐのを肩輿といふ。

「さとき御まなじりに見とどめさせ給ひ」 此の一句は、終りの方の「御階の忌垣のもとに……目を偷みてうすずまり居る」といふ各部の述部であるから、其の下に續けて行くこと全文の意味が、わかりよくなる。通釋も、そのやうにしておいた。

「御階」 階段。さざはし。技は、社前の石段をいふ。

「忌垣」 神社の廻りの垣。又瑞籬ともいふ。その外構に設けたものを玉垣といふ。

「かしこまり」 つゝしみひざまづく。

「法師」 僧。

「あなるが」 「あなるが」の略。

「面つき」 顔付。

「黒みづきたるに」 黒く色づいてゐるのに。

「かたゐもの」 乞食。路傍などにゐて、物を乞ふところから傍居の義でもあるともいひ、又偏坐であらうともいふ。

「目を偷みて」 人目を忍んで。

「うすずまり」 うづくまる。

「なほ人」 只人。普通の人。門地などの貴くないつねなみの人。

「思しけむ」 思はれたのであらう。

「修行するやう」 修行の様子。

「修・遊行」 佛敎の法を行ふことであるけれども、技は、行脚（托鉢・遊行）の意。

「仰せたらうぶ」 御命令をたまはつた。

「たうぶ」 「賜ふ」の延言。

四名は圓位と申す（二）

御輿ぞひの若侍いそぎ走り寄りて、ありがたく御

目賜へり。何處よりの修行ぞ。名をも申せよ。」といふ。ゆくりなきに驚きたる様にして、「雲水にありか定めず侍るものにて、名は圓位と申す。」といふ。聞しめされて、「さればこそ聞き知りたれ。穴熊の猛き獲物の類ならで、賢き人得たるためしに、誘ひ歸らむ。わがあとにつきて參れといへ。」とて召連れさせ給へり。

「御輿ぞひ」 「ありがたく」「ゆくりなし」「雲水」「さればこそ」「穴熊の猛き獲物の類云云」

○水産講習所

要旨 前節の續きで、かたゐものさましたる法師が西行であるといふことが知れたので、頼朝が彼を連れ歸つたといふことを記してゐる。

釋義

【御輿ぞひの若侍いそぎ走り寄りて、……とて召連れさせ給へり】 大將殿（源頼朝）の御輿に附添うてゐた若い侍が、法師の傍へ急いで走り寄つて、「そなたは、勿體なくも、大將殿の御目に

とまつた。何處から修行して來た者か。名前をも申せよ。」といふ。するとかの法師は、意外な事に驚いた様子をして、「拙僧は、行雲流水のやうに處定めずして天下をめぐる行脚僧でございます。名をば圓位と申します。」といふ。大將殿はそれをお聞きになつて、「それならなるほど、前から聞いて知つてゐる。昔周の文王が狩に出て、穴熊のやうな猛獸を獲たのでなく賢人なる太公望を得たといふ例もある事であるから、それに倣つて、この僧を連れまわらう。私の後について來いと云へ。」と仰せられて、西行をお召し連れになつた。

「御輿ぞひ」 御輿の傍につき添つてお供をするもの。

「ありがたく」 古文では、あることが難い・めつたにない、の意に用ひられることが普通であるが、技では、勿體ない・かたじけない、の意。

「御目賜へり」 お目にとまつた。目におとめ下された。

「ゆくりなきに」 思ひがけないので・突然であるので・不意打をくつたので、の意。

「驚きたる様にして」 驚いた様子をして。

「雲水に」 雲水のために・雲水をして、の義で、行脚のため、行脚をして、の意。

雲水 笈を負ひ、師をたづね、道を問うて、行雲流水のやうに悠

々として去來にまかせ、諸國を周遊して住居を定めなことをいふ。行脚すること。

「圓位」西行の別名。西行は、俗稱を佐藤義清といふ。勇敢で武術に長じ、鳥羽上皇に仕へて北面の武士となり、左兵衛尉となつた。出家して嵯峨に居り、西行といひ圓位と號した。行脚して足跡天下に普く、意を得ると、即ち吟詠した。其の歌多く新古今集に入る。歌集を山家集といふ。建久元年、京都に歿した。年七十三。(一七七八—一八五〇)

「さればこそ」それなら、なるほど。

「穴熊の猛き獲物の類ならて云云」狩に出て穴熊を獲たのとは話がちがつて、賢人を得た例にならつて、の意。(狩に出た人は、西伯、即ち、周の文王であり、賢き人は、呂尙、即ち、太公望を指す。ためしには、例の仲間入りをして、即ち、例にならつて、の意。)

史記齊世家に「西伯(周文王)將獵、トレ之曰、非龍非影非熊、非虎、所獲霸王輔。果遇百尙(太公望)於渭水陽、中略、載與俱歸、立爲師」とある。

五 口とく心さとき法師なり

君をみほこらせ給ひ、口とく心さとき法師なり。

こよひは月見る夜ぞ。物語今ははたしてむ。人とかははらけとりはやし、曉かけて遊ばむ。まれ人は、酒のまざるべし。鹿猿の中に立ちまじりて歌よめといふとも詠むまじ。ただわが前にて遊べ。風ひややかなるにもあかず飲み、物きたなげに食ひちらす人人は、あたたかにもこそ。此の火とり法師にまゐらせよ。とて、白がねもて作りたる猫の形したるを取り傳へて、君より賜はる。とて前に置きたり。

「口とく心さとし」「今ははたしてむ」「まれ人」「火とり」

要旨

やはり「月の前」の一節ではあるが西行が頼朝に向つて、政治の要道や和歌の道に就ての意見を言上した條の後を承けてゐる。そして、本節は、頼朝は、西行から、軍がうまいとほめられ、得意になつて彼をもてなし、寒さをふせげよといつて、銀製の猫の火取を與へたといふことを記してゐる。

釋義

【君をみほこらせ給ひ、……「君より賜はる。」とて、前に置きたり】 頼朝公は、得意にほゝゑまれて、「口の達者な氣ばらきのすぐれた僧である。今宵は、月を見る夜であるぞ。物語はもうやめにしよう。ものどもと盃をにぎやかにとりやりして、夜明までも遊ばう。お客人は、酒は飲むまい。鹿や猿のやうな荒くれ武者の中に交つてゐては、歌を詠めと云つても、詠むまい。ただかうして私の前で遊んでゐよ。あのやうに、風が冷く吹いても、飽くことも知らずに澤山に酒を飲んだり、ぶざまに食ひちらす者共は、つめたくも感ぜず、暖くもあらう。しかし酒食をとらないでゐる僧はさぞ寒からうから、此の香爐を僧に差上げよ。」といはれたので、おそばの者どもが、銀で作つた猫形の香爐を、だんだんに取りついで、「これは、君公から下さるのである。」といつて、西行の前においた。

「口とく」 口のよくまはる。口の達者な。よくしゃべる。
「心さとき」 心のはたらきのすぐれた。才智のある。氣のきいた。
「今ははたしてむ」 今はもう果(終)にしよう、の意。一説に、はては、將、で、「今はもうやめて、又しよう」の意である。

てむ 未來に關して願ふ意をあらはす。

「かはらけ」「土器」と書く。素焼のさかづき。

「とりはやし」 聲をあげてとりかはす。にぎやかに笑ひ興じて取りかはすことをいふ。

はやし 聲を立てて笑ひ興ずる、意。

「まれ人」 稀人の義。常には家に居らず、他から稀に訪ひ來る人。即ち、客人。まらうど。

「鹿・猿の中に立ちまじりて、云云」 其の許は、阪東の荒武者の中に加はつて、歌をよめといつたところで、よまないだらう。

鹿・猿 阪東の荒くれ武者(東えびす)を、鹿や猿にたとへたのである。

「あかず飲み、物きたなげに食ひちらす」 阪東武者共の暴飲暴食することをいひあらはす。

物きたなげに ぶざまに。

「あたたかにもこそ」 この下に、「あらめ」などの語を補つて解くがよい。

「火とり」 火取。香爐をいふ。薰物をたく香爐で、火取香爐の略。單に、火入と解してもよい。

「猫の形したるを」 猫の形したる銀の香爐を、の意。

「とり傳へて」 だん／＼に取りついで。

六 西行人に語りていふ

西行後に此のことを人に語りていふ。「右府は、まことにねぢけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針のおはするぞ。漢高の大度曹孟徳の智略あるに似て、天下の人皆此の君の網の中に入れられたるは、我が佛の冥福といふものを生まれ得させけむ。ただかなしむべきは、神の御裔の此の後やうやう衰へさせ給はむ世の姿なるは」とて、涙をとどめがたくして、物語りしとなむ。

〔右府〕「ねぢけたる君」〔口に蜜し給へど云云〕〔漢高の大度〕〔冥福〕「生れ得さす」〔神の御裔〕「世の姿なるは」
○米澤高等工業學校

要旨 「月の前」の末節である。西行が頼朝に對面して語り會つた時の感想を、人に語つたことを記してゐる。

釋義

通鑑綱目、唐紀に「李林甫爲相、尤忌文學之士、或陽與之善、略以甘言、而陰陷之。世謂「林甫口有蜜腹有劍。」とあるに據つたものである。猶、之を「口蜜腹劍」ともいふ。

〔漢高〕 漢の高祖、即ち、劉邦のこと。

〔大度〕 大きな度量（器量）。事物を寛容し、又は事業を經營し得る品性を多量に持つてゐること。

〔曹孟徳〕 三國時代の魏の武帝、即ち、曹操のこと。

〔智略〕 智慧と計略。又、才智があつて、すぐれて計略をなすこと。

〔此の君の網の中に入れられたるは〕 頼朝公の掌中にまゐるめこまれて自由にあやつられてゐるのは。

〔我が佛の〕 わが信仰する佛の、といふ意。西行が自ら佛門に歸依してゐたから、我がといつたのである。

〔冥福〕 茲では、冥加、即ち、神佛が冥々のうちに加護して下さることをいふ。佛の與へる幸福。猶、冥福には、死後の幸福といふ意もある。

〔神の御裔〕 神の御子様といふ義で、代々の天皇、又は、皇室の意。

〔此の後やうやう衰へさせ給はむ〕 頼朝が鎌倉に幕府を開いてから、政權が將軍に移つて、皇威の漸次衰微して行くことを指して

〔西行、後に此のことを人に語りていふ。……とて、涙をとどめがたくして物語りしとなむ〕 西行法師が、後になつて、頼朝に對面した時の事を、或人に語つていつた。「右大臣は、ほんとうに心のひねくれた方である。口ではうまいことを言つてゐられるが、心にはおそろしいたくらみを持つてゐられますぞ。漢の高祖（劉邦）の大きな度量や、曹孟徳（魏の武帝）の智慧計略があるやうであつて、天下中の人は、皆頼朝公の手中にまゐめられて自由にあやつられてゐるのは、我が信仰する佛の冥加といふものを、生れながら持つてゐられるためであらう。たゞ悲しまなければならぬことは、これが爲に、皇室の御威光が漸次に御衰微なさる世の有様であるわい。」と言つて、とめどなく涙をながして物語つたといふことである。

〔此のこと〕 頼朝に對面した時の事を指す。

〔右府〕 右大臣の唐名。但し頼朝は、權大納言になり、右近衛大將になり、更に征夷大將軍になつたけれども、右大臣にはならなかつた。それ故、こゝは、右大將とあるべきところである。

〔ねぢけたる君〕 心のひねくれた方。心がすなほでない方。

〔口に蜜し給へど心には針のおはするぞ〕 口先は親切でやさしげであるが、心中にはどんな險惡なたくらみがあるかわからない人であるぞ、の意。

いふ。

〔姿なるは〕 状態（有様）であるわい。
は、感動の助詞で、口語の「よ・わい」に當る。

七 苦の下臥

〔梶枕わびしくおぼさは、かしこによせむかの野にやどりしたまへ。〕と申す。「風波はげしからねば、ただこのままに。」とて、苦の下臥して明かしにけり。

（秋成遺文）

〔苦の下臥〕 〔梶枕〕 〔ただこのままに〕

○高等學校

要旨 秋成遺文中から採つた一節。或時、秋成が船に乗つて出掛けた折、其の船中で一夜を明かしたといふことを記してゐる。

釋義

〔梶枕わびしくおぼさは、……とて、苦の下臥して明かしにけり〕 船頭が、舟の中でお寝みになることをつらくお思ひなされ

ますならば、あそこに舟を著けませうから、上陸されてあの野にお宿りなさいませ。」と申した。然し自分は、「この通り風や波も烈しくないのであるから、ただこのまゝに、舟の中に寝よう。」といつて、苦の下に寝て夜を明かしたことであつた。

「榻枕わびしくおぼさば」此の句は、下の「かの野にやどりしたまへ」に續くので、直下の「かしこによせむ」は、挿入の副詞句である。

「榻枕」榻を枕とする義で、船中に寝ることをいふ。ふなやどり。

「榻」(一)船を漕いで進める具。楫。(二)船尾に取りつけて船の方向を定める具。舵。茲は其の何れにとつても通ずる。

「わびし」なやましい・さびしい、などの意に用ひられるが、茲は、つらい・いやに、などの意。

「かしこによせむ」彼處に船を寄せませう。

「ただこのまゝにとて」ただこのまゝ船の中に寝よう、といつて。ただこのまゝに、此の下に略されてゐる語の何であるかは、下に

「苦の下臥して」の語があるによつて知ることが出来る。

「苦の下臥」苦(菅や茅などで編んで、船などの屋根を作るに用ひるもの)に下に寝ること。

【秋成遺文】文學博士藤井乙男氏が、秋成の歌文の未刊ものを蒐集出版されたものである。

文脈

一讀すると、對話の文であることがわかる。そして最初の「」の言葉の中には、「榻枕」とか「よせむ」とかいふ語があり、更に其の「」の下には「申す」といふ敬語があるので、船頭が客(作者秋成)に向つていつてゐる言葉であることがわかる。従つて、次の「」の中の言葉は、船頭の言葉に對する客(作者秋成)の返事であることもわかる。然し全然句讀點をとつてしまふと、相當にわかり難い文である。生徒には、明らかに話の主が誰であるかをつかませるやうに導かれない。

琴後集鈔

解題

琴後集十五卷七冊は、江戸時代の能文家村田春海の作である。一卷から九卷までは短歌と長歌とを載せ、十卷から十五卷までは、記序跋書牘文などを載せてゐる。本書の文は、主として法則を唐宋八家の文に取つて、別に一家の風を成し、文情は豊富措辭は巧妙流麗で、趣味津々として盡きず、古來名文の譽高いものである。

著者村田春海は、姓は平氏、通稱平四郎字は士觀、春海は其の名、琴後翁又は錦織齋と號する。江戸の人、延享三年生る。春道の次子。兄春郷と同じく加茂眞淵に従つて古學を學んだ。又和歌を善くした。兄に代つて家を督したけれども、性豪放財利に淡く、竟に家産を失つた。けれども之を顧みず、専ら心を學事に潜め老いて益、精しく、加藤千蔭と名を齊しうし、竝に江戸の宗匠と稱せられ、從ひ學ぶ者が衆かつた。白河侯月に五口俸を賜ひて門客とした。春海又心を漢籍に潜め、好みて詩文を作つた。初め服部仲英を師とし、仲英死して後、鶴殿士寧に従ひ、中頃京都に往きて皆川淇園に學んだ。博雅淹通、學和漢を兼ね、其の國文を作るや法を漢文に取り別に一派を開いた。和學者推して紀氏以來の能文と爲した。又書札を書くし、詩文等を録するに至つては、米元章の風致があつた。文化二年三月京都妙法院法親王が江戸に至られた時、春海を召見して其の和歌を徴された。是の時、橋千蔭畫人谷文晁も亦侍坐した。春海後に仙語記一卷を著して、詳に其の時の事を記した。八年二月十三日に、年六

十六で歿した。著はす所和學大概神道志琴後集等頗る多い。(二四〇六—二四七一)

一世のならばし

あはれ世のならばしこそはかなきものはあなれ。たかきいやしき品いとことなりといへども、おのがじし心ゆくばかりなるは稀にて、ただ足らはぬ事のみぞ多かりける。花を思ふとは梢の嵐を恨み、月をめづるとは尾上の雲をいとふためし誰かはそのがるべき。「林にやどる鷓鴣は、わづかなる小枝のかけをたのみ流に水もとむる鼠は、ただ腹ふくるるに過ぎず。」こそ、いにしへ人もいひつれ。かかることわりをだにわかたば、かぎりあるこの世に、かぎりなき事をおもふべきかは。

【はかなきものはあなれ】 【品】 【おのがじし】 【心ゆくばかり】
【林にやどる云云】 【かかることわり】

○福岡高等商業學校

ようか、誰しも免れることが出来ず、一方に満足を感じれば、一方には不足を感じるものである。

【あはれ】 「あゝ」に同じ。感動詞。

【ならばし】 ならばし・習慣・慣例・世の常態。茲は、世の有様と解する。

【はかなき】 頼みにならない・あてにならない。

【ものはあなれ】 「ものにはあるなれ」の略で、ものではある。

【たかき】 貴の字を宛てる。

【品】 品等・階級などの義から、人品・身分・地位、などの意となる。

【おのがじし】 めいゝ。各自。

【心ゆく】 心の及ぶ所まで往く義。満足する。

【足らはぬ】 「たらぬ」の延言。不足なこと。

【多かりける】 このけるは、詠歎の意をあらはす。

【花を思ふ】 花を戀ひ慕ふ、意。

【月をめづるとは】 月を愛賞するといつては。

【尾の上】 峰の上。

【誰かは】 反語法。詳しくいへば、かは疑問、はは感歎をあらは

尾、山の裾の長く曳いた處をいふが、峰又は丘をいふ。

【誰かは】 反語法。詳しくいへば、かは疑問、はは感歎をあらは

○仙臺醫學專門學校
○高等學校

要旨

知足庵記の冒頭で、常に足らぬ勝なことは、人世のならひであるから、徒らに限りなき事を望んではならないと説いてゐる。

釋義

【あはれ世のならばしこそは……誰かはそのがるべき】 あゝ世の中の常の有様といふものは、頼みにならないものであつて、自分の思ひ通りになるものではないんだなあ。世には高貴な人もあり、卑賤な人もあつて、其の身分は非常に違つてゐるけれども、各自が心に満足するほどの事は稀であつて、たゞもう、いつも不足に思ふ事ばかりが多いものであるよ。譬へば、花を思ふ存分眺めようと思ふと、一方に於ては花の咲いてゐる梢を吹く嵐をうらめしく思ふといふやうな事が起り、又月を賞美しようとする、一方に於ては月を蔽はうとする峰の上の雲を嫌はしく思ふやうな事が起つて來るといふやうな事柄は、誰がまあ免れることが出来

す。

【林にやどる鷓鴣は、……かぎりなき事をおもふべきかは】

「大きな林の中に棲んでゐるみそさといは、たゞ僅かな小枝を頼みどころとするばかりであり、大河の流に水を求めどぶねずみは、たゞ水を飲んで腹を満たすだけの事である。すべて此のやうに、人も、各、その分に安んじて、食らぬやうにしなければならぬ。」と、昔の人も説いて言つてゐる。かういふやうに、人の世は不足勝なものであるといふ道理をさへ辨へ知つたならば、我々の希望を満たし得る範囲に際限のあるこの世に於て、限りのない希望を懐いてよからうか、懐くべき筈のものではない。

【林にやどる鷓鴣はわづかなる小枝のかけをたのみ】 林の中に棲んでゐるみそさといは、たゞ僅かな小枝の蔭を頼み所とする、の意で人は各、その分に安んずべきであるといふ事に喩へたのである。莊子、逍遙遊篇に「鷓鴣巢深林、不_レ過_二枝_一。」とあるに據つて書いたものである。

鷓鴣 「さゝぎ」と訓む。「みそさとい(溝さといの音便)」の古名。この鳥、今は保護鳥。形雀に似て小さく、巢を深山の崖の樹枝にかけて作り、極めて巧妙である。故巧妙鳥の名がある。

【流に水をもとむる鼠は、ただ腹ふくるるに過ぎず】 大河の流に水を求めどぶねずみは、たゞ水を飲んで腹に満たすだけの事であ

る、の意で、此の句も、前項の句と同類の譬喩。莊子、逍遙遊篇に「偃鼠飲河、不過滿腹」とあるに據つて書いたものである。鼠、茲は、「偃鼠」で、どぶねずみをいふ。

「いにしへの人」 暗に、莊子の著者である莊周をさす。

「かかることわりをだにわかたば」 かういふ（人の世は不足勝なものであるといふ）道理だけでも辨へ知つたなら（分つたなら）。

「かぎりあるこの世に」 我々の希望を満たし得る範圍に際限のある此の世に於て、の意。

「かぎりなき事をおもふべきかは」 無限の希望を懐くべき筈のものではない。

かは 反語の意をあらはす。既出。

二 心ゆくわざ(二)

うつせみの世の人のことわざ、よろづにさまざまなれど、時にそむき、折にあはで、つきづきしからざらむは、いみじきふしなりとも、いかで心のゆくわざなるべき。されば夏の日は埋火のあたたかなるを思はず、冬の夜にひみづの涼しさをば忘れつ

べし。古の人も、春のあじろ八月のしらがさねをこそ、すさまじきことのためしには引きいでたりけれ。

「うつせみの」 「ことわざ」 「つきづきし」 「いみじきふし」

「心ゆくわざ」 「ひみづ」 「古の人」 「春のあじろ」 「八月のしらがさね」 「すさまじ」

○ 高等學校

要旨 (一)(二)は、隨時樓の記の冒頭である。

(一)は、すべて季節はづれのものは面白くないといふことを述べてゐる。

釋義

【うつせみの世の人のことわざ、……すさまじきことのためしには引きいでたりけれ】 此の世の中の人のすることは、多くあつて、又いろ／＼にちがふけれども、季節にはづれたり、その場合々に當てはまらないで不調和であつたなら、たとへそれがどんなにすぐれた結構な事であつても、どうして満足することが出来ようか、とても満足は出来ない。さういふ譯であるから、い

「ひみづ」 水をとかした水。和名抄に「氷漿、今按、以氷入氷漿也。」とある。

「忘れつべし」 忘れてしまふであらう。つは、完了の助動詞。

べしは、推量の助動詞。

「古の人」 暗に、清少納言を指す。即ち、清少納言の枕草紙に「すさまじきもの、春の網代……八月の白重云云。」と見えてゐる。

「春のあじろ」 あじろ（網代）は、「あみしろ」の略で、昔、川瀬に網を引く形に、竹木を編み列ね、その一方に簀を當てて魚を捕つたものである。そして、これは、冬時水魚（「ひろを」の略、琵琶湖・宇治川などに産する小魚。色白くして水のやうで、秋末から冬にかけて多く捕へられる。）を捕るへに用ひるものであるから、水魚の寄る冬の内は興があるが、春になつては、もう季節はづれのものである。延喜式に「山城國、近江國、水魚網代各一處、其水魚、始九月迄十二月貢之。」と見えてゐる。

「八月のしらがさね」 しらがさね（白重）は、下襲の白いのをいふ。地質は、綾・平絹等がある。四月と十月との更衣の外は、夏時だけ之を用ひた。八月は陰暦では、秋であるから、この時に白重を用ひるのは、季節はづれである。

「すさまじきことのためしに」 興の醒めることのためしに。すさまじ もと、心の進まない義。

かによいものであるといつても、夏の日には、埋火の暖さを慰しがらないし、冬の夜には、氷水の涼しさを忘れてしまつて、思ひ出しもしない事だらう。昔の人も春の網代や八月の白重などをこそ、季節はづれの興さめる例にまあ引きだしてゐる。

「うつせみの」 命・世・人などに冠する枕詞。母韻變化によつて、うつしみ・うつそみ、ともなる。空蟬と書くのは宛字。現身の義で、現に生きてゐる身といふ意。ところが、人間や此の世は極めて脆くはないといふ觀念からの聯想と、發音の類似とによつて空蟬（蟬の蛻）とも書くに至つたものであらう。

「ことわざ」 事と業とである。人間のなす様々の譽み。仕事。

「よろづにさまざまなれど」 數多くいろ／＼に異なるけれども。

「時にそむき折にあはで」 時節に反したり、場合に適應しない。

「つきづきし」 似つかはしい。ふさはしい。調和した。

「いみじきふし」 すぐれたよいこと。立派な事柄。

「ふし」 (一) 齋み慎むべきである。(二) 甚だしい・ひどい。茲は甚だしくよい、意。

「心ゆくわざ」 己の心の満足すること。

「埋火」 灰にうづめた火。

三 心をやるべきすまひ(二)

かかれればはかなきすさみも折にあひたるはをかしく見所なき木草も時を得たるはめづらかなになむおぼゆる。しかはあれど人ぐさしげき巷ちまたの所せく門かどたちならべたらむあたりには時をすぐし折を失ふたぐひ多くて月にたよりよきは花にうとく水によしあるは山はるかにて四つの時のゆきめぐるにしたがひて心をやるべきすまひはいともいともかたしや。

「はかなきすさみ」「人ぐさしげき巷」「所せく」「時をすぐし折を失ふ」「月にたよりよきは花にうとし」「水によしあるは」「心をやる」

○高等學校

○慶應義塾大學豫科

要旨

前節の続きである。年中よい景色を眺め得る住居は、まことに得難いものであるといふことを述べてゐる。

「門たちならべたらむあたり」門(軒)を立てたらべてある邊。
「時をすぐし折を失ふたぐひ多くて」四圍の状況に妨げられて、月や花をながめるによい時機を失し、場合を失ふ類の事が多くあつて、の意。

「月にたよりよきは」秋、月を眺めるに便利な場所は。
「花にうとく」春、花に縁とほく。花との關係がうすく。
「水によしあるは」夏、水に縁故(關係)のある所は。
「山はるかにて」冬、雪景を賞すべき山が遠くあつて。
「四つの時」四季。春夏秋冬。

「心をやるべき」心を感めることの出来る。
「いともいとも」非常に。
「かたしや」得がたいことであるよ。
や 感動詞。

四 法となすしるべ

よろづ何の業わざにも古より法のりとなすしるべありて、それによらざらむはまことの心を得がたく、その法を得たるはまめやかなりとして人もうべなふめ

る。

釋義

【かかれればはかなきすさみも……心をやるべきすまひは、いともいともかたしや】 かういふ譯であるから、一寸したなぐさみも、場合に適してゐるのは面白し、見るべきねらうのない木や草も、時節にかなつて榮えてゐるのは愛らしく感ずるやうである。さうではあるが、住民の多い街中の狭まじかくする門を立てなればたやうな邊では、四季折々の眺を樂しむべきよい時機をばづし、よい場合をなくしてしまふといふやうな事が多くて、秋、月を見るのに都合のよい所は、春、花に縁が薄く、夏、流水の景趣を眺めるに縁のある所は、冬、雪を賞すべき山が遠いといふ風で、春夏秋冬の循環するにつれて、その折々に、心を感めることの出来るやうな住居は、滅多に無いものである。

「はかなきすさみ」一寸したなぐさみ。つまらぬあそび。

「めづらか」珍らしい、又は、愛らしい、意。

「人ぐさしげき巷」住む人の多い町通。

「人ぐさ」「あをひとぐさ」に同じ。人の多く生れいづるを草の繁茂するに譬へていふ。

「所せく」所も狭いばかりに。狭くする。窮屈に。

り。こはもとより理ことわりすることながら、ふかく事のもとを考ふるに、よろづの事はじめに法をまうけおきて、後にその業をなし出づるにはあらず。その業あるが上にこそ法てふ事はいでくめれ。

「しるべ」「まめやか」「うべなふ」「さることながら」「法てふこと」

○高等學校

○大阪外國語學校

要旨

萬事は、その法則に従つてなすべきであることは勿論であるが、よく考へると、仕事があつて後に法則といふ事が出来てくるものである、即ち業は本で法は末であるといふことを説いてゐる。

釋義

【よろづ何の業も古より法となすしるべありて、……その業あるが上にこそ法てふ事はいでくめれ】 すべてどんな仕事にでも、昔から其の道の手引となるべき法則があつて、その法則によらないでやつたやうな事は、その事に就ての眞の精神を捉へ

ることが出来ないし、その法則通りにやつた事は、よく行届いた忠實な仕事であるといつて、人々もそれを承認するやうである。之はいふまでもなく、尤もな事ではあるが、然しよく／＼物事の起りを考へて見ると、總べての事は、最初に法則を作つておいて、それから後に其の仕事を爲しはじめるのではない。其の仕事があつて、はじめて法則といふことが出来てくるやうである。

「法」 法則。手本。

「しるべ」 手引。案内。指南。

「まことの心を得」 眞の精神をとらへる。其の物の眞髓を會得する。

「まめやか」 忠實。眞面目。

「うべなふ」 尤もな事とする。承認する。同意する。納得する。

「理さることながら」 道理は、その通りであるが。尤もな事であるが。

「法てふこと」「法といふこと」の約。

五 わが相思ふ人人

つれづれと降りくらしたる長雨も、やうやうはれ開おぼゆるに「かかるゆふべをただにやは過すべ

き。春のゆくへをもしのばむ花の名残をも見ばや。いざ」とて、葎生の門おどろかすなるは、わが相思ふ人人なりけり。

「はれ開おぼゆる」「ただにやは過すべき」「春のゆくへ」「花の名残」「葎生の門おどろかす」「相思ふ人人」

○北海道帝國大學豫科

要旨 「花を惜しむ記」の冒頭で、長雨の晴間に、親

しい友達が、花見に誘ひに、自分の家へ訪れて来たことを記してゐる。

釋義

【つれづれと降りくらしたる長雨も、……わが相思ふ人人なりけり】 幾日も降りつゞいてまことに退屈であつた長雨も、やつと晴間になつたかと思ふ時分に、「こんな夕方を何もしないで空しく過してよからうか、空しく過してしまふのは惜しい。過ぎ行く春の別をも惜しまう。散つて行く春の最後の様子を見たいものである。さあ一つ出かけようではないか。」といつて、葎の生茂つてゐる私のあばら屋を訪ねて来たのは、日頃親しくしてゐる人々であつた。

六 寢で明してまし

降りくらしたる雨の名残はれゆかむ空もおぼえず。ましてさやけき光まちいでむは、いとど心もとなきを、更けゆかばかくのみはあらじを、こよひは寢で明してまし。などいひつつ伊豫簾むなしうかかけて、そらのみうちまもらるるも、いとわりなしや。

「雨の名残」「はれゆかむ空もおぼえず」「さやけし」「心もとなし」「寢で明してまし」「伊豫簾」「うちまもらる」「わりなしや」

○高等學校

要旨 「曇る夜の月を見る記」の一節、即ち、加藤千

影の家で、月見をした時の一節で、曇つた夜ではあつたが、なほさやけき月の光を期待する心を述べてゐる。

釋義

「つれづれと」 何のなす事もなくものまびしく思はせるやうに。所在なく思はせるやうに。退屈がらせるやうに。
「降りくらす」 終日降りつゞく。葎は、幾日も／＼降りつゞくをいふ。
「長雨」 「ながあめ」の略。数日ふりつゞく雨。霖雨。
「はれ開おぼゆるに」 晴間になつたかと思ふ頃に。
「ただにやは過すべき」 何もしないでむだにすごしてよからうか、よくはない。
「春のゆくへをもしのばむ」 行く春の別をも惜しまう。
「花の名残をも見ばや」 散り行く春の最後の様子を見たいものである。
名残 葎は、最後のさま、の意。
「いざ」 人をいざなふとき、又は、事をなしはじめようとする時に發する聲で、感動詞である。「いで」といふに同じ。
「葎生の門」 葎などの雑草の生茂つてゐる門。轉じて、いぶせきすまひ。自分の家の濶稱。
葎 「やへむぐら」に同じ。茜草科に屬する草で、原野・路傍などに自生する。莖は細長く、葉は小さくして毛刺があり、輪生する。
「おどろかす」 訪れる。
「相思ふ人人」 親しい友だち。

【降りくらしたる雨の名残、……そのみうちまもらるるも、いとわりなしや】 一日中降つてゐた雨の氣がまだ残つてゐて、空はまだ、うまく晴れてゆきさうにも思はれない。まして明らかな月の光が出て来るのを待ち受けて眺めるなどといふことは、尙一層あてにならぬことであるが、しかし、夜が更けて行つたならば、まさかかう曇つてばかりはぬまいから、いつそ今夜は寢ずに明かしてしまはう。」などと皆がひひいひ、月も出ないのに、伊豫簾を捲き上げて、自然と空ばかりが見つめられて仕方がないのも、思へは譯のわからないことであるよ。

「降りくらしたる雨の名残云々」 終日降つた雨あがりの空が、晴れて行く時は、いつか分らぬ、の意。

雨の名残 雨の降つた様子が、まだ残つてゐること。未だ空に雨雲が残つてゐるのである。

名残 すべて、事の終つた後に、なほその氣分の残つてゐること。餘波・餘勢。

はれゆかむ空もおぼえず 晴れ行く空が見られようとも思はれない。5。

「さやけき」 清く澄んではつきりした、の意。明らかな・鮮かな。「心もとなし」 あてにならない。心細い。「かくのみはあらじ」 かり曇つてばかりは居るまいから。雲が霽

れて月が出るかも知れないから、一概にあきらめてしまはずに、の意をあらはす。このをば、ゆゑに通ずる。

「明してまし」 明かしてしまはう。では完了の助動詞「つ」の未然形。このましは「む」に近い用法であるから、てましは「てむ」に似て、普通の「てむ」よりは強い心持をあらはす。

「むなしうかかけて」 月も出ないのに（月を見られるあてもないのに）かどけたからかくいふ。

「うちまもらるるも」 自然と見つめまいとしても見つめずにはゐられないのも。

うち 接頭語。つひ・ちよつと、といふやうな心持をあらはす場合が多い。

まもる 見守る・見つめる。自然可能の助動詞。自然にさうなる意を示す。

「わりなし」 (一) わきまへがない・めちやくちやである・譯がわからない。(二) よぎない・せん方ない・是非がない。(三) 一通りでない・ことの外である。茲は、第一義。

七手かく業

人のことわざ多かる中に、しなわかるるものは、手

かく業になむありける。そがなかに先づうち見てけぢめいちじるきものは、ゆきかひぶみの書きざまなりけり。はかなき筆のすさみに、あやしくも、あてにも、いやしくも見ゆるものにしあれば、いとつつましきわざなりや。

「しなわかる」 「手かく業」 「けぢめ」 「いちじるきもの」 「筆のすさみ」 「つつましきわざ」

○京都醫科大學豫科
○成蹊實務學校

要旨 「行かひぶりの序」の冒頭で、手紙の書き振によつて其の人の人品が知れるから、つゝしまなくてはならぬと戒めてゐる。

釋義 【人のことわざ多かる中に……いとつつましきわざなりや】

人のする仕事は澤山あるが、その中で、よしあしの等級の分れるのは、何といつても、字を書くことであるわい。人の書いた文字の中でも、先づ一寸見てうまいまづいの差別の著しくわかるもの

は、お互にやりとりする手紙の書き振であるわい。筆にまかせて一寸書いたものでも、不思議にも、それが上品にも下品にも見えるやうなわけのものであるからして、手紙の文字をかくときには、誠につつましまなければならぬ事であるわい。

「しなわかる」 品等がつく。等級が分れる。「手かく業」 字を書くこと。手 字の意。

「うち見て」 一寸見て。「けぢめ」 差別。茲は、上手下手の差別。

「いちじるき」 「いちじるしき」に同じ。目立って・顯著である、の意。

「ゆきかひぶみ」 互にやりとりする手紙の文。消息文。「はかなき筆のすさみ」 筆にまかせて一寸書いたもの。日常往復の手紙などをいふ。日用の手紙などは、別に念を入れず即座に書くから、かういつたのである。

はかなし (一) たよりない・もろい。(二) とりとめもない・一寸した・つまらない。茲は、第二義。

すさみ (一) いよいよ進むこと。(二) 心のすゝままゝに何かすること。興に乗じてすること・なぐさみ。茲は、第二義。

「あやしくも」 不思議にも。

「あて」上品。
 「いやし」下品。
 「見ゆる」 「見ゆる」といふべきを、ぼかしていつたものである。
 「ものしあれば」しは、強助詞で、語意を強めたり、語調を整へる爲に用ひる。
 「つしまし」 慎むべきである。又、遠慮される・恥かしい、などの意に用ひることもある。

八 谷の戸のはつ音

年あらたまりては、なに事かおはすらむ。春の日數もまだあさきに岡べの下もえは、今しも御袖にたまるばかりも摘みそめ給ひつや。谷の戸のはつ音は、いつよりか御朝いのまくらをばおどろかしまゐらせたる。いとなむゆかしき。

「なに事かおはすらむ」 「春の日數」 「岡べの下もえ」 「谷の戸のはつ音」 「朝こ」
 ○小樽高等商業學校

要旨 「陸月ばかり山里人のもとへ」といふ手紙の冒頭である。先方の情景を想像して述べてゐる。

釋義

【年あらたまりては。なに事かおはすらむ。……いとなむゆかしき】 新年になりましたが、どうしてゐらつしやいますか(御機嫌は、如何ですか)。春になつてから、まだいく日も日數がたちませぬが、岡邊の若草をば、今頃は御袖にたまるほど摘みはじめなさいましたか。谷の口を出た鶯の初音は、いつ頃から、御朝寝の枕元に聞えて来て、御目をお覺まし申したことでせうか。ほんたうに、その事が何ひたくてたまりませぬ。
 「なに事かおはすらむ」 どんな事をしておくらしなまつておいでになりますか。
 「春の日數」 立春から以後を春と見ていふのである。
 「岡べ」 岡のこと。
 「下もえ」 下萌。芽をだしたばかりの若草。地から萌え出ることを「下もゆ」といふ。
 「今しも」 今頃は。しは 強助詞。
 「給ひつや」 つは、完了の助動詞。
 「谷の戸のはつ音」 鶯の初音をいふ。拾遺集に「谷の戸をとぢや

はてつる鶯の、待つに音せて春も過ぎぬる。」とある。

谷の戸 谷の入口・谷口。

はつ音 はじめての鳴き聲。茲は、鶯の初音。

「朝こ」 朝寝。

「おどろかす」 目を覺まさせる。

「いとなむ」 下の、ゆかしきの係詞。

「ゆかし」 心がその方にゆかうとする義で、茲は、開きたく思ふ意。

九 澄みのぼる光

いでや、澄みのぼる光の高くあらはれて、人の目とどめむに、まばゆきばかりなるも、時のまにあやなき霧のまよひにかきけられて、ただ闇かとはばかりたどり、中空にしばしありと見ゆるも、やがて西になることのとどめ難きに、浮雲の定めなくて、昨日はさかえ、けふは衰ふる世の有様こそまづおぼゆれ。又浅茅が露に宿れども、處せくもおぼえず、海

原の波に浮びても、廣きを知られざるは、高きみじかき、おのがじしのすみかのきはぎはにつけて、身の安かる心しらひによそへつべきもあはれなり。

○名古屋高等商業學校

要旨

「對月言志」といふことを題にて書けることばの一節。月の遭遇する所とその態度とを、人世によそへてゐる。

釋義

【いでや、澄みのぼる光の高くあらはれて、……けふは衰ふる世の有様こそまづおぼゆれ】 さて、澄み昇る月の光が高空高くあらはれて、人がちつと見るのにまぶしい程であるが、それとすぐさま、わけのわからぬいやな霧の立ち迷ふ爲に掻き消されて、たゞもう闇であるかとはかり思ひ惑ひ、又、暫くは中天にあるなど見えても、すぐと西に傾いて行く事を止めることはむづかしいが、それを見るにつけても、かの浮雲のやうに定めがなく、昨日は榮え今日は衰へるといふ世の中の有様が、先づ第一に

い。それであるのに、今になつて、その優劣を判断していふことは、人の物笑ひにもなるに相違ない。さうではあるが、今これを批判するのは、理由がある。其の優劣は勿論彼の月花そのものには無からうけれども、各自見る人の身に引きくらべて考へる場合には、その一方に心の寄ること（その最良する方）が、どうして無からうか、必ずどちらか一方に寄るに相違ない。

「高きもみじかきも」 身分の高い人も低い人も。

「うむかしみ思へる」 賞愛すること。うむかしむは、うむがしと思ふ意。「おもかしむ」と同じ。うむがし（形）は、よろこぶ賞愛する。徳とする意の古語。續紀十七「伊蘇之義宇牟賀。義忘不給奈母」とある。

「餘れりとし」 趣味が多いとする。言ひかへれば、優つたとする、意。

「足らずとし」 趣味が足りないとする。言ひかへれば、劣つたとする、意。

「一かたに心をよす」 一方に心を寄せる、即ち、一方にのみ最良として優つたとする、の意。

「よしあし」 優劣。

「ことわりいふ」 判断していふ。判定する。批判する。

「人わらへ」 人笑はれ、の意。世人から笑はれること。世人の物

笑ひ。

「彼にはあらざれど」 「彼にはあらずあるれど」の省略。月や花そのものにはないやうであるが、の意。

彼 月や花を指す。

「たぐへ」 ひきくらべる。比較する。自分の身にひきくらべて考へる。自分の身に比較して考へる。

年年隨筆鈔

解題 年年隨筆六卷は、徳川時代に於ける國文和歌の名家石原正明の著である。即ち本書は、著者が享和元年（紀元二四六一年）から四年間に於ける年々の見聞感想、敘景、評論、訓戒、歴史、制度考證等を記した隨筆で、行文簡淨、頗る趣味に富んでゐる。

著者石原正明は、尾張名古屋の人。初名將聽、後、正明と改めた。通稱は喜左衛門、蓬堂と號した。初め漢學を修め、後本居宣長の門に入り、更に江戸に出て、塙保己一の塾頭となつた。人となり博覽卓見、最も有職の學に委しく、其の著冠位通考を見て、其の一端を知ることが出来る。和歌は達吟で、一萬首を詠出したならば始めて他人の評を請はんなどと言つてゐたが、六千首ほど作つた時或人に持去られ、遂に果す事が出来なかつた。最も新古今集の風體を好み、就中後京極攝政の氣韻を追慕して、人すまぬ不破の關屋の板びさし、あれにし後はたゞ秋の風。を第一義とし、常にこれによつたといふ事である。甥正俊が尾張に歸る時書いて與へた、尾張の家づとは、凡て宣長の美濃の家苞と反對の説を立てたものである。文政四年正月七日に歿した。年六十二。著書には此の外に、制度通考、名目類箋、百條補歷律解、百人一首抄勢語、章句、江戸職人歌合、臣連二造考、宰相通考等數十種ある。（二四二〇—二四八一）

一 ゆふべやまさりたらむ

ゆふべやまさりたらむ。村雨むらぐさなごりなくはれ、風いと涼しうて、山のはの雲いと白う、わざとならず

ところどころにかかれるに、いさよふ月の今出づべきにやあらむにほひうつりて見ゆる。あしたやまさりたらむ。峰の松原こき緑なるにあかねの色もゆるやうにて、日のなからばかりさし出でたる。

〔村雨〕「いさよふ月」〔にほひうつる〕「見ゆる」「あかねの色」〔なから〕

○神戸高等商業學校

要旨

朝景と夕景とは、それ／＼よいところがあつて、優劣を定めがたいといふことを説いてゐる。

釋義

〔ゆふべやまさりたらむ。……日のなからばかりさし出でたる〕景色は、夕方が優つて居るであらうか。村雨がからりと霽上り、風も非常に涼しく、山の端にある雲も非常に白く、如何にも自然的に處々にかゝつてゐるのに出ようとしてためらつてゐた月が、いよ／＼今出るのであらうか、その雲にほんのりと光が映つて見えるのは、如何にも趣が深い美景である。それとも、又、朝の方が優つて居るであらうか。峰の松原が濃い緑色を呈してゐる所へ、紅の色がもえるやうにあか／＼と輝いて、朝の太陽が半分ばかりさし出た美景は、これ亦いひやうもなく趣が深い。かく、夕景色は夕景色でまさるところがあり、朝景色は朝景色でまさるところがあるから、一概にその優劣は定められないやうである。

「ゆふべやまさりたらむ」夕方の景が優つて居るであらうか、どうであらうか、の意。下文の朝の景に比較していつた句である。

〔村雨〕「しきりづつ降り過ぎる雨。にはか雨・驟雨。

「なごりなくはれ」残りなく（あとかたもなく）霽上り。

「わざとならず」自然のまま。

「かかれるに」「かかれる」の下に「もの」の語を補ひその「もの」に「にほひうつりて見ゆる」と、意味が続くのである。

〔いさよふ月〕ぐづ／＼してゐてなかく／＼出ない月。だから十六夜の月を「いさよひの月」といつてゐるが、こゝは、十六夜の月と限らなくてもよい。

〔にほひうつりて云云〕ほんのりと光が映つて見える有様は甚だ趣味がある、の意。

にほひうつりて、ほんのりと薄い光がさして。

見ゆる 上に、第二の係詞がないのに、連體形で止めてゐるのは、この下に「ゆかし・趣あり」などの語が省略されてゐるのである。最後の「さし出でたるも、同様である。

比較して述べてゐる。

釋義

〔「散るぞめでたき。」と詠みしもことわりなり。……「とく枯れよかし。」とさへぞ思はるるや〕古人が、「櫻の花は、未練なく皆散つてしまふ所が、甚だよいのである。」と歌に詠んだのも、尤もなことである。櫻の花盛は、たゞ二三日位であつて、あんまり、あつけない氣持はするけれども、又來年の春には眺め、うと心がいら／＼して、自然と花の咲くのが待たれてならないのも、その盛の開が永くなくて散りやすい爲であるわい。之に反して唐桐といふものは、葉の様子も涼しさうであるし、花の色も非常に結構であるけれども、夏の中頃から、秋の末時分まで、たゞ同じやうな恰好に咲いてゐるので、飽き／＼してしまつて、「はやく枯れてしまへなあ。」とまでも、まあ思はれるわい。

〔散るぞめでたき〕古今集、春の部、讀人知らずの「残りなく散るぞめでたき櫻花、ありて世の中はての憂ければ。」の歌を指してゐる。一首の意は「とかく世の中といふものは、いつまでも存在してゐると、終りがよくないからして、櫻の花のやうに、未練なくさつぱりと散つてしまふのがよいのである。」

めでたし、「愛で痛し」の義。古くは、（一）愛すべきである・賞

「あかねの色」赤色の稍濃い色。紅色。
あかね 蔓草の一種。茜の字を當てる。その根は赤色の染料となる。
〔なから〕半分。

二 散るぞめでたき

「散るぞめでたき。」と詠みしもことわりなり。櫻の盛はただ二三日ばかり、あまりあへなき心地はすれど、又來む春はと心いられて待たるるも、久しからぬ故ぞかし。唐桐といふもの葉のさま涼しげに花の色いとめでたけれど、夏のなかばより秋過ぐるまで、ただ同じさまに咲きたるにあきはてて、とく枯れよかし。」とさへぞ思はるるや。

〔散るぞめでたき〕「あへなし」〔心いらる〕〔唐桐〕〔とく〕

○大分高等商業學校

要旨

櫻の花は早く散るために珍重がられ、唐桐の花はいつまでも咲いてゐるために、疎まれるといふことを、

すべきである。(二)よい・結構である・立派である・美しい。現今では、(三)お祝すべきである・慶賀すべきである。茲は、第二義。

「あへなし」敢無しの義。たのみにならない・はかない。茲は、張合がない・あつけない、意にとる。

「來む春」來る春。來年の春、の意。この下に「眺めむ・見む」などの語を補つて解するがよい。

「心いられ」心寄られの義。心がいら／＼とあせること。心がせくこと。焦慮する。

「待たるる」自然と待つやうになる。るは、自然相の助動詞。

「唐桐」赤桐・緋桐ともいひ、蒨桐ともかく。葉は圓くて尖り、花は紅色で、夏から秋まで咲く。暖國の産である。

「あきはてて」飽き／＼してしまつて。

「とく」疾く。

「かし」語尾につけて念を押し意を強めるにふ感動詞。

「思はるるや」やは、感動詞。

三 學問に志ある人

學問に志ある人は古と今とかはりし有様をよく

物の文面にあらはれた皮相の意味と、今の時代の世相とを比較し考へて、今かうであるから、昔もかうであつたらう位に大きつばにのみ吞込んでゐるから、さういふ人の昔の事に對する見解は、恰も霞んでゐる夜の月を見るやうであつて、はつきりしない事ばかり多いのである。

「古と今とかはりし有様」昔の時代から今の時代に移り變つて來た有様。

「心がくべきわざ」心掛けなければならぬ。

べき、茲は、當然の意をあらはす助動詞。

べしは、普通、推量の助動詞といつてゐるが、實際には、推量の外に、種々の意に用ひられる。今、之を概説しておく。

(一)當然(義務)……親には孝を盡すべし。(二)適當……明智光秀の逆意はにくむべし。(三)決意……御名殘惜しくは候へども、御暇申すべし。(四)可能……その知には及ぶべく、その愚には及ぶべからず。(五)命令……明日より登校すべし。(六)推量(想像)……誠にさもあるべし。(七)許容……さらば汝はいつにても歸るべし。

わざ、こと。

「けしからぬ」「怪しくあらぬ」で、「怪しがる」と同義に用ひる。異様な・思ひもよらぬ・案外な・意外な、などの意。

知り得むと心がくべきわざなり。古の事、今より見ては、いとけしからぬ沿革あるものにて、事によりてはゆくへも知らずうつり來たるものあり。然るをただ文章のうはべと、今の世のさまと思ひあはせて、大かたにのみ心得居るゆゑ、かすめる夜半の月見るやうにて、おぼおぼしき事のみなり。

【けしからず】「ゆくへ」「おぼおぼし」

○醫學專門學校

要旨 學問に志すものの心得を説いたもので、博く書を讀んで明確な智識を修得すべきであると誠めてゐる。

釋義

【學問に志ある人は、……かすめる夜半の月見るやうにておぼおぼしき事のみなり】 學問に心を向ける人は、昔から今に移り變つて來た有様を、よく知り得るやうにと、心掛けなければならぬものである。昔の事の中には、今から見れば、實に思ひもよらぬ變遷のあるもので、事柄によつては、さうなるまでの筋道もわからぬやうに變遷したのものもある。それなのに、單に昔の書

「沿革」うつりかはり。

「事によりては」事柄次第では、事柄によつては。

「ゆくへもしらず」見當のつかぬやうに。さうなる筋道もわからぬやうに。

ゆくへ、進みゆく先。なりゆき。

「うつり來たるもの」變遷した者。

「文章のうはべ」古書の文面にあらはれた皮相の意味。

「今の世のさま」現代の世相。

「思ひあはせて」合はせ考へて。比較して考へて。

「大かたにのみ心得居るゆゑ」よい加減にばかりのみ込んでゐるから。大きつばに解釋してゐるから。

「おぼおぼし」ぼんやりした。はつきりしない。

四 梅の花いとめでたし

梅の花いとめでたし。こと木の冬籠りたる中にほひいとこよなくて、氷のひまより打出づる波ならで、立ちならぶ花も無きは心とかりけりと思はるるがをかしきなり。

「こと木」 「心とかり」

○高等學校

要旨 梅の萬花に魁して咲くのをほめてゐる。

釋義

【梅の花いとめでたし。……心とかりけりと思はるるがをか
しきなり】 梅の花はまことによいものである。他の木がまだ冬籠
りをしてゐて枯れたやうに見える中から咲き出して、その趣が、
此の上もなくすぐれてゐて、氷の解けた隙間からあらはれ出る、
春の初花ともいはれる、白波でもなくては、之と早さを競ふ花も
ないのは、如何にも機敏だなあと思はれるが、その點が面白いの
である。

「めでたし」 愛すべきである。結構である。よくある。

「こと木」 異なる木。他の木。

「にほひ」 茲では、香ではなくて、色艶、又は趣の意。

「こよなく」 この上なく。

「氷のひまより云云」 古今集、春歌上、源當純の歌の「谷風にと
くる氷のひま毎に、うち出づる波や春の初花。」に據つて書いたも
のである。一首の意は、「春の谷を吹く風に、山川に張りつめた氷

も所々うち融けて、その隙間々々から白く噴き出す波は、恰も花
のやうに美しく見えるが、まだ一般の花が咲き出さない時である
から、之が春の一番がけだらうかしら。」
「立ちならぶ」 早く咲き出した點に於て肩を並べる。早さを競
ふ、意。
「心とかり」 「心敏くあり」の約。敏捷である。機敏である、意。
又、「心疾かり」とも、解せられるが、その場合は、氣早である、
意。何れかといへば前説の方が、趣が深いやうである。

五 鳥獸のなく聲

鳥獸は、なく聲に遅速緩急大小高低ありて、喜怒哀
樂の勢をうつすなるが、つづつと物語するばかり、
下の情の通ずるものなり、おのがどちかよふ詞
ありて、なきつつ物語するにあらず。鹿雀雲雀、鶯
雉などの笛によるにてしるし。笛の音に言語あ
るべきにはあらねど、遅速緩急高低大小をうつす
故鳥獸もしかぞとおもひてよるなり。公治長が

鳥語に通じたりといふ説は、よしなき事なり。

「喜怒哀樂の勢をうつす」 「しるし」 「物語るばかり」 「お
のがどち」 「笛による」 「しるし」 「しかぞとおもふ」 「公治長
が云云」

○東京高等商業學校

要旨 鳥獸には言語といふものはないといふことを説
してゐる。

釋義

【鳥獸は、なく聲に遅速……公治長が鳥語に通じたりといふ
説は、よしなき事なり】 鳥や獸は、その鳴く聲に、遅い速い、
ゆるいせはしい、大きい小さい、高い低い等の差違があつて、そ
れを以て喜怒哀樂の様子をあらはすのであるが、それが丁度人間
がこま／＼と話すのと、同じ程度に心の中に思つてゐることを相
手に傳へるのである。自分等の仲間同士に通じあふ言葉があつて、
鳴き／＼談話を交はしあふのではない。その事は、鹿・雀・ひば
り・いへばと・きじなどが笛の音を聞いて寄り集つて來る事實に依
つて明白に知ることが出来る。それは、別に、笛の音には言語の
あらう筈はないが、それが音の遅速・緩急・高低・大小をあらはす

から、鳥や獸も、それを聞いて、自分の仲間の者が鳴いてゐるの
であると思つて、寄せ集つて來るのである。かく言葉、なきない笛
の音を聞いて、仲間の聲と聞き誤るところから立證して、鳥獸の
聲は、言葉をなしてゐないといふことがわかる。それ故、昔公治
長といふ人が、鳥の言葉を聞きわけたといふ説は、いはれない
ことである。
「勢をうつす」 様子をあらはす。
「しるし」 つぶさに。つまびらかに。くはしく。細々と。
「物語るばかり」 談話をするくらゐに。
「下の情」 心の奥底の感情。心に思つてゐること。
下 胸中、の意。
「おのがどち」 自分の仲間同士。
どち 同類、の義を示す接尾語。
「かよふ詞」 通じる言葉。
「鶯」 いへばと「家鳩」ともかく。家に飼はれる鳩のこと。
「笛によるにてしるし」 笛の音を聞いて寄せ集つて來る事實に依
つて、言葉があるのではないといふ事がよくわかる。
しるし 明白である。著明である。よくわかる。
「しかぞと思ひて」 さうだと思つて。自分達の同類の鳴いてゐる
聲である（鳴いてゐるのである）と思つて。

しか。然。或事物を指していふ語。
 「公治長」公治は姓、長は名。孔子の弟子。よく鳥語を解し、或人の死屍の所在を知つて、其の母の老嫗に告げたので、殺人の嫌疑を受けて、投獄されたといふ説が、梁の皇侃の著した論語義疏に見えてゐるが、それは好事者の偽作になつたもので、固より取るに足らない。「公治長云々」の句は、その説を非難したのである。
 「鳥語に通じたり」鳥の言葉を聞いてその意味がわかつた。
 「よしなき事」いはれのなきこと。

泊酒文藻鈔

解題 泊酒文藻四卷は清水濱臣の文集である。濱臣は、號を泊酒舎といつたから、かく名づけたのである。その文章は、穩籍雅潤興趣縱横まことに當代拔群の才筆である。

著者清水濱臣は、姓は藤原、元長と稱し、江戸下谷不忍池畔の萱町に卜居してゐたので泊酒舎と號し、又月齋とも號した。江戸の人で、醫を業とした。幼少の頃から國學和歌が好きで、醫術の傍ら村田春海の門に學び、頗る文筆に長じ、博覽強記であつたから、師春海に愛せられた。雅文については師の衣鉢を嗣いで一家をなし、文學史上に其の名を印した。性質が濃厚で人と争ふことを好まず、従ひ學ぶものには懇切に教示したので、門人が頗る多く、其の中で、前田夏陰が最も著名である。權門では、關宿侯林田侯などが禮を厚くして其の教を聞き、濱臣の家集の序は、此の兩侯が書いた。文政七年八月十七日に四十九歳で歿した。著書頗る多く、泊酒文藻の外、主なものには、杉田日記伊勢物語添註源氏物語名寄圖考後撰和歌集補註等がある。(二四三六—二四八四)

一 水 鶏

殿へまゐりたれば、庭の遺水清うはしらせて、石の

たてかたもかどあるに、よしある梢ども色をふかめて、散りのこりたる卵花垣もあはれおぼゆるを、かたへには、さゆりなでしこ、今をさかりと色を交

へて露涼しげなる、とりどり言はむ方なきに、夕立ひとしきりして、光ぬれたる月影波に浮べるに、釣殿のもとにて水鶏のうちたたきたるが、耳にさしあてたるやうなるぞ、昔物語の心地して、いと艶におぼえけるかし。

〔遣水〕「かど」 「色をふかむ」 「とりどり」 「耳にさしあてたるやうなるぞ」

○廣島高等師範學校

要旨 或御殿へ参つて、水鶏を聞いた事を記してゐる。全文一つの切れ目なく、次から次へと續けてあるから、句と句との續き具合を、よくわかるやうに説いてゆくことが必要である。

釋義

【殿へまゐりたれば、庭の遣水清うはしらせて、…いと艶におぼえけるかし】 御殿へ参上したところが、庭内には清らかな水を引き入れて、それが早く流れるやうにしてあり、石の立て方にも一かどの趣があるやうにしてあるが、その上にもなほ、如

「たたき」 たゞくやうな風に鳴く。

「耳にさしあてたるやうなるぞ」 耳にあてて聞くやうにすぐそばで鳴いてゐるのは、の意。源氏物語夕顔の巻に「壁の中のきりり」すだに…耳にあてたるやうに鳴きみだるゝをなかく様かへておぼさる。」

備考

【寢殿造】 平安朝時代の公卿貴族の邸宅として用ひられた建築の様式である。中央に寢殿があつて南面し、その東西と北とに對屋がある。東西の對屋からは南へ通ふ廊下があり、その兩廊下の各先端には、池に臨んで一屋が構へてある。東にあるのが泉殿で、西にあるのが釣殿である。この東西兩廊の中間に各々門があつて、これを中門といふ。それから寢殿の前面には池を掘り、その中には島を築いてこれを中島といふ。この一群の建物の西面には四脚門といふのがあつて、これを正門とする。外來者は、この門を入り、次に西の中門をくぐつて、直ちに寢殿の前なる中庭に出たものである。

寢殿即ち正殿は主人の常に居る所で、また來賓を接待する所ともなつてゐた。對屋は家族眷屬の居所であつた。また東西の廊内には、家司・所従の役所々々があつて、従者も伺候してゐた。泉殿

何にも風情に富んだ梢々も一入緑の色濃く繁りあつて、散残つてゐる卯の花の垣根も、しみんとした情趣が感ぜられるのに、そのわきには百合や撫子が今を盛りと美しい色をまじへて咲きそつて、それに宿つてゐる露も如何にも涼しさうで、皆それらに言ひやうのないほど面白と思つて見てみると、そこへ夕立が一しきり降つて来て、光の濡れたやうな月の姿が、波に浮んでゐる時しも、釣殿の下で、水鶏が、戸を叩くやうな聲で鳴くのが、耳のすぐ近くで鳴くかのやうに聞えるのは、何だか昔物語にある事のやうな氣がして、實に優雅な感に打たれた事であるわい。

「殿」 高貴の人の住む宏莊な家屋。やかた。

「遣水」 庭園に導いた流水。

「かどある」 一かどある。一ふしの見所がある。

「よしある」 趣ある。由緒ある。風情ある。

「色をふかめて」 緑の色を濃くして。

「さゆり」 百合のこと。さは、接頭語。

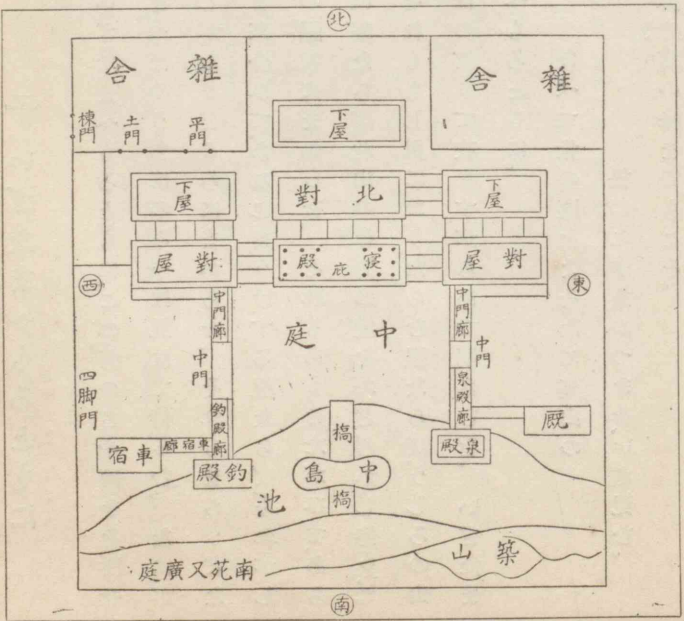
「とりどり」 それら。

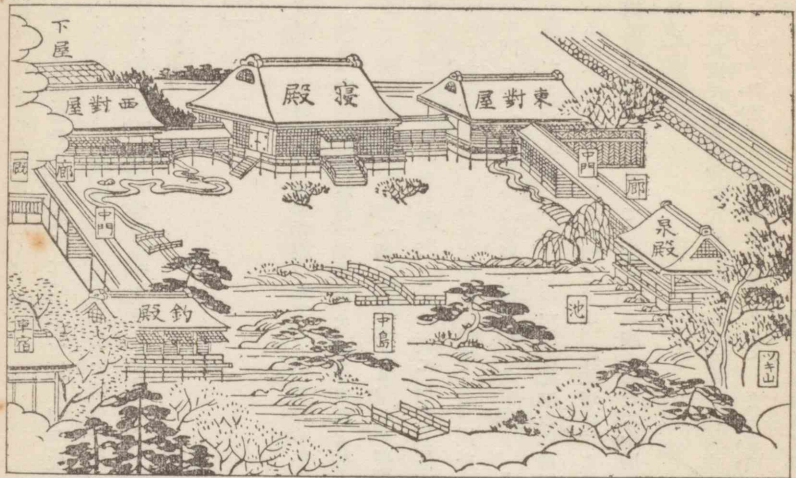
「光ぬれたる月影」 濡れたやうに光つてゐる月の姿。

「釣殿」 寢殿造の右翼の廊の南端に、池に臨んで建てた屋。

「水鶏」 鶏の雛に似てゐて、水邊に住んで鳴く。その鳴聲が、人家の戸を叩くやうに聞える。

と釣殿とは、池に臨んで建てられてゐるため、納涼・覽月などに用ひられた。釣殿ではまた釣をしたこともあるやうだ。





二 いざたまへもろともに

いざたまへもろともに、この月のさやけきを所せきつぼのうちのみやは見はて侍らむ。なにがしがなりどころにまからむ。それもまらうどなど來合ひて、あるじまうけする程ならば、それがしの隠家かくれがにまからむ。それもありきたがひて、あらぬ程ならば、北山の律師りしの室むろをおどろかし侍らむ。それももし里りにおりたらむ程ならば、うしろの山のぼりて、夜もすがらめで明さむを。いざたまへもろともに。

なべて世の塵をよそなる高山の

松のこすゑのつきを、いざ見む。

蘇迷廬そめいろの峰までもこそ。

「いざたまへ」「所せきつぼのうち」「なりどころ」「まからむ」「まらうど」「あるじまうけ」「ありきたがひてあらぬ程ならば」

〔律師〕〔明さむを〕〔蘇迷廬の峰〕

要旨 月の夜、友のもとにおくつた、月見誘引の趣味の消息文である。

釋義

【いざたまへもろともに、……蘇迷廬の峰までもこそ】

さあ参りませう御一緒に。この月の明らかなのに、狭苦しい庭の内ばかり、眺めて済ましてしまはれませうか、さうはゆきません。甲君の別荘に参りませう。だがそれも、他に客などが来てゐたりして、御馳走などしてゐるやうな場合でしたら、乙君の閑居に参りませう。若し乙君も出ちがつて不在でしたら、北山の律師の座室を不意討に訪問してやりませう。だが律師も若し、山から里に下りてゐる留守の場合だつたら、うしろの山に登つて、終夜月色を賞して明かませうよ。さあ参りませう、御一緒に。

ませうよ。

須彌の峰までも行きませうよ。

「いざたまへ」さあまゐりませう、の意。

いざ、人を誘ひ立て促す意の感動詞。

たまへ、補助的敬動詞であるから、「いざ行きたまへ」といふべきを、習慣的にかう用ひたのである。

「所せき」狭苦しい。

「つぼのうち」庭の内。

つぼ、建物の間にある庭をいふ。

「なにがし」実際には、友の名が書かれてあつた筈である。

「なりどころ」別荘・下屋敷。

「まからむ」まかは、漢字では罷ると書く。本来は「参る」に對する語で「参る」は、身分の低い者が、高い人の方へ行く意、

「罷る」は、高い人の前から退出する意。後には、それが混用されて、「罷る」は只行く意になり、尙又「無事罷在候」などのやうに、單なる接續語ともなつた。茲では、行く意。

「まらうど」稀人の義。客人。

「あるじまうけ」饗應。馳走。主人がいろいろの設をして、客に對する義。

「隠家」隠棲。閑居。世の煩累をさけて静かにかくれ住んでゐる所をいふ。普通には「隠家」と書くが、實際は「隠所」と書くのを正しいとする。

「ありきたがひて」出でちがひて。ありきは、あるくの古言。

〔律師〕戒律を保つた徳望高い僧。又僧官(僧正・僧都・律師)の

一。五位に准ぜられた。茲は、何れにとつてもよからう。
「おどろかし侍らむ」不意を襲つて訪問しよう、の意。
侍り、本来貴い人の傍に侍坐する意であるが、自分の動作につけて相手を尊敬する意味の補助的敬動詞として、對話又は書簡文に用ひられる。茲も、その意。

「夜もすがら」終夜。

「明さむを」このをは、感動の助詞。

「なべて」すべての。

「蘇迷廬の峰」須彌山。須彌山は、佛教でいふ最高峰で、世界を構成してゐる山だといふ。大海の中にあつて、高さ八萬四千由旬、日月は、之を中心として廻り、四洲・諸天は之によつて支へられてゐるといふ。

蘇迷廬 梵語 Sumeru の音譯で、妙高の意である。

三 きぬた

近しときけば遠く遠しときけば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。雁がねのきぬたをさそふにやあらむ。きぬたのねの雁がねにかよ

に、砧の音が雁に通じて、雁をして調子を合せて鳴かせるのであらうか。どうも變である。それはさうと、この砧の音を聞くとき、妙に悲哀の感を感させるが、これは砧の音そのものが悲しみを感ぜさせる性質をもつてゐるのか、これを搦つ人の住んでゐる里が淋しい爲であるのか、それとも亦、搦つ季節が秋といふ物悲しい折である爲であるのかしら。いや皆違つてゐる、實際はそれを聞く人の心が物さびしく悲しいので、さう聞きとれるのである。

「きぬた」きぬいた(衣板)の約。砧・搦衣と書く。槌で布帛を搦つに用ひる木や石の臺。又、それを搦つこと。又、その音。茲は、その音。

「しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる」しげく續いて聞える音も、間もなく緩やかになり、緩やかに聞える音も、間もなくしげく續いて来る、意。
しきる しげく續く。頻繁になる。

「雁がねのきぬたをさそふにやあらむ。云々」雁の鳴く時、丁度砧の音もするが、あれは雁が砧をさそひ出して搦出させるのであらうか、それとも砧の音がすると、それが雁に通じ、雁はその爲に誘ひ出されて、鳴き渡るのであらうか、の意。
かよふ 通じる。感ずる。
「みなあらず」皆さうではない。

ふにやあらむ。あなあやし、あなあやし。そもこの音のかなしきか、すむ里のさびしきか、うつをりのうきがゆるか。みなあらず、聞く人のこのころのわびしきなり。

「しきるもたゆむ」「きぬた」「かよふ」「あなあやし」「わびし」

○山口高等商業學校
○廣島高等師範學校

要旨 砧の音を聞いての感想を述べたもので、詩趣豊かな文である。

釋義

【近しときけば遠く、……聞く人のこのころのわびしきなり】おや、砧の音がしてゐる。あゝあゝの砧の音は、近いなと思つて聞くと遠いし、遠いなと思つて聞くと近いやうでもある。頻繁に音がしてゐるかと思ふと、その内にゆつくりになり、ゆつくりしてゐるかと思ふと、その内にまた頻繁に音がして来る。おやよく聞く、と、砧の音の中には、雁の聲がまじつてゐるぞ。これは、雁の聲が砧の音をさそひ出して搦出させるのであらうか、それとも反對

あらず、しかあらず。さにあらず。さうではない、意。
「聞く人のこのころのわびしきなり」それを聞く人が、物淋しい心を持つてゐるから、その爲に悲しいのである、の意。
わびし ものさびしく悲しい。

四 いでや水を見よ

いでや水を見よ、荒海のしほのみちひも、山川のたぎつはや瀬も鏡なす池の面のさざなみも、水の心にかはることやはある。廣きには深く、早きには勢つよく、所せきにはおのづからこまやかに、ほどほどにそのけぢめ見ゆるぞかし。

「たぎつはやせ」「水の心」「けぢめ」
○東北帝國大學農科大學豫科

要旨 「心適庵記」の冒頭である。水はその環境に従つて種々に姿態を變へるが、水そのものの本質は少しも變ることがないといふことを説いてゐる。

釋義

【いでや水を見よ……ほどほどにそのけぢめ見ゆるぞかし】
さあ水を見なさい、荒海の潮の満ちたり干たりすることも、山の中
の川の沸きかへるやうに流れる早い瀬も、鏡の様に平静な池の
面の漣も、皆水そのものの本質に於て變りがあるか、ありはし
ない。廣い所では勢強く、狭い所では自然と細流となり、その場
合々々によつて、その差別が見えるものであるわい。

「うてや」さあ。

「山川」山間を流れる川。

「たぎつはや瀬」沸きかへるやうになつて流れる早い瀬。

「たぎつ」沸きあがる。逆巻く。泡立つ。

「はやせ」流れの急な瀬。

「水の心」水の本質。

「ことやはある」やは反意の助詞。

「ほどほどに」場合々々よつて。

「けぢめ」差別・區別。

五心のたゆみ

土さへさくくる心地したるほどは、ことわりの暑さに
に思ひなして、さまでも覺えざりしを、御被川に流

く覺ゆるよ】

非常な暑さの爲に、地面までも乾割れるやうな氣
持のした盛夏の間は、當然な暑さと思ひあきらめて、き程苦しい
とも感じなかつたのに、あの六月晦日の禊をして、總ての罪穢と
共にさらりと川へ流してやつてしまつたやうに思つて念頭から
去つてゐた夏の餘勢(殘暑)が、またもや再びもりかへして來て、
昨日も今日もから暑くなつては、眞夏の暑さよりも、却つて、怪
へきれなく感じるわい。

「土さへさくくる」暑さの厳しい形容で、強烈な日光の爲に地面が
乾割れて龜裂を生ずるをいふ。

「ことわりの暑さ」道理にかなつた暑さ。當然の暑さ。尤も千萬
な暑さ。

「思ひなして」思ひ諦めて。覺悟して。觀念して。

「御被川」みそぎを行ふ川。固有名詞ではない。

御被 禊とも書く。「身激ぎ」の義で、身の罪穢を祓ふために、川
原に行つて、水を浴びて、之を流し去る意である。我々の祖先は
頗る心身の清淨を尙び、隨時に御被をしたが、殊に六月の晦日と
十二月の晦日には、大祓と稱して大勢河原に集り御被の式を
行つて、半年分の罪穢を川へ流し去つたものである。其の後にな
つては、實際に水浴をすることなく、人形を作り、それで身體を
撫でて川に流すやうになつた。本文では、六月晦日即ち夏の最終

しやりつるやうに思ひ捨てたる夏のなごり、又も
たちかへりて、昨日今日となりては、なかなか堪
へがたく覺ゆるよ。あやしくさるべきことども
こそあらね。さるは庭のさまを見るにも、しなえ
よらるるばかりの日影ともなく、袖ふく風も身に
しみそめぬるに、いかなればかく覺ゆるにやあら
む。思ふに心のたゆみにこそありけれ。(遊京漫
録)

「土さへさく」 「ことわりの暑さ」 「御被川」 「なかなか」

「さるべきこと」 「しなえよらる」 「心のたゆみ」

〇高等學校

要旨

眞夏の暑さよりも却つて殘暑の方が堪へ難いと
いふことと、かく感ずるのは、思ふにそれは氣のゆるみか
らであるといふことを述べてゐる。

釋義

【土さへさくくる心地したるほどは、……なかなか堪へがた

日の御被をさす。小倉百人一首の「みそぎぞ夏のしるしなりける」
とあるのは、「みそぎが行はれるのが、夏の終つたといふしるしで
ある」といふ意味である。

「夏のなごり」夏の餘勢・夏の残り。茲は、殘暑をいふ。

「たちかへりて」立戻つて來て。再びもりかへして來て。

「なかなか」却つて、の意。

【あやしくさるべきことどもこそあらね。……思ふに心のた
ゆみにこそありけれ】 どうもをかしいな、そんな事のあらう道
理がない。といふのは、庭の様子を見ても、草木の葉が萎れて搦
れ／＼になる程の強烈な日光である譯でもない、又朝夕、袖を吹く
風もだん／＼と肌に沁みはじめて來たのに、何だつてこんなに堪
へ難く感じるのであらうかと考へて見ると、これはどうしても氣
のゆるみに原因するのに相違ない。

「あやしく」不思議に。變に。妙に。

「さるべきこと」そんな筈の事。

「しなえよらるる」萎みよられる。強烈な日光の爲に草木の葉が
搦れ／＼になる意。

「日影ともなく」日光といふ譯でもなく。日光であるといふ譯で
もなく。

日影 茲は、日光、の意。

「心のたゆみ」心持の弛緩。油斷。怠り。

【遊京漫録】 上下二卷。清水濱臣著。東海道・伊勢路・京阪地方を漫遊した際の紀行・見聞・感想等をしるしたものである。

花月草紙鈔

解題

花月草紙六卷は、樂翁公松平定信の隨筆である。大は政治經濟道德から、小は雜藝身邊の些事に至るまで、自然人事の兩界に互つて、著者の耳目に觸れた事象に對しての感想を録したもので、その根柢を流れてゐるものは、どこまでも儒教主義の倫理觀で、著者の理想を窺ふに足ると同時に、徳川時代そのものを具現してゐるものである。この教訓に囚はれた點が枕草紙などと異なる所で、その文學的價値を低めてゐるとはいへ、流暢で才氣に富んだその擬古文は皮肉あり諷刺あり、世の生氣に乏しい乾燥な擬古文とは大いに撰を異にしてゐる。書名は、卷中に花と月との事が屢記してあるので、かく名づけたのである。自筆の刊本の外、百家説林名著文庫等に收めてある。

著者松平定信は、權大納言徳川田安宗武の第三子で、八代將軍徳川吉宗の孫である。幼名は賢丸、字は貞卿、旭峰と號し、致仕してからは樂翁と號した。寶曆八年十二月廿七日江戸田安の邸に生れ、幼より聰明學を好んだ。安永三年十一月幕命により磐城國白河城主松平定邦の掣養子となり、上總介と稱し天明三年封を嗣いで従四位下越中守に敘任せられた。當時幕府では田沼意次が權を専らにして弊政を行ひ紀綱大いに紊れ、加ふるに天變地妖頻りに至り凶作相次いで、世に所謂天明の飢饉であつたが、ひとり定信の封内は治績大いに擧がつたので、同七年擧げられて老中の上座となり、將軍家齊を輔佐して銳意治を圖り奢侈を戒め文武を獎勵したので、徳川季世の極盛期たる寛政の治をなすに

至つた。即ち儲蓄米の制、七分野の令、内裏の造營、無宿者の取締、土庶を問はず聖堂の入學を許可した事、寛政異學の禁、海防の警備等が其の主な治績である。寛政二年光格天皇が閑院家から入つて大統を嗣ぎ給うてから、御生父典仁親王に太上天皇の尊號を奉らうとした時之に反對したため同様の境遇にあつた家齊に疎まれたので、同五年七月職を辭した。時に左近衛少將に進んだ。文政十二年五月十三日年七十二で卒した。世に白河樂翁とも、白河の少將とも稱し、又ある時「忘往所戀」といふ題で「心あてに見し夕顔の花散りて、尋ねぞ迷ふたそがれの宿」と詠んだので、たそがれの少將とも稱した。著書頗る多く、集古十種、八五卷は考古家美術家の好参考書として名高く、又林述齋、成島司直等に命じて朝野舊聞ぼん稿一〇九三卷、徳川實紀五一六卷を編せしめて、徳川氏の創業及び歴世の事蹟を明らかにした外、花月草紙、輿事圖考、大學經文講義等數十種ある。(二四一―二四八九)

一 櫻てふ花(一)

なしと聞けば、ありといはまほしく、あしといふをば、よしとことかへていはむこそ、いとねぢけたることなれ。櫻てふ花は、わが國のものなるを、からくにもありとて、さまざまためしなどひきつく

れど、櫻かいたるもろこしの畫もなく、かなへりと思ふからうたもなければ、なしとこそいふべけれ。「ことかへていふ」「ねぢけたること」「ひきつくる」「かなへり」

○醫學専門學校

要旨 (一)(二)に互りて、櫻のことを書いた「花」

と題する文の前半である。

そして(一)は、櫻は日本獨特のものであることを論證してゐる。

釋義

【なしと聞けば、ありといはまほしく、……なしとこそいふべけれ】 人が「無い。」といふのを聞くと、「いや、有る。」といつて見たかと思つたり、人が「悪い。」といふのを「いや、善い。」と反對に言はうとしたりするの、甚だひねくれたわるい事である。あの櫻といふ花は、我が國獨特のものであるのに、支那にもあるといつて、色々例などを無理に引張つてこじつける者があるけれども、櫻を描いた支那の畫もないし、櫻に適合してゐると思はれるやうな漢詩もないのであるから、支那には櫻が、無いといふのが至當であるなあ。

「いはまほしく」言ひたがり。

「ことかへて」事を反對にとつて、即ち、反對に。「言換へて」即ち、言葉を換へて、とも考へられる。

「ねぢけたる」心の曲つた。

「p.4」「とふ」の約。

「わが國のもの」我が國獨特のもの、の意。「からくに」唐國。もろこし。支那のこと。「ためし」例。「ひきつくれど」引きつけるが。無理にこじつけるけれども、牽強附會するけれども。「かなへりと思ふからうた」櫻に適合する(あてはまつてゐる)と思はれる漢詩。即ち、内容がよく櫻のことをうたつたものであると推定されるやうな詩、の意。からうた 漢詩。和歌を「やまとうた」といふのに對していふ稱。

二 雲か雪か(二)

いでや櫻といはでしも、花とだにいへば、異木にはまぎれぬものを、ほのぼのと明け行く山際、雲か雪かとはかり咲きみちたるも、霞こめたるゆふまぐれ花のけはひもおぼろに見えて、ごこにのみ暮れのこす景色などいふは浅かりけり。まいてうてなのびやかなれば、近おとりするなど言ふは、か

のことかへてざえおふ心にいふことなりかし。
「いはてしも」「ほのぼのと」「山際」「けはひ」「まじつ」
「うてな」「近おとり」「ざえおふ」

○新潟醫科大學豫科

要旨 前節の続きである。櫻が、形容や批評を超越した名花であるといふことを説いてゐる。

釋義

【いでや櫻といはでしも、花とだにいへば……ざえおふ心にいふことなりかし】 いやもう、あらためて櫻と言はなくても、たゞ單に花とさへいへば、それでもう他の木とは、紛れないほどの名花であるのは、わざ／＼色々と形容を巧んで、ほんのりと夜の明けて行く山のきはに、雲か雪かと思はれるほど、一ぱいに咲いてゐるのも面白い。とか、また「霞の一ぱいかゝつてゐる夕暮時に、花の様子もぼうつとおぼろに見えて、そこだけが、日が暮れずに残つてゐるやうになつて景色が面白い。」などといつてほめたてるのは、却つて淺はかな考である。まして「花梗が長く延びたやうになつてゐるから、近く寄つて見ると、見劣りがする。」などといふのは、例の、何でもわざと反對に言つて、自分の才氣を鼻

にかける心からいふことであるなあ。

「いでや」 いやもう。又は、ところで。

「いはてしも」 いはなくても。しは、強助詞。

「異木」 他の木。

「ほのぼのと」 ほんのりと。しら／＼と。夜のうす／＼明けてゆくさま。

「山際」 山と他の物のさかひ。山の輪廓に沿うた空。この下に「に」を補つて見るがよい。

「霧こめたる」 一面に霞がかゝつてゐる。

こむ つゝむ、意。

「けはひ」 様子。

「暮れのこす」 他の所は暮れても、そこだけは暮れないで明かす意。

「淺かりけり」 淺はかな考である。淺薄な心である。

「まいて」 まして。

「うてな」 萼。茲は、花梗の意。

「のびやかなれば」 長いから。

「近おとりするなどいふは」 近寄つて見ると、却つて見劣りがするなどといふのは。此のするは「す」とある方が穩當である。
「ざえおふ心」 己の學才を自負する心。才氣ぶる心。

ざえ 「才」の字音の轉じたものである。

三月のさしのぼる頃

月のさしのぼる頃、曙のそらおぼえて、横雲のたなびきたるにやや匂ひそめたれど、遠山の梢にいざよつて、姿も見えず、からうじてさし昇りけり。梢のうさも晴れにけりと思へば、いつしか雲の一つ出で來たるが、近よる程、あやにくに月の方より雲の中にかき入るやうに見ゆ。

「曙のそらおぼゆ」「匂ひそむ」「いざよつて」「梢のうさ」「あやにくに」

○高等學校

○専門學校入學資格試験

○東京女子大學豫科

要旨 「月」と題する文の冒頭の一節。待つてゐた月がやう／＼のことで昇つたので、よろこぶ間もなく雲にかかれてしまつたといふことを述べてゐる。

釋義

【月のさしのぼる頃、曙のそらおぼえて……かき入るやうに見ゆ】 月の昇る時分、丁度夜明の空に似て、横に長い雲がたなびいてゐる處へ、ほんのりと光がさしかけて來たけれども、なほ遠山の木々の梢のところでぐづついてゐて、容易に姿をあらはさない。氣を腐らして暫く待つてゐると、やつと、梢をはなれて昇つて來た。もう梢に邪魔されて見えないといふつらさも、掃ひのけられてしまつて、あゝ嬉しいと思つてゐると、何時の間にか出で來た一片の雲が、月の方へ近寄つてゆくうちに、今度は意地悪くも月の方から雲の中に這入つて行くやうに見える。

「さし昇る」 さしは、接頭語。

「曙のそらおぼえて」 明け方の空が聯想されて。明け方の空に似て。明方の空のやうな氣がして。

おぼゆ 「おもほゆ」の約。思はれる・聯想される、意。

「たなびきたるに」 たなびいた處へ。

「たなびく」「靡く」に接頭語の「た」が冠せられた語。横長くすうつと曳く意。(柵引は宛字で、柵のやうに引く意ではない。)

「やや匂ひそめたれど」 ほんのりと月代(つきしろ)の月の出ようとする時仄かに空の白くなること)がさし初めて來たが。

「いや、茲は、いくらか・少しの意で、ほんのりと、と解くがよい。
「いざよひて」「いざよひて」の音便。ぐづ／＼してゐて。ため
らつてゐて。ひまどつてゐて。

「梢のうさも晴れにけり」月を見るのに梢が邪魔になるといふ心
配もなくなつた、の意。

うさ、心配・気がかり。

「雲の一つ出て來たるが」「一つ出で來たる雲が」の意で、出で
來た一片の雲が、と解くべきである。

「あやにくに」生憎に。意地悪く。

「かき入る」かきは、接頭語。

四 久方の空にまかす

「久方の空にまかせて、我がささやかなるざえを用
ひざれ。」とはいへど、空にまかすに深き心あるべ
し。星の光みても「はや沖はあらし風吹きいでつ。
このあたりは、明日の晝つかた吹きくべし。」といふ
ことも知れば、心して乗るを空にまかすとこそ
はいはめ。沖の風吹くも吹かぬもとはずして、今

を見ても、「あの星の光の様子では、もう沖の方には暴風が吹き
出した。この邊へは、明日の晝時分吹いて來るであらう。」とい
ふことを知つてゐるので、注意して舟に乗るといふやうなやり方
をするのを、天運に任せるといふのであらう。沖の風が吹いてゐ
ようがぬまいが、そんな事にはかまはないで、今此の邊の波が穏
かであるからといつて、すぐ漕ぎだしてゆくといふやうなやり方
を天運にまかせるといふのではあるまい。食物についていつても
さうである。凡て養生になる方法を十分にとつて、飲食の程合を
慎んで後、生死を天運にまかすべき筈であるのに、養生の事は念
頭に置かないで、たい食ひたいまゝに食ひ飲みたいまゝに飲むと
いふ様に、自分の欲することばかり氣儘に行つてゐて、それで生死
を天運に任せてゐるのであるといつてゐるやうな事もあらうが、
それは甚だしい間違である。

「久方の空にまかせて」運を天にまかせて。天命にまかせて。

「久方の」天(空)・あめ・月・光等天體に關する事に廣く冠する枕詞。

「空」天、即ち、天運、などの意。

「ざえ」才智。

「ささやか」少しの。

「深き心」深い意味。

「知れば」これは、完了の助動詞。

ここの波平かなれば、はや漕ぎいでて行くを空に
まかすとはいはじ。もの食ふものにもあれ。
すべて身をやしなふ道をつくし、そのほどを慎み
て後、いきしにを空にまかすべきを、やしなひのこ
とは心とせず、ただおのがほりする事にのみ隨ひ
て、生死をそらにまかすといふこともありぬべし。

「久方の空」「ささやか」「深き心」「心す」「身をやしなふ道」

「ほどを慎む」「ほりする事」

○東京女子大學豫科

要旨 天運に任せるといふことに關しての誤解を解い

てゐる。

釋義

「久方の空にまかせて、我がささやかなるざえを用ひざれ。」
とはいへど、……生死をそらにまかすといふこともありぬ
べし」 「何事をも天運に任せて置いて、自分のわづかな才能を用
ひてはならぬ。」といふことがあるけれども、天運に任せるといふ
事については、深い意味がある筈である。譬へば、星の光りあんばい塵梅

「心して」注意して。用心して。

「いはめ」言はう。言ふのであらう。上の「空にまかすをこそ」
の結詞。

「とはずして」かまはないで。頓著しないで。

「身を養ふ道」養生法。

「そのほどを慎みて」その程合(節度)をも守り慎んで。自分の
身體に應じて、飲食を節制することをいふ。

「心とせず」注意しないで。

「ほりする」欲する。

五 道まねぶ人

「かの人は雪瑩ゆきたるとあつめし窓に年を積みて、書ふみ見る道
に心を盡し侍るなり。されば世の中の事には、い
とうとく侍り。」といへば、さるこそまことの道まね
ぶ人なりけれ。」と、ほめものするものありとや。も
とより道まねぶものは、五つの常五つの道よりし
て、人を治め己を修むる道まねぶより外のこと
なし。されば世の事にさとく、今のあたりのみか

は、千歳ちとせの前つ世のこと、見ぬもろこしのむかし今のさまより、盛り衰ふるきざし、人の心の上より、仕ふる道のくさぐさに至るまでも、明かなるをこそ道まねぶ人とはいふべけれ。この世のことにおろそかにては、いかで道まねぶ人とはいふべからむ。

「雪ゆき・螢あつめし・螢あつめし」 「書見る道」 「まねぶ」 「ほめものす」 「ありとや」 「五つの常」 「五つの道」 「さとし」 「今のあたりのみかは」 「きざし」 「くさぐさ」 「おろそか」

- 桐生高等染織學校
- 岡山醫學專門學校
- 小樽高等商業學校

要旨 世情に暗くしては、學者たるの資格がないといふことを述べてゐる。

釋義

【かの人は、雪・螢あつめし窓に年を積みて、……いかで道まねぶ人とはいふべからむ】 「あの人は、長年の間、學窓に

研究を重ねて學問に力を盡してゐるのである。それ故、世間の事情には甚だ暗くして何も知らないのであります。」と或人がいふと、「そのやうな人こそ、眞實に道を學ぶ人であるなあ。」と賞讃する人もあるといふことである。いふまでもなく、道を學ぶ人は、五常(仁・義・禮・智・信)・五倫(義・親・別・序・信)の道を始めとして、人を治め己を修養する道を學ぶより外の事はないのである。それであるから、世間の事情によく通じて、現今の事ばかりでなく、千年前の世の事や見た事もない支那の古今の有様を始めとして、世の盛衰の兆候、人の心の状態、君に仕へる道の種々の事に至るまで、よく知つてゐる人であつてはじめて、その人を眞に道を學ぶ人といへるのである。この世間の事情に暗くしては、どうして道を學ぶ人となることが出来ようか、出来ない。

「雪・螢あつめし窓」 學窓。晉の孫康・車胤の故事から起つた語。

「年を積みて」 長年を経て。

「書見る道」 書物を讀む道。學問。

「心を盡す」 精力をつくす。眞剣になる。

「侍る」 貴人の側に伺候する意であるが、轉じては、對話中に、

「あり・居る」の敬語として用ひ、又他の助詞へ添へて單なる敬語とする。

六 詞の花

よし詞ことばの花を咲かせたりとも、誠のつらぬくにあらざれば、えうなき事なり。誠もつらぬきて詞の色もそなはりなば、いとど人の心をうごかし、やはらぎつべければ、一やうに實みだにあらば花はなくてはありなむとはいはじ。

【詞の花】 「ことばの花」 「さなはし」

○ 神戸高等商業學校

要旨 大和歌に就いて述べた文の末尾の一部である。

すべて、眞心がこもつてゐる言葉で、しかもそれが美しくあつたなら、一層人を感動せしめるものであるといふことを述べてゐる。

釋義

【よし詞の花を咲かせたりとも、……花はなくてもありなむとはいはじ】 たとひ、どんなに立派に言葉を飾つて見たところ

「さうあるこそ」 さうあるのこそ。さういふ人こそ。

「まねぶ」 「まねぶ」に同じ。(一) 眞似をする。(二) そのまゝを語る。名狀する。(三) 學習する・學問する。茲は第三義。

「ほめものする」 ほめそやす。賞讃する。

「ものす」 いろ／＼の動詞のかはりに用ひられる語。

「ありとや」 この下に「いふ・傳へ聞く」などの語を補つて解くがよい。

「五つの常」 五常。人の常に守るべき五つの徳。仁・義・禮・智・信をいふ。

「五つの道」 五倫。人の守るべき五つの道。君臣有レ義・父子有レ親・夫婦有レ別・長幼有レ序・朋友有レ信をいふ。

「さとく」 覺ることが早い、の意であるが、茲は、よく知つてゐる。明かである、の意に解する。

「今のあたりのみかは」 反語法。現今の事だけであらうか、いやそれだけではなく、の意。

「きざし」 兆候。原因。

「仕ふる道」 仕官の道、君に仕へる道。

「くさぐさ」 種々。さま／＼。

「おろそか」 疎略なこと。通じてゐないこと。

で、誠心がこもつてゐなければ、何にもならぬ事である。しかし誠心もこもつてゐて、その上に言葉の美しさも加つてゐたならば、なほ一層人心をも感動させ、やはらかにすることが出来るものであるから、一概に、「誠心さへあつたならば、言葉の飾はなくてもよからう。」とはいはれまい。

「よし」たとひ。よしんば。

「詞の花を咲かせたりとも」いくら立派に言葉飾をつけても。

詞、茲では、廣く、言語を記した詞・辭をも含めていつてゐると見るがよい。そのことは本文の前文を見るとわかる。即ち「大和歌は、人の心より天地・鬼神をも感ぜしむるなどいふは、和歌の道に限ることにはあらず。ただ一つの誠もてこそ大空をも動かしつべし。漢の高祖の太子動かすべき私の御心を、さまざまことわり盡して人々諫むれども、うけがひ給はず。さるに周勃といふ人が、「口には言ひ得ねども、よからぬ事を知れば、その勅をば受けじ。」といひし一言にて、さばかりの御心までも晴れ給ひしか。されば、」である。

「誠のつらぬくにあらざれば」誠心が一貫してゐなければ。

「えうなき」益なき事。無益な事。

「詞の色もそなはりなほ」言葉の美しさも具つてゐたならば。

「いとど」いよゝ。なほ一層。

釋義

【すべて春は雨こそそのどかなれ。……柳のいとこの動きもやら露そふも、ともにいとこのどかなれ】概して、春には雨が一番静かでのんびりとした気分のものである。即ち、軒先からずうつと向ふまでばやけて非常にこまかく降つてゐる雨が、出て見ると、著物を濡らすのであるけれども、目には降つてゐるとは見えない。軒の雨垂が長い間拍子を置いてぼとり／＼と音を立てる様子といひ、空になつた蜘蛛の巣に雨の露がかゝつてまるで玉をぬき通したやうな様子といひ、又庭の枯れた芝の下の方に緑の新芽がだん／＼多くなつて行く様子といひ、絲のやうに垂れた柳の枝が動かうともしないで、それにだん／＼露の玉が殖えてゆく様子といひ、何れも皆のんびりとした気分にならせる情景である。

「のどか」静かでのんびりしてゐるさま。

「霞みわたりて」普通にいふ霞ではなくて、榊雨の爲に景色が一面にばやけてゐることをいふ。

「降れるが」降つてゐる雨が。降つてゐる、その雨が、と解してもよい。

「軒の玉水」軒先から落ちる雨垂を美化していふ。

「閑遠に」長い間を置いて。長い間拍子を置いて。

「一やうに」一概に。最後の「いはじ」に係る修飾語。「實だにあらば花はなくてもありなむ」誠心の實さへあつたら、詞の花（言葉のかざり）はどうでもよからう、の意。ありなむ、よからう。

七春は雨こそそのどかなれ

すべて春は雨こそそのどかなれ。軒端より霞みわたりて、いと細やかに降れるが、衣うるほせども降るとは見えず。軒の玉水も閑遠に音して、すみ捨てしくものいに玉ぬくけしき庭のおものかれふの底に緑ややそひゆくも、柳のいとこの動きもやら露そふも、ともにいとこのどかなれ。

「降れるが」「軒の玉水」「閑遠に」「くものい」「玉ぬくけしき」「かれふ」「露そふ」

○京城醫學専門學校

要旨 春雨の長閑な情景を描寫してゐる。

「すみ捨てし」もう棲んでゐない空の、の意。

「くものい」蜘蛛の巣。

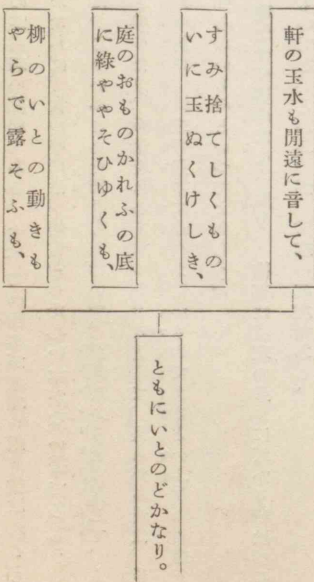
い 名詞。蜘蛛の巣に限つていふ。

「玉ぬくけしき」蜘蛛の巣に雨が溜つてゐるのを、緒に玉を貫いた有様に見立てたものである。

「かれふ」普通には、枯生と書く。萬葉には、此の「ふ」に「原」の字が宛ててある。即ち、草の枯れた廣い平地の意。茲は、芝の枯れた地。

「緑ややそひゆくも」緑がだん／＼増してゆくのも。(語釋の體は、(九〇頁の上欄))

文脈



「露そふも」露の玉が殖えるのも。
ぞふ 單に「宿る」とも解せられる。

八 理のまこと

【理なきが理のまことなり。理のごと行はるるものならば、何のかたきこともあらじを、さも知らず人とあらそひ、政をそしりなどしてたかぶる者は理のまことを知らぬとやいふらむ。】

「理のまこと」「あらじを」「さも知らず」

○山梨高等工業學校

○同志社大學豫科

○女子英學塾

【要旨】 物事が道理の通りにばかり行はれるものでないといふのが、道理の真相であるといふことを説いてゐる。

釋義

【理なきが理のまことなり。……理のまことを知らぬとやいふらむ】 物事は道理の通りにばかり行はれるものではないといふ

ざることもきこゆめり。といふは、いいたりしことにて、それをばかのくじの君も、むそじにて耳順ふ。とも、のたまへりしぞかし。さるに我がともがらの、色にそみ香にめづる心はさらなり、いささかもほりする心あれば、誠をおほふにぞ、そのさかひに至ることなき。

「誠より貫き出づ」「いたりしこと」「くじの君」「むそじにて

耳順ふ」「色にそみ香にめづる」「ほりする心」「誠をおほふ

「さかひ」

○神戸高等商業學校

【要旨】 吾人が至極の境地に達せられないのは、欲心が誠を蔽塞するからであるといふことを説いてゐる。

釋義

【わが誠より貫き出づれば、……そのさかひに至ることなき】 「自分の誠心から徹底的にやりぬけば、まだ見ない事でも自然に見え、まだ聞かない事でも自然に聞えるものである。(即ち、まだ経験しない事物をも自然に理解し得るものである。)」といふ

のが道理の真相である。すべての物事が道理の通り行はれるものならば、世の中には、何もむづかしい事がない筈であらうのに、さういふことを知りもしないで、道理ばかりを主張して、人と争つたり、政治をわるく言つたりなどして、えらがる者は、世の中萬事は道理の通りには行かないものであるといふ眞の道理を知らないものといつてよからう。

【理なきが理のまことなり】 物事は道理の通りにばかり行はれるものでないといふのが、道理の真相である。

「理のごと」 道理の通りに。

【何のかたきこともあらじを】 少しもむづかしい事はないであらうのに。(ところが、世の中の事は、道理の通りばかりには、なかなか行はれないのである、の意を含む。)

【さも知らず】 物事は道理の通りに行はれるものでないといふことを知らないで。

【理のまことを知らぬとやいふらむ】 道理の真相を知らぬといふものでらう。

九 誠

【わが誠より貫き出づれば、見ざることもみえ、聞か

が、それは、本當に、至極の境地に達した状態であつて、その趣をば、かの孔子様も、「自分は六十歳になつて、人のいふ事が何事でもすらすらと了解されるやうになつた。」といはれたのである。ところが吾々凡人は、美しい色を見ると、すぐそれに心を奪はれ、またよい香を嗅ぐとすぐ愛しおぼれるが、このやうな精神では、かの境地に達することが出来ないのは勿論のこと、少しでも欲心があると、それが誠心を蔽ひ塞ぐから、やはり、かの境地には至られないのである。

「きこゆめり」「聞ゆるなり」を婉曲にいつたのである。

「いたりしこと」 至極のことに到達したこと。

「くじの君」 孔子の君。

【むそじにて耳順ふ】 自分は六十歳になると、耳に入つた所のものが皆すらすらと了解されて少しも滞り疑ふやうな事がないやうになつた。論語、爲政篇第二「子曰吾十有五而志於學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲不踰矩」とある。

【耳順】 耳に入る所のものがすらすらと了解される。つまり知ることの至であつて、思はずして得るものである。此の論語の句より、耳順は、六十歳のことをいふ。

【色にそみ香にめづる】 物の色香に心を奪はれること。

「いささかもほりする心」少しでも欲しいと思ふ心。欲心・欲望。
「誠をおほふ」欲心のために誠心が壓倒される。
「さかひ」境界・境地。たちば。

一〇 かたはらにて見る

かたはらよりいふことは、いとよくあたるものなり。「かの人は衰へたまひき」といへど、かがみ見てもさは思はず。「かれは今かくすれど、後には悔いおもふべし。」などいへど、しらざるものぞかし。私の心だになくば、かたはらにて見るとおなじかるべし。

【かたはらよりいふ】「さは思はず」【私の心】

- 北海道帝國大學豫科
- 北海道帝國大學農學部
- 高等學校
- 高岡高等商業學校
- 女子英學塾

「私の心」 自分びいきの心。

一一 雨風のうさ添ふならひ

花の咲く比、雨降りいでたるに、風さへ添ひぬれば、「必ず花の時雨風のうさ添ふならひにて、人の世の別れ離るることわり見することにこそ。さりとはつらき雨かな、うき風かな。」といふを聞いて、「雨降るとも五月雨のやうにはあらず、はげしとて夕立のやうにはあらず。風添ふとても秋の末の方の野分、または木枯のやうにあらぬものを、花をしめば、ことさらに雨も風も世になきやうに思ひ給ふか。」といひき。

【雨降りいでたるに】「人の世の別れ離るることわり」【さりとは】【五月雨】【野分】【木枯】【ことさらに】

○男女中等教員養成所

【要旨】 花時の雨風を例に引いて、人間の我儘な心を詰つてゐる。

【要旨】 自己が自己のことがよくわからないのは、私心があるからであるといふことを説いてゐる。

釋義

【かたはらよりいふことは、……かたはらにて見るとおなじかるべし】 傍から見えていふことは、誠によく事實にあたるものである。傍の者が、「あの人は衰へなかつた。」といつても、本人は鏡を見ても衰へたとは思はない。又傍の者が、「あの人は、今あのやうな事をしてゐるけれども、いまに後悔するであらう。」などといつても、本人は、その事に気がつかないものであるよ。然し、その人に、自分勝手な自惚心さへなかつたならば、傍から見ると、同じやうに、自分の事がよくわかる筈である。

【かたはらよりいふこと】 傍から見えていふこと。當事者でないものいふこと。

【あたる】 その云ふことが的中する。

【衰へたまひき】 老衰なされた。

【さは思はず】 當人はさうは思はない。

【かくすれど】 からいふことをしてゐるが。

【悔いおもふべし】 後悔するであらう。

釋義

【花の咲く比、……ことさらに雨も風も世になきやうに思ひ給ふか。】といひき】 櫻の花の咲く時から、雨が降り出した上に、風までが加はつて吹いたので、或人が、「花時には必ず雨や風の心配が伴ふのが常例で、これは人世の、會へば必ず別れ離れるといふ道理を知らせるのである。それにしても、無情な雨であるわい。いやな風であるわい。」といふのを聞いて、他の一人が、「たとひ雨が降るといつたところで、五月雨のやうに長く續くわけでもなく、ひどく降るといつたところで、夏の夕立のやうにひどいわけではない。又花時に風が吹き添はるといつたところで、秋の末頃の野分や、冬の木枯のやうに烈しくはないのに、花の散るのが惜しい爲に、特に雨も風も、此の世に無いやうにと望まれるのか。それはあまり勝手すぎますなあ。」といつた。

【雨降りいでたるに】 雨が降り出した上に、雨が降り出した所の意。

【うさ】 憂き。つらいこと・心配。

【人の世の別れ離れることわり】 人の世には別離といふことがあるといふ道理。人世の哀別離苦の道理。佛教でいふ「會者定離の理」をさす。

人の世、人世。世の中・世間。因に、「人生」は、人類の此の世に於ける生存又は生涯をいふ。茲は、人生の意にとつてもよい。「さりとは」 それにしては。

「五月雨」 陰曆五月頃の長く降りつゞく雨。つゆ・梅雨。

「野分」 秋冬の頃吹く疾風の名。野草を吹き分ける意から出たとば。

「木枯」 風(國字)とも書く。冬頃、木の葉を吹き落す荒い風の名。

「ことさらに」 特に。

一三 四つの時のうつり行く景色

四つの時のうつり行く景色こそ、またなくをかきき、咲かざるをりの花を、咲かせむとし、散る頃に散らさじと思ふはいとくるし。散れば又來む年は咲きぬべし。いかに心をくるしむとも、霜白く氷堅きをりに蓮の咲くべきことわりなし。されど咲くを待ち、散るををしむは道なり。散るをもよそにして心とせぬは、道知らぬ心なるべし。

人情當然の理を解しない見下げ果てた心持の人であらう。

「四つの時」 春夏秋冬の四季。

「またなくをかききき」 他に比べるものもなく興が深いのに。此の句は、上に「こそ」の係があるから、「またなくをかききき」を「とすべき結を消して、「を」の助詞で續けてしまつた用法である。

またなく、他に類例のないほど。この上もない。

をかき、趣がある・面白い。

「咲かざるをり」 まだ咲くべき時でない季節、の意。

「散る頃」 當然散るべき時節、の意。

「いとくるし」 心苦しい・苦痛である・氣骨の折れる事である。

「咲きぬべし」 ぬは、完了の助動詞、べしは、推量。その時にな

つたなら、すつかり咲くであらう、の意。強い推量の意を含んで

ゐる。口語では「咲くに相違ない」位に譯しておけばよい。

「蓮」 蜂窠の義。倒圓錐形の花托が蜂窠に似てゐるからいふ。

「道なり」 人情として當然である・當然の道理である・人情の自然である。

「よそにして」 餘所事にして。知らぬ類して。

「心とせぬは」 氣に懸けないのは。氣にとめないのは。

「道知らぬ心」 人情當然の道理を知らぬ心の人。人情を解しない

「またなく」 「くるし」 「來む年」 「道なり」 「散るをもよそにして心とせず」

○海軍兵學校

○新潟醫學專門學校

○高等學校

○神宮皇學館

要旨 花に對して吾人の取るべき態度を説いてゐる。

釋義

【四つの時のうつり行く景色こそ、……散るをもよそにして心とせぬは、道知らぬ心なるべし】 春夏秋冬と四季の移り變つて行く折々の景色は、比べる物もなく面白ものであるのに、まだ咲くべき時でもない季節の花を咲かせようとしたり、又散るべき時になつたものを散らすまいと思ふのは、誠に心苦しいことである。花が散れば又來年の春には咲くにきまつてゐる。どんなに苦心して見たところで、霜が眞白におりてをり、氷が堅く張りつめてゐる時節に、蓮の花の咲く道理がない。けれども咲く花を待ち、散る花を惜しむのは、人情の自然である。それだけに美しい花の散るのを餘所事のやうに考へて、一向氣にとめないのは、

人。

一三 梁の上を歩まば落ちぬべし

「道路は足底のひろさだにあらば歩むべし。」といふは、例のことわりのみなり。いかで歩むべからむ。梁の上を歩まば落ちぬべし。こはかの陳氏のいひたる餘地なきなり。あまりに事に甚だしく物にせちなれば行はれぬのみかうとまれぬべし。こは事物に對して、餘地なきなりと聞きぬ。

【陳氏の云云】 「せち」 「うとまる」

○海軍兵學校

要旨 物事に對して餘裕がなくてはならぬといふことを説いてゐる。

釋義

【道路は足底のひろさだにあらば、……餘地なきなりと

聞きぬ」。「道路は足のうらの幅さだけあれば、歩かれる。」といふのは、よく世間でいふ、あの理窟一方といふものである。實際は、どうして歩けようか、歩けるものではない。足の幅位しかない梁の上を歩いたなら、落ちるにきまつてゐる。これはかの陳氏のいつた所謂餘地がないといふ事なのである。物事をあまりぎりぎり一ぱいにやつたりさせまつてやつたりすると（少しも餘裕のないやり方をすると）、それが行はれないといふことだけでは済まず、人から疎まれるにちがひない。こんなやり方は、物事に對して、ゆとりがないといふものであると聞いてゐる。

「足底の廣さだにあらば」足の裏の幅ささへあると。

「歩むべし」歩くことが出来る。

「例のことわりのみなり」よく世間にあるやうな（いつもよくいふ）理窟だけに止り、實際には行はれない、の意。

ことわりのみ 理窟一方。

「梁」柱の上をわたして屋根を支へるための材木。然し、顔氏家訓によると、幅の狭いかけ橋と解すべきであらう。

「陳氏」詳かでない。顔氏の誤りであらう。顔氏家訓に「人足所履」

「不_レ過_二數寸_一。然而咫尺之途必顛_二蹶於崖岸_一。掛拘之梁每沈_二溺於川谷_一。何哉。爲_二其傍無_二餘地_一故也。」とある。

「事に其だしく物にせぢなれば」一解には、「事柄に對して過酷に

失したり、人に對して嚴密であつて少しも大目に見るといふ事になかつたなら」と説いてゐる。そして此の場合には、「物」を「人」の意にとつてゐる。

せぢ、「切」の字音。急切の意。さしせまること。

「行はれぬのみか」實行出来ないばかりではない。

「うとまれぬべし」人から疎外されるであらう。

「餘地」ゆとり。餘裕。

一四 外をせめて内をせめざれ

「人を責むるは、あらはなるを責むべし。」とか聞きし。まづ面_{まへ}あらためたらば、よしとこそ言はめ。「彼は虎の皮きぬる羊なり。」とはいはじ。羊にもせよ虎の皮きたならば、虎にしてこそ養はめ。さらば千里をば走らずとも、羊の力のおよぶだけは走りもしなむ。「外をせめて内をせめざれ。」とむかしより聞きしを。

「人を責む」〔あらは〕〔面あらたむ〕〔虎の皮きぬる羊〕〔聞きしを〕

○陸軍士官學校

要旨

人を責めるには、表面にあらはれてゐる明白な點に就てするにとどめ、裏面にかくれてゐることに就てまでするな。君子らしい顔をする者は、たとひ小人であつても、君子として待遇すれば、彼は君子の行に及ばずとも、及ぶ限りの努力はするであらうといふことが説いてゐる。

釋義

「人を責むるは、あらはなるを責むべし。」とか聞きし。…とむかしより聞きしを」人の行の缺點を責めて匡正するには、明らかに表面にあらはれてゐるものについてだけ責むべきである。内面にかくれてゐる事までには觸れるな。とかいふことを聞いてゐる。第一に表面だけの行を改めたならば、それでよいといつておかう。「彼は虎の皮を著て強さうに見せかけてゐるが、實は羊のやうな弱者であるのである（彼は虎の皮を著た羊のやうに、

君子らしい顔をしてゐるが、實は小人であるのである。）」などといつて内面にまでも立入つて非難することはよさう。たとひ羊であつたにしても、虎の皮を著てゐたなら、それを虎と見做して養ふことにしよう（小人でも、君子らしいふりをしたなら、君子として待遇しておかう）。若し、さうしたなら、虎のやうに千里は走らないにしても羊の力の及ぶだけは走りもするであらう（君子の行は出来ずとも、その人相當の努力はするであらう。「外面にあらはれてゐることを責めて、内面にかくれてゐることは、責めずにおくがよい。」といふことを昔から聞いてゐる、だから、今更内面まで責めるやうなことは、すまい。

「あらはなる」表面上にあらはれたところ。

「面あらためたらば」内心はともかく表面を改めたならば。易革卦に「君子豹變、小人革_レ面。」とある。

「虎の皮をきぬる羊」表面に強い風を裝ふ弱者。君子のやうな顔して、内實は小人である、の意。揚子法言に「羊質而虎皮（なかな身は羊で、外皮は虎。見かけだふし。）」とあるに據つた語。

「いはじ」非難することはよさう。

「羊にもせよ」羊であつたにしても。見かけだふしでも。

「虎にしてこそ養はめ」虎と見做して養はう。見かけの通りと思つておかう、の意。

「さらば」さうしたならば。羊でも虎と見做したならば。
「外をせめて内をせめざれ」外面にあらはれた所について善ならんことを求め、内面にかくれてゐることについては責めるな、の意。

「聞きしを」聞いてゐるのに。聞いてゐる、であるから云々である、と解く。をは、反意に續く助詞と見るがよからう。反意にとつて餘韻を保たせる場合に用ひる。

一五 日新の教

「おほよそ躬行にてもあれ人事にあづかることにてもあれ政にてもあれ新なりといふ文字を忘るべからず。日に新なりといふはものかは、事に新に物物に新なるべし。昨日のことに馴れて思ひあやまるも、かねて知れることと思ひてやぶれるも多し。かの賢き人も愚なる人に欺かるるも、一つ一つに新ならねばこそありけれ。昨日にくしと思ひし事心にそみ、ごぞのうれしと思ひし

事心につきて離れねば、それより根ざして迷ふとか聞けり。げに日新の教こそ、よろづにかよはして、身を終ふるまでも忘るな。」と、語りし老人もありけり。

「躬行」「人事にあづかること」「新なり」「ものかは」「あやまる」「ごぞ」「根ざす」「よろづにかよはず」
○東京高等師範學校

要旨

最新を尙ぶ思想を有することが必要であるといふことを説いてゐる。此の文によつて、樂翁公の進歩主義の人であつたといふことが立證される。

釋義

「おほよそ躬行にてもあれ、政にてもあれ、……身を終ふるまでも忘るな。」と、語りし老人もありけり。總じて、道徳を自身で行ふことにしても、また他人の事に關係してゐることにしても、又天下の政事上のことにしても、前の悪い點を改め善くして向上してゆくといふことを忘れてはならない。かの湯の盤の銘に書いてあつたといはれてゐる「毎日毎日舊習の惡を去つて、改善

る。即ち、昨日よりは今日、今日よりは明日といふ風に、日毎に改善し向上してゆくをいふ。大學に「湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新。」とあるに據る。

「ものかは」物の數であらうか、物の數ではない。何でもない。更にそれ以上でなければならぬ、の意を含む。

「昨日のことに馴れて云云」昨日からだつたからと思つて、つひ其の事に馴れて、今日も其の通りだらうと考へ違ひをするのも、又、前以て知つてゐる事だから、今も同様であると考へて失敗するものも多い。

「思ひあやまる」考へ違ひをする。
「やぶれとる」失敗を招く。

「かの賢き人も云云」かの賢明な人でも、愚な人に欺かれるのも、一つよい事があると、他の事も同様によいと思つたり、一つ正直な事があれば、他も同様と考へて、一事一物毎に新な考をしないから欺かれたりするのである。

「新ならねばこそありけれ」新でないからこそ、そんなことになつたのである。

「心にそみ」心にしみつく。
「ごぞ」去年。

「心につきて離れねば」心に入りて離れないから。

して行く。」といふくらゐのことは何でもないことで、更に、一歩を進めて、毎日毎時のすべての事すべての物について、改新してゆかなければならぬ。昨日の事になれて考へ違ひをすることも、又前々から知つてゐる事と思つて失敗する事も多い。かの賢い人も愚な人間にだまされる様な事があるのも、一つ一つに新にする考がないからこそ、そんな事になつたのである。昨日憎いと思つた事が、今日は心にしみつき、去年嬉しいと思つた事が、今は心にかゝつて離れないので、それが本となつて迷ふのであると聞いてゐる。ほんたうに日々に新にするといふ教こそ、凡ての事に通じて死ぬまで忘れてはならない。」と、語つた老人もあつた。

「躬行」自身躬ら行ふこと。即ち、思つたり言つたりすることを實際に身に行ふことをいふ。茲は、道徳を躬ら實行する、意。

「にてもあれ」にせよ。にせよ。にしても。
「人事にあづかること」他人のことに關すること。人間社會のことに關係すること。

「新なりといふ文字」「新なり」といふことば。
新なり、舊習の惡を去つて、考を新にすること。又は、前の悪い點を改めて善い點をとつて行くこと。

「文字」茲では、「言葉」と譯してよ。

「日に新なり」毎日々と舊い惡習慣を取去つて、考を新しくす

「根ざして」 根元となつて。

「よろづにかよはして」 萬事に通じて。萬般の事に涉つて。

一六 とみのいたづき

やむごとなき人、にはかにいたづきに罹れりけり。たやすからぬさまなりければ、今このくすし一人に任せむもいかなり。「かれもくすしの道には世のつねならねば、これと心を合せて薬調ぜよ。」といへば、はじめのくすしかうべふりて、さらばその世のつねならぬものに任せ給へ。かかるとみのいたづきを療治せむに、人を語らひては、いかで出で來べき。といひければ、げにもとて、初のに任せてければ、そのいたづきもすみやかに怠りぬ。

「いたづき」 「世のつねならぬ」 「とみ」 「語らむ」 「いかで出て來べき」 「怠りぬ」
○ 高等學校

要旨 治療の道は、醫師を信じて、病を養ふにありといふことを説いて、暗に、人を信用しないで迷ふことの非を戒めてゐる。

釋義

【やむごとなき人、にはかにいたづきに罹れり。……そのいたづきもすみやかに怠りぬ】 或高貴の人が、急に病氣になつてしまつた。容易ならぬ容態であつたから、側近の者が、「今この醫師一人に一任しておくのもどうであらうか。」と不安に思つた。そこで、「あの何某（他の醫師をさす）も、醫道にかけてはなみなみの手腕でないから（非凡な技倆があるから）、あの醫師とも相談して薬を盛つて下さい。」といふと、最初の醫師が首を振つて、「それでは、そのなみ／＼ならぬ手腕の醫師にお任せなさい。こんな急病を療治しようとするのに、人と相談しては、どうしてうまく出來ませう。」といつたので、「なるほどその通りだ。」と、最初の醫師に任せ切つてしまつたところが、その病氣も早速直つた。

「やむごとなき人」 高貴な人。

「いたづき」 痛著きの義で、勞する・骨折る、の意から轉じて、所勞、即ち、病氣、の意。

「罹れりけり」 かゝつてしまつた。りは、完了の助動詞の連用形。

けりは、過去。

「たやすからぬさま」 容易ならぬ病狀。病氣の重かつたこと。重症。

「くすし」 薬を以て病を治する人の義。それ故、實は、薬師とかくべきであるが、それでは、「薬師如來」と混同の虞があるので、醫師と書く。

「任せむも」 任せておくのも。

「いかなり」 「いかにぞや覺ゆる」といふに殆ど同じ。どうかと思はれるのである。穩當でないやうに思はれる。「どんなものかしら、どうやら不安心である」と解く。

「かれも」 他の醫師をさす。實際の會話の際には、勿論何の某と、その名をいつたに相違ない。

「世のつねならねば」 常並の腕前でないから。非凡な技倆であるから。

世のつね 尋常・普通・平凡・並々。

「これと心を合せて」 その（他の醫師）と協力して。その醫師と相談して。

「調ぜよ」 調合せよ。調ずは、薬に限らず、調製する意。

「とみのいたづき」 急病。

とみ 俄・急、の意。普通、「頓」の字音の變化したものと云ふが、「扱み」であるとの説もある。

「人を語りひては」 人と相談しては。

語りふ 語りあふ。相談する。

「いかで出て來べき」 どうしてもうまく出來ようぞ、とても出來はしない。

「げにもとて」 なるほどさうだと思つて。

「任せてければ」 まかせてしまつたところが。任せきつたので。では、完了の助動詞「つ」の連用形。

「怠りぬ」 病勢がなまける、意から轉じて、病氣がなほる・輕快になる。

一七 家國のすがた

家國の姿は、わかわかとあらまほし。もし年老いたる姿になりもて行かば、物事沈みはてて、人に見知られじと物の色目も花やかならざれと思ふまでになり行くぞかし。その心よりして、人に秀で

むの心もとよりなければ、物の堪能^{かんたう}上手もたえはてぬるものとなむ。

「あらまほし」「なりもてゆく」「色目」「堪能」

○大阪醫科大學豫科

○福島高等商業學校

要旨 家や國の姿は、絶えず生新であるべきであるといふことを説いてゐる。

釋義

【家・國の姿は、わかわかとあらまほし。……物の堪能・上手もたえはてぬるものとなむ】一家でも、一國でも、その状態は若々しく生々したやうにありたいものである。もしこれが古びた状態にだん／＼なつて行くと、すべて物事が活氣を失つて、なるべく人に見知られまいとか、物の色合も花々しくないやうにとかと、思ふほどじみになつて行くものである。さう引込主義の心からして、人よりえらくならうといふ考も勿論ないから、物事の達人とか上手とかいふ者も全く無くなつてしまふといふことである。

「姿」状態。

「わかわか」と 若々しくて生々してゐるやうに。

「まほし」「ま／＼ほし」の略。希望の意をあらはす助動詞。

「年老いたる姿」古くさい状態。

「なりもてゆく」自然にだん／＼とさうなつてゆく。

もて、動詞と動詞との間に挟まる助詞で、上の動詞の意を助けて、それに繼續進行の意を附加するものである。

「物事沈みはてて」沈みこんでしまふ・沈淪してしまふ。すつかり活氣を失つてしまふ。

「人に見知られじと」なるべく、人には見知られまい（人目につかない様に）と思ひ。この「人に見知られじと」の句と、次の「物の色目も花やかならざれと」の句とは、共に「思ふまで云々」に係るのである。

「物の色目」住宅・服装・器物などの色合。

「花やか」立派なこと。派手なこと。

「その心よりして」そのやうに進取の鋭氣を失ひ、引込みがちな心がもとになつて。さういふ引込思案（引込主義）のために。

「秀てむの心」優らう（えらくならう）といふ心（考）。

「もとより」茲は、いふまでもなく・勿論、などの意。

「堪能」深く其の道に通ずること・業に秀でたこと、又、その人。その道の達人。

「上字」物事をするに巧なこと、又、その人。
「ものとなむ」「ものなりとなむいふ」の略。ものであるといふことである、の意。

一八 膽をねること

「膽をねるといふは、如何にして得てむ。」とたづねしに「天命を知るにあり。この知るは、まことに知るをいふなり。ただこがねなどの慾は去りやすし。好名の慾ぞいとかなしき。古にも、『父君の命にそむきて身を潔くし、朝廷の事をそしりて直をうる。これをしのぶならば何かしのび得ざらむ。』とまで、古より言ひしをや。ただその天命をまことに知りて疑ふことなければ、つゆも心の煩なく、ちりばかりもけがれなし。『獨寢ふすまに愧ぢず。』とかいふ。かの浩浩たる氣ともいふらむ。」

「天命」「好名の慾」「直をうる」「獨寢ふすまに愧ぢず」「浩浩たる氣」

○米澤高等工業學校

要旨 心膽を鍛錬する方法は、天命を知るにあるといふ事であるといふことを、問答的に書き述べたものである。

釋義

【「膽をねるといふは、如何にして得てむ。」……かの浩浩たる氣ともいふらむ。】或人が「心膽を錬り鍛へるには、どうしたなら、出来るだらうか。」と尋ねたので、それに對して自分は、その最もよい方法は、天命を知り悟つて、これに安んずるといふことにある。但しこゝに天命を知るといふのは、徹底的に知りぬくことを意味するのである。ところで、たゞ金錢がほしいといふやうな慾は去り易い。これが出来たらといつて、眞に悟つたとはいへない。然し、名譽を求める慾心は、悲しい事になかなか取り難いのである。これの出来る人は、眞の大悟徹底した人である。それで今ばかりではなく昔の時代にも、『父や君の命に背いてまでも、自分の名譽を得んが爲に、わが身の潔白なことを示したり、朝廷の政治をわるくいつてまでも、自分の剛直であるといふ評判を強ひて得ようとして、世の中にその行を見せびらかしたりした者がある。このやうな名譽慾を押へつけて我慢し得るほどに大悟

徹底したならば、どんな困難な事でも我慢されないことはない。」
とまでも、昔から言つてある位であるんだもの、名譽心を去る事は一通りの事では出来るものでないといふことがわかる。然しこの名譽心の去り難いといふのも、畢竟は天命を知らないといふ事に起因するのである。たゞ自分の天命をほんたうに知り悉して、疑ふことがなかつたならば、少しも心に心配がなく、微塵も穢れた點がなくなる。古語に『獨りで寝てゐても、その夜具に對してすら、何等恥ぢる所がない。』というてある。これをば、よくいはれる公明正大で何物にも押へられない雄大な精神ともいふのであらう。それ故に心膽を鍛錬するには、天命を知るにありといふのである。」と答へた。

「膽をねる」心膽を鍛錬する。精神を修養する。

「得てむ」では、完了の助動詞「つ」の將然形、むは、未來の終止形であるから、未來完了の形であるが、茲では「得む」を強くいつたものと見て、「得るであらうか」位に解けばよい。

「天命」天の與へた運命。自分が天から授つた運命。

「此の知るは、まことに知るをいふなり」こゝに「天命を知る」といふ事の意味は、うはばかりでなく、本當に知るのをいふのである、の意。
まことに知る ほんたうに知る。徹底的に知る。

と、自分一身だけを潔くしたり、又朝廷の事を悪しきまに言つて、己の正直であるといふ事の名をうる。此のやうな父君の身に關する事でも忍んでするほどであるならば、どんな事でも、自分の好名の爲には、どうして忍んでしない事があらうか、屹度するにちがひない。」と説く。識者の示教を俟つ。

しのぶ 我を憚る。おさへる。名譽を得ようとする心を押へつけて我を憚る。異説によれば、慄へて行ふ、意。

「古より言ひしをや」言つてをるではないか。これを以て見ても、好名心の去りがたいことがわかる、といふ意を含む。

「疑ふことなければ」懷疑の心がないならば、天命のまゝに安んずるならば。

「つゆも」少しも。

「心の煩」煩悶。

「ちりばかりも」極く僅かほども。微塵も。

「獨寝ふすまに愧ぢず」獨り寝てをつても内に省みて心に疚しい事がないから、夜具に對しても何等愧ぢる所がない。即ち、わが心に疚しい所がないと何物にも愧ぢる所がない、の意。劉氏新論に「獨立不慚影。獨寝不愧衾。」とあるに據つた句。

「浩浩たる氣」孟子の謂ふ所の「浩然之氣」に同じ。天地の正義をうけ、道義を根柢とした正大剛健な氣象。公明正大で何物にも

「こがねなどの慾」金錢などについての慾望。
慾の字、古くは欲と書く。

「好名の慾ぞいとかなしき」「好名の慾の去り難いといふかなしき」の意。名譽を好むといふ慾は、なか／＼去り難いもので、實になさけないものである。

好名の慾 名譽を得ようとする慾望。名譽心。

「古にも」今ばかりでなく古にも。

「父君の命にそむきて、身を潔くし」父や君の命令にそむいても、わが身の潔白を示さうとし。

父君 茲は、自分の父の敬稱として用ひたのではなく、父や君、の意。

「朝廷の事をそしりて直をうる」朝廷の政治のしかたを悪くいつてまでも、自分の剛直なことを強ひてみせびらかさうとする。

直をうる 剛直であるといふ評判をとるやうに自分の行をみせびらかす。自分の剛直を世間に知らせる。

「これをしのぶならば、何かしのび得ざらむ」このやうにして、我が身の潔白を示さうしたり、自分の剛直をみせびらかさうと思ふ好名心を押へつけて我慢することが出来るならば、如何なる苦しいことでも堪へることが出来るであらう。
一解に「父や君の命令に違背しても自分だけよければそれでよい

押へられない雄大な氣性。

浩浩 廣々としたさま。

一九 人は悪しき心あるものかな

「わが悪しきをば、桀紂を引ききてなだめ、人の善きをば、堯舜を引きいでてとがむ。『かれはかかる悪しき事なしぬ。』といへば、『げにさあらむ。』といふ。

『このものかく善きことし侍りぬ。』といへば、『いかがあるものかな。』といふ。げにも人は悪しき心あるものかな。』といへば、善き名得まほしと思ふがゆゑに、人の悪しきにてわが心をなだめ、人の善きをば嫉むより出でくるなり。』といひき。

「桀・紂を引ききてなだむ」〔げにさあらむ〕〔いかがあるものかな〕

要旨 人は、とかく自分の悪事に對しては極悪の桀紂と引き合ひに出して辯護し、之に反して善事に對しては聖

帝の堯舜を例にとつて非難したり、又、人の悪事をよろこび善事を悪むものであるが、これは自分だけよい評判を得ようとする我儘勝手な心から起るものであるといふことを問答的に述べてゐる。

釋義

【わが悪しきをば、桀・紂を引きてなだめ、……嫉むより出でくるなり。】といひき 或人が、「人といふものは、自分勝手なもので、自分の悪事に對しては夏の桀王や殷の紂王のやうな極悪無道な暴君の大なる悪行を引き合に出して（例に引いて）、之と比較して、この位の悪事は大したことではないといつて大目に見、之に反して、人の善事に對しては、支那古代の堯帝や舜帝のやうな聖人の大なる善行を例に引き出して、之と比較して、これ位の善行では、まだ大いに足りない所があるといつて非難する。又、人といふものは、人の悪事を喜び、人の善事を悪む偏狭な心があるものであつて、『あの人はかういふ悪い事をした。』といふ者がある」と、『あの人のことだから、實際それ位の悪事はするであらう。』といつて、賛成する。之に反して、『この人はかういふ善い事をしました。』といふと、『あの人にはそんな善行が出来るかどうか疑はし

いものだ。』といつて、之を否定する。これ等のことを思ふと、なるほど人といふものは自分勝手に、偏狭な悪い心を持つてゐるものであるわい。』といふと、之を聞いた相手の者は、「人といふものは、自分がよい評判を得たいと思ふからして、人が悪いといふことで（他人の悪い事で）、自分の嫉み心をなぐさめ、人が善いといふことをば（他人の善いのを）、嫉むことからしてこのやうな悪い心も出て来るのである。』といつた。

「わが悪しきをば」 我が悪しき行をば。

「桀・紂を引きてなだめ」 桀・紂のやうな暴虐な君主の悪行を例に引いて、それに比較してこれ位な悪事は大したことではないといつて、自分を大目に見るをいふ。

桀・紂 夏の桀王と殷の紂王。共に暴虐無道の王であつて、宗室を亡ぼした者。支那の暴君の代表にいはれる二王。

なだむ 「宥む」とかく。ゆるして責めない。罪をゆるす。きびしく責めない。

「堯・舜」 堯帝陶唐氏と舜帝有虞氏。支那古代に相ついで出た聖君。支那で聖人の代表に呼ばれる二帝。

「とがむ」 非難する。

「げにさあらむ」 本當に（實際）さうであらう。即ち、あの人はそんな悪事をするだらうよと、全く疑もないやうにいふ、意。

「いかがあらむ、いぶかし」 實際はどうであらうか、怪しい。即ち、この人がそんな善事をする筈がないから、どうもその事は疑はしい、と否定する意。

「げにも人は悪しき心あるものかな」 誠に人は、自分勝手に偏狭な悪い心を持つてゐるものであるわい。

「美き名得まほしと思ふが故に、云云」 自分がよい評判を得たいと思ふから、人がわるいといふ事で自分の心を慰め、人が善いといふ事をば嫉妬するから、こんな悪心も出てくるのである、の意。
出てくるなり 悪心が出て来るのである。

文脈

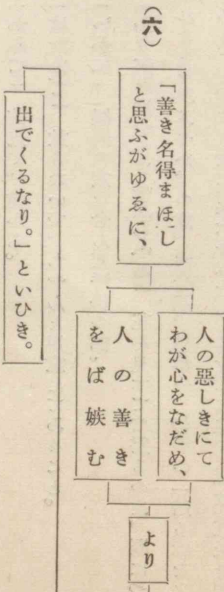
(一) 「わが悪しきをば、桀・紂を引きてなだめ、と、人の善きをば、堯・舜を引きてとがむ。 との二句は、反対の行爲を示した對句。

(二) 『かれはかかる悪しき事なしぬ。』といへば、『げにさあらむ。』といふ。』と、『このものかく善きことし侍りぬ。』といへば、『いかがあらむ、いぶかし。』といふ。』との二句も反対の行爲をあらはした對句。

(三) (一)(二)の對句は、人には我儘勝手な性質があるといふ例證。

花月草紙鈔 二〇花を見すててかへる

(四) (二)の對句は、人には、他人の善事を嫉む心があるといふ例證。
(五) げにも人は悪しき心あるものかな。』といへば、の施點の句は、(一)と(二)との二つを綜合して、之に對する作者の意見をのべたものである。



二〇花を見すててかへる

四方をふとうち見れば筑波嶺のあたりいとほそくひらめきわたる雲こそありけれ。この雲よ、世にいふはやてなどいふものなりけり。あまりに朝よりめづらしく晴れたる日なればとて、かねてみのもかさもはなたで居しが、はや櫓おしたて漕

ぎかへるをいかに、この花を見すててかへるは、かりがねにつらさやならへる。櫓の音ばかりまなべよかし。など、くちぐちにわらふを耳にも入れて、漕ぎさりぬ。

「ひらめく」「はやて」「かりがねに云云」「櫓の音ばかり云云」

要旨 隅田川に船を漕いで、花見に行つたが、疾風が來さうになつたので、途中で止めて歸つたことを記してゐる。

釋義

【四方をふとうち見れば、……くちぐちにわらふを耳にも入れて、漕ぎさりぬ】 ふと四方を見ると、筑波山の邊に、甚だ細くひら／＼と見える雲があつたわい。この雲がき、世間でいふ疾風などいふもの前兆であつたのだわい。あまりに朝から珍らしくよく晴れてゐる日であるから、どうも怪しいといふので、船頭は、前から、糞も笠もちゃんと用意してゐたが、早くも、櫓を立てて、急いで漕ぎかへるのを、人々が、「どうしたとか、此の美しい花を見ないで歸るのは、雁の無風情に眞似るといふのか。雁

である。

つらさ 氣強く知らぬ顔してゐること、即ち情愛がない・無情である・不人情である、の意。然し茲では、花鳥風月などを眺めても、それに心を動かされないうこと、即ち、無風流の意に用ひられてゐる。

「櫓の音ばかり學べよかし」花に對してつれない雁を學ばないで、櫓のかり／＼の音だけを、雁の鳴く聲に學ぶがよい、の意。これは、雁の鳴き聲は、櫓を押すかり／＼といふ音に似てゐるところからいふ。白樂天の河亭晴望の詩句に「晴虹橋影出、秋雁櫓聲來。」とあり、又古今集卷第四、藤原菅根朝臣の「寛平の御時きさいの宮の歌合の歌」の題下に「秋風に聲をほにあげてくる船は、あまのと渡る雁にぞありける（この節の秋風に、聲を帆に、即ち、あらはに高く舉げて、追手に走るやうに來る船は、よく／＼見ると船ではなくて、空の海の渡り所を高く鳴いて渡る雁でさあつたわい。）」とある。共に雁の聲が櫓の音に似てゐるからいふ。

「耳にも入れて」耳にも入れないで、聞かないで、の意。

の眞似をするのなら、そんな點を眞似ないで、櫓の音だけを眞似たがよいよ。などと、いつて口々に笑ふのを、聞きもしないでさつさと漕ぎ去つた。

「ひらめく」 ひら／＼する。ちら／＼見える。

「はやて」 俄かに激しく吹き起る風。「はやち」ともいふ。今、雲を見て「はやて」といふのは、その雲が出ると、急に風が吹き起つて、雨がげしく降り出して來るからである。即ち、茲は、疾風の前兆。

「けり」 茲は、過去に詠歎の意味の含まれてゐるもの。

「かねて」 前以て。前から。

「はなたて」 放さないで。ちゃんと用意してゐること。

「いかに」 疑問の意を含んだ呼掛の詞。

「かりがねにつらさやならへる」花を見すてて歸るのは、雁につれなきを學ぶのか、の意。古今集、卷第一、伊勢の「歸る雁をよめる」と題する歌に「春がすみ立つを見捨てて行く雁は、花なき里に住みやならへる（もはや聞もなく花が咲く時節である。此のやうにのどかな春霞の立つのを見すてて歸つて行くあの雁は、想ふに、花といふものの無い里に住み慣れてゐる事だらうか、それで花の面白味を知らないであらう。それを知つてゐたなら、決して見捨てて歸る筈はなからうから。）」とある歌に據つて書いたの

松屋文集鈔

解題

松屋文集五卷は、國學の大家藤井高尙たかみほの著書である。本書は、高尙の和文を集めたもので、前集二卷後集三卷ある。序文跋文敘景文敘事文等を多數に集めてゐる。何れも情趣の深い優雅な文である。

著者藤井高尙は、松屋と號し、備中國吉備津宮の祠官であつたが、本居宣長の門に入つて和學を研究し、殊に和文を以て聞え、後京都に出て、和學の教授に従事した。著書には、松屋文集松の落葉出雲路日記伊勢物語新釋紫日記釋等種々ある。仁孝天皇の天保十一年に、年七十七で歿した。(二四二四—二五〇〇)

一 鶴

鶴は、空高く飛ぶも翅つばさこそさだかに見えわかぬ、靜かなるさまいとしるし。まして、間近くおりのたるは、たとへば、よき人の冠かぶりうへのきぬきて立ちたまへるに似て、いといやむごとなげに見ゆかし。

羽衣はごろもの雪はづかしく、額のかぎり紅きを、千年經にけるなりといふは、仙人やまびとの數へ知りて、いひそめける事ならむとぞ。

「さだかに」 「しるし」 「うへのきぬ」 「雪はづかし」 「額のかぎり」

要旨

鶴のけだかく貴い鳥であることを述べてゐる。

釋義

【鶴は、空高く飛ぶも、……仙人の數へ知りて、いひそめける事ならむとぞ】 鶴は、大空を高く飛んでゐるのも、そのつばさこそは、はつきり見わけがつかないけれども、そのゆつたり落ちついてゐる様子は、まことに際立つてゐて、それが鶴であることがよく判る。ましてすぐ近いところに下りてゐるさまは、外のものに譬へていへば、貴人が冠をつけ袍を着て立つて居られるのに似て、誠に貴く見えるわい。その羽の色が、雪すらきまりわがる位に純白で（雪もかなはないほど眞白で）、額全體が紅くなつてゐるのを、千年も経つてゐる鶴であるといふのは、恐らく不老不死の仙人が、其の齡を數へ知つて言ひはじめた事であらうといふことである。

「飛ぶも」 飛んでゐるのも。飛べども、の意ではない。
「さだかに」 はつきりと。
「しるし」 「いちじるし」に同じ。際立つ・目立つ・明かに判る、などの意。
「よき人」 高貴の人。
「うへのきぬ」 束帯（官位ある者の正式の服装）の時の上衣、即ち、袍のこと。

「やむことなげに」 貴い様子に。
「羽衣の雪はづかしく」 「羽衣の、雪はづかしく」であつて「羽衣の雪、はづかしく」ではないことに注意。
「羽衣」 茲は、鶴の羽色をいふ。
「雪はづかしく」 白さを比べると雪の方がきまりわがる、の意。雪よりも白い、即ち、非常に白いことをいふ。
「額のかぎり」 額の部分が全體、の意。
「かぎり」 あるだけ・すべて・全體。
「仙人の數へ知りて」 鶴が千年も長生することは、普通の人間にはわかる筈がない。不老不死の仙人であつてはじめて數へることが出来る故に、かくいつたのである。
「仙人」 人間界を離れて山中に住み、不老長生の法を修めて神變自在の術を得てゐるものをいふ。
「とぞ」 この下に「いふ」の語が略されてゐる。「思はるる」が略されてゐると見てもよい。

二 しくものぞなき

「しくものぞなき」と昔のなにがしがいたくめでしも、此のころの月ならむと、そぞろに心うかれて、暮

るるよりはし近くゐて、ながめつつ待つに霞ふか
くたちおほひて、いとど暗ういぶせきに、山ぎはの
やうやうあかくなるは、出づるなりけり。霞もす
こし晴れて、照りもせずくもりもはてぬながめは
さやかなる秋よりもまさりて、心しれらむ人に見
せばやと、この月ばかりにもいはまほしうなむ。

「しくものぞなき」 「いぶせきに」 「心しれらむ人」

○東京高等蠶絲學校

要旨 春の朧月の、秋の明月にまさることを述べてゐる。

釋義

【しくものぞなき。】と昔のなにがしが……この月ばかりにもいはまほしうなむ】 「朧月夜にしくものはない。」といつて昔の或人が甚だ愛賞したのも、此の頃の月であらうと思はれ、自然に心が浮かれて来て、日が暮れるとすぐに、縁端に出て、眺め眺めして待つてゐると、霞が深く立ちかくして、大層暗く鬱陶しかつたが、山の際がだん／＼と明るくなつて来るのは、月が出るのであつた。霞も少し晴れて、古歌にあるやうに、照るでもなく、

また曇つてしまふでもない春の朧月の眺めは、皎々と照りわたる秋の月の眺めよりもまさつて、この風情を解する人に見せたいものであると、昔の人は月と花とについていつてゐるけれども、自分はこの月だけについても、さう言ひたいのである。
「しくものぞなき」 新古今集、卷第一、大江千里の「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」といふ歌の最後の句を採つたのである。一首の意は「明かに照りもせず、さりとて、全く曇りもしないで、ほのかな春の月夜に及ぶものはない。實によいけしきである。」
「昔のなにがし」 昔の或人。前項の歌の作者、大江千里をさす。
「めでしも」 愛賞したのも。
「此のころの月」 春の月。
「そぞろに」 何故ともなく。自然に。
「暮るるより」 日の暮れると同時に。暮れるや否や。
「はし」 縁先。
「いとど」 前からさうであつたが、茲に至つてなほ一層、といふ意。いよ／＼・ます／＼。
「いぶせき」 心が晴れない・うつたうしい、などの意。
「山ぎは」 山の輪廓に沿うた空。
「あかく」 明るく。

「照りもせずくもりもはてぬ」前にあげた大江千里の歌の一句。「さやかなり」明かである・はつきりしてゐる、などの意。「心しれらむ人」情趣を解してゐる人。後撰集、源信明の歌の「あたら夜の月と花とを同じくは、心しれらむ人に見せばや。」に據つて書いたのである。

「見せばや」見せたい。ばやは、自分の希望をいふ時に用ひる感動詞。

「この月はかりにも」この月ばかりについても。

古人（源信明）は、春の夜の月と花とを心知れらむ人に見せたいといつてゐるが、自分（藤井高尙）は、たゞ月だけについても、さういひたいといふのである。

「まほし」「まくほし」の略。希望の意をあらはす助動詞。

三 夏はよる

「夏はよる、月の頃は更なり」と、清少納言のいひけることぞかし。暮れはてて夕やみの程はしばし物むつかしげなれど、それも遣水のほとりに篝火たかせなどすれば、をかしきほどなるひかりに、木

「夏はよる、月の頃は更なり」枕草子第二段にある句。「夏はよるをかし、月のある頃をかしきはいふも更なり」の意。因に「をかし」は、面白い、の意で、興あるをいふ。

「清少納言」清原元輔の女。博學伶俐、才識溢れ、當時一條天皇の皇后藤原定子に仕へて眷遇を受け、紫式部と共に才名が高かつた。その著枕草紙三卷は、隨時見聞感想の事項を記したもので、文章簡潔奇抜一氣呵成の妙を得、我が國隨筆文の嚆矢である。

「夕やみ」日が暮れて月の出る時分までの間をいふ。

「物むつかしげ」何となく氣分がはれなく、しないやうである。

「遣水」庭園の中にひいた水。

「篝火」鐵の籠を木の柱に下げ、その中で火をたいしたもの。

「端居して」縁端に出てゐると。

四 よろづの調度

よろづの調度など目なれぬさまにやうかへて作りたるは、今めかしきにしはしは目とまれど、よく見ればそばつきざればみて心劣りし、昔やうにてうるはしきは、うはへはきて見ゆれど、やうやう

の葉の色の青やかにきらきらと見えたるいとすずしげなり。月出でては又更にいはむ方なし。端居してながむるに、秋よりもまさりてあかすこそあれ。

「さらなり」「物むつかしげ」

要旨 夏の夜の景趣を述べてゐる。

釋義

「夏はよる、月の頃はさらなり」と、清少納言の……秋よりもまさりてあかすこそあれ」夏は夜が面白い、月のある頃の面白いのは、いふまでもない。」と清少納言がいつたのは尤もなことであるよ。とつぷりと暮れて夕闇の時分は暫くの閑何となく氣分がくさくさするやうであるが、それも遣水の附近に篝火を焚かせたりなどすると、暑さうでもなく、又、暗くもなく、丁度面白いほどの光に、木の葉の色が青々ときら／＼光つて見えるのは、大層涼しさうである。月が出てからはなほ一層云ひやうもないほどに趣がある。縁先にゐて眺めると、秋よりもまさつて飽くことを知らないくらゐである。

に見まさりするものなりかし。それよりも人のちから入れつくれる所のすくなく、おのづからなるは猶まさりけり。

「調度」「やうかへて」「今めかしき」「そばつき」「ざればむ」「きて見ゆ」「人のちから入れつくる」

要旨 「硯に書きてそふる」の題下の文で、わざと風變りに作られた手道具よりも、昔風のものの方がよく、更に自然のまゝに出来てゐるものが、最もゆかしくあるといふことを述べてゐる。

釋義

「よろづの調度など目なれぬさまに……おのづからなるは猶まされり」多くの手道具などを、見馴れない様子に、恰好をかへて作つたのは當世風であるといふので、暫くの間は、注意を引くけれども、よく見ると形態がふざけてゐて、見劣りがするものであるが、昔風で立派なのは、表面は、よい所が隠れて見えるが、段々と見れば見るほど、立派に見えて来るものであるよ。それよりも人がわざ／＼人工を加へて作つた所が少くて、自然に出来て

ゐるのは、猶一層勝つてゐるよ。

「調度」 手まはりの道具。

「やうかへて」 恰好をかへて。風變りに。

「今めかしきに」 當世風であるといふので。

「そばづき」 見た所の状。形態。

「ざればみて」 不真面目でたはむれてゐる。ふざけてゐる。

「心劣りし」 見劣りがしてゆかしさがなくなり。

「きえて」 よい所がかくれて。

「見まざりする」 見るに従つて、立派に見えてくる。

「人のちから入れ」 人工を加へて。

「おのづからなるは」 自然のまゝなのは。

五 學ばでやはあるべき

いにしへと今とは、こととなることも多かれども、ものしれば智といふもののほどほどに大きくなれば、おもひはかりせまらずして古いにしへかかりつれば、今はかうかうしてこそと、なみなみならぬをかしきかうがへも出で來ぬべく、よき人になるわざ

「しあれば、上なくたふときものになむ。かくめでたきものなるを、鳥獸とりけものはすぐれたるもえせず、わくらはに、人と生れて學ばでやはあるべき。(松の落葉)

「こととなること」 「ほどほどに」 「おもひはかり」 「せまらずして」 「かうがへ」 「わくらはに」

○ 福島高等商業學校

要旨

學問といふものは有難いものであるといふ事と、而もそれが人間にだけ許されたものであるから、人たる者は是非とも之をやらねばならぬといふ事とを説いてゐる。

釋義

いにしへと今とは、こととなることも多かれども、……【人と生れて學ばでやはあるべき】 昔と今とは、物事の違つてゐる場合も多いけれども、物事を知れば智慧といふものが、それ相應に廣くなるから、思慮が狭く差迫るといふことがなく、従つて昔はかうであつたから、今日はかうくするのがよいといふ風になみ一通りでない面白い考も出て來る筈であるし、また立派な人物

になることであるから、學問といふものは、此の上もなく有難いものである。かく結構なものであるが、鳥や獸はいくら優れてゐるものでも、それが出來ないので、只人間にだけ與へられた特權である。して見ると、たま〜人間と生れて、學問をせずにあてよからうか、よくはない。

「こととなること」 「事異なること」で、物事の違つてゐること。

「ほどほどに」 その程度々々に従つて。それ相應に。

「おもひはかり」 思慮。考。

「古かかりつれば」 昔はかうであつたから。

「せまらずして」 窮屈狭小にならないで。

「をかしき」 面白い。すぐれた。

「かうがへ」 「かんがへ」の音便。考。

「よき人」 立派な人物。

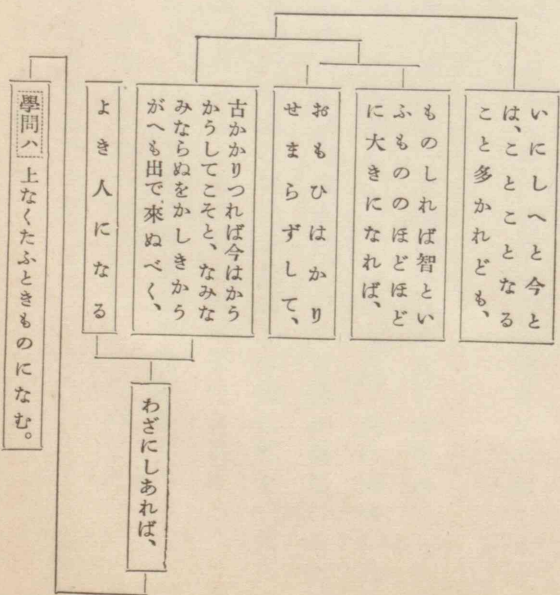
「めでたきもの」 茲は、尊いもの・有難いもの、などの意。

「すぐれたるもえせず」 どんなに優れてゐるものでも、なし得ない。

「わくらはに」 たま〜。たまさかに。稀に。佛書に「人身受け難く、佛法あひがたし。」とある。人として此の世に生れて來るとは容易でない。それ故、茲に「わくらはに人と生れて」と書いたのである。

「學ばでやはあるべき」 反語法。學ばないでよからうか、學ばなくてはならない。
【松の落葉】 五卷。藤井高尙の隨筆で、教訓・修養に關することが書いてある。

文脈



樞園文集鈔

解題 かしの 樞園文集三卷は、國文和歌の大家である中島廣足の著である。本書は、序文二十六篇、跋文四篇、記文百七篇、物語文十五篇、墓碑誌三篇、雜文七篇からなつてゐる。本書の文は、淳樸質實で風韻興趣に富み、筆力勁健、秩序整然、その豪壯雄大なものに至つては、まことに國文中古今殆どその類を見ない程である。

著者中島廣足は、通稱太郎、名は春臣。樞園、又は黄口と號する。寛政四年三月五日に熊本で生れた。世々熊本藩主細川侯に仕へた。享和二年家を繼ぎ、同十二年病によつて致仕した。夙に國學和歌を長瀬眞幸に學び、屢、長崎に來往して遂に其の地に住し、庭内に樞を栽えた。因つて世に樞園の翁と稱する。文政十一年の秋熊本に歸つたが遂に麴島に至つて颶風に遭ひ、船顛覆して纔に死を免れたといふことが、其の著麴島風浪記に委しい。此の後樞園に住すること多年、安政三年の春京に上つて嵐山吉野の花を賞し、歸途難波の地に留る事五年に及んだ。文久元年の秋藩侯の聘に應じて故郷に歸り、國學師範役に任ぜられ、邸を白川の邊に賜はつた。著書頗る多かつたけれども、上梓したのは未だその半にも及ばないで、文久三年五月から病を得、翌元治元年正月に歿した。享年七十三。詞の玉緒補遺、玉霞憲の小篠文集歌集等の著書がある。(二四五二―二五二四)

一 花ざかりは更なり(一)

花ざかりは更なり、さらでも柳など青やかにうち煙り、うらうらと照りたる日は、蕨わらび土筆つづきなどいかならむと、野山のさまのみゆかしく思ひやられて、庵の中には籠り居がたきを、人さへゆくりなく訪ひ來つ、近きわたりまでいざいざなど、そのかすめり。雨の降る日は、さることも思ひ絶えて、人はたおとづれねば、文机ふづきのみよりゐたる、なかなかをかしうなむ。

「さらても」 「うち煙る」 「うらうらと」 「ゆかし」 「ゆくりなく」 「そのかすめり」 「さることも思ひ絶えて」 「はた」

○東京女子醫學專門學校

○京城法學專門學校

要旨 (一)(二)は、「閑中春雨といふを」と題した文

で、閑静な日の春雨の降る状態及び趣味を述べてゐる。

(一)は、春の晴れた日と、雨の日とを比較対照して、春は

「さらても」 さうでなくても。花盛の時でなくても、の意。

「うち煙り」 柳の新芽の出たさまが、薄緑色にぼうつとかすんだやうに見えるのをいふ。

「うらうらと」 よく晴れて静かなさま。長閑に・ほがらかに。

「土筆」 「つくづくし」ともいふ。杉菜すぎなの地下莖から生ずる子囊群の莖。

「ゆくりなく」 思ひがけなく。突然に。

「近きわたり」 近きあたり。近邊。

「そのかすめり」 誘ひすゝめるやうなこともある。めり。推量の助動詞であるが、玆は「そのかすなり」といふべきところを、ぼかして「めり」といつたのであるから、「らしい」と見える」などと解かないで、「やうなこともある」などとすべきである。

「さるごと」 そんなこと。上の「野山のさまのみゆかしく思ひやられて、云々」を受ける。

「思ひ絶えて」 野山へゆかうなどといふ氣も全くななくなつて。又は、自ら斷念し、の意。

「はた」 また。

「おとづれねば」 上の「ゆくりなく訪ひ來つ」を受けていふ。

「よりゐたる」 これは、次の句の主部になつてゐる。故にこの下

晴れた日も雨の日も共に面白いが、就中、雨の日方が、の靜かな春の趣がしみ／＼と味ははれて面白くあると述べてゐる。

釋義

【花ざかりは更なり、さらでも柳など……なかなかをかしうなむ】 花盛の時は勿論であるが、その時でなくても、柳の新芽をふいたさまが、薄緑色にぼうつとかすんだやうに見え、ほがらかに晴れ渡つた靜かな日には、蕨や土筆などはどうであらうか、まだ摘むには早いかしらなどと、野山の様子ばかりが頻りに慕はしく思ひやられて、家の中に閉ぢ籠つては居りにくい所へ、友達までが思ひがけなく訪ねて來て、「この近邊まで行つて見ようと思ふ。さあ、どうです、一緒に出掛けては。」などと誘ひ立てるやうなこともある。ところで、雨の降る日には、自分にも、野山へ行つて遊びたいなどといふ氣も全く起らず、人もやはり訪ねて來ないから、たゞちつと机によりかゝつてゆつくり書見をするが、それは晴れ日に野山に遊ぶよりも却つて興趣が深いものである。「更なり」 いふまでもない。勿論である。下の「野山のさまのみゆかしく思ひやられて、云々」にかゝる。

に、「は」があるものとして解かなくてはならない。

「なかなか」 かへつて。

「をかしうなむ」 この下に、「ある」が略されてゐる。おもしくある、の意。

二 春雨の音(二)

萱かきふける軒は雨の音しづかにて、池水いけみづのあやこまやかなるに、いと深う霞める梢より、翹たはしをれたる鳥どものそこはかとなく飛びわたるなど、いといたうをかし。暮れぬればましていとしめやかにて、見る書かきさへ今ひとときは心しめぬ。風少し吹出でて、燈臺とうだいの火の瞬またたきたるに、何とも知らぬ花の香の、ほのかにうち薫かりたるなどもをかし。

「池水のあや」 「翹しをれたる鳥」 「そこはかとなく」 「しめやか」 「燈臺の火の瞬きたるに」

○山口高等商業學校

要旨 前節の續きで、更に物靜かな雨の夜の趣を述べ

てゐる。

釋義

【萱ふける軒は雨の音しづかにて、……うち薫りたるなどもをかし】 萱葺の屋根は雨の音も静かで、池の面には美しい小波がこまかにうち寄せて居て面白くあるその上に、非常に濃く霞のかかつた木の梢から、舞ひ出で、雨の爲に翅のぬれしをれた鳥の幾羽かが、何處といふあてもなくあちこちと飛んでゆくさまなどは、非常に面白い。すつかり暮れてしまふと、一層静かにしんとして、見る本さへ晝間より一層よく頭に入る。風が少し吹出して、燈臺の燈が消えかけたり又明るくなつたりする時に、何といふか知らない花の香が、かすかに匂つて来るのなども趣がある。

【池水のあや】 池の面の小波をいふ。

【あや 文・紋様の意から、妓は、さいなみのこと。】

【そこはかとなく】 何處といふこともなく。どこともなしに。あちこちと。

【いとちたう】 「いといたく」の音便。

【しめやか】 人のけはひもなく、極めて物静かなこと。ひつそりと・しんみりとして。

【今ひとときは】 今一層。晝間よりも一層、の意。

をまちて、口のかぎり開きつつ、鳴きさわぎたるさまは、いみじうこそあはれなれ。

【思ふどち】 【ひぢきまぐむ】 【巢くふ】 【雛おほす】

○ 廣島高等師範學校

要旨

「燕を題にて」と題する文の前半で、燕の飛びかける時の有様や、その雛を育てる時の有様などを記して、愛すべき鳥であるといふことを述べてゐる。

釋義

【いとうららかなる日、……遠く翔りゆくもをかし】 大層のどかに晴れ渡つた日に、親しい友達と一緒に連立つて行く廣い路に、燕があちこちに飛びちがつて、ふと自分たちの袖の下をくゞつて行つたのは、容易に手でも捕へることが出来るやうで非常に面白い。雨上りの地面の濕がまだ乾かない所などに下りて泥をくはへくゞして、子供の走り寄つて来るのに驚いて飛立ち、遠い所へ飛んでゆくのも亦面白い。

【おもふどち】 親しい友達同士。

【大路】 幅の廣い路。

【つばくらめ】 「つばめ」に同じ。

【心しみぬ】 「心にしみぬ」とあるべきである。心にしみ透る。よく頭に入ることをいふ。
【か】 此の場合は、完了の意にはとらないで、たゞ現在の意を強めるのに用ひてあると思へばよい。
【燈臺】 燭臺のやうにして、上に燈蓋をおき、油火を點す具。
【またたく】 目叩く、意で、目たゞきするやうに、燈がちら／＼とゆれ動くこと。即ち、風に吹かれて燈の消えかゝつたり又明るくなつたりするをいふ。

三 つばくらめ

いとうららかなる日、思ふどちうちつれゆく大路に、つばくらめのこなたかなたに飛びかひて、ふと袖の下すぎたる、手にもとらへつべくて、いとをかして、雨のなごりのなほかわかぬ方などにおりゐて、ひぢきをふくみつつ、わらはべの走りくるに驚きたちて、遠く翔りゆくもをかし。梁に巢くひて、いつの程にかあまたの雛おほしたるが、飛びくる親

「飛びかひて」 飛ぶちがつて。

「とらへつべくて」 此のつは助動詞の「つ」。但しこれも、完了の意を離れたものである。

【雨のなごり】 雨の降つたあと。地面に水溜があつたり、地面が濡れてゐたりすることをいふ。

【なごり】 物事の過ぎ去つた後、尙その氣の残つてゐること。

【ひぢ】 泥。

【ふくみつつ】 ふくむは、口の中に入れ持つ、意。

【わらはべ】 子供のむれ。べは、「むれ」の約。

【翔りゆく】 空高く飛びゆく、意。

【梁に巢くひて、いつの程にか、……いみじうこそあはれなれ】 梁に巢を造つて、何時の間にか、澤山の雛を育てて居たが、その雛が、飛んで来る親鳥を待つて、出来るだけ大きな口を開けて、鳴き騒いでゐる有様は、いかにも可憐なものである。

【梁】 柱の上にかへ渡して屋根を支へる爲の材。

【巢くふ】 巢を構へる。巢をつくる。

【おほしたるが】 育てたが。

【おほす】 養育する。

【飛びくる親をまちて】 文の係り具合は、「あまたの雛おほしたるが、その雛が、飛びくる親をまちて」である。

「口のかぎり」口を出るだけ大きく。
「あはれ」茲では、愛すべき、意。

四 遠山寺の入相の鐘

遠山寺の入相の鐘、ねぐらに歸る夕鳥も、いつしか聲しづまりて、むかへる文巻もやうやう見えなくなりゆくに、心ゆくわたりはいとくちをしきものから暫しうちおきて、端の方に出づれば暮れのころ梢どものほのかなる山のはには、はつかにあらはれたる三日月の影こそ、いとをかしけれ。青鷺とかやいふ鳥のあやしき聲になきゆくが、何となくものさびしげなるを來むといひつる友は、た暮れすぐしてやとおもふも心もとなきに、ともし火挑げたるこそまづうれしけれ。

「入相の鐘」「ねぐら」「文巻」「心ゆくわたり」「はつかに」「あやしき聲」「心もとなし」

○専門學校入學資格試験

ないが、さういふ時に、燈火をともしたのは、先づ何といつても嬉しいものである。

「入相の鐘」日の入る頃につく鐘。晚鐘。

「ねぐら」塙。鳥の寝る所。

「聲しづまりて」鐘の音をも兼ねていふ。

「文巻」書物。本來は、帙のこと、書物の上を包む物をいふ。

茲は、轉義。

「心ゆくわたり」面白いと感ずるあたり。満足に覺えて心の進む個所。會心の所。わたりは、「あたり」に同じ。

「くちをしきものから」口惜しくはあるものの、今中止するのは、ものから、「ものながら」の約。「さうではあるが、けれども」と、反

戻する意をもつた接尾語。

「うちおきて」書物をおいて。

「端の方」縁先。

「暮れのころ」まだすつかり暮れてしまはない。

「はつかに」僅かに。

「をかし」趣がある・興味がある・おもしろい。

「青鷺」鷺の一種。常の鷺より形が少し大きい。

「あやしき聲」變な鳴聲。

「ものさびしげなるを」何となく淋しさうであるのに。ものには、

【要旨】「夕」と題する文で、夕方の興味を述べてゐる。即ち、一所懸命に讀書してゐて、ふと氣がつくともう薄暗くなつてゐる。そこでちよつと書物をおいて外に出る。暫くして又内に入った。しかし來る筈の友はまだ來ないで何となく物さびしい。さういふ時に、火をともして、それを見た瞬間のうれしさを書いたものである。

釋義

【遠山寺の入相の鐘、………ともし火挑げたるこそまづうれしけれ】遠い山寺の晚鐘の音も、寢床へ歸る夕方の鳥の鳴き聲もいつの間にか静まつて、向つて續んでゐた書物の文字も、だん／＼見えなくなつて來たので、興味を感じて讀んでゐたあたりは、途中で止めるのが、甚だ残念であるけれども、仕方がないので、暫くそのままに讀みさして置いて、縁先の方に出ると、まだ日がすつかり暮れ切らないで、木の梢などがかすかに見える彼方の山の端に、一寸ばかり現はれてゐる三日月の姿が、まことに面白い。折から青鷺とかいふ鳥が、變な聲で鳴いてゆくのが何となく淋しい氣持がするの、來ると言つた友達も亦暮れてしまつてから來るのであらうかと思ふと、待遠しい感じがしてたまら

別に意味がない。

「はた」もまた。はまたの意にとることもある。

「暮れすぐしてや」下に「來む」を補つて解する。暮れてしまつてから來るであらうか、といふ意。

「心もとなきに」おぼつかない・氣がかりである、の意であるが、

茲は、待遠しい、意。

「ともし火挑げ」燈火をとます。

五 旅路のならひ

をさまれる世は、うまやぢの行きかひもにぎははしく、人宿す家はたちつづきて、草ひき結ぶ思ひもなきものから、さすがにうちとけてしもねられぬは、旅路のならひなるべし。

「うまやぢ」「行きかひ」「草ひき結ぶ思ひ」「さすがに」

○高等學校

○大阪女子専門學校

【要旨】「驛」と題する文の冒頭で、街道の往來も繁く

たり、旅宿の設も行き届いてゐる今日ではあるが、やは

り旅はうきものであるといふことを述べてゐる。

釋義

【をさまれる世は、……旅路のならひなるべし】 太平無事の世の中では、街道の往來も賑やかで、旅人を宿泊させる家もまた並べて建てられてあり、昔のやうに、草を結んで枕とする（野宿する）やうなつらい思ひはしなくても済むが、それでもやはりうち打解けてゆつくり寝られないのは、旅の常習といふものであらう。

「うまやぢ」 「驛路」と書く。驛、即ち、宿場のある街道。

驛、旅宿や駄馬・人夫などの備などがあつて、旅人の便利をはかつた町。東海道五十三次（京都三條から江戸日本橋まで）などは、その例である。

「ゆきかひ」 往來。

「はた」 も亦。

「草ひき結ぶ思ひ」 草を結んで枕として寝るやうなつらい思ひ。

昔は旅人が野宿するときには、草を結んで枕としたのである。

「草枕」といふ語が「旅」に冠せられる枕詞となつたのも、かういふ事に因んで起つたのである。

「なきものから」 ないものの。

「さすがに」 それでもやはり。
「うちとけてしも」 しもは、語勢を強める爲の語で、強助詞の「し」に、感動詞の「も」が添つたものである。
「旅路のならひ」 旅の常習。旅にはいつでもあること。

六神の御社

暮れゆく野末のすえにいと木暗こくらう見えたる一むらは、神の御社みやしろにやと思ふに、木の間にほのめく火の光注連繩つづな引きはへたる瑞籬みづがきのさまなどたどたどしきものから、いとかうがうしく見えわたるに、畔あぜの細道ほそみちたどり行きて鳥居とりゐのもとに至れば、奥かたの方より年老としぢいたる翁おきなの腰屈こしかがまりたるが燈籠とうろう提げて出で來たるは、御前の事どもものせしなるべし。

【野末】 「木暗う」 「一むら」 「ほのめく」 「注連繩」 「引きはふ」 「瑞籬」 「たどたどし」 「かうがうし」 「見えわたる」 「たどる」 「御前の事ども」
○旅順工科大学豫科

要旨

「杜」と題した文の前半である。暮れゆく野末の杜の中の社の有様と、折しも御燈明の火を持つて出て來た老翁とのことを記してゐる。猶此の後半には、その翁にその宮の神主の名を聞いたら、自分の知つてゐる人であつたといふことが書いてあるのである。

釋義

【暮れゆく野末にいと木暗う見えたる一むらは、……御前の事どもものせしなるべし】 日が暮れてだん／＼暗くなつて行く野の先の方に、甚だ暗く茂つて見える一叢ひとむらの木立こたぢは神社なのであらうと思つてよく見ると、木の間にちら／＼と見える火の光や、注連繩つづなの引きわたしてある瑞籬みづがきの様子などが、何分にも暮方くれかたなので、はつきりとは見えないけれども、如何にも尊嚴に見渡されるので、一つそこまで行つて見ようと、畔あぜの細道ほそみちを辿つて行つて、鳥居とりゐのそばまで來ると、杜みやしろの奥うしろの方から、年取つた腰こしかがの屈んだ翁おきなが、燈籠とうろうを提げて出て來た。これは大方神前で行ふ事などを済まして來たものだらうと思はれる。

「野末」 野の末、即ち、野の先の方。

「木暗う」 樹木が茂つて黒く見えてゐるところを言つたもの。

「一むら」 一かたまり。茲は、樹木の一叢、即ち、杜をいふ。因に「杜」は、音「ト」。我が國では、「もり」と訓じ、特に神社のある森の義。

「ほのめく」 ちら／＼見える。

「注連繩」 正しくは「しめなは」と訓むのであるが、茲は、原本によつて、單に「しめ」と訓む。淨地を區劃する爲に、神前等に引きわたしてある繩。

「引きはへたる」 引き渡してある。は、は、延へ」と書く。

「瑞籬」 神社の周圍にある垣をいふ。「いがき」ともいふ。瑞籬の外に設けるのを「玉垣」といふ。

「たどたどし」 はつきりとは見えない。よくはわからない。これは、暮方くれかたで暗くあるからである。

「かうがうし」 「神々し」と書く。尊くおごそかなこと。

「見えわたる」 廣い範囲が見える。遠くまでずうつと見える。

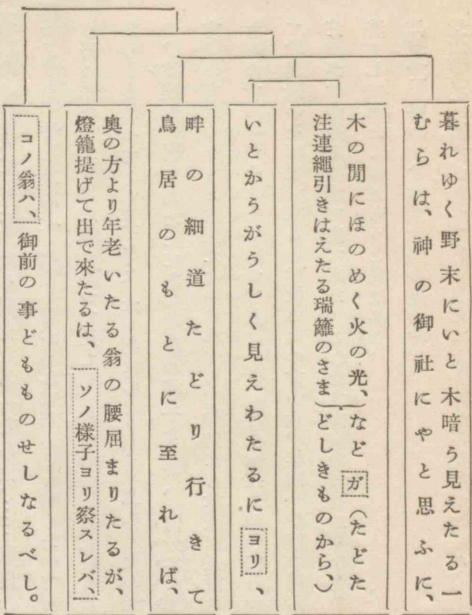
「たどる」 よくわからぬ道を探し／＼ゆく。

「燈籠」 とうろう

「御前の事ども」 神前で行ふいろ／＼の事。神事のことであらう。

「ものす」 行ふ。すます。

文脈



七岩もる水

岩もる水のほのかなるを、竹の樋もてすのこのもとにまかせやりつつ、あやしき水槽にたたへたるが、夜晝となく滴る音のいみじう心すみて、うき世の塵も清うすすぎはてぬる心地す。おきふし安

き獨住には、山の鳥どももいたうなれて朝夕にこの水のほとりにおり來つ、羽うちそそぎなどするも、またなき友と思ひむつばれてなむ。
 「ほのかなる」 「まかせやる」 「あやしき水槽」 「思ひむつばれてなむ」
 ○大分高等商業學校
 要旨 「山家水」と題する文で、いかにも暢氣な山家の閑居のさまを記してゐる。
 釋義

【岩もる水のほのかなるを、…またなき友と思ひむつばれてなむ】 岩の開からちよろ／＼と漏れ出て來る僅かの水を、竹の懸樋でもつて、竹縁のそばに絶えず引入れて、粗末な木製の水槽に一杯ためてあるのが、晝夜の區別なく滴り落ちるのを聞くと、心の中が非常に澄んで、浮世に於てけがされた心も、きれいに洗ひ清められたやうな氣がする。起きるにも寝るにも、いつも氣安く暢氣に氣まゝに出來る獨り住居には、山の鳥などもすつかり馴れ親んで、朝夕この水の近くに下りて來下りて來して、ぼちやぼちやと羽を浸したり洗つたりするが、これも無二の友として親しく思はれるのである。

く思はれるのである。

「岩もる」 岩の開から漏れ出て來る。

「ほのかなる」 かすかな。僅かな水。

「竹の樋」 竹のかけひ。竹の節を抜いて水を引くやうにしたもの。

「すのこ」 「すのこえん」の略。竹を並べて作つた縁側。廂の外にあつて、雨露にさらされてゐる場合が多い。

「もと」 下。

「まかせやりつつ」 水を引く。まかせは、「引」の字をよむ。

「あやし」 古文では、賤しい・粗末である・みすばらしい、などの意に用ひられた場合が多い。

「水槽」 水を入れて置く木製の箱又は桶。

「たたふ」 一ぱいためる。

「滴る音のいみじう心すみて」 滴る水の音を聞くと非常に心が澄んで、の意。滴る音のは、「滴る水の音に」の意に取ればよい。

「うき世の塵」 浮世のけがれ。

「清う」 「清く」の音便。

「すすぎはてぬる」 洗ひ清めてしまった。

「安き」 心安い。のんきな。

「いたう」 「いたく」の音便。ひどく。すつかり。大變よく。

「朝夕に」 いつも常に、の意。朝と夕とだけを指すのではない。
 「そそぎ」 洗ふ。
 「またなき」 またとない。此の上もない。無二の。
 「むつばる」 親しまれる。親しく思はれる。

八あまのすみか

あまのすみかばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき海邊の風もたまらぬ松かげなどに、ただかりそめに作りたる藁屋どものさま浪うちよせなば、やがて流れも失せぬべういとはかなげに見ゆるを、繪にかきすさびたるなどは、なかなかをかしきものから、さてすまひなば、なにどこちかせましと思ひやるだに心ぼそし。

「たよりなき海邊の風もたまらぬ松かげ」 「繪にかきすさび」

○専門學校入學資格試験

○山口高等商業學校

○大倉高等商業學校

【要旨】「漁村」と題する文の冒頭の一節で、漁夫の住處に對する感想で、繪などに描いては面白さうであるが、さて自身そこに住んで見たならば、嘸寂しくたよりないことであらうといつてゐる。

釋義

【あまのすみかばかりあはれなるものはなし。……思ひやるだに心ぼそし】 漁夫の住むところくらゐたよりなくあはれつぽい趣のあるものはない。人里遠くはなれて、非常に心細い海岸の風も吹きぬけになつてゐる松の木蔭などに、ほんの間に合せに造つた藁葺きの家なんかの有様は、もし浪が打寄せて來たなら、すぐにも流れ失せてでもしまひさうに如何にもたよりなさうに見えるが、そんな有様でも、それを繪にかき興じたなどは、却つて面白味のあるものだけでも、然し自分がさうやつて實際に住んで見たら、まあどんな氣持がするであらうかと、單に想像して見るだけでも心細く感じる。

【あま】 漁夫のこと。海人・海士・蟹・白水郎、などと漢字を宛てる。

【すみか】 住む場所の意であるが、住宅の意にも用ひる。住家と

書くのは正しくない。茲は、家ぐるゐの意に用ひてある。

【ばかり】 ほど・くらゐ。

【あはれ】 茲は、さびしくたよりないやうな趣をいふ。さびしくあはれつぽい、意。

【たよりなき】 人里から離れて、頼りとすべきものもない、といふ意。心細い。不便、の意にとる説もある。

【風もたまらぬ】 風がそこに止まらずに吹きぬけてゆく、意。吹き抜け・吹きさらし。閉ばらに生えて而もあまりよく繁つてゐない松の木の下といふ意味で、「風もたまらぬ松蔭」といつたのである。

【たまらぬ】 止まらない。防げない。

【かりそめ】 ちよつと。一時的に。間に合せに。

【やがて】 すぐに。即座に。

【流れも】 このもは、意味を強める語。

【失せぬべう】 失せてしまひさうに。ぬは、完了の助動詞。べうは、「べく」の音便。

【繪にかきすさびたる】 興に乗じて繪にかく。

【かきすさぶ】 筆にまかせてかく。興に乗じてかく。

【なかなかに】 却つて。

【をかしきものから】 面白いものの。面白いけれども。

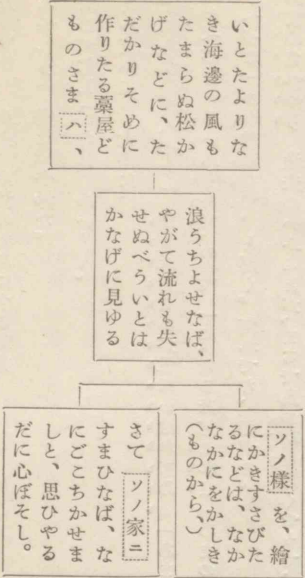
【ものから】 ものながら・ものではあるが。

【さて】 自分もそんな風にして、の意。茲は、發語に用ひた軽い意の「さて」と見てはいけない。

【なにこちかせまし】 どんな氣がするだらう。

【せまし、ましは、未來の推量。茲は、自分が其處に住んでゐないといふ事實に立脚しての假設推量である。

文脈



九 あまのさへづり

一夜やどりて見れば、浪風のひびき枕をゆすりて、

つゆまどろまれます。曉がた、となりの家、家めさまして、なりはひの事どもなるべし、あやしう聞きしらぬことどもを、おのがじし聲高にいひかはしたる、げにあまのさへづり、めづらしうも、をかしうも。【つゆ】 「まどろむ」 「なりはひ」 「あまのさへづり」 「めづらしうもをかしうも」

- 米澤高等工業學校
- 東京女子大學豫科

【要旨】 本文は、やはり「漁村」と題する文の一節で、その結尾である。即ち、漁村の明方の有様を描いてゐる。

釋義

【一夜やどりて見れば、……めづらしうもをかしうも】

漁村に、一晚とまつて見ると、浪や風の音が、枕をゆり動かすやうに強く響いて、少しも眠れない。夜明方になると隣の家の人が目を覺まして、生業に關しての事などでもあらうか、奇妙な聞いたこともないやうな譯のわからぬ事などを、めい／＼大聲で云ひあつてゐるのが聞えるが、なるほどこれがいはゆる「あまのさ

「へぶり」といふもので、珍らしくもあり、又面白くもある。
「やどりて」 泊つて。

「つゆ」 少しも。

「まどろむ」 うとくと眠る。

「なりはひ」 生業。生活のためにする職業。

「あやしう」 變な。奇妙な。

「おのがじし」 各自。めいめい。

「こわだかに」 大聲に。

「げにあまのさへぶり」 なるほどこれが世にいはれてゐる。「あまのさへぶり」といふもので、の意。一に、なるほどこれは、「あまのさへぶり」の字義通りで、と解く。何れでも、通ずる。

あまのさへぶり、漁夫のいふことが、まるで鳥の囀（トリノネ）を聞くやうで、

何の事かわからないのをいふ。

「めづらしうもをかしようも」 珍らしくもあり、面白くもある、の意。

一〇 燈火かかかけてふづくゑに向ふ

寺の初夜の鐘のひびきもをさまりて、皆人もねたるに、いとうれしう、燈火あかくしなして、ふづく

ゑにうち向ひたる、いみじう心すみて、晝見しあたりの何心なくて過ぎにしも思ひしられて深き心ばへあるくだりくだりも、おのづからとき得らるかし。かかげつくしても、なほねぶたさも知らず油さしそへつつ見もてゆくに、遠き世の人も、たださし向ひ語らふ心ちす。

【初夜の鐘】「何心なくて」「深き心ばへあるくだりくだり」

【かかげつくす】

○東京女子高等師範學校

○高等學校

要旨 「夜學」と題する文の前半で、夜の讀書の樂みと効果とを説いてゐる。

釋義

【寺の初夜の鐘のひびきもをさまりて、……遠き世の人もたださし向ひ語らふ心ちす】 諸方の寺々で鳴らす初夜(午後八時)の鐘の響もやんで、家の者も皆寝てしまつて靜かになつたので、非常に嬉しく、燈火を明るくして机の前にすわつたところが、

「ふづくゑ」 食卓などに對して、書見用の机をいふ。

「いみじう」 非常に。たいさう。

「心すみて」 頭が冴えて。心氣が落著いて、物事がはつきりとわかつて來ることをいふ。

「晝見しあたり」 晝間讀んだ所。

「何心なくて過ぎにしも」 あまり氣にもとめずに、漫然と讀みすごした個所も、の意。

「思ひしられて」 今になつて氣がついて。

「心ばへ」 心がけ・心構へ・氣だて等、總て心そのものではなくて、心の働を示す語である。茲では、著者の心持・趣意、などの意。普通の説では、「意味」と解してゐるが、「深き心」ならば、さう解くべきである。然し「意味」と解しても許されないことはなし。

「くだりくだり」 「條條」と漢字を宛てる。箇所々々。

「かし」 今では殆ど命令形につけて命令願望の意を強調するにのみ用ひられるが、古くは動詞・形容詞・助動詞の終止形にも同様に添へ用ひた。

「かかげつくして」 しばしば燈心をかきたてて油のなくなるまで點して、の意。

かかげ 「掻き上げ」の約。

すばらしく頭腦がはつきりして(非常に頭が冴えて來て)、晝間讀んだ所などで、その時には、うつかり何の氣もつかずに通つて來た個所も、なるほどかうであつたわいと分つて來て、著者の深い用意の存する個所々々も自然とよく了解されるものである。幾度か燈心を掻きあげて油がすつかりなくなつても、まだ睡氣も感じないで、更に油をつぎたししてだん／＼讀んで行くと、遠い昔の世の人(書中の古人)も、まるで、向ひあつて坐つて直接に語り合つてゐるやうな氣持がする。

【初夜】 日没から夜半までをいふこともあるが、茲は、今の午後八時頃のこと。佛教では、一晝夜を晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜と分けて、これを六時といひ、その時刻に鐘を鳴らし佛徳禮讚の經文を讀誦する。之を六時禮讚といふ。

「をさまりて」 止んで。

「皆人もねたるに」 家族の者も皆靜まつたので。

皆人 その事に關係ある人々は皆、の意。茲は、家の者は皆、の意にとる。之に對して、「人皆」は、世人皆・天下の人は皆、と一般的にいふ場合に用ひる。然し後世は混用された場合が多い。それ故、實は茲なども、「家人をはじめ世間の人も皆靜つて」と解してもよい。

「あかし」 明るく。

「あかし」 明るく。

「見もてゆくに」 だん／＼と見てゆくと、の意。
 「遠き世の人」 古人。書中にあらはれた人物。又、古書ならば、その著者をさす。
 「たださし向ひ」 直接対面して。
 「語りふ」 話しあふ。「語る」の未然形「語り」を語根として、更に、は行四段に活用させた語である。

一一書

遠き世の書を見るほどに、われもその世にあるこ
 こちして、やがてその人人を友となして、うち語ら
 ふこちさへせらるるを、われも筆とりてよしな
 しごとども書きつくるが、たまたまも、ちりぼひ残
 りて、後の世に傳らば、今の昔を見るが如く、後の人
 はたわれを友とせむには、千とせの末にさへ知る
 人あるこちして、いとをかしくなむおぼゆる。
 「見るほどに」 「やがて」 「よしなしごと」 「たまたまも」 「ち
 りぼひ残る」 「今の昔を」

要旨 「書といふを題にてかけることば」といふ文の
 一節で、書を読むと古人を友とすることが出来、書を著す
 と千年の後までも知己を得ることが出来るといふことを述
 べたもので、即ち、書の趣味と利益とを書いてゐる。

釋義

【遠き世の書を見るほどに……いとをかしくなむおぼゆる】
 昔の書物を見てゐる時には、自分も、其の時代に居るやうな氣持
 がして、直接其の人々を友として互に語り合ふやうな氣さへする
 が、自分も筆を執つて、つまらない事を書きつけたものが、偶然に
 も散らばり残つて、後の時代に傳はつたならば、今日の吾々が昔
 のものを見ると同様に、後世の人も亦自分を友とするであらうと
 思ふと、長い末々の年の後にまでも知己があるやうな氣がして、
 大層面白く思はれる。
 「遠き世」 遠い昔の時代。
 「やがて」 すぐに。そのまま。直接に。
 「よしなしごと」 つまらないこと。
 「たまたまも」 稀にも。偶然にでも。
 「ちりぼひ残りて」 散らばつた中の一部が残つて、の意。

ちりぼひ 散り亂れ。
 「今の昔を見るが如く」 今日から昔の事を考へると同じやうに。
 「はた」 も亦
 「をかし」 面白い。

一二 家にのみやは

をのことあらむもの、家にのみやはと、心たけく
 思ひ立ちしも、日かすふるままに、いとこひしう、今
 も立ちかへらまほしき心地するを、しひてねんじ
 てへめぐるに、いつしか年月も重なりぬ。

「家にのみやは」 「心たけく」 「ねんず」

○ 高等學校

要旨 「霧中幽情」と題する文の冒頭の一節である。

氣強く旅には出たが、いつしか旅愁を感じて郷里へ歸りた
 い歸りたいと思ひつゝも、いつの間にか多くの歳年を経て
 しまつたといふことが書いてある。交通機關や旅宿の設備
 も行届いてゐなかつた昔は、實際に「旅は憂いものつらい

もの」であつたらう。最初の一句の「をのことあらむもの
 の、家にのみかはと、心たけく思ひ立ちしも」は、既に旅
 のつらいものであるといふことを暗にあらはしてゐる。

釋義

【をのことあらむもの、……いつしか年月も重なりぬ】
 男子ともあらう者が、家にばかりゐてよからうか、それではなら
 ぬと、勇ましく思ひ立つて旅に出かけたが、日数がたつにつれ
 て、非常に自分の家が戀しくなり、今からでも歸りたいやうな氣
 がするのを、無理に我慢して、次から次へと歩きまはつてゐるう
 ちに、いつの間にやら、多くの歳月が経つてしまつた（幾年かが
 経過してしまつた）。

「そのこ」 男子。

「家にのみやは」 反語法。家にばかりゐてよからうか、さうでは
 ない。

「心たけく」 勇ましく。

「思ひ立ちしも」 思ひ立つて旅に出かけはしたものの。

「日かすふるままに」 日数のたつに隨つて。

「いとこひしう」 我が家が、大層戀しくなり。

「今も立ちかへらまほしき心地するを」今からでもすぐ歸りたい
 やらな氣がするのを。
 「しひて」押して。無理に。
 「ねんじて」こらへて。辛捧して。我慢して。
 「へめぐるに」遊歴してゐるうちに。
 「年月も重なりぬ」幾年かが経過した。

標準問題 國文新鈔教授資料 中篇(近世文)終

昭和四年七月二十日發行
 昭和五年十二月廿八日發行
 昭和七年二月六日發行
 昭和九年五月三十一日發行
 再發行
 發行所
 (上篇)
 (中篇)
 (下篇)



編者 發行所 印刷者

光風館編輯所
 東京市神田區神保町一丁目五番地
 上原才一郎
 東京市神田區神保町一丁目五番地
 光風館書店
 (電話 神田三〇八七番)
 (振替口座 東京三二七番)
 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
 株式會社秀英舎
 根本力三

非賣品

標準問題 國文新鈔教授資料

光風館編輯所編

標準問題 國文新鈔教授資料

洋裝全壹册
 和裝全三册
 (非賣品)

